



（岡山製本）

明治四十四年十二月八日印刷
明治四十四年十二月十一日發行

枕草紙、方丈記、徒然草
定價金八拾五錢

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

大賣捌所　東京市神田區表神保町一番地　三省堂書店

同　大阪市東區南本町四丁目　三宅莊藏書店

徒然草索引　終

ロ

ワ

ユ

ヨ

ヤ

ム

マ

ツ

チ

コ

ケ

キ

イ

徒然草索引

語句の配列順は總て歴史的假名遣に據る

ア

方丈記索引　終

ツ

テ

ト

ス

オ

カ

ウ

エ

方丈記索引

語句の配列順は總て歴史的假名遣に據る

ア

イ

枕草紙索引　終

ロ

ワ

ラ

マ

ヒ

ハ

ニ

ナ

ト

ツ

タ

サ

コ

ク

枕草紙索引

語句の配列順は總て歴史的假名遣に據る
本索引は本文中の題をも一行に取扱へり

ア

徒然草終

わが心にしたがふことにて樂也

しかず。これ顚倒の相よりおこりて、若干のわづらひあり。求めざらんにはしかじ。

八つになりし年、父に問ひていはく、「佛はいかなるものにか候ふらん」といふ。父がいはく、「佛には人のなりたるなり」と。また問ふ、「人は何として佛にはなり候ふやらん」と。父また、「佛のをしへによりてなるなり」とこたふ。また問ふ、「敎へ候ひける佛をば、何がをしへ候ひける」と。また答ふ、「それもまた、さきの佛のをしへによりてなり給ふなり」と。また問ふ、「その敎へはじめ候ひける第一の佛は、いかなる佛にか候ひける」といふとき、父「空よりやふりけん、土よりやわきけん」といひて笑ふ。「問ひつめられてえ答へずなり侍りつ」と諸人にかたりて興じき。

は山しげ山しげけれど思ひ入るにはさはらざりけり

違順―文段抄に、違はわが心に違ふことにて苦也、順は

に近し。されどもいまだ病急ならず、死に赴かざる程は、常住平生の念にならひて、生の中に多くの事を成じて後、しづかに道を修せんと思ふほどに、病をうけて死門にのぞむ時、所願一事も成ぜず、いふかひなくて、年月の懈怠を悔いて、この度もしたちなほりて、命をまたくせば、夜を日につぎて、この事かの事怠らず成じてんと、願をおこすらめど、やがて重りぬれば、われにもあらずとり亂してはてぬ。この類のみこそあらめ。この事まづ人々急ぎ心におくべし。所願を成じてのち、いとまありて道にむかはんとせば、所願つくべからず。如幻の生の中に何事をかなさん。すべて所願皆妄想なり、所願心にきたらば、妄心迷亂すと知りて、一事をもなすべからず。直に萬事を放下して道に向ふときは、さはりなく、所作なくて、心身ながくしづかなり。

とこしなへに違順につかはるゝことは、偏に苦樂のためなり。樂といふは好み愛する事なり。これを求むること止む時なし。樂欲するところ、一には名なり。名に二種あり。行跡と才藝とのほまれなり。二には色欲、三には味なり。よろづのねがひ、この三には

さそふ水云云—小町の歌、わびぬれば身を浮草の根をたえて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

しられず云云—新古今西行、疎くなる人を何しに恨むらん知られずしらぬ折もありしに

分けこしは山—古今集に、筑波山

る女の、似げなき老法師、あやしの東人なりとも、にぎはゝしきにつきて、さそふ水あらばなンどいふを、なか人いづかたも心にくきさまにいひなして、しられずしらぬ人を迎へもて來らんあいなさよ。何事をかうち出づる言の葉にせん。年月のつらさをも、分けこしは山のなンどもあひかたらはんこそ、つきせぬ言の葉にてもあらめ。すべてよその人のとりまかなひたらん、うたて心づきなき事多かるべし。よき女ならんにつけても、品くだり、みにくく、年もたけなん男は、かくあやしき身のために、あたら身をいたづらになさんやはと、人も心劣せられ、わが身はむかひ居たらんも、影はづかしくおぼえなん、いとこそあいなからめ。梅の花かうばしき夜の朧月にたゝずみ、御垣が原の露分けいでんありあけの空も、わが身ざまに忍ばるべくもなからん人は、たゞ色このまざらんにはしかじ。

望月のまどかなる事は、しばらくも住せず、やがて虧けぬ、心とゞめぬ人は、一夜の中に、さまでかはる様も見えぬにやあらん。病のおもるも、住する隙なくして、死期すで

婁宿—二十八宿の一、西方七宿の第二、宿の字シュクと讀む說もあり

りて膝にゐかゝれば、にほひなンどもうつるばかりなれば、便あしと思ひてすり退きたるに、なほ居寄りておなじさまなれば立ちぬ。その後、ある御所ざまのふるき女房の、そゞろごと言はれしついでに、「無下に色なき人におはしけりと、見おとし奉ることなんありし。情なしと恨み奉る人なんある」とのたまひ出したるに、「更にこそ心えはべらね」と申して止みぬ。この事後に聞き侍りしは、かの聽聞の夜、御局のうちより人の御覽じ知りて、さぶらふ女房をつくりたてて、出し給ひて、「便よくばことばなンどかけんものぞ。そのありさま參りて申せ、興あらん」とてはかり給ひけるとぞ。

八月十五日九月廿三日は婁宿なり。この宿清明なるゆゑに、月をもてあそぶに良夜とす。

しのぶの浦の蜑のみるめもところせく、くらぶの山ももる人しげからんに、わりなく通はん心のいろこそ、淺からずあはれと思ふふしぶしの、忘れがたきことも多からめ。親はらからゆるして、ひたぶるに迎へすゑたらん、いとまばゆかりぬべし。世にありわぶ

—小野道風を合せて三蹟といふ

誰か—原本これや

八災—憂、苦、喜、樂、尋、伺、出息、入息

所化—弟子、師を能化といふ

加持香水—正月八日より十五日の朝まで行はるゝ御法事中の法式

とごとしく申し侍りしを、「行成ならば裏書あるべし。佐理ならば裏書あるべからず」といひたりしに、裏は塵つもり、蟲の巣にていぶせげなるを、よくはき拭ひて、おの〳〵見侍りしに、行成位署名字年號さだかに見え侍りしかば、人みな興に入る。

一、那蘭陀寺にて、道眼ひじり談義せしに、八災といふことを忘れて、「誰かおぼえ給ふ」といひしを、所化みなおぼえざりしに、局のうちより、これ〳〵にやといひ出したれば、いみじく感じ侍りき。

一、賢助僧正に伴ひて、加持香水を見はべりしに、いまだ果てぬほどに、僧正かへりて侍りしに、陣の外まで僧都見えず。法師どもをかへして求めさするに、おなじさまなる大衆多くて、えもとめあはずといひて、いと久しくて出でたりしを、「あなわびし。それもとめておはせよ」といはれしに、かへり入りて、やがて具していでぬ。

一、二月十五日、月あかき夜、うちふけて千本の寺にまうでて、後より入りて、一人顔深くかくして聽聞し侍りしに、優なる女の、すがたにほひ人よりことなるが、わけ入

秋の野の云云—古今集在原棟梁

疑狀—任官志願の申文也、壽命院抄に、くわんの音なれどもくわじやうと讀むべき由或ろ有職の人の說也

三塔—東塔、西塔、横川をいふ

佐理、行成

　　秋の野の草のたもとか花すゝきほに出でてまねく袖とみゆらん

とはべれば、何事かさふらふべきと申されたることも、時にあたりて本歌を覺悟す、道の冥加なり、高運なりなんど、こと〴〵しく記しおかれ侍るなり。九條相國伊通公の欵狀にも、ことなる事なき題目をも書きのせて、自讃せられたり。

一、常在光院の撞鐘の銘は、在兼卿の草なり。行房朝臣淸書して、型にうつさせんとせしに、奉行の入道かの草をとり出でて見せ侍りしに、花の外に夕をおくれば聲百里に聞ゆといふ句あり。「陽唐の韻と見ゆるに、百里あやまりか」と申したりしを、「よくぞ見せ奉りける。おのれが高名なり」とて、筆者の許へいひやりたるに、「あやまり侍りけり。數行となほさるべし」と返事はべりき。數行もいかなるべきにか、もし數歩の意か、おぼつかなし。

一、人あまた伴ひて、三塔巡禮の事侍りしに、横川の常行堂の中、龍華院と書けるふるき額あり。「佐理行成の間うたがひありて、いまだ決せずと申し傳へたり」と堂僧こ

く、舊說によれば筥盞共に同名なるが如し

當代—今上帝

坊—春宮坊、皇太子にておはする時

一、人あまたつれて花見ありきしに、最勝光院の邊にて、男の馬をはしらしむるを見て、「今一度馬を馳するものならば、馬倒れて落つべし。しばし見給へ」とて立ちとまりたるに、また馬を馳す。とゞむる所にて、馬を引きたふして、乘れる人泥土の中にころび入る。その詞のあやまらざることを、人みな感ず。

一、當代いまだ坊におはしましゝころ、萬里小路殿御所なりしに、堀河大納言殿伺候したまひし御曹子へ、用ありて參りたりしに、論語の四五六の卷をくりひろげ給ひて、「ただ今御所にて、紫の朱うばふ事を惡むといふ文を、御覽ぜられたき事ありて、御本を御らんずれども、御覽じ出されぬなり。なほよくひき見よと仰事にて、求むるなり」と仰せらるゝに、「九の卷のそこ〳〵の程に侍る」と申したりしかば、「あなうれし」とて、もてまゐらせ給ひき。かほどの事は、兒どもも常のことなれど、昔の人は、いさゝかの事をもいみじく自讃したるなり。後鳥羽院の御歌に、袖と袂と一首の中にあしかりなんやと、定家卿に尋ね仰せられたるに、

つと―みやげ

やない筥―關根氏說には柳の木を廣さ五分程に三角に削り編み合せたる筥にて後世其蓋の棧を高くして足とせるをばヤナイバと稱す云云、本文なるは後者を云へるが如

勝の事は御覽じとがめずや。無下なり」といへば、おの〳〵あやしみて、「まことに他にことなりけり。都のつとにかたらん」などいふに、上人なほゆかしがりて、おとなしく物知りぬべき顔したる神官をよびて、「この御社の獅子のたてられやう、定めてならひあることに侍らん。ちと承らばや」といはれければ、「そのことに候ふ。さがなき童どもの仕りける、奇怪に候ふことなり」とて、さし寄りてすゑなほして往にければ、上人の感涙いたづらになりにけり。

やない筥にすうるものは、縦ざま横ざま、物によるべきにや。「巻物などはたてざまにおきて、木のあはひより、紙捻を通してゆひつく。硯も縦ざまにおきたる、筆ころばずよし」と三條右大臣殿おほせられき。勘解由小路の家の能書の人々は、假にも縦ざまにおかるゝことなし、かならず横ざまにすゑられ侍りき。

御隨身近友が自讃とて、七箇條かきとゞめたることあり。みな馬藝させることなき事どもなり。そのためしをおもひて、自讃のこと七つあり。

は、ものなれぬ人のあることなり。

主ある家には、すゞろなる人、心のまゝに入りくることなし。あるじなき所には、道行人みだりに立ち入り、狐梟やうのものも、人げにせかれねば、所えがほに入りすみ、木精なンどいふけしからぬ形もあらはるゝものなり。また鏡には色形なき故に、よろづの影きたりてうつる。鏡に色形あらましかば、うつらざらまし。虚空よくものを容る。われらが心に、念々のほしきまゝにきたり浮ぶも、心といふものの無きにやあらん。心にぬしあらましかば、胸のうちに若干のことは入りきたらざらまし。

丹波に出雲といふ所あり。大社を遷して、めでたくつくれり。志太の某とかやしる所なれば、秋の頃、聖海上人、その外も人あまたさそひて、「いざたまへ、出雲拜みに。かいもちひめさせん」とて、具しもていきたるに、おの〳〵拜みて、ゆゝしく信おこしたり。御前なる獅子狛犬、背きて後ざまに立ちたりければ、上人いみじく感じて、「あなめでたや。この獅子のたちやういと珍し。深きゆゑあらん」と涙ぐみて、「いかに殿ばら、殊

木精―山彦、木神、木魅、罔象など何れも同じく木石の化生妖怪を云ふ也

しろ所―知行所

いざたまへ―いざ來たまへ

かいもちひ―牡丹餅

をこがまし―馬鹿げて居る
うらゝかに―明瞭に

仰せられし。わかき人は、少しの事もよく見えわろく見ゆるなり。

よろづの科あらじとおもはゞ、何事にも誠ありて、人をわかずうやうやしく、言葉すくなからんにはしかじ。男女老少みなさる人こそよけれども、殊にわかくかたちよき人の言うるはしきは、忘れがたく思ひつかるゝものなり。よろづのとがは、馴れたるさまに上手めき、所えたるけしきして、人をないがしろにするにあり。

人のものを問ひたるに、知らずしもあらじ。ありのまゝにいはんはをこがましとにや、心まどはすやうに返事したる、よからぬ事なり。知りたる事も、なほさだかにと思ひてや問ふらん。又まことに知らぬ人もなどか無からん。うらゝかに言ひきかせたらんは、おとなしく聞えなまし。人はいまだ聞き及ばぬ事を、わが知りたるまゝに、「さてもその人の事のあさましき」など ばかり言ひやりたれば、「いかなる事のあるにか」と推し返し問ひにやるこそ、こゝろづきなけれ。世にふりぬる事をも、おのづから聞きもらすこともあれば、おぼつかなからぬやうに告げやりたらん、悪しかるべきことかは。かやうの事

ついで云々—其場合のおもしろきやうに、文段抄に其首尾をつくろひて面白きやうにしなす事也といへるは如何

ぢう—柱なり、琴にはことぢといひ、琵琶にはぢうといふ

ひもの木—檜物師の使ふ木

がまさりたることなり。賓客の饗應なンども、ついでをかしきやうにとりなしたるも、誠によけれども、唯その事となくてとり出でたる、いとよし。人に物をとらせたるも、ついでなくて、これを奉らんといひたる、まことの志なり。惜しむよしして乞はれんと思ひ、勝負のまけわざにことつけなンどしたる、むつかし。

すべて人は無智無能なるべきものなり。ある人の子の、見ざまなンどあしからぬが、父の前にて人とものいふとて、史書の文をひきたりし、さかしくは聞えしかども、尊者の前にてはさらずもと覺えしなり。

またある人の許にて、琵琶法師の物語をきかんとて、琵琶を召しよせたるに、ぢうのひとつ落ちたりしかば、「作りてつけよ」といふに、ある男の中に、あしからずと見ゆるが、「ふるきひさくの柄ありや」なンどいふを見れば、爪をおふしたり。琵琶なンど彈くにこそ。めくら法師の琵琶、その沙汰にもおよばぬことなり。道に心えたるよしにやと、かたはらいたかりき。「ひさくの柄はひもの木とかやいひて、よからぬものに」とぞ或人

とよまれて——騒がれて

園別當入道——藤原基氏

なんでふ云云——何ぞ百日の鯉を切らん、明に虚言と聞ゆと也、切らんぞ迄が北山殿の詞

五條の内裏には妖物ありけり。藤大納言殿かたられ侍りしは、殿上人ども黒戸にて碁をうちけるに、御簾をかゝげて見るものあり。誰そと見向きたれば、狐人のやうについゐてさしのぞきたるを、あれ狐よととよまれて、まどひ遁げにけり。未練の狐、ばけ損じけるにこそ。

「園別當入道は、さうなき庖丁者なり。ある人のもとにて、いみじき鯉を出したりければ、みな人、別當入道の庖丁を見ばやと思へども、たやすくうち出でんもいかゞとためらひけるを、別當入道さる人にて、このほど百日の鯉を切りはべるを、今日缺き侍るべきにあらず、まげて申しうけんとて切られける、いみじくつき〴〵しく興ありて、人ども思へりけると、ある人北山太政入道殿にかたり申されたりければ、かやうのこと、おのれは世にうるさく覺ゆるなり。切りぬべき人なくば、たべ、切らんといひたらんは尚よかりなん。なんでふ百日の鯉を切らんぞとのたまひたりし、をかしくおぼえし」と人のかたり給ひける、いとをかし。大かた、ふるまひて興あるよりも、興なくて安らかなる

せしむる人數に召さるる也

山門—比叡山延暦寺

ふしはかせ—節の規範

妙觀—攝州勝尾寺の觀音を刻みし人

して、學問をすてゝ遁世したりけるを、慈鎭和尚、一藝あるものをば、下部までも召しおきて、不便にせさせ給ひければ、この信濃入道を扶持し給ひけり。この行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へてかたらせけり。さて山門のことを殊にゆゝしくかけり。九郎判官のことは委しく知りて書き載せたり。蒲の冠者のことは能く知らざりけるにや、多くの事どもをしるしもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國のものにて、武士に問ひ聞きてかゝせけり。かの生佛がうまれつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

六時禮讃は、法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて作りてつとめにしけり。その後太秦の善觀房といふ僧、ふしはかせを定めて聲明になせり。一念の念佛の最初なり。後嵯峨院の御代よりはじまれり。法事讃もおなじく善觀房はじめたるなり。

千本の釋迦念佛は、文永のころ、如輪上人これをはじめられけり。

よき細工は少し鈍き刀をつかふといふ。妙觀が刀はいたくたゝず。

田鶴のおほいどの―亘経の三男基家

さうまき―鞘巻、鍔なき短刀にて緒を鞘に巻き腰に結びつく

番にめされて―學者を分ちて論義

田鶴のおほいどのは、童名たづ君なり。鶴を飼ひ給ひけるゆゑにと申すは僻事なり。

陰陽師有宗入道、鎌倉よりのぼりて、尋ねまうできたりしが、まづさし入りて、「この庭のいたづらに廣きこと、あさましくあるべからぬ事なり。道を知るものは植うる事をつとむ。細道ひとつのこして、みな畠に作りたまへ」と諫め侍りき。誠にすこしの地をも徒におかんことは益なきことなり。食物藥種などうゑおくべし。

多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手のうちに興ある事どもをえらびて、磯の禪師といひける女に教へてまはせけり。白き水干にさうまきをさゝせ、烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞいひける。禪師がむすめ靜といひける、この藝をつげり。これ白拍子の根源なり。佛神の本緣をうたふ。その後、源光行、おほくの事をつくれり。後鳥羽院の御作もあり。龜菊に教へさせ給ひけるとぞ。

後鳥羽院の御時、信濃の前司行長稽古のほまれありけるが、樂府の御論義の番にめされて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心うきことに

読む、検非違使廰に雇はれ警固の役を勤むる小者、元放免せられし罪人を以て任じたるよりの稱、つけものはその著用せる錦繡

歌のこゝろ―蜘蛛のいにあれたる駒はつなぐとも二道かくる人は頼まじと云ふ古歌の意味

つくりて、尾髪にはとうしみをして、蜘蛛のいかきたる水干に著けて、歌のこゝろなンどいひてわたりしこと、常に見及び侍りしなンども、興ありてしたる心地にてこそ侍りしかと、老いたる道志どもの今日もかたりはべるなり。この頃は、つけもの年をおくりて過差ことの外になりて、萬の重きものを多くつけて、左右の袖を人にもたせて、みづからは鋒をだに持たず、息つぎくるしむ有樣いと見ぐるし。

竹谷の乘願房、東二條院へまゐられたりけるに、「亡者の追善には何事か勝利おほき」とたづねさせ給ひければ、「光明眞言、寶篋印陀羅尼」と申されたりけるを、弟子ども「いかにかくは申し給ひけるぞ。念佛に勝ること候ふまじとは、など申し給はぬぞ」と申しければ、「わが宗なれば、さこそ申さまほしかりつれども、まさしく稱名を追福に修して巨益あるべしと說ける經文を見及ばねば、何に見えたるぞと、重ねて問はせたまはば、いかゞ申さんとおもひて、本經のたしかなるにつきて、この眞言、陀羅尼をば申しつるなり」とぞ申されける。

太子―聖徳太子

はかせ―師範、定規

放免―又ハウメンとも

もこゝろよからず。上手はいづれをも吹きあはす。呂律のものにかなはざるは、人の咎なり、器物の失にあらず」と申しき。

何事も、邊土は卑しくかたくななれども、天王寺の舞樂のみ、都に恥ぢずといへば、天王寺の伶人の申しはべりしは、「當寺の樂は、よく圖をしらべ合せて、ものの音のめでたくとゝのほり侍ること、外よりも勝れたり。ゆゑは太子の御時の圖、今にはべるをはかせとす。いはゆる六時堂の前の鐘なり。そのこゑ黄鐘調の最中なり。寒暑に從ひて上り下りあるべきゆゑに、二月涅槃會より聖靈會までの中間を指南とす。祕藏のことなり。この一調子をもちて、いづれの聲をもとゝのへ侍るなり」と申しき。およそ鐘のこゑは黄鐘調なるべし。これ無常の調子、祇園精舍の無常院の聲なり。西園寺の鐘、黄鐘調に鑄らるべしとて、あまたたび鑄替へられけれども、かなはざりけるを、遠國よりたづね出されけり。法金剛院の鐘の聲、また黄鐘調なり。

建治弘安のころは、祭の日の放免のつけものに、ことやうなる紺の布四五端にて、馬を

龍秋—樂人豐原龍秋
荒涼—過言
のく—口をのく意にて笛を吹くに口をもち直すをいふ
性骨—天性その骨を得たるをいふ

四條黄門命ぜられていはく、「龍秋は道にとりてはやんごとなき者なり。先日きたりていはく、短慮のいたり、極めて荒涼の事なれども、横笛の五の穴は、いさゝかいぶかしき所の侍るかと、ひそかにこれを存ず。そのゆゑは、干の穴は平調、五の穴は下無調なり。その間に勝絶調をへだてたり。上の穴雙調、次に鳧鐘調をおきて、夕の穴黄鐘調なり。その次に鸞鏡調をおきて、中の穴盤渉調、中と六とのあはひに神仙調あり。かやうに間々にみな一律をぬすめるに、五の穴のみ上の間に調子をもたずして、しかも間をくばる事ひとしきゆゑに、その聲不快なり。さればこの穴を吹くときは、かならずのく。のけあへぬときは物にあはず。吹きうる人かたしと申しき。料簡のいたり、まことに興あり。先達後生をおそるといふこと、この事なり」と侍りき。他日に景茂が申し侍りしは、「笙は調べおほせてもちたれば、たゞ吹くばかりなり。笛はふきながら、息のうちにて、かつしらべもてゆく物なれば、穴ごとに口傳の上に、性骨を加へて心を入るゝこと五の穴のみにかぎらず。偏にのくとばかりも定むべからず。あしく吹けば、いづれの穴

は、富の來ること、火のかわけるに就き、水の下れるに從ふが如くなるべし。錢つもりて盡きざるときは、宴飲聲色を事とせず、居所をかざらず、所願を成ぜざれども、心とこしなへに安く樂し」と申しき。そも〳〵人は所願を成ぜんがために財をもとむ。錢をたからとする事は、願をかなふるがゆゑなり。所願あれどもかなへず、錢あれども用ゐざらんは、全く貧者とおなじ。何をか樂とせん。このおきてはたゞ人間の望を絶ちて、貧を憂ふべからずと聞えたり。欲をなして樂とせんよりは、しかじ財なからんには。癰疽を病むもの、水に洗ひて樂とせんよりは、病まざらんにはしかじ。こゝにいたりては、貧富分くところなし。究竟は理即にひとし。大欲は無欲に似たり。

狐は人に食ひつくものなり。堀河殿にて、舍人が寝たる足を狐にくはる。仁和寺にて、夜本寺の前をとほる下法師に、狐三つ飛びかゝりて食ひつきければ、刀を抜きてこれを拒ぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつき殺しぬ。二は遁げぬ。法師はあまた所くはれながら、ことゆゑなかりけり。

癰疽―熱氣甚しき腫物

究竟、理即―天台に理即、名字即、觀行即、相似即、分身即、究竟即の六即あり、理即は凡夫畜類まで佛性を具するをいひ、究竟即は妙覺の位如來の地

徳をつく―利徳を身につける、財産を作る

り。その時見たる人のちかくまで侍りしが、かたり侍りしなり。

ある大福長者のいはく、「人はよろづをさしおきて、ひたぶるに徳をつくべきなり。貧しくては生けるかひなし。富めるのみを人とす。徳をつかんとおもはゞ、すべからくまづその心づかひを修行すべし。その心といふは他の事にあらず。人間常住のおもひに住して、假にも無常を觀ずる事なかれ。これ第一の用心なり。次に萬事の用をかなふべからず。人の世にある、自他につけて所願無量なり。欲に從ひて志を遂げんと思はゞ、百萬の錢ありといふとも、しばらくも住すべからず。所願は止むときなし。財は盡くる期あり。かぎりある財をもちてかぎりなき願に從ふこと得べからず。所願心にきざすことあらば、われを亡すべき惡念きたれりと、かたく愼しみおそれて、小用をもなすべからず。次に錢を奴の如くしてつかひ用ゐるものとしらば、長く貧苦を免るべからず。君の如く神のごとくおそれ尊みて、從へ用ゐることなかれ。次に恥にのぞむといふとも、怒り怨むることなかれ。次に正直にして約をかたくすべし。この義を守りて利をもとめん人

さう〳〵し—さびし

あるじ—饗應

うち鮑—熨斗鮑、鮑の肉を打ち延して熨斗とせる物

さふらはぬにや、夜なればことやうなりとも疾くとありしかば、なえたる直垂、うちうちのまゝにて罷りたりしに、銚子にかはらけ取りそへてもて出でて、この酒をひとりたうべんがさう〳〵しければ申しつるなり。肴こそなけれ、人はしづまりぬらん。さりぬべき物やあるといづくまでも求め給へとありしかば、紙燭さしてくま〳〵を求めしほどに、臺所の棚に、小土器に味噌の少しつきたるを見出でて、これぞ求め得てさふらふと申しゝかば、事足りなんとて、心よく數獻におよびて興に入られはべりき。その世にはかくこそ侍りしか」と申されき。

最明寺入道、鶴岡の社參のついでに、足利左馬入道のもとへ、まづ使を遣して、立ちいられたりけるに、あるじまうけられたりけるやう、一獻にうち鮑、二獻にえび、三獻にかい餅にて止みぬ。その座には亭主夫婦、隆辨僧正、あるじがたの人にて坐せられけり。さて「年ごとにたまはる足利の染物心もとなく候ふ」と申されければ、「用意しさふらふ」とて、いろ〳〵の染物三十、前にて女房どもに小袖に調ぜさせて後につかはされけ

想夫戀—季吟の說に、白氏文集、韻府等に相夫憐とあるをあやまれるならん

最明寺入道—北條時賴

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらん人は、無下に心うかるべきことなり。

御前の火爐に火をおくときは、火箸してはさむことなし。土器より直にうつすべし。さればころびおちぬやうに心えて、炭を積むべきなり。八幡の御幸に、供奉の人淨衣をきて、手にて炭をさゝれければ、ある有職の人「白きものを著たる日は、火箸を用ゐる、苦しからず」と申されけり。

想夫戀といふ樂は、女男を戀ふるゆゑの名にはあらず。もとは相府蓮、文字のかよへるなり。晉の王儉、大臣として、家に蓮を植ゑて愛せしときの樂なり。これより大臣を蓮府といふ。廻忽も廻鶻なり。廻鶻國とてえびすのこはき國あり、その夷、漢に伏して後にきたりて、おのれが國の樂を奏せしなり。

平宣時朝臣、老ののち昔がたりに、「最明寺入道あるよひの間によばるゝ事ありしに、やがてと申しながら、直垂のなくてとかくせしほどに、また使きたりて、直垂なンどの

讃岐國安益郡ニ之時軍王見レ山作歌

顔回も云々—論語雍也篇に、顔回不幸短命而死矣

ひしげくだく—壓碎す

歌に、霞たつながき春日のなゝどつゞけたり。鵺鳥も喚子鳥の事樣に通ひて聞ゆ。

萬の事はたのむべからず。愚なる人は、ふかくものを憑むゆゑに、うらみ怒ることあり。勢ありとて憑むべからず、こはきものまづ滅ぶ。財多しとて憑むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて憑むべからず、孔子も時に遇はず。德ありとてたのむべからず、顔回も不幸なりき。君の寵をも憑むべからず、誅をうくること速なり。奴したがへりとて憑むべからず、そむき走ることあり。人の志をもたのむべからず、かならず變ず。約をも憑むべからず、信あることすくなし。身をも人をも憑まざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず、左右廣ければさはらず、前後遠ければふさがらず。せばき時はひしげくだく。心を用ゐること少しきにしてきびしき時は、物に逆ひ爭ひてやぶる。寛くして柔なるときは、一毛も損ぜず。人は天地の靈なり。天地はかぎるところなし、人の性何ぞことならん。寛大にして窮らざるときは、喜怒これにさはらずして、物のためにわづらはず。

喚子鳥―百千鳥、稻おほせ鳥と共に古今三鳥と稱し所謂古今傳授の祕傳とせるもの也
萬葉集云々―第一幸二

經文などの紐をゆふに、上下より襷にちがへて、二すぢの中より、わなのかしらを横ざまにひき出すことは、常のことなり。さやうにしたるをば、華嚴院の弘舜僧正解きてなほさせけり。「これはこの頃やうのことなり。いと見にくし。うるはしくは、たゞくるくると卷きて、上より下へ、わなの先をさしはさむべし」と申されけり。ふるき人にて、かやうのこと知れる人になん侍りける。

人の田を論ずるもの、訟にまけてねたさに、その田を刈りてとれとて、人をつかはしけるに、まづ道すがらの田をさへ刈りもてゆくを、「これは論じ給ふ所にあらず。いかにかくは」といひければ、刈るものども「その所とても刈るべき理なけれども、僻事せんとてまかるものなれば、いづくをか刈らざらん」とぞいひける。ことわりいとをかしかりけり。

喚子鳥は春のものなりとばかりいひて、いかなる鳥ともさだかに記せるものなし。ある眞言書の中に、喚子鳥なくとき招魂の法をば行ふ次第あり。これは鵺なり。萬葉集の長

にれ云々―反芻動物の呑みし食を更に口に戻し嚼む事

怪を見て云云―千金方黄帝雑忌咒に出づ

さうなく―左右なく、やたらに

官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入りて、大理の座のはまゆかの上にのぼりて、にれうち嚙みて臥したりけり。重き怪異なりとて、牛を陰陽師のもとへ遣すべきよし、おのおの申しけるを、父の相國きゝたまひて、「牛に分別なし。足あらばいづくへかのぼらざらん。尫弱の官人、たま〳〵出仕の微牛をとらるべきやうなし」とて、牛をば主にかへして、臥したりける疊をばかへられにけり。あへて凶事なかりけるとなん。怪を見てあやしまざる時は、怪かへりてやぶるといへり。

龜山殿たてられんとて、地をひかれけるに、大なる蛇數もしらず凝り集りたる塚ありけり。この所の神なりといひて、事のよし申しければ、いかゞあるべきと勅問ありけるに、「ふるくよりこの地を占めたるものならば、さうなく掘り捨てられがたし」とみな人申されけるに、この大臣一人「王土に居らん蟲、皇居を建てられんに、何のたよりをかなすべき。鬼神は邪なし。咎むべからず。たゞ皆ほりすつべし」と申されたりければ、塚をくづして、蛇をば大井川に流してけり。更にたよりなかりけり。

靫—矢籠にて平胡籙(ヒラヤナグヒ)の類、音に清濁兩說あり

看督長—檢非違使廳に附屬せる官

法曹—明法家

り。

勅勘の所に靫かくる作法、今は絶えて知れる人なし。主上の御惱、大かた世の中のさわがしき時は、五條の天神に靫をかけらる。鞍馬にゆぎの明神といふも、靫かけられたりける神なり。看督長の負ひたる靫を、その家にかけられぬれば、人いで入らず。この事絶えて後、今の世には封をつくることになりにけり。

犯人を笞にて打つときは、拷器によせてゆひつくるなり。拷器のやうも、よする作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。

比叡山に、大師勸請の起請といふことは、慈惠僧正書きはじめ給ひけるなり。起請文といふこと、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起請文につきて行はるゝ政はなきを、近代このこと流布したるなり。また法令には、水火にけがれをたてず、入物にはけがれあるべし。

德大寺右大臣殿、檢非違使の別當のとき、中門にて使廳の評定おこなはれけるほどに、

定額―一定の人數

揚名介―源氏夕顏に見え源氏三祕事の一也

退凡下乘―西域記九に出づ

諸寺の僧のみにもあらず、定額の女孺といふこと、延喜式に見えたり。すべて數さだまりたる公人の通號にこそ。

揚名介にかぎらず、揚名目といふものあり。政事要略にあり。

横川の行宣法印が申しはべりしは、「唐土は呂の國なり、律の音なし。和國は單律の國にて、呂の音なし」と申しき。

吳竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁壽殿の方によりて植ゑられたるは吳竹なり。

退凡下乘の卒都婆、外なるは下乘、內なるは退凡なり。

十月をかみなづきといひて、神事にはゞかるべきよしは、記したるものなし。本文も見えず。たゞし當月諸社の祭なきゆゑに、この名あるか。この月萬の神たち、太神宮へ集り給ふなッどいふ說あれども、その本說なし。さることならば、伊勢には殊に祭月とすべきに、その例もなし。十月諸社の行幸、その例もおほし。たゞしおほくは不吉の例な

久我内大臣殿―通基
この殿―通基を指す
土御門相國―定實
西宮―西宮記、西宮左大臣高明の作

る所、詞にても顔にても、かくれなく知られぬべし。ましてあきらかならん人の、惑へるわれらを見んこと、掌の上のものを見んがごとし。たゞしかやうの推量にて、佛法までをなずらへ言ふべきにはあらず。

ある人、久我畷を通りけるに、小袖に大口きたる人、木造の地藏を田の中の水におしひたして、ねんごろに洗ひけり。心えがたく見るほどに、狩衣の男ふたりみたり出で來て、「こゝにおはしましけり」とてこの人を具して往にけり。久我内大臣殿にてぞおはしける。尋常におはしましける時は、神妙にやんごとなき人にておはしけり。

東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座のとき、源氏の公卿まゐられけるに、この殿大將にて先をおはれけるを、土御門相國「社頭にて警蹕いかゞはべるべからん」と申されければ、「隨身のふるまひは、兵杖の家が知ることに候ふ」とばかり答へ給ひけり。さて後に仰せられけるは、「この相國、北山抄を見て、西宮の說をこそ知られざりけれ。眷屬の惡鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にて殊に先をおふべき理あり」とぞ仰せられける。

達人―賢達の人、賈誼鵩鳥賦通人大觀兮物無ㇾ不ㇾ可、注に通一作ㇾ達

つや〱―一向

欺かず―あざけり笑はずの義ならん

達人の人を見る眼は、すこしも誤る處あるべからず。たとへば、ある人の世に虚言を構へいだして、人をはかる事あらんに、正直にまことと思ひて、いふまゝにはからるゝ人あり。あまりに深く信をおこして、なほわづらはしく虚言を心えそふる人あり。また何としも思はで、心をつけぬ人あり。又いさゝかおぼつかなく覺えて、たのむにもあらずたのまずもあらで、案じ居たる人あり。又まことしくは覺えねども、人のいふことなれば、さもあらんとて止みぬる人もあり。又さま〲に推し心えたるよしして、かしこげに打ちうなづき、ほゝゑみて居たれど、つや〱知らぬ人あり。また推し出して、あはれさるめりと思ひながら、なほ誤もこそあれと怪しむ人あり。又異なるやうもなかりけりと、手を打ちて笑ふ人あり。また心えたれども、知れりともいはず、おぼつかなからぬは、とかくの事なく、知らぬ人と同じやうにて過ぐる人あり。またこの虚言の本意をはじめより心えて、すこしも欺かず、構へいだしたる人とおなじ心になりて、力をあはする人あり。愚者の中のたはぶれだに、知りたる人の前にては、このさま〲の得た

くて聞きたる、用意ある、心にくし。匂も物の音も、たゞ夜ぞひときはめでたき。さしてことなることなき夜、うち更けて參れる人の、淸げなる樣したるいとよし。若きどち心とゞめて見る人は、時をもわかぬものなれば、殊にうちとけぬべき折節ぞ、けはれなく引きつくろはまほしき。よき男の、日くれてゆするし、女も夜ふくるほどにすべりつつ、鏡とりて顏なンどつくろひ出づるこそをかしけれ。

神佛にも、人の詣でぬ日、夜まゐりたるよし。

くらき人の、人をはかりて、その智を知れりとおもはん、更にあたるべからず。拙き人の、碁うつことばかりに敏くたくみなるは、賢き人の、この藝におろかなるを見て、おのれが智に及ばずとさだめて、よろづの道のたくみ、わが道を人の知らざるを見て、おのれ勝れたりと思はんこと、大なるあやまりなるべし。文字の法師、諳證の禪師、互にはかりて、おのれに如かずと思へる、共にあたらず。おのれが境界にあらざるものをば、爭ふべからず、是非すべからず。

けはれなく―褻と晴となく

ゆする―沐浴髮あらひなどするをいふ

くらき人―闇愚の人

文字の法師、諳證の禪師―一は教相を習ひて座禪を知らぬ者、一は座禪に專にして教相に暗き者

男なぞ—男こその誤なるべき由古來の定說也

半空—おろそかに、疎略に

はえ—物のつや

およすげたる—大樣に大人めける

れ。たれがしが壻になりぬとも、またいかなる女をとりすゑて相住むなンどきゝつれば、無下に心おとりせらるゝわざなり。ことなることなき女を、よしと思ひ定めてこそそひ居たらめと、賤しくもおしはかられ、よき女ならば、この男をぞらうたくして、あが佛とまもりゐたらめ。たとへば、さばかりにこそと覺えぬべし。まして家の内を行ひをさめたる女、いとくちをし。子なンど出できてかしづき愛したる、心うし。男なくなりて後、尼になりて年よりたるありさま、亡きあとまであさまし。いかなる女なりとも、明暮そひみんには、いと心づきなくにくかりなん。女のためも半空にこそならめ。よそながら時々通ひすまんこそ、年月へても絶えぬなからひともならめ。あからさまに來て泊り居なンどせんは、めづらしかりぬべし。

夜に入りてもののはえなしといふ人、いとくちをし。萬の物のきら、かざり、色ふしも、夜のみこそめでたけれ。晝はことそぎおよすげたる姿にてもありなん。夜はきらゝかに花やかなる裝束いとよし。人のけしきも、夜の火影ぞよきはよく、物いひたる聲も、暗

の絲の亂れたるが如きをいふとぞ
敏きときは云々―論語陽貨篇

ければ、「無下の事をも仰せらるゝものかな。人の命は雨のはれまを待つものかは。我も死に聖もうせなば、尋ぬ聞きてんや」とて、はしり出て行きつゝ習ひ侍りけりと申し傳へたるこそ、ゆゝしくありがたう覺ゆれ。敏きときはすなはち功ありとぞ、論語といふふみにも侍るなる。この薄をいぶかしく思ひけるやうに、一大事の因縁をぞ思ふべかりける。

今日はその事をなさんと思へど、あらぬいそぎまづ出で來てまぎれ暮し、待つ人はさはりありて、たのめぬ人はきたり、頼みたる方のことはたがひて、思ひよらぬ道ばかりはかなひぬ。煩はしかりつる事はことなくて、安かるべき事はいと心ぐるし。日々に過ぎゆくさま、かねて思ひつるに似ず。一年のこともかくのごとし。一生の間もまたしかなり。かねてのあらまし皆違ひゆくかと思ふに、おのづから違はぬ事もあれば、いよいよものは定めがたし。不定と心得ぬるのみ誠にて違はず。

妻といふものこそ、男のもつまじきものなれ。いつも獨住にてなンど聞くこそ心にくけ

日かさゝぬ—いついつと日を極めたる譯でも無き

ますほ云々—十寸穗の薄、眞麻穗の薄、一は穗の一尺計なるをいひ、一は穗

かたし。一つなりとも勝らんかたへこそつくべきを、十までなりぬれば惜しくおぼえて、多くまさらぬ石にはかへにくし。これをも捨てず、かれをもとらんと思ふこゝろに、かれをも得ず、これをも失ふべき道なり。京にすむ人、急ぎて東山に用ありて既に行きつきたりとも、西山に行きてその益まさるべき事を思ひえたらば、門よりかへりて西山へゆくべきなり。こゝまで來著きぬれば、この事をばまづいひてん、日をさゝぬことなれば、西山の事はかへりてまたこそ思ひたゝめと思ふゆゑに、一時の懈怠すなはち一生の懈怠となる。これをおそるべし。一事を必ず成さんとおもはゞ、他の事の破るゝをも痛むべからず。人のあざけりをも恥づべからず。萬事にかへずしては一の大事成るべからず。人のあまたありける中にて、あるもの「ますほの薄まそほの薄などいふことあり。渡邊のひじりこの事を傳へ知りたり」と語りけるを、登蓮法師その座に侍りけるが聞きて、雨の降りけるに、「蓑笠やある、貸したまへ。かの薄のことならひに、渡邊の聖のがり尋ねまからん」といひけるを、「あまりに物さわがし。雨やみてこそ」と人のいひ

や、又はハヤウタにて所謂しりとりなどの類か
あらます事—豫期する事
むねと云々—主として希望する事

べき暇なくて年よりにけり。この法師のみにもあらず、世間の人なべてこの事あり。若きほどは諸事につけて、身をたて、大なる道をも成し、能をもつき、學問をもせんと、行末ひさしくあらます事ども、心にはかけながら、世をのどかに思ひてうち怠りつゝ、まづさしあたりたる目の前の事にのみまぎれて月日をおくれば、ことぐ〵になす事なくして身は老いぬ。終にものの上手にもならず、思ひしやうに身をもたず、悔ゆれどもとり返さるゝ齢ならねば、走りて坂をくだる輪の如くに衰へゆく。されば一生のうち、むねとあらまほしからん事の中に、いづれか勝ると、よく思ひくらべて、第一の事を案じ定めて、その外は思ひすてゝ、一事を勵むべし。一日の中一時のうちにも、數多のことの來らん中に、すこしも益のまさらんことを營みて、その外をばうち捨てゝ、大事をいそぐべきなり。いづかたをも捨てじと心にとりもちては、一事も成るべからず。たとへば碁をうつ人、一手もいたづらにせず、人にさきだちて、小をすて大につくが如し。それにとりて、三つの石をすてゝ、十の石につくことは易し。十をすてゝ十一につくことは

非家—その道の家柄ならぬ人

すさまじく—不興

早歌—小歌端歌の類に

やあると見て、心にかゝる事あらば、その馬を馳すべからず。この用意をわすれざるを馬乘とは申すなり。これ祕藏のことなり」と申しき。

よろづの道の人、たとひ不堪なりといへども、堪能の非家の人にならぶ時、必ずまさることは、たゆみなく愼みて輕々しくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能所作のみにあらず、大方のふるまひ心づかひも、愚にして謹めるは得の本なり、巧にしてほしきまゝなるは失の本なり。

あるもの子を法師になして、「學問して因果の理をもしり、說經なンどして世わたるたづきともせよ」といひければ、敎のまゝに說經師にならんために、まづ馬に乘りならひけり。輿車もたぬ身の、導師に請ぜられん時、馬なンど迎におこせたらんに、桃尻にて落ちなんは心憂かるべしと思ひけり。次に佛事の後酒なンど勸むることあらんに、法師のむげに能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふことをならひけり。二つのわざやう〳〵境に入りければ、いよ〳〵よくしたくおぼえて嗜みけるほどに、說經ならふ

の用意をなす係なりしなり

城陸奥守―秋田城介にして陸奥守を兼ねし也

もまさり侍らじ」とてなほ一間づつ張られけるを、義景「皆を張りかへ候はんは、遙にたやすく候ふべし。斑に候ふも見苦しくや」と重ねて申されければ、「尼も後はさわ〳〵と張りかへんと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐることぞと、若き人に見ならはせて、心づけんためなり」と申されける、いと有難かりけり。世を治むる道、倹約を本とす。女性なれども聖人の心に通へり。天下をたもつほどの人を子にて持たれける、誠にたゞ人にはあらざりけるとぞ。

城陸奥守泰盛は雙なき馬乘なりけり。馬を引き出でさせけるに、足をそろへて閾をゆらりと超ゆるを見ては、「これはいさめる馬なり」とて鞍を置きかへさせけり。また足を延べて閾に蹴あてぬれば、「これは鈍くして過あるべし」とて乘らざりけり。道を知らざらん人、かばかり恐れなんや。

吉田と申す馬乘の申し侍りしは、「馬毎にこはきものなり。人の力爭ふべからずと知るべし。乘るべき馬をばまづよく見て、強き所弱き所を知るべし。次に轡鞍の具に危きこと

讃岐典侍—堀河院の女官

守をいれ申す—相模守を我亭に招き入るゝ

けいめい—經營、接待

るにかく仰せられけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。

四條大納言隆親卿、からざけといふものを供御にまゐらせられたりけるを、「かく怪しきもの參るやうあらじ」と人の申しけるを聞きて、大納言「鮭といふ魚まゐらぬことにてあらんにこそあれ。鮭の素干なでふことかあらん。鮎の素干はまゐらぬかは」と申されけり。

人つく牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りてそのしるしとす。しるしをつけずして人をやぶらせぬるは、主の科なり。人くふ犬をば養ひ飼ふべからず。これみな科あり、律の禁なり。

相模守時頼の母は、松下禪尼とぞ申しける。守をいれ申さるゝことありけるに、すゝけたるあかり障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切りまはしつゝ張られければ、兄の城介義景、その日のけいめいして候ひけるが、「たまはりて、なにがし男に張らせ候はん。さやうの事に心得たるものに候ふ」と申されければ、「その男尼が細工によ

入宋―宋に渡る事

江帥―大江匡房

さぎちやう―三毬打、左義長、正月十五日清涼殿の庭上にて爆竹をなす儀式

あれ」と忍びやかにいひたりし、心にくかりき。その人、ふるき典侍なりけるとかや。

入宋の沙門道眼上人、一切經を持來して、六波羅のあたり、燒野といふ所に安置して、殊に首楞嚴經を講じて、那蘭陀寺と號す。その聖の申されしは、「那蘭陀寺は大門北むきなりと、江帥の說とていひ傳へたれど、西域傳、法顯傳などにも見えず、更に所見なし。江帥はいかなる才覺にてか申されけん、おぼつかなし。唐土の西明寺は北向勿論なり」と申しき。

さぎちやうは、正月にうちたるぎちやうを、眞言院より神泉苑へ出して燒きあぐるなり。法成就の池にこそとはやすは、神泉苑の池をいふなり。

「ふれ〳〵こゆき、たんばのこゆきといふ事、米搗きふるひたるに似たれば粉雪といふ。たまれこゆきといふべきを、誤りてたんばのとは言ふなり。垣や木のまたにとうたふべし」と或ものしり申しき。昔よりいひけることにや。鳥羽院をさなくおはしまして、雪の降

也
小松の御門―光孝天皇
鎌倉の中書王―一品中務卿宗尊親王
吉田中納言―藤原藤房

きづきし。

黒戸は、小松の御門位につかせ給ひて、昔たゞ人におはしましし時、まさな事せさせ給ひしを忘れたまはで、常にいとなませ給ひける間なり。御薪にすゝけたれば黒戸といふとぞ。

鎌倉の中書王にて御鞠ありけるに、雨ふりて後いまだ庭のかわかざりければ、いかゞせんと沙汰ありけるに、佐々木隠岐入道、鋸の屑を車に積みておほく奉りたりければ、一庭に敷かれて、泥土のわづらひなかりけり。「とりためけん用意ありがたし」と人感じあへりけり。この事をある者のかたりいでたりしに、吉田中納言の、「乾砂子の用意やはなかりける」とのたまひたりしかば、耻しかりき。いみじと思ひける鋸の屑、賤しく異様のことなり。庭の儀を奉行する人、乾砂子をまうくるは、故實なりとぞ。

ある所の侍ども、内侍所の御神樂を見て人にかたるとて、寶劔をばその人ぞ持ち給へるなゝどいふを聞きて、うちなる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御劔にてこそ

のに生るとこそ、佛は說きたまふなれ。かくうとましと思ふものなれど、おのづから捨て難き折もあるべし。月の夜、雪の朝、花のもとにても、心のどかに物語して盃いだしたる、萬の興を添ふるわざなり。つれ〴〵なる日、おもひの外に友の入りきて、執り行ひたるも心慰む。なれ〳〵しからぬあたりの御簾の中より、御菓子御酒なンど、よきやうなるけはひしてさし出されたる、いとよし。冬せばき所にて、火にて物いりなンどして、隔なきどちさし向ひて多く飲みたる、いとをかし。旅のかりや、野山なンどにて、「御肴何」なンどいひて、芝の上にて飲みたるもをかし。いたういたむ人の、强ひられて少し飲みたるもいとよし。よき人のとりわきて、「今ひとつ、上すくなし」なンどのたまはせたるも嬉し。近づかまほしき人の上戸にて、ひし〳〵と馴れぬる、また嬉し。さはいへど、上戸はをかしく罪許さるゝものなり。醉ひくたびれて朝寢したる所を、あるじの引きあけたるに、まどひて、ほれたる顔ながら、細き髻さしいだし、物も著あへず抱きもち、ひきしろひて逃ぐるかひどり姿のうしろ手、毛おひたる細脛のほど、をかしくつ

經に、自身手遇二酒器一與レ人飲レ酒者五百世無レ手何況自飲云々

上すくなし―參考に、盃の上少しと也

かいどり姿―かいどり卽ち裃（ウチカケ）を著たるが如き姿、文段抄に、下著ばかりにて帯をもせぬ

すぢりたる―一曲奏したる

のりあひ―罵り合ひ

えもいはぬ―何ともいはれぬ、嘔吐など也

酒をとりて云々―梵網

づからも食ひたる、さまあし。聲のかぎり出しておの／＼謠ひ舞ひ、年老いたる法師召し出されて、黒く穢き身を肩ぬぎて、目もあてられずすぢりたるを、興じ見る人さへうとましく憎し。あるはまた我身いみじき事ども、かたはら痛くいひ聞かせ、あるは醉泣し、下ざまの人はのりあひ諍ひて、あさましく恐しく、はぢがましく心憂きことのみありて、はては許さぬ物どもおし取りて、緣より墮ち、馬車より落ちてあやまちしつ。物にも乘らぬ際は、大路をよろほひ行きて、築地、門の下などに向きて、えもいはぬ事ども爲ちらし、年老い袈裟かけたる法師の、小童の肩をおさへて、聞えぬ事どもいひつゝよろめきたる、いとかはゆし。かゝる事をしても、この世も後の世も、益あるべきわざならば如何はせん。この世にては過おほく、財を失ひ、病をまうく。百藥の長とはいへど、萬の病は酒よりこそ起れ。憂を忘るといへど、醉ひたる人ぞ、過にし憂さをも思ひ出でて泣くめる。後の世は、人の智惠を失ひ、善根を燒くこと火の如くして惡を增し、よろづの戒を破りて地獄におつべし。酒をとりて人に飲ませたる人、五百生が間手なきも

によびー呻吟して

これらになき人事ー我國に無き他國の事

まばゆからずーはづかしき様子もなく

を興とすること、いかなる故とも心得ず。飲む人の、顔いと堪へがたげに眉をひそめ、人目をはかりて捨てんとし、逃げんとするを捕へて、引きとゞめて、すゞろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も目の前に大事の病者となりて、前後も知らず倒れふす。祝ふべき日なンどはあさましかりぬべし。あくる日まで頭いたく、物食はずによびふし、生を隔てたるやうにして、昨日のこと覺えず、公私の大事を缺きて煩となる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり。かく辛き目にあひたらん人、ねたく口をしと思はざらんや。他の國にかゝる習あンなりと、これらになき人事にて傳へ聞きたらんは、あやしく不思議に覺えぬべし。人の上にて見たるだに心うし。思ひ入れたるさまに心にくしと見し人も、思ふ所なく笑ひのゝしり、詞おほく、烏帽子ゆがみ、紐はづし、脛高くかゝげて、用意なきけしき、日ごろの人とも覺えず。女は額髪はれらかに掻きやり、まばゆからず、顔うちさゝげてうち笑ひ、盃もてる手に取りつき、よからぬ人は、肴とりて口にさしあて、み

高野大師——弘法大師

小鷹大鷹——小鷹には鶉、鴉等を捕り、大鷹には雉子を捕る

若き時のしわざなり。老いぬる人は精神おとろへ、淡くおろそかにして、感じ動くところなし。心おのづから靜なれば、無益のわざをなさず、身をたすけて愁なく、人の煩なからんことを思ふ。老いて智の若き時にまされること、若くして貌の老いたるにまされるが如し。

小野小町がこと、極めてさだかならず。衰へたるさまは、玉造といふ文に見えたり。この文清行が書けりといふ說あれど、高野大師の御作の目錄に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町が盛なること、その後のことにや、なほおぼつかなし。

小鷹によき犬、大鷹につかひぬれば、小鷹にわろくなるといふ。大に就き小を捨つる理まことにしかなり。人事おほかる中に、道を樂むより氣味深きはなし。これまことの大事なり。一たび道を聞きて、これに志さん人、いづれの業かすたれざらん、何事をか營まん。愚なる人といふとも、賢き犬の心におとらんや。

世にはこゝろえぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめ、強ひ飲ませたる

なるひじりめをすぐに彈けば、立てたる石必ずあたる。萬のこと外にむきて求むべからず、たゞこゝもとを正しくすべし。清獻公がことばに、好事を行じて前程を問ふことなかれといへり。世を保たん道もかくや侍らん。内を愼まず、輕くほしきまゝにしてみだりなれば、遠國必ずそむく時、始めて謀をもとむ。「風にあたり濕に臥して、病を神靈に訴ふるは愚なる人なり」と醫書にいへるが如し。目の前なる人の愁をやめ、惠をほどこし道を正しくせば、その化遠く流れんことを知らざるなり。禹の行きて三苗を征せしも、師をかへして徳を布くには如かざりき。

若き時は血氣内にあまり、心物に動きて、情欲おほし。身をあやぶめて碎け易きこと、珠を走らしむるに似たり。美麗を好みて寶を費し、これを捨てゝ苔の袂にやつれ、勇める心盛にして物と爭ひ、心に耻ぢ羨み、好む所日々に定らず、色にふけり情にめで、行を潔くして百年の身をあやまり、命を失へるためし願はしくして、身の全く久しからんことをば思はず、すけるかたに心ひきて、ながき世がたりともなる。身をあやまつことは、

モク）とて碁盤面の上下左右中央四隅凡て九個の黒星

清獻公—宋の趙抃

風にあたり云々—本草序に、眞誥曰常不レ能愼レ事上者自致ニ百病之本ニ而怨ニ告於神靈一乎當レ風臥レ濕反責ニ他人於失覆一皆癡人也

さしたる事なくて人のがり行くは、よからぬことなり。用ありて行きたりとも、その事はてなば疾く歸るべし。久しく居たる、いとむつかし。人と對ひたれば、詞おほく、身もくたびれ、心もしづかならず、萬の事さはりて時をうつす、互のため益なし。厭はしげにいはんもわろし、心づきなき事あらんをりは、なか〳〵その由をもいひてん。おなじ心に向はまほしく思はん人の、つれ〴〵にて、「いましばし、今日は心しづかに」などいはんは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべきことなり。その事となきに人の來りて、のどかに物語して歸りぬる、いとよし。また文も「久しく聞えさせねば」などばかり言ひおこせたる、いと嬉し。

貝をおほふ人の、わが前なるをばおきて、よそを見わたして、人の袖のかげ、膝の下まで目をくばるまに、前なるをば人におほはれぬ。よくおほふ人は、よそまでわりなく取るとは見えずして、近きばかり掩ふやうなれど、多くおほふなり。碁盤のすみに石を立てゝはじくに、むかひなる石をまもりて彈くはあたらず、わが手もとをよく見て、こゝ

の義と見えたれど年たけ身分高き人の義に解すべし

阮籍―竹林七賢の隨一、好まぬ人をば白眼を以て見、心にかなへる友には青眼を以て接す

ひじりめ―聖目へセイ

―いひ消される、けなされる
老の方人―老功の人
おとなしく云々―大人しくして彼是と非難を加へ難き人の意、おとなしくは磐抄には老人

道にもまことに長じぬる人は、みづから明にその非を知るゆゑに、志常に滿たずして、つひに物に誇ることなし。

年老いたる人の、一事すぐれたる才能ありて、「この人の後には誰にか問はん」なンどいはるゝは、老の方人にて生けるも徒ならず。さはあれど、それもすたれたる所のなきは、一生この事にて暮れにけりと拙く見ゆ。「今は忘れにけり」といひてありなん。大方は知りたりとも、すゞろにいひ散らすは、さばかりの才にはあらぬにやと聞え、おのづから誤もありぬべし。「さだかにも辨へ知らず」なンどいひたるは、なほまことに道のあるじとも覺えぬべし。まして知らぬこと、したりがほに、おとなしくもどきぬべくもあらぬ人のいひ聞かするを、さもあらずと思ひながら聞き居たる、いとわびし。

「何事の式といふことは、後嵯峨の御代まではいはざりけるを、近き程よりいふ詞なり」と人の申し侍りしに、建禮門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内住したることをいふに、世の式も變りたる事はなきにもと書きたり。

あらぬ道―自分の專門外の道

品―位、家柄などをいふ

をこ―馬鹿者

いひけたれ

人間の營みあへるわざを見るに、春の日に雪佛をつくりて、そのために金銀珠玉の飾をいとなみ、堂塔を建てんとするに似たり。その構を待ちてよく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、いとなみ待つこと甚おほし。

一道にたづさはる人、あらぬ道の席にのぞみて、「あはれ我道ならましかば、かくよそに見侍らじものを」といひ、心にも思へること、常のことなれど、よにわろく覺ゆるなり。知らぬ道の羨しく覺えば、「あなうらやまし、などか習はざりけん」と言ひてありなん。我智を取り出でて人に爭ふは、角あるものゝ角をかたぶけ、牙あるものゝ牙をかみいだす類なり。人としては善にほこらず、物と爭はざるを德とす。他に勝ることのあるは大なる失なり。品のたかさにても、才藝のすぐれたるにても、先祖の譽にても、人にまされりと思へる人は、たとひ詞に出でてこそいはねども、內心に若干の科あり。謹みてこれを忘るべし。をこにも見え、人にもいひけたれ、禍をも招くは、たゞこの慢心なり。一

使廳―檢非違使廳

太衝―九月の異名

吉平―安倍晴明の子

顯密―顯は天台宗、密は眞言宗

るよそほひ、おどろ〳〵しく聞えけるを、草刈る童聞きて人に告げければ、村の男ども、おこりて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、うち伏せねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使廳へ出したりけり。殺すところの鳥を頸にかけさせて、禁獄せられけり。基俊大納言別當の時になん侍りける。

太衝の太の字、點うつうたずといふこと、陰陽のともがら相論のことありけり。もりちか入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛關白殿にあり。點うちたるを書きたり」と申しき。

世の人相逢ふ時、しばらくも默止することなし。かならず言葉あり。そのことを聞くに、おほくは無益の談なり。世間の浮說、人の是非、自他のために失多く得少し。これをかたる時、たがひの心に、無益のことなりといふことを知らず。

東の人の、都の人にまじはり、みやこの人の、東に行きて身をたて、また本寺本山をはなれぬる顯密の僧、すべてわが俗にあらずして、人にまじはれる、見ぐるし。

みなむすび—公家の袴僧の袈裟等の飾に絲にて結びさぐるもの

二品禪門—藤原行忠

承仕法師—寺中の雜役をなす者

なり。流を殘して口のつきたる所をすゝぐなり」とぞ仰せられし。

「みなむすびといふは、絲をむすび重ねたるが、蜷といふ貝に似たればいふ」と或やんごとなき人仰せられき。になといふは誤なり。

「門に額かくるを、うつといふはよからぬにや。勘解由小路二品禪門は、額かくるとのたまひき。見物の棧敷うつもよからぬにや。平張うつなどは常の事なり。棧敷構ふるなゝどいふべし。護摩たくといふもわろし。修する、護摩するなゝどいふなり。行法も法の字をすみていふわろし、濁りていふ」と淸閑寺僧正仰せられき。常にいふ事にかゝることのみ多し。

花の盛は、冬至より百五十日とも、時正の後七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。

遍照寺の承仕法師、池の鳥を日ごろ飼ひつけて、堂の内まで餌をまきて、戸ひとつをあけたれば、數も知らず入りこもりける後、おのれも入りて、立て籠めて捕へつゝ殺しけ

させる事のよせ—文段抄に、さして御一門などいふ事のよせもあらねどゝ也、諸抄大成の一説に、よせは子細なり何とぞ極りたる流例はなけれども也

殿にて行はる。内裏にてありけるを申されけるによりて、よそへ行幸ありけり。させる事のよせなけれども、女院の御所なンど借り申す故實なりとぞ。

筆をとればものかゝれ、樂器をとれば音をたてんと思ふ。盃をとれば酒をおもひ、賽をとれば攤うたんことを思ふ。心はかならず事に觸れて來る。假にも不善のたはぶれをなすべからす。あからさまに聖教の一句を見れば、何となく前後の文も見ゆ。卒爾にして多年の非を改むることもあり。假に今この文をひろげざらましかば、このことを知らんや。これすなはち觸るゝ所の益なり。心更に起らずとも、佛前にありて珠數を取り經を取らば、怠るうちにも善業おのづから修せられ、散亂の心ながらも繩床に坐せば、おぼえずして禪定なるべし。事理もとより二つならず、外相もしそむかざれば、内證かならず熟す。強ひて不信といふべからず。仰ぎてこれを尊むべし。

「盃の底を捨つることはいかゞ心得たる」とある人の尋ねさせたまひしに、「凝當と申し侍るは、底に凝りたるを捨つるにや候ふらん」と申し侍りしかば、「さにはあらず、魚道

氣色怒れるきざしを見てそれと大方知るを機嫌を知るとはいへり

つはる―芽ぐむ、きざす

大臣の大饗―任大臣披露の宴

ぬる事のみ、機嫌をはからず、ついであしとて止むことなし。生住異滅の移り變るまことの大事は、たけき河の漲り流るゝが如し。しばしも滯らず、直に行ひゆくものなり。されば眞俗につけて、かならず果し遂げんと思はんことは、機嫌をいふべからず。とかくの用意なく、足を踏みとゞむまじきなり。春暮れて後夏になり、夏はてゝ秋の來るにはあらず。春はやがて夏の氣を催し、夏より既に秋はかよひ、秋はすなはち寒くなり、十月は小春の天氣、草も青くなり梅も蕾みぬ。木の葉の落つるも、まづ落ちてめぐむにはあらず、下よりきざしつはるに堪へずして落つるなり。迎ふる氣下に設けたる故に、待ちとるついで甚早し。生老病死のうつり來ること、またこれに過ぎたり。四季はなほ定れる序あり、死期は序を待たず。死は前よりしも來らず、かねて後に迫れり。人みな死あることを知りて、待つ事しかも急ならざるに、覺えずして來る。沖の干潟遙なれども、磯より潮の滿つるが如し。

大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常のことなり。宇治左大臣殿は、東三條

まもり—見守り

機嫌—文段抄に、向へる人の喜ぶ

爲兼大納言入道めしとられて、武士ども打圍みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一條わたりにてこれを見て、「あな羨し。世にあらんおもひで、かくこそ有らまほしけれ」とぞいはれける。

この人、東寺の門に雨宿せられたりけるに、かたはものども集り居たるが、手も足もねぢゆがみうちかへりて、いづくも不具に異樣なるを見て、とりぐ\に類なきくせものなり、尤も愛するに足れりと思ひて、まもり給ひけるほどに、やがてその興つきて、見にくゝいぶせく覺えければ、たゞすなほに珍しからぬものには如かずと思ひて、かへりて後、この鬪植木を好みて、異樣に曲折あるを求めて目を喜ばしめつるは、かのかたはものを愛するなりけりと、興なく覺えければ、鉢に裁ゑられける木ども、みなほり棄てられにけり。さもありぬべきことなり。

世にしたがはん人は、まづ機嫌を知るべし。ついであしきことは、人の耳にも逆ひ、心にも違ひて、その事成らず。さやうの折節を心得べきなり。たゞし病をうけ、子うみ、死

放埒せざれば、世の博士にて、萬人の師となること、諸道かはるべからず。

ある人のいはく、年五十になるまで上手に至らざらん藝をば捨つべきなり。勵み習ふべき行末もなし。老人の事をば人もえ笑はず、衆に交りたるもあいなく見ぐるし。大かたよろづのしわざは止めて、暇あるこそめやすくあらまほしけれ。世俗の事にたづさはりて、生涯を暮すは下愚の人なり。ゆかしく覺えんことは學び聞くとも、その趣を知りなば、おぼつかなからずして止むべし。もとより望むことなくしてやまんは、第一のことなり。

西大寺靜然上人、腰かゞまり眉白く、まことに德たけたるありさまにて、内裏へ參られたりけるを、西園寺内大臣殿「あなたふとのけしきや」とて信仰の氣色ありければ、資朝卿これを見て、「年のよりたるに候ふ」と申されけり。後日に、むく犬のあさましく老いさらぼひて毛はげたるをひかせて、「この氣色たふとく見えて候ふ」とて内府へ參らせられたりけるとぞ。

美玉也、左傳に瑾瑜匿瑕などありてもと疵の義にあらず美玉の義なるを早くより斯く誤用し來れり

おぼつかなからずして　一文段抄、おぼつかなくは無きにして止むべしと也、大體に通じたる所にて止めよの義

能をつかんとする人―藝能に志す人

堅固かたほなる―一向に未熟なる

瑕瑾―疵瑕の義、瑾は説文に瑾瑜

なり」と申しけり。はたして矢にあたりてうせ給ひにけり。

灸治あまた所になりぬれば神事に穢ありといふこと、近く人のいひ出せるなり、格式等にも見えずとぞ。

四十以後の人、身に灸を加へて三里を燒かざれば上氣のことあり、かならず灸すべし。

鹿茸を鼻にあてゝ嗅ぐべからず、ちひさき蟲ありて、鼻より入りて腦をはむといへり。

能をつかんとする人、よくせざらんほどは、なまじひに人に知られじ、内々よく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめと常にいふめれど、かくいふ人、一藝もならひ得ることなし。いまだ堅固かたほなるより、上手の中にまじりて、譏り笑はるゝにも恥ぢず、つれなくすぎてたしなむ人、天性その骨なけれども、道になづまず妄にせずして、年をおくれば、堪能の嗜まざるよりは、終に上手の位にいたり、德たけ人に許されて、ならびなき名をうることなり。天下のものの上手といへども、はじめは不堪のきこえもあり、無下の瑕瑾もありき。されどもその人、道のおきて正しく、これを重くして

宿執開發—前世の功德あらはるゝこと

桃尻—尻浮きて鞍にすわらぬ也

沛艾—康熙字典に、沛艾姿容俊偉貌、文選註には馬行貌、馬の逞しくをどり上れるをいふ

ちとまりて、「あなたふとや。宿執開發の人かな。阿字々々と唱ふるぞや。いかなる人の御馬ぞ。あまりにたふとく覺ゆるは」と尋ね給ひければ、「府生殿の御馬に候ふ」と答へけり。「こはめでたき事かな。阿字本不生にこそあゝなれ。うれしき結縁をもしつるかな」とて感涙を拭はれけるとぞ。

御隨身秦の重躬、北面の下野入道信願を、「落馬の相ある人なり。よく／＼愼み給へ」といひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬より落ちて死にけり。道に長じぬる一言、神の如しと人おもへり。さて「いかなる相ぞ」と人の問ひければ、「極めて桃尻にして、沛艾の馬を好みしかば、この相をおほせ侍りき。いつかは申し誤りたる」とぞいひける。

明雲座主、相者に逢ひ給ひて、「おのれ若兵杖の難やある」と尋ね給ひければ、相人「まことにその相おはします」と申す。「いかなる相ぞ」と尋ね給ひければ、「傷害の恐おはしますまじき御身にて、假にもかくおぼしよりて尋ね給ふ。これ既にそのあやぶみの兆

かなしからむ云々—最愛なる親や妻子の爲めには云々、かなしはいとほしかはゆしの義なるべし、文段抄に只今飢ゑ凍ゆるを見てかなしく思はん親妻子といへるは如何

違ふ所—生前道に違ふ所

り。されば盗人をいましめ、僻事をのみ罪せんよりは、世の人の飢ゑず寒からぬやうに、世をばおこなはまほしきなり。人恒の産なき時は恒の心なし。人窮りて盗す。世治らずして凍餒の苦あらば、科のもの絶ゆべからず。人を苦しめ法を犯さしめて、それを罪なはんこと、不便のわざなり。さていかゞして人を恵むべきとならば、上のおごり費すところを止め、民を撫で農をすゝめば、下に利あらんこと疑あるべからず。衣食世の常なる上にひがごとせん人をぞ、まことの盗人とはいふべき。

人の終焉のありさまのいみじかりし事など、人のかたるを聞くに、たゞ靜にして亂れずといはゞ心にくかるべきを、愚なる人は、あやしく異なる相を語りつけ、いひし言葉もふるまひも、おのれが好む方に譽めなすこそ、その人の日ごろの本意にもあらずやと覺ゆれ。この大事は、權化の人も定むべからず、博學の士もはかるべからず。おのれ違ふ所なくば、人の見聞くにはよるべからず。

栂尾の上人道を過ぎ給ひけるに、河にて馬洗ふをのこ、あし〳〵といひければ、上人た

聲うちゆがみ―音聲なまりて

かたへ―傍輩

するすみ―匹如身、人の一物も手に持たぬをするすみといふ(沙石集)

初より否といひて止みぬ。にぎはひ豊なれば、人には頼まるゝぞかし」とことわられ侍りしこそ。この聖、聲うちゆがみあらく〱しくて、聖教のこまやかなる理、いと辨へずもやと思ひしに、この一言の後心にくゝなりて、多かる中に寺をも住持せらるゝは、かく和ぎたるところありて、その益もあるにこそと覺え侍りし。

心なしと見ゆるものも、よき一言はいふものなり。ある荒夷の恐しげなるが、かたへにあひて、「御子はおはすや」と問ひしに、「一人も持ち侍らず」と答へしかば、「さては物のあはれは知り給はじ。情なき御心にぞものし給ふらんといとおそろし。子ゆゑにこそ萬のあはれは思ひ知らるれ」といひたりし、さもありぬべき事なり。恩愛の道ならでは、かゝるものの心に慈悲ありなんや。孝養の心なきものも、子持ちてこそ親の志はおもひ知るなれ。世をすてたる人のよろづにするすみなるが、なべてほだし多かる人の、よろづに諂ひ望ふかきを見て、無下に思ひくたすは、僻事なり。その人の心になりて思へば、まことにかなしからん親のため妻子のためには、恥をも忘れ盗もしつべきことな

さまあし―見つともなし

悲田院―孤兒病者を收容して施養せし所

けやけく―きつぱりと、水で鼻をこくつた樣に

すぐよか―剛直

身死して財殘ることは、智者のせざるところなり。よからぬもの蓄へおきたるも拙く、よきものは、心をとめけんとはかなし。こちたく多かる、まして口をし。我こそ得めなどいふものどもありて、あとに爭ひたる、さまあし。後は誰にと志すものあらば、生けらん中にぞ讓るべき。朝夕なくて協はざらん物こそあらめ。その外は何も持たでぞあらまほしき。

悲田院の堯蓮上人は、俗姓は三浦のなにがしとかや、さうなき武者なり。故郷の人の來りて物がたりすとて、「吾妻人こそいひつることは賴まるれ。都の人はことうけのみよくて、實なし」といひしを、聖「それはさこそ思すらめども、おのれは都に久しく住みて、馴れて見侍るに、人の心おとれりとは思ひ侍らず。なべて心やはらかに情あるゆゑに、人のいふほどの事、けやけく否びがたく、よろづえ言ひはなたず、心弱くことうけしつ。僞せんとは思はねど、乏しくかなはぬ人のみあれば、おのづから本意通らぬこと多かるべし。吾妻人は我かたなれど、げには心の色なく情おくれ、偏にすぐよかなるものなれば、

返歌は玉ぬきしあやめの草はありながら夜殿は荒れん物とやは見し

京極入道中納言—藤原定家

こそあれ。八重櫻はことやうのものなり。いとこちたくねぢけたり。植ゑずともありなん。遲櫻またすさまじ、蟲のつきたるもむづかし。梅はしろき、うす紅梅、一重なるが疾く咲きたるも、かさなりたる紅梅の、にほひめでたきもみなをかし。「おそき梅は櫻に咲きあひて、おぼえおとりけおされて、枝に萎みつきたる、こゝろうし。一重なるがまづ咲きて散りたるは、心とくをかし」とて、京極入道中納言は、なほ一重梅をなん軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南むきに、今も二本はべるめり。柳またをかし。卯月ばかりの若楓、すべて萬の花紅葉にも優りてめでたきものなり。橘、桂、いづれも木はものふり、大なるよし。草は山吹、藤、杜若、撫子、池には蓮。秋の草は荻、薄、桔梗、萩、女郎花、藤袴、紫苑、吾木香、苅萱、龍膽、菊、黄菊も。蔦、葛、朝顏、いづれもいと高からず、さゝやかなる垣に、しげからぬよし。この外世にまれなるもの、唐めきたる名の聞きにくゝ、花も見なれぬなゝど、いとなつかしからず。大かた何も珍しくありがたきものは、よからぬ人のもて興ずるものなり。さやうの物なくてありなん。

玉だれに云云—和泉式部の詠、下句、枯れてもかよへ人の面影

をりならぬ云々—此贈答千載集哀傷部に出づ辨の歌の上句あやめ草涙の玉にぬきかへて、

かくれどもかひなき物はもろともにみすの葵の枯葉なりけり

と詠めるも、母屋の御簾に葵のかゝりたる枯葉を詠めるよし、家の集に書けり。古き歌の詞書に、枯れたる葵にさしてつかはしけるとも侍り。枕草紙にも、來しかた戀しきもの、かれたる葵と書けるこそ、いみじくなつかしう思ひよりたれ。鴨長明が四季物語にも、玉だれに後の葵はとまりけりとぞ書ける。おのれと枯るゝだにこそあるを、名殘なくいかゞ取り捨つべき。御帳にかゝれる藥玉も、九月九日菊にとりかへらるゝといへば、菖蒲は菊の折までもあるべきにこそ。枇杷の皇太后宮かくれ給ひて後、ふるき御帳の内に、菖蒲藥玉などの枯れたるが侍りけるを見て、をりならぬねをなほぞかけつると、辨の乳母のいへる返事に、あやめの草はありながらとも、江の侍從が詠みしぞかし。

家にありたき木は松櫻。松は五葉もよし。花はひとへなるよし。八重櫻は奈良の都にのみありけるを、このごろぞ世に多くなり侍るなる。吉野の花、左近の櫻、皆ひとへにて

まゝ子立—黒白の石を竝べ印したる石より數へて十に當るを除く遊戯

後の葵—祭過ぎたる後の葵、賀茂の祭に葵かくること前にも見ゆ

も、送る數おほかる日はあれど、送らぬ日はなし。されば棺をひさぐもの、作りてうち置くほどなし。若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ來にけるは、ありがたき不思議なり。暫時も世をのどかに思ひなんや。まゝ子立といふものを、雙六の石にてつくりて、立て竝べたる程は、取られん事いづれの石とも知らねども、數へ當てゝひとつを取りぬれば、その外は遁れぬと見れど、また〳〵かぞふれば、かれこれ間拔き行くほどに、いづれも遁れざるに似たり。兵の軍にいづるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世をそむける草の庵には、しづかに水石をもてあそびて、これを他所に聞くと思へるはいとはかなし。しづかなる山の奥、無常の敵きほひ來らざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進めるにおなじ。

祭過ぎぬれば、後の葵不用なりとて、ある人の御簾なるを皆取らせられ侍りしが、色もなくおぼえ侍りしを、よき人のしたまふ事なれば、さるべきにやと思ひしかど、周防の内侍が、

及びかゝらず—及び腰になりて後より人にのび掛からず

らうがはし—亂りがはし

こゝら—多く

なるは、宮仕にたちゐ、人の後にさぶらふは、さまあしくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。何となく葵かけ渡してなまめかしきに、明け離れぬほど、忍びて寄する車どものゆかしきを、それかかれかなゝど思ひよすれば、牛飼下部なゝどの見知れるもあり。をかしくもきら〳〵しくも、さま〴〵に行きかふ、見るもつれ〴〵ならず。暮るゝ程には、立て竝べつる車ども、所なくなみゐつる人も、いづかたへ行きつらん、程なく稀になりて、車どものらうがはしさも濟みぬれば、簾疊も取り拂ひ、目の前に淋しげになり行くこそ、世のためしも思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。かの棧敷の前をこゝら行きかふ人の見知れるが數多あるにて知りぬ、世の人數もさのみは多からぬにこそ。この人みな失せなん後、我身死ぬべきに定りたりとも、ほどなく待ちつけぬべし。大なる器物に水を入れて、細き孔をあけたらんに、滴ること少しと云ふとも、怠る間なく漏りゆかば、やがて盡きぬべし。都の中に多き人、死なざる日はあるべからず。一日に一人二人のみならんや。鳥部野、舟岡、さらぬ野山に

色こく―しつこく
あからめ―よそ目、わき目

うなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都こひしう覺ゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見る物かは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながらも思へるこそ、いと頼もしうをかしけれ。よき人は偏にすける樣にも見えず、興ずる樣もなほざりなり。片田舍の人こそ、色こくよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢより立ちより、あからめもせずまもりて、酒飮み、連歌して、はては大なる枝心なく折り取りぬ。泉には手足さしひたして、雪にはおりたちて跡つけなンど、萬の物、よそながら見る事なし。さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。「見ごといとおそし。そのほどは棧敷不用なり」とて、奧なる屋にて酒飮み物食ひ、圍碁雙六なンど遊びて、棧敷には人をおきたれば、「わたり候ふ」といふ時に、おの〱肝つぶるゝやうに爭ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張りいでて、押しあひつゝ、一事も見洩さじとまぼりて、とありかゝりと物事にいひて、わたり過ぎぬれば、又渡らんまでといひて降りぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。都の人のゆゝしげなるは、眠りていとも見ず。若くすゑ〲

とよみになりて—どつと大笑になりて

淺茅が宿—あれ果てたる宿

心ぶかう—趣深く、文段抄の説に依ればこの語の下に又なくあはれなりと補ふ

けり。

花は盛に、月は隈なきをのみ見るものかは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春のゆくへ知らぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭なンどこそ見どころ多けれ。歌の詞書にも、「花見に罷りけるにはやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありて罷らで」なンども書けるは、「花を見て」といへるに劣れる事かは。花の散り月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、ことにかたくなな人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見所なし」なンどはいふめる。萬の事も始終こそをかしけれ。男女の情も、偏にあひ見るをばいふものかは。逢はでやみにし憂さを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとり明し、遠き雲ゐを思ひやり、淺茅が宿に昔を忍ぶこそ、色このむとはいはめ。望月の隈なきを、千里の外まで眺めたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心ぶかう、青みたる樣にて、深き山の杉の梢に見えたる木の間のかげ、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴白樫なンどの、濡れたるや

馬のきつりやう云々ー黒川眞頼翁詳しく考案を立てて雁（かり）の隱語なりといひたれど如何にか

土偏ー鹽の字を塩の俗字にて答へし也

りけるに、具氏「幼くより聞きならひ侍れど、その心しらぬこと侍り。馬のきつりやうきつにのをか、なかくぼれいりくれんどうと申すことは、いかなる心にか侍らん。うけたまはらん」と申されけるに、大納言入道はたとつまりて、「これはそゞろごとなれば、いふにも足らず」といはれけるを、「もとより深き道は知り侍らず。そゞろごとを尋ね奉らんと、定め申しつ」と申されければ、大納言入道負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。

醫師あつしげ、故法皇の御前にさぶらひて、供御の參りけるに、「今參りはべる供御のいろいろを、文字も功能も尋ね下されて、そらに申しはべらば、本草に御覽じあはせられ侍れかし。一つも申し誤り侍らじ」と申しける時しも、六條の故内府まゐり給ひて、「有房ついでに物習ひ侍らん」とて、「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らん」と問はれたりけるに、「土偏に候ふ」と申したりければ、「才のほど既にあらはれにたり。今はさばかりにて候へ、ゆかしきところなし」と申されけるに、とよみになりて罷り出でに

不堪の藝―堪能ならざる藝

壯なる―曲禮に三十曰レ壯、血氣盛の者

そゞろごと―深きわけなき言、つまらぬ言葉

あきらめ―說き明かす

れにして出で仕へ、無智にして大才に交り、不堪の藝をもちて堪能の座につらなり、雪の頭を戴きて壯なる人にならび、況や及ばざることを望み、協はぬことを憂へ、來らざることを待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる恥にあらず、貪る心にひかれて、自ら身を恥しむるなり。貪ることのやまざるは、命を終ふる大事今こゝに來れりと、たしかに知らざればなり。

資季大納言入道とかや聞えける人、具氏宰相中將に逢ひて、「わぬしの問はれんほどのこと、何事なりとも答へ申さゞらんや」といはれければ、具氏「いかゞ侍らん」と申されけるを、「さらばあらがひ給へ」といはれて、「はかぐ\しき事は片端もまねび知り侍らねば、尋ね申すまでもなし。何となきそゞろごとの中に、おぼつかなき事をこそ問ひ奉らめ」と申されけり。「ましてこゝもとの淺きことは、何事なりともあきらめ申さん」といはれければ、近習の人々、女房なゝども、「興あるあらがひなり。同じくは御前にて爭はるべし。負けたらん人は供御をまうけらるべし」と定めて、御前にてめし合せられた

官名、僧綱の一、釋氏要覽に、律鈔解題云佛言善解ニ一字ノ名ニ律師ト一字者律字也云々

これを云々——尙書に念レ茲在レ茲

と見て、我貌の醜くあさましきことを、あまりに心憂く覺えて、鏡さへうとましき心地しければ、その後長く鏡をおそれて手にだに取らず、更に人に交る事なし。御堂の勤ばかりにあひて、籠り居たりと聞き傳へしこそ、ありがたく覺えしか。かしこげなる人も、人の上をのみ計りて、おのれをば知らざるなり。我を知らずして外を知るといふ理あるべからず。されば己を知るを、物知れる人といふべし。貌醜けれども知らず、心の愚なるをも知らず、藝の拙きをも知らず、身の數ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、病の冒すをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非をも知らねば、まして外の譏を知らず。たゞし貌は鏡に見ゆ、年は數へて知る。我身の事知らぬにはあらねど、すべき方のなければ、知らぬに似たりとぞいはまし。貌を改め、齡を若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞやがて退かざる。老いぬと知らば、何ぞしづかに身を安くせざる。行愚なりと知らば、何ぞこれを思ふことこれにあらざる。すべて人に愛樂せられずして衆に交るは恥なり。貌みにくゝ心おく

貧しきものは云々―世人一般に斯る狀態なるは誤れるの甚しきものぞと戒めたる也

鳥羽殿―白河院の建てられし仙洞御所

李部王の記―醍醐帝の御子式部卿重明親王の御著

律師―僧の

貧しきものは財をもて禮とし、老いたるものは力をもて禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は速にやむを智といふべし。許さゞらんは人のあやまりなり。分を知らずして強ひて勵むは、おのれがあやまりなり。貧しくて分を知らざれば盜み、力衰へて分を知らざれば病をうく。

鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の號にはあらず、昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の聲はなはだ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。

夜のおとゞは東御枕なり。大かた東を枕として、陽氣を受くべきゆゑに、孔子も東首し給へり。寢殿のしつらひ、或は南枕常のことなり。白河院は北首に御寢なりけり。「北は忌むことなり。また伊勢は南なり。太神宮の御方を御跡にせさせ給ふこといかゞ」と人申しけり。たゞし太神宮の遙拜は辰巳に向はせたまふ、南にはあらず。

高倉院の法華堂の三昧僧、何某の律師とかやいふもの、ある時鏡を取りて顔をつくぐ

凌雲の額云云—魏明帝の時、韋誕といふ人凌雲觀にのぼりて榜に題書し忽ち白頭となりし事、三國史に見ゆ

受く。外より來る病は少し。藥を飲みて汗を求むるには、驗なきことあれども、一旦恥ぢ恐るゝことあれば、かならず汗を流すは、心のしわざなりといふことを知るべし。凌雲の額を書きて、白頭の人となりし例なきにあらず。

物に爭はず、おのれを枉げて人に從ひ、我身を後にして、人を先にするには如かず。萬のあそびにも、勝負を好む人は、勝ちて興あらんためなり。おのれが藝の勝りたる事をよろこぶ。されば負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。我負けて人を歡ばしめんと思はゞ、更にあそびの興なかるべし。人に本意なく思はせて、わが心を慰めん事、徳に背けり。むつまじき中に戲るゝも、人をはかり欺きて、おのれが智の勝りたることを興とす。これまた禮にあらず。さればはじめ興宴より起りて、長き恨を結ぶ類おほし。これ皆あらそひを好む失なり。人に勝らんことを思はゞ、たゞ學問して、その智を人に勝らんと思ふべし。道を學ぶとならば、善に誇らず、ともがらに爭ふべからずといふ事を知るべきゆゑなり。大なる職をも辭し、利をも捨つるは、たゞ學問の力なり。

犬の足は云云—犬の足を切りし事は虚構也

顔回は云々—論語公冶長篇に、顔淵曰願無レ伐レ善無レ施レ勞

おとなしき人—大人

心は、いと尊きことなり。大かた生けるものを殺し、痛め闘はしめて遊び楽まん人は、畜生残害の類なり。よろづの鳥獣、小き蟲までも、心をとめてありさまを見るに、子をおもひ親をなつかしくし、夫婦を伴ひ、妬み怒り、慾おほく、身をあいし、命を惜める事、偏に愚癡なるゆゑに、人よりも勝りて甚だし。かれに苦を與へ、命を奪はんこと、いかでか痛ましからざらん。すべて一切の有情をみて慈悲の心なからんは、人倫にあらず。

顔回は志人に勞を施さじとなり。すべて人を苦しめ物を虐ぐること、賤しき民の志をも奪ふべからず。又いときなき子を賺し嚇し、言ひ辱しめて興ずることあり。おとなしき人は、まことならねば事にもあらず思へど、幼き心には、身にしみて恐しく、恥しく、あさましきおもひ、誠に切なるべし。これを悩して興ずること、慈悲の心にあらず。おとなしき人の、喜び怒り哀び楽ぶも、皆虚妄なれども、誰か實有の相に著せざる。身を破るよりも、心を痛ましむるは、人を害ふ事なほ甚だし。病を受くる事も、多くは心より

我頸―大成本其他、我がかしらに作る

逢ひて―大全の說によれば相手也

思はずなれど―意外なれど

づ我頸を斬るゆゑに、人をばえ切らぬなり。おのれまづ醉ひて臥しなば、人はよもめさじ」と申しき。劍にて斬り試みたりけるにや、いとをかしかりき。

「博奕の負きはまりて、殘なくうち入れんとせんに、逢ひては打つべからず。立ち歸りつゞけて勝つべき時のいたれるを知るべし。その時を知るをよき博奕といふなり」とあるもの申しき。

あらためて益なきことは、改めぬをよしとするなり。

雅房大納言は、才かしこく善き人にて、大將にもなさばやとおぼしける頃、院の近習なる人「只今あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何事ぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を切り侍りつるを、中垣の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく、にくゝおぼしめして、日ごろの御氣色もたがひ、昇進もしたまはざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足はあとなき事なり。虚言は不便なれども、かゝることを聞かせ給ひて、にくませ給ひける君の御

唐の狗に云云｜眞賴翁の說に唐の狗は狆也狆は淚を常に流してある故に此法師の自ら淚を流し說經せるを斯く嘲りし也云々

過ぐすを樂とす。たゞし人みな病あり、病に冐されぬれば、その愁忍びがたし。醫療を忘るべからず。藥を加へて、四つの事もとめ得ざるを貧しとす。この四つ缺けざるを富めりとす。この四つの外を求め營むを驕とす。四つの事儉約ならば、誰の人か足らずとせん。

是法法師は、淨土宗に恥ぢずといへども、學匠をたてず、たゞ明暮念佛して、やすらかに世を過ぐすありさま、いとあらまほし。

人におくれて、四十九日の佛事に、ある聖を請じ侍りしに、說法いみじくして、みな人淚をながしけり。導師かへりて後、聽聞の人ども「いつよりも殊に今日は尊くおぼえ侍りつる」と感じあへりし返事に、ある者のいはく、「何とも候へ、あれほど唐の狗に似候ひなん上は」といひたりしに、あはれもさめてをかしかりけり。さる導師のほめやうやはあるべき。また人に酒勸むるとて、「おのれまづたべて人に强ひ奉らんとするは、劍にて人を斬らんとするに似たることなり。二方に刄つきたるものなれば、もたぐる時ま

めづらしき鳥云々—尚書に、珍禽奇獸不レ育二于國一

多能は云々—論語孔子の言に吾少也賤故多二能鄙事一君子多乎不レ多也

する事はなくとも、これを習ふべし。學問に便あらんためなり。次に醫術を習ふべし。身を養ひ人を助け、忠孝のつとめも、醫にあらずばあるべからず。次に弓射、馬に乘ること六藝にいだせり。必ずこれを窺ふべし。文武醫の道、まことに缺けてはあるべからず。これを學ばんをば、いたづらなる人といふべからず。次に食は人の天なり。よく味をとゝのへ知れる人、大なる德とすべし。次に細工、よろづの要おほし。この外の事ども、多能は君子のはづるところなり。詩歌にたくみに、絲竹に妙なるは、幽玄の道、君臣これを重くすとはいへども、今の世には、これをもちて世を治むること、漸く愚なるに似たり。金はすぐれたれども、鐵の益多きに如かざるがごとし。

無益の事をなして時をうつすを、愚なる人とも、僻事する人ともいふべし。國のため君のために、止むことを得ずしてなすべき事おほし。そのあまりの暇、いくばくならず思ふべし。人の身に止むことを得ずして營む所、第一に食物、第二に著物、第三に居所なり。人間の大事この三つには過ぎず。飢ゑず、寒からず、風雨に冒されずして、しづかに

遠きもの云—尚書云、不レ寶二遠物一則遠人格

得がたき云—老子云、不レ貴二難レ得之貨一、使二民不一レ爲レ盜

桀紂—夏の桀、殷の紂、共に無道の王也

王子猷—晉の人、名は徽子、王羲之の子也

きも寫してん。もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみ取り積みて、所せく渡しもて來る、いと愚なり。遠きものを寶とせずとも、また得がたき寶をたふとまずとも、書にも侍るとかや。

養ひ飼ふものには馬牛、繋ぎ苦しむるこそ痛ましけれど、なくて叶はぬ物なれば如何はせん。犬はまもり防ぐつとめ、人にも優りたれば、必ずあるべし。されど家ごとにあるものなれば、ことさらに求め飼はずともありなん。その外の鳥獸、すべて用なきものなり。はしる獸は檻にこめ、鎖をさゝれ、飛ぶ鳥は翼を切り、籠に入れられて、雲を戀ひ野山をおもふ愁やむ時なし。そのおもひ我身にあたりて忍びがたくば、心あらん人これをたのしまんや。生を苦しめて目をよろこばしむるは、桀紂が心なり。王子猷が鳥を愛せし、林にたのしぶを見て逍遙の友としき。捕へ苦めたるにあらず。凡そめづらしき鳥、あやしき獸、國に養はずとこそ文にも侍るなれ。

人の才能は、文あきらかにして、聖の教を知れるを第一とす。次には手かくこと、旨と

さうなき―雙なき、この上なき

御湯殿―料理の間、湯にて物を煮などするより出でし語

北山入道殿―西園寺實氏、常盤井相國と號す

鯉のあつもの食ひたる日は、鬢そゝけずとなん。膠にもつくるものなれば、ねばりたるものにこそ。鯉ばかりこそ、御前にても切らるゝものなれば、やんごとなき魚なり。鳥には雉さうなきものなり。雉松茸なンどは、御湯殿の上にかゝりたるも苦しからず。その外は心憂きことなり。中宮の御方の御湯殿の上のくろみ棚に、雁の見えつるを、北山入道殿の御覽じて、歸らせたまひて、やがて御文にて、「がやうのもの、さながらその姿にて、御棚にゐて候ひしこと、見ならはずさま惡しきことなり。はか〴〵しき人のさぶらはぬ故にこそ」なンど申されたりけり。

鎌倉の海にかつをといふ魚は、かの境には雙なきものにて、この頃もてなすものなり。それも鎌倉の年寄の申し侍りしは、「この魚おのれら若かりし世までは、はか〴〵しき人の前へ出づること侍らざりき。頭は下部も食はず、切りて捨て侍りしものなり」と申しき。かやうの物も、世の末になれば、上ざままでも入りたつわざにこそ侍れ。

唐のものは、藥の外はなくとも事かくまじ。書どもは、この國に多くひろまりぬれば、書

さらぬ—其他

友とするに云々—論語季氏篇に出でたる益者三友損者三友の類

は、昔はなかりけるにや。近き世に、梵論字、梵字、漢字などいひける者、そのはじめなりけるとかや。世を捨てたるに似て我執ふかく、佛道を願ふに似て鬭諍を事とす。放逸無慚のありさまなれども、死を輕くして少しもなづまざる方のいさぎよく覺えて、人の語りしまゝに書きつけ侍るなり。

寺院の號、さらぬよろづの物にも名をつくること、昔の人はすこしも求めず、たゞありのまゝに安くつけけるなり。この頃は深く案じ、才覺を顯さんとしたるやうに聞ゆる、いとむづかし。人の名も、めなれぬ文字をつかんとする、益なき事なり。何事もめづらしき事をもとめ、異説を好むは、淺才の人の必ずあることなりとぞ。

友とするにわろきもの七つあり。一には高くやんごとなき人、二には若き人、三には病なく身つよき人、四には酒をこのむ人、五には武く勇める人、六にはそらごとする人、七には慾ふかき人。善き友三つあり。一にはものくるゝ友、二には醫師、三には智惠ある友。

太秦殿—藤原信清

ぼろ〳〵—暮露、虚無僧なり

わきざしたち云々—朋輩方どちらをも助太刀は無用なり

とて御車に頭をうちあてられにけり。この高名の齋王丸は、太秦殿の男、料の御牛飼ぞかし。この太秦殿に侍りける女房の名ども、一人は膝幸、一人は牸槌、一人は胞腹、一人は乙牛とつけられけり。

宿河原といふ所にて、ぼろ〳〵おほく集りて、九品の念佛を申しけるに、外より入りくるぼろ〳〵の、「もしこの御中に、いろをし坊と申すぼろやおはします」と尋ねければ、その中より、「いろをしこゝに候ふ。かくのたまふは誰ぞ」と答ふれば、「しら梵字と申す者なり。おのれが師なにがしと申す人、東國にていろをしと申すぼろに殺されけりと承りしかば、その人に逢ひ奉りて、うらみ申さばやと思ひて尋ね申すなり」といふ。いろをし「ゆゝしくも尋ねおはしたり。さること侍りき。こゝにて對面したてまつらば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまゐりあはん。あなかしこ。わきざしたち、いづ方をもみつぎ給ふな。數多のわづらひにならば、佛事のさまたげに侍るべし」といひ定めて、二人河原に出であひて、心ゆくばかりに貫きあひて、共に死にけり。ぼろ〳〵といふもの

日暮れ云々—白居易傳に、日暮而途遠吾生已蹉跎、老人病者などの菩提の途未だ至らざるに譬へし也

今出川のおほい殿—菊亭兼季

暮れ途とほし、吾生既に蹉跎たり、諸縁を放下すべき時なり。信をも守らじ、禮儀をも思はじ。この心を持たざらん人は、ものぐるひともいへ、現なし情なしともおもへ、譏るとも苦しまじ、譽むとも聞きいれじ。

四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた、おのづから忍びてあらんは如何はせん。ことにうち出でて、男女のこと、人の上をもいひ戲るゝこそ、似げなく見ぐるしけれ。大かた聞きにくゝ見ぐるしき事、老人の若き人にまじはりて興あらんと物いひ居たる、數ならぬ身にて、世のおぼえある人を隔なきさまにいひたる、貧しきところに酒宴このみ、客人に饗應せんときらめきたる。

今出川のおほい殿嵯峨へおはしけるに、有栖川のわたりに水の流れたる所にて、齋王丸御牛を追ひたりければ、あがきの水前板までさゝとかゝりけるを、爲則御車のしりに候ひけるが、「希有の童かな。かゝる所にて御牛をば追ふものか」といひたりければ、おほい殿御氣色あしくなりて、「おのれ車やらんこと、齋王丸に勝りてえ知らじ。希有の男なり」

雙六の上手といひし人に、そのてだてを問ひ侍りしかば、「勝たんとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手かとく負けぬべきと案じて、その手をつかはずして、一目なりとも遲くまくべき手につくべし」といふ。道を知れるをしへ、身を脩め國を保たん道もまたしかなり。

「圍碁雙六このみてあかし暮す人は、四重五逆にもまされる惡事とぞ思ふ」とある聖の申しゝこと、耳にとゞまりて、いみじくおぼえ侍る。

明日は遠國へ赴くべしと聞かん人に、心しづかになすべからんわざをば、人いひかけてんや。俄の大事をもいとなみ、切に歎くこともある人は、他の事を聞き入れず、人のうれへよろこびをも問はず。問はずとてなどやと恨むる人もなし。されば年もやう〳〵たけ、病にもまつはれ、況や世をも遁れたらん人、亦これに同じかるべし。人間の儀式、いづれの事か去りがたからぬ。世俗の默しがたきに從ひて、これをかならずとせば、願も多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雜事の小節にさへられて、空しく暮れなん。日

四重―殺生、偸盜、邪淫、妄語

五逆―父、母、阿羅漢を殺し和合僧を破り佛身の血を出す

法華の筆受—法華飜譯の執筆者、靈運は涅槃經の筆受なるが如し

惠遠白蓮の交—廬山の惠遠庭中に白蓮花を植ゑ同志と淨業をつとむ、これを白蓮の交といふ

おきてて—いひつけて

益のことを思惟して、時を遷すのみならず、日を消し月をわたりて、一生をおくる、尤も愚なり。謝靈運は法華の筆受なりしかども、心常に風雲のおもひを觀ぜしかば、惠遠白蓮の交をゆるさざりき。しばらくもこれなき時は死人におなじ。光陰何のためにか惜むとならば、內に思慮なく、外に世事なくして、止まん人はやめ、修ぜん人は修ぜよとなり。

高名の木のぼりといひし男、人をおきてて、高き木にのぼせて梢をきらせしに、いと危く見えしほどはいふこともなくて、おるゝ時に、軒だけばかりになりて、「あやまちすな。心しておりよ」と言葉をかけ侍りしを、「かばかりになりては、飛び下るゝともおりなん。如何にかくいふぞ」と申し侍りしかば、「その事に候ふ。目くるめき枝危きほどは、おのれがおそれ侍れば申さず。あやまちは安き所になりて、必ず仕ることに候ふ」といふ。あやしき下臈なれども、聖人のいましめにかなへり。鞠もかたき所を蹴出して後、やすくおもへば必ずおつと侍るやらん。

する心を云ふ、我相、人相、衆生相、壽者相を般若の四相とす

道人―得道者名爲二道人一餘出家者未得道者亦名二道人一（智度論）

便利―便通

かり飾れる事は、男の智惠にも優りたるかと思へば、その事あとより顯るゝを知らず。質朴ならずして拙きものは女なり。その心に隨ひてよく思はれんことは、心うかるべし。されば何かは女の恥かしからん。もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなん。ただ迷をあるじとしてかれに隨ふ時、やさしくもおもしろくも覺ゆべきことなり。

寸陰惜む人なし。これよく知れるか、愚なるか。愚にして怠る人のためにいはゞ、一錢かろしといへども、これを累ぬれば貧しき人を富める人となす。されば商人の一錢を惜む心切なり。刹那おぼえずといへども、これを運びてやまざれば、命を終ふる期忽ちにいたる。されば道人は、遠く日月を惜むべからず。只今の一念空しく過ぐることを惜むべし。もし人來りて、わが命明日は必ず失はるべしと告げ知らせたらんに、今日の暮るる間、何事をか賴み、何事をか營まん。我等が生ける今日の日、何ぞその時節に異ならん。一日の中に、飲食、便利、睡眠、言語、行歩、止むことを得ずして、多くの時を失ふ。そのあまりの暇、いくばくならぬうちに、無益の事をなし、無益のことをいひ、無

しれたる—ざれたる

數ならぬ身むづかし—數ならぬ身と某の答へしは安らかならずと也

人我の相—人と我との隔をたてゝ他人を輕くし我を重く

女のものいひかけたる返事、とりあへずよき程にする男はありがたきものぞとて、龜山院の御時、しれたる女房ども、若き男達の參らるゝ每に、「時鳥や聞きたまへる」と問ひて試みられけるに、某の大納言とかやは、「數ならぬ身はえ聞き候はず」と答へられけり。堀河内大臣殿は、「岩倉にて聞きて候ひしやらん」と仰せられけるを、「これは難なし。數ならぬ身むづかし」など定めあはれけり。すべて男をば、女に笑はれぬ樣におほしたつべしとぞ、淨土寺の前關白殿は、をさなくて安喜門院のよく敎へまゐらせさせ給ひける故に、御詞などのよきぞと人の仰せられけるとかや。山階左大臣殿は「あやしの下女の見奉るも、いと恥しく心づかひせらるゝ」とこそ仰せられけれ。女のなき世なりせば、衣紋も冠もいかにもあれ、ひきつくろふ人も侍らじ。かく人に恥らるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに、女の性はみなひがめり。人我の相ふかく、貪欲甚しく、物の理を知らず、たゞ迷の方に心もはやくうつり、詞も巧に、苦しからぬ事をも問ふ時はいはず、用意あるかと見れば、又あさましき事まで問はずがたりにいひ出す。深くたば

かぶしかたち―女の髮容、貞徳の説には女の打傾ける形

けはひなど云々―話の言葉の途切れ途切れ僅に漏れ聞ゆるをいふ

四部の弟子―四衆ともいふ、優婆塞は佛弟子の俗男、優婆夷は俗女

くきらめきて、有明の月さやかなれども、隈なくはあらぬに、人ばなれなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女と長押にしりかけて、物がたりするさまこそ、何事にかあらんつきすまじけれ。かぶしかたちなンどいとよしと見えて、えもいはぬ匂の、さとかをりたるこそをかしけれ。けはひなンどはつれ／＼聞えたるもゆかし。

高野の證空上人京へのぼりけるに、細道にて馬に乗りたる女の行きあひたりけるが、口引きける男あしく引きて、聖の馬を堀へ落してけり。聖いと腹あしく咎めて、「こは希有の狼藉かな。四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼はおとり、比丘尼より優婆塞はおとり、優婆塞より優婆夷はおとれり。かくのごとくの優婆夷なンどの身にて、比丘を堀に蹴入れさする、未曾有の惡行なり」といはれければ、口引の男「いかに仰せらるゝやらん、えこそ聞き知らね」といふに、上人なほいきまきて、「何といふぞ。非修非學の男」とあらゝかに言ひて、きはまりなき放言しつと思ひける氣色にて、馬引きかへして逃げられにけり。たふとかりける諍論なるべし。

たてあけ―開閉

俄にしも云云―今俄にはあらず日頃よりたしなみて焚きしめし香の匂也

今宵ぞ云々―下部どもの言葉、今宵は泊る人のあれば心安く寝ぬべきを喜ぶ也

いふ人あれば、たてあけ所せげなる遣戸よりぞ入りたまひぬる。内のさまはいたくすさまじからず、心にくく、火はかなたにほのかなれど、物の綺羅なンど見えて、俄にしもあらぬにほひ、いとなつかしう住みなしたり。「門よくさしてよ。雨もぞふる、御車は門の下に、御供の人はそこ〳〵に」といへば、「今宵ぞやすきいは寝べかンめる」とうちさゝめくも、忍びたれど、ほどなければほの聞ゆ。さてこの程の事どもこまやかに聞え給ふに、夜ぶかき鷄も鳴きぬ。こしかた行くすゑかけて、まめやかなる御物語に、この度は鷄も花やかなる聲にうちしきれば、明け離るゝにやと聞きたまへど、夜深く急ぐべき所のさまにもあらねば、すこしたゆみ給へるに、隙白くなれば、忘れ難きことなンどいひて立ち出でたまふに、梢も庭もめづらしく青みわたりたる卯月ばかりのあけぼの、艶にをかしかりしをおぼし出でて、桂の木の大なるがかくるゝまで、今も見おくり給ふとぞ。

北の家かげに消え残りたる雪の、いたうこほりたるに、さし寄せたる車の轅も、霜いた

れければ、「又五郎をのこを師とするより外の才覺候はじ」とぞのたまひける。かの又五郎は老いたる衛士の、よく公事に馴れたるものにてぞありける。近衛殿着陣したまひける時、膝突をわすれて外記をめされければ、火をたきて候ひけるが、「まづ膝突をめさるべくや候ふらん」と忍びやかにつぶやきける、いとをかしかりけり。

大覺寺殿にて、近習の人ども、なぞ〱をつくりて解かれけるところへ、醫師忠守參りたりけるに、侍從大納言公明卿「我朝のものとも見えぬ忠守かな」となぞ〱にせられけるを、唐瓶子と解きて笑ひあはれければ、腹立ちてまかり出にけり。

荒れたる宿の人めなきに、女の憚ることあるころにて、つれ〲と籠り居たるを、ある人とぶらひ給はんとて、夕月夜のおぼつかなきほどに、忍びて尋ねおはしたるに、犬のこと〲しくとがむれば、げす女のいでて、「いづくよりぞ」といふに、やがて案内せさせて入りたまひぬ。心ぼそげなるありさま、いかで過すらんと、いと心ぐるし。あやしき板敷に、しばし立ち給へるを、もてしづめたるけはひの若やかなるして、「こなたへ」と

膝突—小半疊のうすべり

我朝の云々—我朝のものとも見えぬは唐なり、忠守は平氏なり、即ち唐瓶子と解ける也

もてしづめたるけはひ—しとやかなる樣子

堀河の相國—源基具
過差—おごり
大理—檢非違使の別當
久我の相國—源雅實
まがり—貝を磨きて造れる飲器

堀河の相國は、美男のたのしき人にて、その事となく過差を好みたまひけり。御子基俊卿を大理になして、廳務を行はれけるに、廳屋の唐櫃見苦しとて、めでたく作り改めらるべきよし仰せられけるに、この唐櫃は上古よりつたはりて、そのはじめを知らず、數百年を經たり、累代の公物、古弊をもちて規模とす、たやすく改められ難きよし、故實の諸官等申しければ、その事やみにけり。

久我の相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司土器をたてまつりければ、「まがりをまゐらせよ」とて、まがりしてぞめしける。

ある人任大臣の節會の内辨を勤められけるに、内記のもちたる宣命を取らずして堂上せられにけり。きはまりなき失禮なれども、たちかへり取るべきにもあらず、思ひ煩はれけるに、六位の内記康綱、衣被の女房をかたらひて、かの宣命をもたせて、しのびやかに奉らせけり。いみじかりけり。

尹大納言光忠入道、追儺の上卿をつとめられけるに、洞院右大臣殿に次第を申し請けら

り、國に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。

たふとき聖のいひおきけることを書きつけて、一言芳談とかや名づけたる草紙を見侍りしに、心にあひて覺えし事ども、

一爲やせまし、爲ずやあらましと思ふことは、おほやう爲ぬはよきなり。

一後世を思はんものは、糂汰瓶ひとつも持つまじきことなり。持經本尊にいたるまで、よきものを持つ、よしなきことなり。

一遁世者は、なきに事かけぬやうをはからひて過ぐる、最上のやうにてあるなり。

一上臈は下臈になり、智者は愚者になり、德人は貧になり、能ある人は無能になるべきなり。

一佛道を願ふといふは別のことなし、暇ある身になりて、世のこと心にかけぬを第一の道とす。

この外もありし事ども覺えず。

糂汰―ぬかみそ

上臈下臈―臈は出家者剃髮授戒してより一夏九旬の間勤行するをいふ僧位は其戒臈の前後にて次第するより上臈下臈を一般に上位下位の義にいふ

常磐井の相國―太政大臣實氏

はなたれ―免職せられ

くりかた―栗形、大全に〇の如き形といへり

めなもみ―豨薟の俗稱、野生にして莖方直枝對生、葉三稜ありて細毛を生じ秋枝端に小黄花を著く

しまた生死の相にあづからずといはゞ、實の理を得たりといふべし」といふに、人いよいよ嘲る。

常磐井の相國出仕したまひけるに、勅書を持ちたる北面あひ奉りて、馬よりおりたりけるを、相國後に、「北面なにがしは勅書を持ちながら下馬し侍りしものなり。かほどのもの、いかでか君に仕うまつり候ふべき」と申されければ、北面をはなたれにけり。勅書を馬の上ながら捧げて見せ奉るべし、おるべからずとぞ。

「箱のくりかたに緒をつくること、いづかたにつけ侍るべきぞ」とある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸につけ表紙につくること兩説なれば、いづれも難なし。文の箱は多くは右につく。手箱には軸につくるも常のことなり」と仰せられき。

めなもみといふ草あり。蝮にさゝれたる人、かの草をもみてつけぬれば、すなはち癒ゆとなん。見知りておくべし。

其物につきて、そのものを費しそこなふもの、數を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あ

いたつがはしく――わづらはしく、面倒なる思をして

心あることを知らんや。何ぞたゞ今の一念において直にすることの甚だ難き。

「牛を賣るものあり、買ふ人、明日その價をやりて牛を取らんといふ。夜の間に牛死ぬ。買はんとする人に利あり、賣らんとする人に損あり」とかたる人あり。これを聞きて傍なるものの曰く、「牛の主まことに損ありといへども、また大なる利あり。その故は、生あるもの死の近きことを知らざること、牛すでにしかなり。人またおなじ。はからざるに牛は死し、計らざるに主は存せり。一日の命萬金よりもおもし。牛の價鵝毛よりも輕し。萬金を得て一錢を失はん人、損ありといふべからず」といふに、皆人嘲りて、「その理は牛の主に限るべからず」といふ。またいはく、「されば人死をにくまば、生を愛すべし。存命のよろこび日々に樂しまざらんや。愚なる人この樂を忘れて、いたつがはしく外の樂をもとめ、この財を忘れて、危く他の財を貪るには、志滿つることなし。いける間生をたのしまずして、死に臨みて死を恐れば、この理あるべからず。人みな生をたのしまざるは、死をおそれざる故なり。死を恐れざるにはあらず、死の近き事を忘るゝなり。も

幻化—まぼろしの如く變化する義、楞嚴經疏に、假託ニ虚僞ニ妄設レ情名稱レ幻無而忽有畢竟無レ體稱レ之曰レ化

もろ矢—一手にて矢二筋持つこと

こと、爲たりしこと叶はず、得たりしものは失ひ、企てたりしこと成らずといふ、愚なり。吉日を選びてなしたるわざの末通らぬを數へて見んも、また等しかるべし。その故は、無常變易のさかひ、ありと見るものも存せず、始あることも終なし。志は遂げず、望は絶えず。人の心不定なり、ものみな幻化なり。何事かしばらくも住する。この理を知らざるなり。吉日に惡をなすに必ず凶なり、惡日に善を行ふにかならず吉なりといへり。吉凶は人によりて日によらず。

ある人弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的にむかふ。師のいはく、「初心の人ふたつの矢を持つことなかれ。後の矢を頼みて初の矢になほざりの心あり、毎度たゞ得失なく、この一箭に定むべしと思へ」といふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろそかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらんことを思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、重ねて懇に修せんことを期せり。いはんや一刹那のうちにおいて、懈怠の

赤舌日―晴明の簠簋内傳によるに赤舌赤口共に羅刹神に當る日にて赤口は大歳東門番神、赤舌は大歳西門番神なり、兼好は此書を見ざりしならん

のもとへふと寄り來て、やがてかきつくまゝに、頸のほどを食はんとす。肝心もうせて、防がんとするに力もなく、足も立たず、小川へころび入りて、「助けよやねこまた、よやよや」と叫べば、家々より松どもともして、走り寄りて見れば、このわたりに見知れる僧なり。こはいかにとて、川の中より抱き起したれば、連歌の賭物とりて、扇小箱など懐に持ちたりけるも水に入りぬ。希有にして助かりたるさまにて、はふ〳〵家に入りにけり。飼ひける犬の、暗けれど主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

大納言法印のめしつかひし乙鶴丸、やすら殿といふものを知りて、常にゆき通ひしに、ある時いでて歸り來るを、法印「いづくへ行きつるぞ」と問ひしかば、「やすら殿のがりまかりて候ふ」といふ。「そのやすら殿は、男か法師か」とまた問はれて、袖かき合せて、「いかゞ候ふらん。頭をば見候はず」と答へ申しき。などか頭ばかりの見えざりけん。

赤舌日といふ事　陰陽道には沙汰なきことなり。昔の人これを忌まず。このごろ何者のいひ出でて忌みはじめけるにか。この日あること末通らずといひて、その日いひたりし

によび—呻吟して

うける事—浮きたる事、虚事

四條大納言—藤原公任

これら—此邊

あやまたず—果して

けり。馬は血つきて宇治大路の家に走り入りたり。あさましくて、男ども數多はしらかしたれば、具覺坊は梔原によび伏したるを、求め出でてかきもて來つ。からき命生きたれど、腰きり損ぜられて、かたはになりにけり。

あるもの小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人「御相傳うけることには侍らじなれども、四條大納言えらばれたるものを、道風書かんこと、時代や違ひ侍らん。覺束なくこそ」といひければ、「さ候へばこそ世にありがたきものには侍りけれ」とていよ〳〵祕藏しけり。

「奥山にねこまたと云ふものありて、人を食ふなる」と人のいひけるに、「山ならねども、これらにも猫の經あがりて、ねこまたになりて、人とることはあゝなるものを」といふものありけるを、なに阿彌陀佛とかや連歌しける法師の、行願寺のほとりにありけるが聞きて、一人ありかん身は心すべきことにこそと思ひける頃しも、ある所にて夜ふくるまで連歌して、たゞ一人かへりけるに、小川の端にて、音に聞きしねこまたあやまたず足

一度せさせよ―一杯飲ませよ

具して逢ひたるに―引き連れ來れるに逢ひたるに、

下部に酒のますることは心すべきことなり。宇治に住みける男、京に具覺坊とてなまめきたる遁世の僧を、小舅なりければ、常に申しむつびけり。ある時迎に馬を遣したりければ、「はるかなる程なり、口つきの男にまづ一度せさせよ」とて酒を出したれば、さしうけさしうけよゝと飲みぬ。太刀うち佩きてかひ〴〵しげなれば、たのもしく覺えて、召し具して行くほどに、木幡のほとりにて、奈良法師の兵士あまた具して逢ひたるに、この男立ちむかひて、「日暮れにたる山中にあやしきぞ。とまり候へ」といひて太刀をひき拔きければ、人もみな太刀ぬき矢はげなどしけるを、具覺坊手をすりて、「現心なく醉ひたるものに候ふ。枉げて許し給はらん」といひければ、おの〳〵嘲りて過ぎぬ。この男具覺坊にあひて、「御坊は口惜しき事したまひつるものかな。おのれ醉ひたること侍らず。高名つかまつらんとするを、拔ける太刀空しくなし給ひつること」と怒りて、ひたぎりに斬り落しつ。さて「山賊あり」とのゝしりければ、里人おこりて出であへば、「われこそ山賊よ」といひて走りかゝりつゝ斬り廻りけるを、あまたして手負せうち伏せてしばり

人の心すなほならねば、偽なきにしもあらず、されどおのづから正直の人などかなからん。おのれすなほならねど、人の賢を見て羨むは世の常なり。いたりて愚なる人は、たまたま賢なる人を見てこれを憎む。「大なる利を得んがために少しきの利を受けず、いつはり飾りて名を立てんとす」と謗る。おのれが心に違へるによりて、この嘲をなすにて知りぬ。この人は下愚の性うつるべからず、偽りて小利をも辭すべからず。假にも愚をまなぶべからず。狂人のまねとて大路を走らば、すなはち狂人なり。惡人のまねとて人を殺さば、惡人なり。驥を學ぶは驥のたぐひ、舜を學ぶは舜の徒なり。偽りても賢をまなばんを賢といふべし。

惟繼中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、讀經うちして、寺法師の圓伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは法師とこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

べからず―うつろ、辭すの下なるは推量、學ぶの下なるは命令

風月の才―詩歌の才

法師―一説に寺を燒かれたれば火憂（ホウシ）といふ秀句といへり

一の上―左大臣

亢龍の悔―易の象に亢之爲ㇾ言也知ㇾ進而不ㇾ知ㇾ退知ㇾ存而不ㇾ知ㇾ亡知ㇾ得而不ㇾ知ㇾ喪云云

法顯三藏―晉朝の高僧、三藏とは經律論の三を修得せる人の稱

へんとするは拙き者のする事なり。不具なるこそよけれ」といひしも、いみじく覺えしなり。すべて何もみな事整りたるはあしきことなり。爲殘したるを、さてうちおきたるは、面白く生きのぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ず造りはてぬ所を殘す事なりと、ある人申し侍りしなり。先賢の作れる内外の文にも、章段の闕けたる事のみこそ侍れ。

竹林院入道左大臣殿、太政大臣にあがりたまはんに、何の滯かおはせんなれども、「珍しげなし。一の上にてやみなん」とて、出家し給ひにけり。洞院左大臣殿この事を甘心し給ひて、相國の望おはせざりけり。亢龍の悔ありとかやいふ事侍るなり。月滿ちては缺け、物盛にしては衰ふ。萬の事さきのつまりたるは、破に近き道なり。

法顯三藏の天竺に渡りて、故鄕の扇を見ては悲び、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の無下にこそ、心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ」と人のいひしに、弘融僧都「優に情ありける三藏かな」といひたりしこそ、法師の樣にもあらず、心にくゝ覺えしか。

巧ならざる自己の専門の道

頓阿―二條為世の門弟にて慶運浄弁兼好と相並びて和歌の四天王と稱せらる

き矢きはまりて、遂に敵に降らず、死を安くして後、はじめて名を顯すべき道なり。生けらんほどは武に誇るべからず。人倫に遠く禽獸に近きふるまひ、その家にあらずば、好みて益なきことなり。

屛風障子などの繪も文字も、かたくななる筆樣して書きたるが、見にくきよりも、宿の主人のつたなく覺ゆるなり。大かた持てる調度にても、心おとりせらるゝ事はありぬべし。さのみよき物を持つべしとにもあらず、損ぜざらんためとて、品なく見にくきさまにしなし、珍しからんとて、用なき事どもしそへ、わづらはしく好みなせるをいふなり。古めかしきやうにて、いたくことぐ〵しからず、費もなくて、物がらのよきがよきなり。

「羅の表紙は疾く損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は、貝落ちて後こそいみじけれ」と申し侍りしこそ、心まさりて覺えしか。一部とある草紙などのおなじ様にもあらぬを、醜しといへど、弘融僧都が「物を必ず一具に整

今さらの人 ―今あらたに交際する人

こゝもとに ―此許、つひ口先になどの義にもいへどこゝは其人々の間にの義ならん

されば云々 ―されば其人の話には京恥しく奥ゆかしき方もあれど

おろかなるおのが道―

まで知らぬ人は心にくし。今さらの人などのある時、こゝもとに言ひつけたる言種、物の名など心えたるどち、かたはし言ひかはし、目見あはせ笑ひなどして、心しらぬ人にこゝろえず思はすること、世なれずよからぬ人の必ずあることなり。

何事も入りたゝぬさましたるぞよき。よき人は知りたる事とて、さのみ知りがほにやはいふ。片田舎よりさしいでたる人こそ、萬の道に心えたるよしのさしいらへはすれ。されば世に恥しき方もあれど、自らもいみじと思へる氣色かたくななり。よく辨へたる道には、かならず口おもく、問はぬかぎりは言はぬこそいみじけれ。

人ごとに、我身にうとき事をのみぞ好める。法師はつはものの道をたて、夷は弓ひくすべ知らず、佛法知りたる氣色し、連歌し、管絃を嗜みあへり。されどおろかなる己が道よりは、なほ人に思ひあなづられぬべし。法師のみにもあらず、上達部、殿上人、上ざままで、おしなべて武を好む人おほかり。百たび戰ひて百たび勝つとも、いまだ武勇の名を定めがたし。その故は運に乘じて敵をくだく時、勇者にあらずといふ人なし。兵盡

ほれて―醉中夢裡の如く茫然として

摩訶止觀―十卷、天台大師の著にして妙法蓮華經觀心の義を演べたるもの

いろふ―取り扱ふ、關知する

中に夢をなす。走りていそがはしく、ほれて忘れたること、人皆かくのごとし。いまだまことの道を知らずとも、緣を離れて身をしづかにし、事に與らずして心を安くせんこそ、暫く樂ぶともいひつべけれ。生活、人事、伎能、學問等の諸緣をやめよとこそ、摩訶止觀にもはべれ。

世のおぼえ花やかなるあたりに、嘆も喜もありて、人おほく往きとぶらふ中に、聖法師のまじりて、いひ入れたゝずみたるこそ、さらずともと見ゆれ。さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。

世の中に、そのころ人のもてあつかひぐさに言ひあへること、いろふべきにはあらぬ人の、能く案内知りて、人にもかたり聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。殊にかたほとりなる聖法師などぞ、世の人の上はわが如く尋ね聞き、如何でかばかりは知りけんと覺ゆるまでぞ言ひ散らすめる。

今やうの事どもの珍しきを、いひ廣めもてなすこそ、またうけられね。世に事ふりたる

先途——冥途、死して行く先

つれ〴〵わぶる——徒然を厭ふ

く、よもあらじなどいふも詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひあざけるべからず。

蟻の如くにあつまりて、東西にいそぎ南北にわしる、貴きあり、賤しきあり、老いたるあり、若きあり、行く所あり、歸る家あり、夕にいねて朝に起く、いとなむ所何事ぞや。生を貪り利を求めてやむ時なし。身を養ひて何事をか待つ、期するところたゞ老と死とにあり。その來ること速にして、念々の間にとゞまらず。これを待つ間、何の樂かあらん。惑へるものはこれを恐れず。名利に溺れて、先途の近きことを顧みねばなり。愚なる人はまたこれをかなしぶ。常住ならんことを思ひて、變化の理を知らねばなり。

つれ〴〵わぶる人は、いかなる心ならん。まぎるゝ方なく、たゞ一人あるのみこそよけれ。世に隨へば、心外の塵にうばはれて惑ひ易く、人に交れば、言葉よそのきゝに隨ひて、さながら心にあらず。人に戲れ、物にあらそひ、一度はうらみ、一度はよろこぶ。そのこと定れることなし。分別妄に起りて、得失やむ時なし。まどひの上に醉へり、醉の

かつ—いふ片端より

おぼめき—明かに覺えぬ樣をなすをいふ

權者—神佛などの衆生濟度の爲めかりに人として出現せるをいふ

て、筆にも書きとゞめぬれば、やがて定りぬ。道々のものゝ上手のいみじき事など、かたくなる人の、その道知らぬは、そゞろに神の如くにいへども、道知れる人はさらに信も起さず。音にきくと見る時とは、何事もかはるものなり。かつ顯るゝも顧みず、口に任せていひちらすは、やがて浮きたる事と聞ゆ。又我も誠しからずは思ひながら、人のいひしまゝに、鼻のほどおごめきて言ふは、その人の虚言にはあらず。げに〳〵しく所々うちおぼめき、能く知らぬよしして、さりながら、つま〴〵合せてかたる虚言は、恐しきことなり。わがため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人いたくあらがはず。皆人の興ずる虚言は、一人さもなかりし物をといはんも詮なくて、聞き居たるほどに、證人にさへなされて、いとゞ定りぬべし。とにもかくにも虚言おほき世なり。たゞ常にある珍しからぬ事のまゝに心えたらん、よろづ違ふべからず。下ざまの人のものがたりは、耳驚くことのみあり。よき人はあやしき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を懇に信じたるもをこがまし

意趣かありけん、物見ける衣被のよりて放ちて、もとのやうに置きたりけるとぞ。

名を聞くより、やがて面影はおしはからるゝ心地するを、見るときは、又かねて思ひつるまゝの顔したる人こそなけれ。昔物語を聞きても、この頃の人の家のそこ程にてぞありけんと覺え、人も今見る人の中に思ひよそへらるゝは、誰もかく覺ゆるにや。またいかなる折ぞ、たゞ今人のいふことも、目に見ゆるものも、わが心のうちも、かゝる事のいつぞやありしがと覺えて、いつとは思ひいでねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふにや。

賤しげなるもの。居たるあたりに調度のおほき、硯に筆のおほき、持佛堂に佛のおほき、前栽に石草木のおほき、家のうちに子孫のおほき、人にあひて詞のおほき、願文に作善おほく書き載せたる。おほくて見苦しからぬは、文車の文、塵塚のちり。

世にかたり傳ふること、まことは愛なきにや、多くは皆虛言なり。あるにも過ぎて人はものをいひなすに、まして年月すぎ、さかひも隔りぬれば、いひたきまゝに語りなし

く柱の落ちし理由をいふ也、もとのやうには前に述べたるが如くにの意、衣被は古貴女の面を蔽ひかくす爲に頭に被りし衣、茲は之を被れる見物の女房也

作善―願文に佛像供養經典書寫の事など書き列ぬるをいふ

出でて、命を惜しまず戰ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議におぼえて、「日頃ここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戰ひしたまふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年來たのみて、あさな〳〵めしつる土大根らに候」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かゝる德もありけるにこそ。

書寫の上人は、法華讀誦の功つもりて、六根淨にかなへる人なりけり。旅の假屋に立ち入られけるに、豆の殼を焚きて豆を煮ける音の、つぶ〳〵となるを聞き給ひければ、「疎からぬおのれらしも、うらめしく我をば煮て、辛き目を見するものかな」といひけり。焚かるゝ豆がらのはら〳〵と鳴る音は、「わが心よりする事かは。燒かるゝはいかばかり堪へがたけれども、力なきことなり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

元應の淸暑堂の御遊に、玄上はうせにし頃、菊亭の大臣、牧馬を彈じたまひけるに、座につきてまづ柱をさぐられたりければ、ひとつ落ちにけり。御ふところに續飯をもち給ひたるにて付けられにければ、神供の參るほどに、よく干て事故なかりけり。いかなる

書寫の上人—性空上人、書寫山に居住せるよりいふ

玄上、牧馬—共に琵琶の名器

菊亭の大臣—左大臣兼季

いかなる意趣云々—斯

吉水和尚―慈鎭和尚、東山吉水に居たればいふ、嘉祿元年滅、嘉禎三年慈鎭と諡せらる

賀茂の岩本橋本は業平實方なり。人の常にいひまがへ侍れば、一とせ參りたりしに、老いたる宮司の過ぎしを、呼びとゞめて尋ね侍りしに、「實方は御手洗に影のうつりける所と侍れば、橋本やなほ水の近ければと覺えはべる。吉水和尚、

月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はこゝにあり原

と詠みたまひけるは、岩本の社とこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、なかなか御存知なンどもこそさぶらはめ」と、いと恭しくいひたりしこそいみじく覺えしか。今出川の院の近衞とて、集どもにあまた入りたる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二つの社の御前に、水にて書きて手向けられけり。誠にやんごとなき譽ありて、人の口にある歌おほし。作文詩序なンどいみじく書く人なり。

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなる者のありけるが、土大根をよろづにいみじき藥とて、朝ごとに二つづつ燒きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時館のうちに人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ來りてかこみ攻めけるに、館の内につはもの二人

に、「さらばおのれが思はんやうにつけて參らせよ」と仰せられたりければ、花もなき梅の枝に、一つをつけて參らせけり。武勝が申し侍りしは、「柴の枝、梅の枝、つぼみたると散りたるにつく。五葉などにもつく。枝の長さ七尺、あるひは六尺、かへし刀五分に切る、枝のなかばに鳥をつく。つくる枝ふまする枝あり。黒葛藤のわらぬにて二所つくべし。藤のさきは、火うち羽のたけに比べて切りて、牛の角のやうに撓むべし。初雪のあした、枝を肩にかけて、中門よりふるまひてまゐる。大砌の石を傳ひて、雪に跡をつけず、雨覆の毛を少しかなぐり散らして、二棟の御所の高欄によせかく。祿をいださるれば、肩にかけて拜して退く。初雪といへども、沓のはなの隱れぬほどの雪にはまるらず。雨覆の毛を散らすことは、鷹は弱腰を取ることなれば、御鷹の取りたるよしなるべし」と申しき。花に鳥つけずとは、いかなる故にかありけん。長月ばかりに、梅のつくり枝に雉をつけて、君がためにと折る花は時しもわかぬといへること、伊勢物語に見えたり。作花はくるしからぬにや。

火うち羽―鳥の羽先の火打形の羽

雨覆の毛―雉の尾のつけぎはの毛

君がために―わがたのむ君がためにと折る花は時しもわかぬものにぞありける

ふたつもじ云々—ふたつもじはこ、牛の角もじはい、すぐなもじはし、ゆがみもじはく

武者—警護の武士

ほどにつけて極むる—其家々の分に應じて最高の

岡本關白殿—家平

ふたつもじ牛の角もじすぐなもじゆがみもじとぞ君はおぼゆる

こひしく思ひまゐらせ給ふとなり。

後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人に逢ひにけるより、宿直人とてかくことぐ\しくなりにけり。一とせの相は、この修中の有樣にこそ見ゆなれば、兵を用ひんこと穩ならぬ事なり。

車の五緒はかならず人によらず、ほどにつけて極むる官位に至りぬれば乘るものなりとぞ、ある人おほせられし。

このごろの冠は昔よりは遙に高くなりたるなりとぞ、ある人おほせられし。古代の冠桶を持ちたる人は、端をつぎて今は用ふるなり。

岡本關白殿、さかりなる紅梅の枝に、鳥一雙をそへて、この枝につけて參らすべきよし、御鷹飼下毛野武勝に仰せられたりけるに、「花に鳥つくるすべ知り候はず、一枝に二つつくることも存じ候はず」と申しければ、膳部に尋ねられ、人々に問はせ給ひて、また武勝

宗の法燈―宗は眞言、法燈は棟梁の意

ときひじ―時非時、時は正午の食非時は午後の食をいふ

甑―蒸籠（セイロウ）

も重く思はれたりけれども、世を輕く思ひたる曲者にて、よろづ自由にして、大かた人に隨ふといふことなし。出仕して饗膳なゝどにつく時も、皆人の前すゑわたすを待たず、我前にすゑぬれば、やがてひとりうち食ひて、歸りたければ、ひとりついたちて行きけり。ときひじも人にひとしく定めて食はず、我食ひたき時、夜中にも曉にも食ひて、ねぶたければ晝もかけ籠りて、いかなる大事あれども、人のいふこと聽き入れず。目覺めぬれば、幾夜もいねず、心をすまして嘯き歩きなど、世の常ならぬさまなれども、人にいとはれず、よろづ許されけり。徳のいたれりけるにや。

御産のとき甑おとすことは、定れることにはあらず。御衣胞滯る時のまじなひなり。滯らせ給はねばこの事なし。下ざまより事おこりて、させる本說なし。大原の里の甑をめすなり。ふるき寶藏の繪に、賤しき人の子産みたる所に、甑おとしたるを書きたり。

延政門院いときなくおはしましける時、院へまゐる人に、御ことづてとて申させ給ひける御歌、

眞乘院―仁和寺内の坊

三萬疋―永錢一貫を百匹といふ三百貫は則ち三萬疋也

めし―食ふ

しろうるり―眞賴の説に、るりはりの延音、しろうりを態と解し難く云へるにてこの僧色白く面長にて白瓜に似たりしならん云々

眞乘院に、盛親僧都とてやんごとなき智者ありけり。芋頭といふものを好みて多く食ひけり。談義の座にても、大なる鉢にうづたかく盛りて、膝もとにおきつゝ、食ひながら書をも讀みけり。煩ふことあるには、七日二七日など療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、萬の病をいやしけり。人に食はすることなし、ただ一人のみぞ食ひける。極めて貧しかりけるに、師匠死にざまに錢二百貫と坊ひとつを讓りたりけるを、坊を百貫に賣りて、かれこれ三萬疋を芋頭のあしと定めて、京なる人にあづけおきて、十貫づつ取りよせて、芋頭を乏しからずめしけるほどに、また他用にも用ふる事なくて、そのあし皆になりにけり。「三百貫のものを貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠にありがたき道心者なり」とぞ人申しける。この僧都ある法師を見て、しろうるりといふ名をつけたりけり。「とは何ものぞ」と人の問ひければ、「さるものを我も知らず。もしあらましかば、この僧の顏に似てん」とぞいひける。この僧都、みめよく、力つよく、大食にて、能書、學匠、辯説人にすぐれて、宗の法燈なれば、寺中に

菩提―翻譯名義集に、肇師云道之極者稱曰二菩提一云々後代諸師皆譯爲レ道

設けて―この下になど思ひ又と補ふ

年ごろも云云―年來も斯くてあればこそありしものをその事の果てんを待たんに幾程の事もあらじ

うとく、善には近づくことのみぞ多き。人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れん事こそあらまほしけれ。偏に貪ることをつとめて、菩提に赴かざらんは、よろづの畜類にかはる所あるまじくや。

大事を思ひたゝん人は、さりがたき心にかゝらんことの本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。しばしこの事はてゝ、おなじくば彼の事沙汰しおきて、しか〴〵の事人の嘲やあらん、行末難なくしたゝめ設けて、年ごろもあればこそあれ、その事待たんほどあらじ、物さわがしからぬやうになんど思はんには、えさらぬ事のみいとゞかさなりて、事の盡くるかぎりもなく、思ひたつ日もあるべからず。おほやう人を見るに、すこし心ある際は。皆このあらましにてぞ一期は過ぐめる。近き火なんどに逃ぐる人は、しばしとやいふ。身を助けんとすれば、恥をも顧みず、財をも捨てゝ遁れ去るぞかし。命は人を待つものかは。無常の來ることは、水火の攻むるよりも速に遁れがたきものを、その時老いたる親、いときなき子、君の恩、人の情、捨てがたしとて捨てざらんや。

かたはらいたく―笑止にて

いさましからん―何ぞ心勇む事あらんや

うつはもの―器量

なじかは捨てし―何しに世を捨てたるぞ、一説捨てじと濁り讀み、なじかはをいかでかと解す。

みじと思ひては語らじ。すべていとも知らぬ道の物がたりしたる、かたはらいたく聞きにくし。

「道心あらば住む所にしもよらじ、家にあり人に交るとも、後世を願はんに難かるべきかは」といふは、更に後世知らぬ人なり。げにはこの世をはかなみ、必ず生死を出でんと思はんに、何の興ありてか、朝夕君につかへ、家を顧るいとなみのいさましからん。心は縁にひかれて移るものなれば、靜ならでは道は行じがたし。そのうつはもの昔の人に及ばず、山林に入りても、飢をたすけ、嵐を防ぐよすがなくては、あられぬわざなれば、おのづから世を貪るに似たることも、便にふればなどか無からん。さればとて、「背けるかひなし。さばかりならば、なじかは捨てし」などいはんは無下のことなり。さすがに一たび道に入りて、世をいとはん人、たとひ望ありとも、勢ある人の貪欲多きに似るべからず。紙の衾麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの、いくばくか人のつひえをなさん。もとむる所はやすく、その心早く足りぬべし。形にはづる所もあれば、さはいへど惡には

あかし—あかるし

次ざまの人—身分のよからぬ人

あからさま—苟且

らうがはし—亂りがはし、騷々し

を見るに、遣戸は蔀の間よりもあかし。天井の高きは、冬寒く、燈くらし。造作は用なき所をつくりたる、見るもおもしろく、よろづの用にも立ちてよしとぞ、人のさだめあひ侍りし。

久しく隔たりて逢ひたる人の、わが方にありつることと、かず〳〵に殘なく語りつゞくるこそあいなけれ。へだてなく馴れぬる人も、程へて見るは恥かしからぬかは。次ざまの人は、あからさまに立ち出でても、興ありつる事とて、息もつぎあへず語り興ずるぞかし。よき人の物がたりするは、人あまたあれど一人に向きていふを、自ら人も聽くにこそあれ。よからぬ人は、誰ともなくあまたの中にうち出でて、見る事のやうに語りなせば、皆同じく笑ひのゝしる、いとらうがはし。をかしき事をいひてもいたく興ぜぬと、興なき事をいひてもよく笑ふにぞ、品の程はかられぬべき。人の見ざまのよしあし、才ある人はその事なンど定めあへるに、おのが身にひきかけていひ出でたる、いとわびし。人のかたり出でたる歌物語の、歌のわろきこそ本意なけれ。すこしその道知らん人は、い

ありつる—例の、前に埋め置きし所をいふ

いらなく—勿體らしく、仰々しく

あいなき—愛なき、原本あひなきに作る

あるあそび法師どもなンどかたらひて、風流の破籠やうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情のものに認め入れて、雙の岡の便よき所にうづみおきて、紅葉ちらしかけなンど、思ひよらぬさまにして、御所へ參りて、兒をそゝのかし出でにけり。うれしく思ひて、こゝかしこ遊びめぐりて、ありつる苔の筵になみゐて、「いたうこそ困じにたれ。あはれ紅葉を燒かん人もがな。しるしあらん僧たち、いのり試みられよ」などいひしろひて、埋みつる木のもとに向きて、數珠おしすり、印こと〴〵しく結びいでなンどして、いらなくふるまひて、木の葉をかきのけたれど、つや〳〵ものも見えず。所の違ひたるにやとて、掘らぬ所もなく山をあされども無かりけり。埋みけるを人の見おきて、御所へ參りたる間に盗めるなりけり。法師ども言の葉なくて、聞きにくゝいさかひ腹だちて歸りにけり。あまりに興あらんとすることは、必ずあいなきものなり。

家のつくりやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる、暑き頃わろき住居は堪へがたきことなり。深き水は涼しげなし、淺くて流れたる、遥に涼し。こまかなるもの

くゞもり聲―鼎の中にぐゝみて聲は響けども言語の外に聞えざるをいふ

かけうげ―缺け穿たれ

ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて、息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪へがたかりければ、叶はですべき樣なくて、三足なる角の上に帷子をうちかけて、手をひき杖をつかせて、京なる醫師のがり率て行きけるに、道すがら人の怪み見ること限なし。醫師のもとにさし入りて、むかひ居たりけんありさま、さこそ異樣なりけめ。物をいふも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝる事は書にも見えず、傳へたる敎もなしといへば、また仁和寺へかへりて、親しきもの、老いたる母など、枕上により居て泣き悲めども、聞くらんとも覺えず。かかるほどに、或者のいふやうは、「たとひ耳鼻こそ切れ失すとも、命ばかりはなどか生きざらん。力をたてゝ引き給へ」とて、藁の蔕をまはりにさし入れて、かねを隔てゝ、首もちぎるばかり引きたるに、耳鼻かけうげながら拔けにけり。からき命まうけて、久しく病み居たりけり。

御室にいみじき兒のありけるを、いかで誘ひ出して遊ばんとたくむ法師どもありて、能

極樂寺、高良―石淸水の麓にある末寺末社

ゆかし―見たし、凡て追究的興味の禁じ難き狀態をいふ

て、水を汲み入るゝ事めでたかりけり。よろづにその道を知れるものは、やんごとなきものなり。

仁和寺にある法師、年よるまで石淸水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、ある時思ひたちて、たゞ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて傍の人に逢ひて、「年ごろ思ひつる事はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ。そも參りたる人ごとに山へのぼりしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれと思ひて、山までは見ず」とぞいひける。すこしの事にも先達はあらまほしきことなり。

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名殘とて、おの／＼遊ぶことありけるに、醉ひて興に入るあまり、傍なる足鼎をとりて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顏をさし入れて舞ひ出でたるに、滿座興に入ること限なし。しばし奏でて後、拔かんとするに、大かた拔かれず。酒宴ことさめて、いかゞはせんと惑

はやく跡なき―もとより無根

しるし―前兆

まかせ―引き入れ

あし―料足の義、錢をいふ

し、今日は院へまゐるべし。たゞ今はそこ〳〵に」などいひあへり。まさしく見たりといふ人もなく、虚言といふ人もなし。上下たゞ鬼の事のみいひやまず。そのころ東山より、安居院の邊へまかり侍りしに、四條よりかみざまの人、みな北をさして走る。「一條室町に鬼あり」とのゝしりあへり。今出川の邊より見やれば、院の御棧敷のあたり、更に通り得べうもあらず立ちこみたり。はやく跡なき事にはあらざンめりとて、人をやりて見するに、大方あへるものなし。暮るゝまでかく立ちさわぎて、はては鬪諍おこりて、あさましき事どもありけり。そのころおしなべて、二日三日人のわづらふこと侍りしをぞ、「かの鬼の虚言は、このしるしを示すなりけり」といふ人も侍りし。

龜山殿の御池に、大井川の水をまかせられんとて、大井の土民におほせて、水車を作らせられけり。多くのあしをたまひて、數日に營み出してかけたりけるに、大方めぐらざりければ、とかく直しけれども、終に廻らで、徒に立てりけり。さて宇治の里人を召してこしらへさせられければ、やすらかに結ひて參らせたりけるが、思ふやうにめぐり

過ぎにし―世を過し來れる

まめやか―忠實

禪林の十因―禪林は東山永觀堂の寺號、永觀律師の往生十因をいふ

老きたりて始めて道を行ぜんと待つことなかれ。ふるき墳おほくはこれ少年の人なり。はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らんとする時にこそ、はじめて過ぎぬる方のあやまれる事は知らるなれ。あやまりといふは他の事にあらず、速にすべき事をゆるくし、ゆるくすべきことを急ぎて過ぎにしことのくやしきなり。その時悔ゆともかひあらんや。人はたゞ無常の身にせまりぬる事を心にひしとかけて、つかのまも忘るまじきなり。さらばなどか此世の濁もうすく、佛道を勤むる心もまめやかならざらん。昔ありける聖は、人のきたりて自他の要事をいふとき、答へていはく、「今火急の事ありて、既に朝夕にせまれり」とて耳をふたぎ念佛して、終に往生を遂げたりと、禪林の十因にはべり。心戒といひける聖は、あまりにこの世のかりそめなることを思ひて、靜についゐける事だになく、常はうづくまりてのみぞありける。

應長のころ、伊勢の國より、女の鬼になりたるを率て上りたりといふ事ありて、そのころ二十日ばかり、日ごとに京白川の人鬼見にとて出でまどふ。「昨日は西園寺に參りたり

やゝはなひたる云々―やゝは文段抄にやうやうとして此故を答へたる也とあれど單に返答の發語と見るべからん、はなひたるは嚏したるの意

・ついがされ―衡重、白木づくりの三方也

る。

柳原の邊に、強盜法印と號する僧ありけり。度々強盜にあひたる故に、この名をつけにけるとぞ。

ある人清水へまゐりけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら嚔々といひもて行きたれば、「尼御前何事をかくはのたまふぞ」と問ひけれども、答もせず、猶いひ止まざりけるを、度々とばれて、うち腹だちて、「やゝ、はなひたる時かく呪はねば死ぬるなりと申せば、養ひ君の、比叡の山に兒にておはしますが、たゞ今もはなひ給はんと思へば、かく申すぞかし」といひけり。あり難き志なりけんかし。

光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御をいだされて食せられけり。物食ひ散らしたるついがさねを、御簾の中へさし入れてまかり出でにけり。女房「あなきたな。誰に取れとてか」など申しあはれければ、「有職のふるまひ、やんごとなき事なり」と、かへすぐ感ぜさせ給ひけるとぞ。

空薫物の匂
—何處ともなく薫り來るたきものの匂

せうと—兄

る、あはれと聞き知るべき人もあらじと思ふに、行かんかた知らまほしくて、見送りつつ行けば、笛を吹きやみて、山の際に總門のあるうちに入りぬ。榻にたてたる車の見ゆるも、常よりは目とまる心地して、下人に問へば、「しか〴〵の宮のおはします頃にて、御佛事などさぶらふにや」といふ。御堂の方に法師ども參りたり。夜寒の風にさそはれくる空薫物の匂も身にしむ心地す。寢殿より御堂の廊にかよふ女房の追風用意など、人目なき山里ともいはず心づかひしたり。心のまゝにしげれる秋の野らは、おきあまる露にうづもれて、蟲の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは、雲のゆききも早き心地して、月の晴れ曇ること定めがたし。

公世の二位のせうとに、良覺僧正と聞えしは、極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に大なる榎ありければ、人「榎の僧正」とぞいひける。この名しかるべからずとて、かの木を切られにけり。その根のありければ、「切杭の僧正」といひけり。いよ〳〵腹立ちて、切杭を掘りすてたりければ、その跡大なる堀にてありければ、「堀池の僧正」とぞいひけ

れば、物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞ恐しく鬼の顔になりて、目は頂の方につき、額のほど鼻になりなンどして、後は坊のうちの人にも見えず籠り居て、年久しくありて、猶煩はしくなりて死にけり。かゝる病もある事にこそありけれ。

春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、賤しからぬ家の、奥ふかく木立ものふりて、庭に散りしをれたる花見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子皆下して、さびしげなるに、東にむきて妻戸のよきほどに開きたる、御簾のやぶれより見れば、かたち清げなる男の、年二十ばかりにて、うちとけたれど、心にくくのどやかなる様して、机の上に書をくりひろげて見居たり。いかなる人なりけん、たづね聞かまほし。

あやしの竹のあみ戸のうちより、いと若き男の、月かげに色合さだかならねど、つやゝかなる狩衣に濃き指貫、いとゆゑづきたるさまにて、さゝやかなる童一人を具して、遙なる田の中の細道を、稲葉の露にそぼちつゝ分け行くほど、笛をえならず吹きすさびた

教相とし、行を為すを事相とす

二の舞の面—安摩舞の次に舞ふ伶人の面、色赤くして恐し

心にくゝ云—奥ゆかしく閑雅なる様子にて

ゆゑづきたる—由緒ありげなる

さゝやかなる—小さき

ついゐて—跪きゐて
あざみて—さげすみ笑ひて
しれもの—愚痴なる者
人木石云々—文選鮑照の詩に、人非二木石一豈無レ感
唐橋中將—源雅清
教相—眞言宗にて經論聖教の學を

かる折に、むかひなる楝の木に法師の登りて、木の股についゐて物見るあり。取りつきながら、いたう眠りて、墮ちぬべき時に目を覺すこと度々なり。これを見る人嘲りあざみて、「世のしれものかな。かく危き枝の上にて安き心ありて眠るらんよ」といふに、わが心にふと思ひしまゝに、「われらが生死の到來只今にもやあらん。これを忘れて物見て日を暮す、愚なることは尚まさりたるものを」といひたれば、前なる人ども、「まことにさこそ候ひけれ。尤も愚に候ふ」といひて、みな後を見かへりて、「こゝへいらせ給へ」とて、所をさりて呼び入れ侍りにき。かほどのことわり、誰かは思ひよらざらんなれども、をりからの思ひかけぬ心地して、胸にあたりけるにや。人木石にあらねば、時にとりて物に感ずることなきにあらず。

唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、教相の人の師する僧ありけり。氣のあがる病ありて、年のやう〳〵たくるほどに、鼻の中ふたがりて、息も出でがたかりければ、さまざまにつくろひけれど、煩はしくなりて、目眉額なども腫れまどひて、うち覆ひけ

法然上人―源空、美作の人建暦二年寂す、其唱へし所は浄土専念の宗也

ず、もとより賢愚得失のさかひに居らざればなり。まよひの心をもちて名利の要を求むるに、かくのごとし。萬事はみな非なり。いふにたらず、願ふにたらず。ある人法然上人に、「念佛の時睡におかされて、行を怠り侍ること、いかゞして此さはりをやめ侍らん」と申しければ、「目の覺めたらんほど念佛したまへ」と答へられたりける、いとたふとかりけり。また「往生は、一定とおもへば一定、不定とおもへば不定なり」といはれけり。これもたふとし。また「疑ひながらも念佛すれば往生す」ともいはれけり。これも亦たふとし。

因幡の國に、何の入道とかやいふものゝ女、かたちよしと聞きて、人數多いひわたりけれども、この女たゞ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かゝる異樣のもの、人に見ゆべきにあらず」とて親ゆるさゞりけり。

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに、車の前に雜人たちへだてて見えざりしかば、おの〳〵おりて埒の際によりたれど、ことに人おほく立ちこみて、分け入りぬべきやうもなし。か

篇、藏二金於山一藏二珠於淵一不レ利二貨財一不レ近二貴富一云々

可不可は一條―可は善、不可は惡、一條は唯一つの義、莊子齊物論より出づ

すて、玉は淵になぐべし。利に惑ふはすぐれて愚なる人なり。うづもれぬ名をながき世に殘さんこそあらまほしかるべけれ。位高くやんごとなきをしも、勝れたる人とやはいふべき。愚に拙き人も、家に生れ時にあへば、高位にのぼり、おごりを極むるもあり。いみじかりし賢人聖人、みづから卑しき位にをり、時に遇はずして止みぬる、またおほし。偏に高き官位をのぞむも、次におろかなり。智惠と心とこそ、世に勝れたる譽も殘さまほしきを、つら〳〵思へば、譽を愛するは人の聞を喜ぶなり。譽むる人、毀る人、共に世にとゞまらず、傳へ聞かん人また〳〵速に去るべし。誰をか恥ぢ、誰にか知られんことを願はん。譽はまた毀のもとなり。身の後の名殘りて更に益なし。これを願ふも次に愚なり。たゞし強ひて智をもとめ、賢をねがふ人のためにいはゞ、智惠いでては僞あり、才能は煩惱の增長せるなり。傳へて聞き、學びて知るは、まことの智にあらず。いかなるをか智といふべき。可不可は一條なり、いかなるをか善といふ。まことの人は、智もなく德もなく、功もなく名もなし。誰か知り誰か傳へん。これ德をかくし愚を守るにあら

仕丁—下僕

まどし—文段抄には我身を守るには貧しと也といへり、惑ひ苦むの義とも解し得ん

金は云々—莊子天地

へなたりと申し侍るとぞいひし。

手のわろき人の、憚らず文かきちらすはよし。見ぐるしとて人に書かするはうるさし。

久しくおとづれぬ頃、いかばかり恨むらんと、我おこたり思ひ知られて、言葉なき心地するに、女のかたより、「仕丁やある、一人」なンどいひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよきと、人の申し侍りし、さもあるべきことなり。

朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時に、我に心をおき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、今更かくやはなどいふ人もありぬべけれど、猶げに〳〵しくよき人かなとぞ覺ゆる。疎き人のうちとけたる事などいひたる、またよしと思ひつきぬべし。

名利につかはれて、しづかなる暇なく、一生を苦むるこそ愚なれ。財おほければ身を守るにまどし。害を買ひ煩を招くなかだちなり。身の後には金をして北斗を支ふとも、人のためにぞ煩はるべき。愚なる人の目を喜ばしむるたのしび、またあぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉のかざりも、心あらん人はうたて愚なりとぞ見るべき。金は山に

今少し云々—客の出でたる妻戸を更に今少し廣く押し開きて

えふ—葉の字ならん、大全に圖ありこの内部の細線卽ちえふ也

九月二十日の頃、ある人にさそはれ奉りて、明くるまで月見ありくこと侍りしに、おぼし出づる所ありて、案内せさせて入りたまひぬ。荒れたる庭の露しげきに、わざとならぬ匂しめやかにうち薫りて、忍びたるけはひ、いと物あはれなり。よきほどにて出で給ひぬれど、猶ことざまの優に覺えて、物のかくれよりしばし見居たるに、妻戸を今少しおしあけて、月見るけしきなり。やがてかけ籠らましかば、口惜しからまし。あとまで見る人ありとは如何でか知らん。かやうの事は、たゞ朝夕の心づかひによるべし。その人程なくうせにけると聞き侍りし。

今の内裏つくりいだされて、有職の人々に見せられけるに、いづくも難なしとて、すでに遷幸の日近くなりけるに、玄輝門院御らんじて、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく縁もなくてぞありし」と仰せられける、いみじかりけり。これはえふの入りて、木にて縁をしたりければ、あやまりにて直されにけり。甲香は、ほらがひの樣なるが、小さくて、口のほどの細長にして出でたる貝の蓋なり。武藏の國金澤といふ浦にありしを、所の者は

るものは日々に疎しといへる事なれば、さはいへど、その際ばかりは覺えぬにや。よしなし事いひてうちも笑ひぬ。骸はけうとき山の中にをさめて、さるべき日ばかり詣でつつ見れば、ほどなく卒都婆も苔むし、木の葉ふり埋みて、夕の嵐夜の月のみぞ、こととふよすがなりける。思ひ出でて忍ぶ人あらんほどこそあらめ。そも又ほどなくうせて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ。さるは跡とふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだに知らず、年々の春の草のみぞ、心あらん人はあはれと見るべきを、はては嵐にむせびし松も、千年を待たで薪にくだかれ、ふるき墳はすかれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞ悲しき。

雪のおもしろう降りたりし朝、人の許へいふべき事ありて、文をやるとて、雪のことは何ともいはざりし返事に、「この雪いかゞ見ると、一筆のたまはせぬほどの、ひが〳〵しからん人の仰せらるる事聞き入るべきかは。かへす〴〵口惜しき御心なり」といひたりしこそ、をかしかりしか。今はなき人なれば、かばかりの事も忘れがたし。

云—文選廿九古詩に、去者日已疎來者日已親出ニ郭門ニ直視但見ニ丘與レ墳古墓犂爲レ田松柏摧爲レ薪云々

ひが〳〵し—僻々し、無風流なり

樣なるぞゆゝしき。

靜におもへば、よろづ過ぎにしかたの戀しさのみぞせん方なき。人しづまりて後、永き夜のすさびに、何となき具足とりしたゝめ、殘しおかじとおもふ反古などやりすつる中に、なき人の手ならひ、繪かきすさびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。このごろある人の文だに、久しくなりて、いかなるをり、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくてかはらず久しき、いとかなし。

人のなきあとばかり悲しきはなし。中陰のほど、山里などにうつろひて、便あしく狹き所にあまたあひ居て、後のわざども營みあへる、心あわたゞし。日數のはやく過ぐるほどぞ、ものにも似ぬ。はての日はいと情なう、互にいふ事もなく、我かしこげに物ひきしたゝめ、ちり〴〵に行きあがれぬ。もとの住家にかへりてぞ、更に悲しきことは多かるべき。しか〴〵の事はあなかしこ、跡のため忌むなる事ぞなどいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心はなほうたて覺ゆれ。年月經てもつゆ忘るゝにはあらねど、去

具足—道具

このごろある人—なき人に對して現に世に生存せる人をいふ

中陰—死後の七七四十九日間

あがれぬ—別れぬ

あなかしこ—必ず畏れ愼むべし

去るもの云

白き絲云々―淮南子に出づ、絲は墨子、衢は楊子

むかし見しの歌―藤原公實の詠

とものみやつこ―伴御奴、主殿寮の下部伴氏の者

諒闇―天子の喪中

倚廬―諒闇の時の假御所

葉ごとに忘れぬものから、我世の外になり行くならひこそ、亡人の別よりも勝りて悲しきものなれ。されば白き絲の染まん事をかなしび、道の衢のわかれん事を歎く人もありけんかし。堀河院の百首の歌の中に、

むかし見し妹が垣根はあれにけり茅花まじりのすみれのみして

さびしきけしき、さること侍りけん。

御國ゆづりの節會おこなはれて、劍、璽、内侍所わたし奉らるゝほどこそ、かぎりなう心ぼそけれ。新院のおりゐさせ給ひての春、よませ給ひけるとかや。

殿もりのとものみやつこよそにしてはらはぬ庭に花ぞちりしく

今の世のことしげきにまぎれて、院にはまゐる人もなきぞ寂しげなる。かゝるをりにぞ人の心もあらはれぬべき。

諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ、倚廬の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布の帽額あら〳〵しく、御調度ども疎に、みな人の装束、太刀、平緒まで、異

何か常なる

飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬となる

御堂殿—關白藤原道長

あせ果てん—荒れはてん

思ひおきてん—思ひ掟てん、思ひ定めん

りしあたりも、人すまぬ野らとなり、變らぬ住家は人あらたまりぬ。桃李物いはねば、誰と共にか昔をかたらん。まして見ぬ古のやんごとなかりけん跡のみぞいとはかなき。京極殿、法成寺など見るこそ、志とゞまり、事變じにける樣はあはれなれ。御堂殿の作り磨かせ給ひて、庄園おほく寄せられ、我御族のみ、御門の御うしろみ、世のかためにて、行末までとおぼしおきし時、いかならん世にも、かばかりあせ果てんとはおぼしてんや。大門金堂など近くまでありしかど、正和のころ南門は燒けぬ。金堂はその後たふれ伏したるまゝにて、取りたつるわざもなし。無量壽院ばかりぞ、そのかたとて殘りたる。丈六の佛九體、いと尊くて竝びおはします。行成大納言の額、兼行が書ける扉、あざやかに見ゆるぞあはれなる。法花堂なども いまだ侍るめり。これも亦いつまでかあらん。かばかりの名殘だになき所々は、おのづから礎ばかり殘るもあれど、さだかに知れる人もなし。されば萬に見ざらん世までを思ひおきてんこそ、はかなかるべけれ。

風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、馴れにし年月をおもへば、あはれと聞きし言の

供奉せるたいふ

陣―陣の座、禁中の節會に諸卿の列坐する所

夜のまうけ―灯の用意

飛鳥川云々―世の中は

れ。露臺、朝餉、何殿、何門などは、いみじとも聞ゆべし、あやしの所にもありぬべき小蔀、小板敷、高遣戸なンども、めでたくこそ聞ゆれ。陣に夜のまうけせよといふこそいみじけれ。夜の御殿のをば、掻燈疾うよなンどいふ、まためでたし。上卿の陣にて事行へるさまはさらなり、諸司の下人どもの、したり顔になれたるもをかし。さばかり寒き夜もすがら、こゝかしこに睡り居たるこそをかしけれ。内侍所の御鈴の音は、めでたく優なるものなりとぞ、徳大寺の太政大臣は仰せられける。

齋宮の野宮におはします有樣こそ、やさしくおもしろき事のかぎりとは覺えしか。經佛なンど忌みて、中子、染紙などいふなるもをかし。すべて神の社こそ、捨てがたくなまめかしき物なれや。ものふりたる森の景色もたゞならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴船、吉田、大原野、松尾、梅宮。

飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時うつり事さり、樂び悲びゆきかひて、花やかな

かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ人に心はつくめれ。岩に砕けて清く流るゝ水のけしきこそ、時をもわかずめでたけれ。沅湘日夜東に流れ去る、愁人の爲にとゞまること少時もせず、といへる詩を見侍りしこそあはれなりしか。嵇康も、山澤にあそびて魚鳥を見れば心樂ぶといへり。人遠く水草きよき所にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらじ。

何事も古き世のみぞ慕はしき。今やうは無下に卑しくこそなり行くめれ。かの木の道の匠の作れる美しき器物も、古代の姿こそをかしと見ゆれ。文の詞などぞ、昔の反古どもはいみじき。たゞいふ詞も、口惜しうこそなりもて行くなれ。いにしへは、車もたげよ、火揭げよとこそいひしを、今やうの人は、もてあげよ、かきあげよといふ。主殿寮の人數だてといふべきを、たちあかししろくせよといひ、最勝講の御聽聞所なるをば、御講の廬とこそいふべきを、かうろといふ、口をしとぞ、古き人の仰せられし。

衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有樣こそ、世づかずめでたきものな

沅湘日夜云云—唐の戴叔倫が湘南即事と題する詩の句

嵇康—竹林七賢の一人、文選四十三嵇康與二山濤一絶交書に、游二山澤一觀二魚鳥一心甚樂レ之

人數だて—節會御神樂などに天子の行幸せさせ給ふ時主殿寮二人立明を執りて

帛を十陵八墓に奉る使

追儺—鬼やらひ、十二月晦日

ほだしもたらぬ—妻子などの絆を持たざる

んごとなき。公事(くじ)どもしげく、春のいそぎにとり重ねて、催(もよほ)し行はるゝさまぞいみじきや。追儺(つゐな)より四方拝につゞくこそおもしろけれ。晦日(つごもり)の夜いたう暗きに、松どもともして、夜半(よなか)すぐるまで、人の門たゝき走りありきて、何事にかあらん、こと〴〵しくのゝしりて、足を空にまどふが、暁(あかつき)がたより、さすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心ぼそけれ。亡人(なきひと)のくる夜とて魂まつるわざは、このごろ都にはなきを、東(あづま)の方(かた)には猶することにてありしこそ、あはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日(きのふ)に變りたりとは見えねど、ひきかへ珍(めづら)しき心地ぞする。大路(おほぢ)のさま、松たてわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

某(なにがし)とかやいひし世すて人の、この世のほだしもたらぬ身に、たゞ空のなごりのみぞ惜しきといひしこそ、まことにさも覺えぬべけれ。

よろづの事は月見るにこそ慰むものなれ。ある人の「月ばかりおもしろきものは有らじ」といひしに、またひとり、「露こそあはれなれ」と爭ひしこそをかしけれ。折(をり)にふれば何

祭―賀茂の御形(ミアレ)の祭、四月、中の酉の日

おぼしき事―思ふ事

かいやり―書き破り

荷前の使―年の終に幣

あはれも人の戀しさもまされと、人のおほせられしこそ、實にさるものなれ。五月、菖蒲ふくころ、早苗とるころ、水鷄のたゝくなど、心細からぬかは。六月の頃あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓またをかし。七夕祭るこそなまめかしけれ。やう〳〵夜寒になるほど、雁なきて來るころ、萩の下葉色づくほど、早稲田刈りほすなど、とり集めたることは秋のみぞおほかる。また野分の朝こそをかしけれ。いひつゞくれば、みな源氏物語、枕草紙などに事ふりにたれど、おなじ事また今更にいはじとにもあらず。おぼしき事いはぬは腹ふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝ、あぢきなきすさびにて、かいやり捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。さて冬枯の景色こそ、秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。汀の草に紅葉のちりとゞまりて、霜いと白うおける朝、遣水より烟のたつこそをかしけれ。年の暮れはてゝ、人ごとに急ぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじき物にして見る人もなき月の、寒けく澄める二十日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ。御佛名、荷前の使たつなどぞ、あはれにや

しがましとて捨てつ。また手にむすびてぞ水も飲みける。いかばかり心の中すゞしかりけん。孫晨は冬月に衾なくて、藁一束ありけるを、夕にはこれに臥し、朝にはをさめけり。もろこしの人は、これをいみじと思へばこそ、しるしとゞめて世にも傳へけめ。これらの人はかたりも傳ふべからず。

折節のうつり變るこそ、ものごとにあはれなれ。物のあはれは秋こそまされと、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今一きは心もうきたつものは、春の景色にこそあゝめれ。鳥の聲などもことの外に春めきて、のどやかなる日かげに、垣根の草萌え出づるころより、やゝ春深くかすみわたりて、花もやう〳〵氣色だつほどこそあれ、をりしも雨風うちつゞきて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづに唯心をのみぞなやます。花橘は名にこそおへれ、なほ梅のにほひにぞ、いにしへの事も立ちかへり戀しう思ひいでらるゝ。山吹のきよげに、藤のおぼつかなき樣したる、すべて思ひすて難きことおほし。灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢すゞしげに繁りゆくほどこそ、世の

比佐古、掛レ水器也、本文の話は高士傳に出づ

これらの人—唐土の古人に對し當時の邦人を指していへるにや

花橘は云々—花橘は昔を追懷せしむとの名を負ふものなれど

灌佛—四月八日に行はるゝ佛生會

梁塵秘抄—神樂、催馬樂の歌謠を集めし書

和琴—あづまごと、六絃也

なりひさご—瓢、和名抄に、奈利

見ありき、ゐなかびたる所、山里などは、いと目馴れぬことのみぞ多かる。都へたよりもとめて文やる。「その事かの事、便宜にわするな」なンどいひやるこそをかしけれ。さやうの所にてこそ、よろづに心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。寺社なンどに忍びてこもりたるもをかし。

神樂こそなまめかしくおもしろけれ。大かた物の音には笛篳篥。つねに聞きたきは琵琶和琴。

山寺にかきこもりて、佛につかうまつるこそ、つれ〴〵もなく、心の濁もきよまる心地すれ。

人はおのれをつゞまやかにして、驕を退けて財をもたず、世を貪らざらんぞいみじかるべき。昔よりかしこき人の富めるは稀なり。唐土に許由といひつる人は、更に身に隨へるたくはへもなくて、水をも手してさゝげて飲みけるを見て、なりひさごといふものを、人の得させたりければ、ある時木の枝にかけたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、か

絲による云云―絲による物ならなくに別路の心細くもおもほゆる哉
源氏物語云云―總角の巻に貫之の歌を引くとて物ならなくにを物とはなしにと改む
のころ松云云―冬の來て山もあらはに木の葉ふり殘る松さへ峰にさびしき

はれにけしき覺ゆるはなし。貫之が、絲による物ならなくにといへるは、古今集の中のうたくづとかやいひ傳へたれど、今の世の人の詠みぬべきことがらとは見えず。その世の歌には、すがたことば、この類のみ多し。この歌にかぎりて、かくいひ立てられたるも知りがたし。源氏物語には、ものとはなしにとぞ書ける。新古今には、のこる松さへ峰にさびしきといへる歌をぞいふなるは、誠に少しくだけたるすがたにもや見ゆらん。されどこの歌も、衆議判の時よろしきよし沙汰ありて、後にもことさらに感じおほせ下されけるよし、家長が日記には書けり。歌の道のみいにしへに變らぬなゝどいふ事もあれど、いさや、今もよみあへる、おなじことば歌枕も、むかしの人のよめるは更におなじものにあらず。やすくすなほにして、すがたも淸げに、あはれも深くみゆ。梁塵祕抄の郢曲のことばこそ、またあはれなる事はおほかゝめれ。むかしの人は、いかにいひ捨てたる言種も、皆いみじく聞ゆるにや。

いづくにもあれ、しばし旅だちたるこそ、めさむる心地すれ。そのわたり、こゝかしこ

なくいひ慰まんこそ嬉しかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひ居たらんは、ひとりある心地やせん。互にいはんほどの事をば、げにと聞くかひあるものから、いさゝか違ふ所もあらん人こそ、「我はさやは思ふ」など爭ひにくみ、「さるからさぞ」ともうち語らはゞ、つれ〴〵慰まめと思へど、げには少しかこつかたも、我とひとしからざらん人は、大かたのよしなしごといはん程こそあらめ、まめやかの心の友には、遙にへだたる所のありぬべきぞわびしきや。

ひとり燈火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むわざなれ。

文は文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇、この國の博士どもの書けるものも、いにしへのは、あはれなることおほかり。

和歌こそなほをかしきものなれ。あやしの賤山がつのしわざも、いひ出づればおもしろく、おそろしき猪も、臥猪の床といへばやさしくなりぬ。この頃の歌は、一ふしをかしくいひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、言葉の外にあ

心おきなく

さやは思ふ—さうは思はず

大かたの云云—插入句

南華の篇—莊子

をかし—おもしろし、興あり

べき。この殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は參らざりけると聞きはべるに、綾小路の宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かのためし思ひ出でられ侍りしに、「まことや、烏のむれゐて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそとおぼえしか。徳大寺にも、いかなるゆゑか侍りけん。

神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入ること侍りしに、遙なる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉にうづもるゝ筧の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊紅葉など折りちらしたる、さすがに住む人のあればなるべし。かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、大なる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりを嚴しく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覺えしか。

おなじ心ならん人と、しめやかに物がたりして、をかしき事も世のはかなき事も、うら

綾小路の宮―龜山天皇の皇子性惠法親王

栗栖野―山城國醍醐の邊

たわゝに―撓む程に、實の多くなりたる形容

うらなく―

女の髮筋云云―大威德陀羅尼經に乃至以二女人髮一爲レ作二綱維一香象能繫況丈夫輩云々

むかし覺えて―古風にて

やは―反語

後德大寺の大臣―藤原實定

れば女の髮筋をよれる綱には、大象もよくつながれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿かならず寄るとぞいひ傳へ侍る。自ら戒めて、恐るべく愼むべきはこの惑なり。

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假のやどりとは思へど、興あるものなれ。よき人ののどかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も、一際しみじみと見ゆるぞかし。今めかしくきらゝかならねど、木立ものふりて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子透垣のたよりをかしく、うちある調度も、むかし覺えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。多くの工匠の心を盡して磨きたて、唐の日本の、めづらしくえならぬ調度ども竝べおき、前栽の草木まで、心のまゝならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやはながらへ住むべき、また時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るよりも思はるゝ。大かたは、家居にこそ事ざまは推しはからるれ。後德大寺の大臣の、寢殿に鳶ゐさせじとて繩を張られたりけるを、西行が見て、「鳶の居たらん何かは苦しかる

あらまし—豫想し
えならぬ—何ともいはれぬ
心ときめきす—心動く
いもねず—安眠もせず
六塵—色、聲、香、味、觸、法

を愛し、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、物のあはれも知らずなり行くなんあさましき。

世の人の心惑すこと色欲には如かず。人の心は愚なるものかな。にほひなンどは假のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂には、かならず心ときめきするものなり。久米の仙人の、物洗ふ女のはぎの白きを見て、通を失ひけんは、まことに手足膚などのきよらに、肥え膏づきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし。

女は髪のめでたからんこそ、人のめだつべかンめれ。人のほど、心ばへなどは、物うちいひたるけはひにこそ、物ごしにも知らるれ。事に觸れてうちあるさまにも、人の心をまどはし、すべて女のうちとけたるいもねず、身ををしとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬ業にもよく堪へ忍ぶは、たゞ色を思ふがゆゑなり。まことに愛著の道、その根深く源遠し。六塵の樂欲おほしといへども、皆厭離しつべし。その中に、たゞかの惑のひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも若きも、智あるも愚なるも、かはる所なしとぞ見ゆる。さ

前の中書王—兼明親王
九條の太政大臣—藤原伊通
花園の左大臣—源有仁
染殿の大臣—藤原良房
世繼の翁の物語—大鏡をいふ

我が身のやんごとなからんにも、まして數ならざらんにも、子といふもの無くてありなん。前の中書王、九條の太政大臣、花園の左大臣、皆族絶えん事を願ひ給へり。染殿の大臣も、子孫おはせぬぞよく侍る。末のおくれ給へるはわろき事なりとぞ、世繼の翁の物語にはいへる。聖德太子の御墓をかねて築かせ給ひける時も、こゝをきれ、かしこをたて。子孫あらせじと思ふなりと侍りけるとかや。

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の烟立ちさらでのみ住みはつるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世は定なきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふのゆふべを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つれ〴〵と一年をくらす程だにも、こよなうのどけしや。飽かずをしとおもはゞ、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に、醜きすがたを待ちえて何かはせん。命長ければ恥おほし。長くとも四十にたらぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、かたちを愧づる心もなく、人にいでまじらはんことを思ひ、夕の日に子孫

九條殿―右大臣師輔

禁中の事ども云々―禁秘抄をいふ

さう〴〵しく―さびしく物たらぬ

あふさきるさ―往くさ來るさ、何かにつけて

ふつゝかに―きまぐれに、深き覺悟もなく

見ゆれ。衣冠より馬車にいたるまで、あるに隨ひてもちひよ。美麗をもとむることなかれとぞ、九條殿の遺誡にもはべる。順德院の禁中の事ども書かせ給へるにも、おほやけの奉物はおろそかなるをもてよしとすとこそ侍れ。

よろづにいみじくとも、色このまざらん男は、いとさう〴〵しく、玉の巵の當なき心地ぞすべき。露霜にしほたれて、所さだめず惑ひありき、親のいさめ、世のそしりをつゝむに、心のいとまなく、あふさきるさに思ひ亂れ、さるは獨寢がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。さりとて一向たはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

後の世のこと心にわすれず、佛の道うとからぬ、心にくし。不幸にうれへに沈める人の、かしらおろしなど、ふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。顯基中納言のいひけん、配所の月罪なくて見んこと、さもおぼえぬべし。

かけずけおさるゝ—對峙し得ずして他に壓せらるゝ義、甚だ見劣りするをいふ

いたましうするものから—酒を勸められて痛痛しく困る樣にはするものゝ

く、佛の御教にたがふらんとぞ覺ゆる。ひたぶるの世すて人は、なか〳〵あらまほしき方もありなん。人はかたちあり樣の勝れたらんこそ、あらまほしかるべけれ。ものうち言ひたる聞きにくからず、愛敬ありて、詞多からぬこそ、飽かずむかはまほしけれ。めでたしと見る人の、心おとりせらるゝ本性見えんこそ、口をしかるべけれ。人品容貌こそ生れつきたらめ。心はなどか、賢きより賢きにも、うつさば移らざらん。かたち心ざまよき人も、才なくなりぬれば、人品くだり、顏にくさげなる人にも立ちまじりて、かけずけおさるゝこそ、本意なきわざなれ。ありたきことは、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、また有職に公事のかた、人の鑑ならんこそいみじかるべけれ。手など拙からずはしりがき、聲をかくして拍子とり、いたましうするものから、下戸ならぬこそ男はよけれ。

いにしへの聖の御代のまつりごとをも忘れ、民のうれへ、國のそこなはるゝをも知らず、よろづにきよらを盡していみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて思ふところなく

そこはかとなく—漫然と

竹の園生—皇族

舎人—朝廷より賜はる従者、隨身

はふれにたれど—おちぶれたるも

いみじ—えらい、立派

徒然草

つれ〴〵なるまゝに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつり行くよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かンめれ。帝の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御ありさまはさらなり、たゞうども、舎人なンどたまはる際はゆゝしと見ゆ。その子孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時に逢ひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いと口をし。法師ばかり羨しからぬものはあらじ。人には木の端のやうに思はるゝよと、清少納言が書けるも、げにさることぞかし。勢猛にのゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀聖のいひけんやうに、名聞ぐるし

淨名居士—維摩詰なり、毘耶梨城中方丈の室に入り假に病臥して來訪者に說法せる人
周梨槃特—楞嚴經に見ゆ、釋迦弟子中の愚人

べて、空しくあたら時を過さん。しづかなる曉、この理を思ひつゞけて、みづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心ををさめて道を行はんがためなり。然るを汝が姿は聖に似て、心は濁にしめり、仕家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつ所はわづかに周梨槃特が行にだにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづからなやますか、はた又妄心のいたりて狂はせるか。そのとき心さらに答ふることなし。ただ傍に舌根をやとひて、不請の念佛兩三度を申してやみぬ。時に建曆の二年、三月の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。

月かげは入る山の端もつらかりきたえぬひかりは見るよしもがな

方丈記　終

まだし―未だし、不足

三界―祖庭事苑に、三界謂二欲界色界無色界一又謂二之三有一

知らず―原本いかでか知らん

餘算―餘命

三途―火途、刀途、血途

り。おほかた世を遁れ、身を捨てしより、恨もなく恐もなし。命は天運にまかせて、をしまず、いとはず。身をば浮雲になずらへて、たのまず、まだしとせず。一期のたのしみは、うたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望は、をり／＼の美景にのこれり。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣ものぞみなし。今さびしき住居、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることをはづといへども、かへりてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ、魚鳥の分野を見よ。魚は水にあかず。魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざればその心をしらず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとらん。

そも／＼一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇にむかはん時、何のわざをかかこたんとする。佛の人ををしへ給ふおもむきは、ことにふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するも科とす。閑寂に著するも障なるべし。いかゞ用なき樂をの

たゆからずしもあらねど―だるくないでもないが、たゆくは支體に云へるダルキ也（雅言集覽）

藤の衣―藤の皮、葛などにて織れる賤者の粗服

たくらぶる―比較する

をば願はず。たゞわが身を奴とするには如かず、もしなすべきことあれば、すなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ、人をかへりみるよりはやすし。もし歩くべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬鞍牛車と心をなやますには似ず。今一身を分ちて、二の用をなす、手のやつこ、足の乘物、よくわが心にかなへり。心また身のくるしみを知れれば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたび〳〵過さず、ものうしとても心を動すことなし。いかに況や、常にありき、常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らん。人を惱すはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

衣食のたぐひまたおなじ。藤の衣、麻のふすま、得るに隨ひて肌をかくし、野邊の茅花、峯の木の實、わづかに命をつぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども、なほ味をあまくす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにあらず、たゞわが身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりな

がうな——寄居蟲（ヤドカリ）

すなほなる——一本すぐなる

家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくしておそれなし。ほど狹しといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。がうなは小さき貝をこのむ。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人を恐るゝが故なり。我またかくのごとし。身を知り世を知れらば、願はず、まじらはず、たゞ靜なるを望とし、愁なきを樂とす。すべて世の人の住家をつくるならひ、かならずしも身のためにはせず、或は妻子眷屬のためにつくり、或は親昵朋友のためにつくる。あるは主君師匠、および財寶馬牛のためにさへ是をつくる。我今身のためにむすべり。人のためにつくらず。ゆゑ如何となれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべき奴もなし。たとひ廣くつくれりとも、誰をかやどし、誰をかすゑん。それ人の友たる者は、富めるを貴み、ねんごろなるを先とす。かならずしも、情あると、すなほなるとをば愛せず。たゞ絲竹花月を友とせんにはしかず。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすく閑なる

山鳥の云々—玉葉、行基菩薩、山鳥のほろほろと鳴く聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ

かせぎ—鹿

白地—かりそめ、つひ一寸

今までに—一本今すでに

跡をとぶらひ、田上川をわたりて、猿丸太夫が墓をたづね、歸るさには、をりにつけつつ、櫻をかり、紅葉をもとめ、蕨を折り、木の實を拾ひて、かつは佛に奉り、かつは家づとにす。もし夜靜なれば、窓の月に古人を忍び、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世にとほざかる程を知る。あるは埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣、折につけてつくることなし。いはんや深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず

おほかた此の所に住みはじめし時は、白地とおもひしかど、今までに五年を經たり。假の庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔むせり。おのづから事の便に都を聞けば、この山にこもり居て後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たび〳〵の炎上にほろびたる

拾遺集沙彌滿誓、世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎ行く船の跡の白波

源都督—琵琶の名手桂大納言經信

ぬかご—零餘子、むかご也

ほぐみ—穗掛に同じく穗を組合せ門又は倉の戸に掛けて神に奉る物

がめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江をおもひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめんとにもあらず、ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひ訪ふ。もしつれ〴〵なる時は、これを友としてあそびありく。かれは十六歲、われは六十、その齡ことの外なれど、心を慰むることはこれ同じ。或はつばなを拔き、いはなしを採る。またぬかごをもり、芹をつむ。あるはすそわの田井にいたりて、落穗を拾ひてほぐみをつくる。もし日うらゝかなれば、嶺に攀ぢ上りて、遙に故鄕の空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩なく、こゝろざし遠くいたる時は、これより峰つゞき、炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうで、石山ををがむ。もしはまた粟津の原を分けて、蟬丸の翁が

正木のかづら—薜茘なり、古今神樂歌に、深山には霰ふるらし外山なる正木のかづら色づきにけり

跡の白波—

垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶる便とす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはちもろ〳〵の藥草をうゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

その處のさまをいはゞ、南に筧あり、岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳にみてり。うつせみの世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとり居れば口業をさめつべし。かならず禁戒をまもるとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をな

に作る
狩人—一本旅人に作る
世の常にも似ず—一本世の常ならず
用途—費用
閼伽棚—閼伽は水の梵語、佛に供ふる水等を載せ置く棚
ほどろ—老穗なり
つかなみ—藁筵

れば、また百分が一にだも及ばず。とかくいふ程に、齡は年々にかたぶき、住家はをりをりにせばし。その家のありさま世の常にも似ず、廣さは僅に方丈、高さは七尺が内なり。所をおもひ定めざるが故に、地をしめて造らず。土居を組み、うちおほひを葺きて、つぎめごとにかけがねをかけたり。もし心にかなはぬことあらば、やすく外に移さんがためなり。その改め造る時、いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二兩なり。車の力をむくゆる外は、更に他の用途いらず。

いま日野山の奥に跡をかくして後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に閼伽棚を作り、中には西の垣に添へて阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日をうけて眉間のひかりとす。かの帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌、管絃、往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏、琵琶、おの〱一張をたつ。いはゆるをり箏、つぎ琵琶これなり。東にそへて、わらびのほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の

しのぶかたがた―住むに堪へざるをいふ、金葉集、周防内侍、住み佗びて我さへ軒の忍ぶ草しのぶかたがた繁き宿かな

白波―盜人をいふ、水難と盜難とを兼ねいふなり

雲に云々―一本雲に臥していつかへりの春秋

我が身、父方の祖母の家を傳へて、久しく彼の所に住む。その後縁かけ、身おとろへて、しのぶかた〴〵しげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして、更に我が心と一の庵をむすぶ。これをありし住居になずらふるに、十分が一なり。たゞ居屋ばかりをかまへて、はか〴〵しくは屋をつくるに及ばず、わづかに築地をつけりといへども、門たつるにたづきなし。竹を柱として、車やどりとせり。雪ふり風吹くごとに、危からずしもあらず。所は河原近ければ、水の難深く、白波の恐もさわがし。すべてあらぬ世を念じ過しつゝ、心をなやませることは、三十餘年なり。その間をり〳〵のたがひめに、おのづから短き運をさとりぬ。すなはち五十の春をむかへて、家をいで世をそむけり。もとより妻子なければ、捨てがたきよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめん。空しく大原山の雲に、いくそばくの春秋をかへぬる。

こゝに六十の露消えがたに及び、更に末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶のまゆを營むがごとし。これを中ごろのすみかになずらふ

すぼき—みすぼらしき

玉ゆらも—しばらくも

なくあだなる様かくのごとし。いはんや所により、身のほどに隨ひて、心をなやますこと、あげて數ふべからず。もしおのづから身かなはずして、權門のかたはらに居る者は、深く悅ぶ事はあれども、大にたのしぶにあたはず。歎ある時も、聲をあげて泣くことなし。進退やすからず、立居につけて恐れをのゝく、たとへば雀の鷹の巢に近づけるがごとし。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すぼき姿を恥ぢて諂ひつゝ、出で入る妻子僮僕の羨めるさまを見るにも、富める家のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々にうごきて、時としてやすからず。もし狹き地に居れば、近く炎上する時、その害を遁るゝことなし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。いきほひある者は貪欲深く、ひとり身なる者は人に輕しめらる。寶あればおそれ多く、貧しければ歎切なり。賴めば身他の奴となり、人をはごくめば心恩愛につかはる。世にしたがへば身くるし、またしたがはねば狂へるに似たり。いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、暫しもこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき。

ふる―地震にて大地のゆれる

四大種―義楚六帖に、四大地水火風也亦名二大種一以二形相大一能生二萬物一也

齊衡―文德天皇の御字

られて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの日など、一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲もをしまず悲しみあひて侍りしこそ、あはれにかなしく見侍りしか。子のかなしみには、猛きものも恥を忘れけりと覺えて、いとほしく理かなとぞ見侍りし。かくおびたゞしくふることは、しばしにて止みにしが、その餘波しばし〳〵絶えず。世の常に驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大かたそのなごり三月ばかりや侍りけん。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。

むかし齊衡のころかとよ。大地震ふりて、東大寺の佛の御首落ちなどして、いみじきことども侍りけれど、なほこのたびには如かずとぞ。すなはち人皆あぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁もうすらぐかと見し程に、月日かさなり、年越えしかば、後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。すべて世のありにくきこと、わが身とすみかとの、はか

長承云々—崇德帝の長承三年諸國洪水京師火災ありし事舊記に見ゆ

跡なしごと—遊戲、跡もら殘ずとりとめなき事の義

地などを加へていはゞ、際限もあるべからず。いかにいはんや諸國七道をや。近くは崇德院の御位のとき、長承のころかとよ、かゝる例はありけると聞けど、その世のありさまは知らず。まのあたりいとめづらかに、かなしかりしことなり。

また元暦二年のころ、大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず。山崩れて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。土さけて水湧きあがり、巖われて谷にまろび入り、渚こぐ船は浪にたゞよひ、道行く駒は足の立處をまどはせり。況や都の邊には、在々所々、堂舍塔廟、一として全からず。或はくづれ、或はたふれたる間、塵灰立ち上りて、盛なる煙のごとし。地の震ひ家のやぶるゝ音、雷に異ならず。家の中に居れば、忽にうちひしげなんとす。走り出づれば、また地われ裂く。羽なければ空へもあがるべからず、龍ならねば雲にのぼらんこと難し。おそれの中におそるべかりけるは、たゞ地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中にある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家を作り、はかなげなる跡なしごとをして遊び侍りしが、俄に崩れ埋め

思—一本志に作り、下なる志の字なし

阿字—毘盧舍那經に出づ、眞言祕密中の祕密

を盗み、堂の物の具を破り取りて、わりくだけるなりけり。濁惡の世にしも生れ逢ひて、かゝる心うきわざをなん見侍りし。

又あはれなること侍りき。さり難き女男など持ちたるものは、その思まさりて、志深きは必先だちて死しぬ。その故は、我が身をば次になして、男にもあれ、女にもあれ、いたはしく思ふかたに、たま〱乞ひ得たる物を、まづ讓るによりてなり。されば父子あるものは、定れる事にて、親ぞ先だちて死にける。また母が命つきて臥せるをも知らずして、いとけなき子の、その乳房に吸ひつきつゝ、臥せるなどもありけり。仁和寺に、隆曉法印といふ人、かくしつゝ數しらず死ぬることを悲みて、聖を數多かたらひつゝ、その死首の見ゆるごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。その人數を知らんとて、四五兩月がほど數へたりければ、京の中、一條より南、九條より北、京極より西、朱雀より東、道のほとりにある頭、すべて四萬二千三百餘なんありける。況やその前後に死ぬるもの多く、河原、白河、西の京、もろ〱の邊

まさるやうに云々—飢饉は益々まさりて祈禱のしるしは無し

少水の魚—文珠出曜經に、是日已過命則衰滅如二少水魚一斯有二何樂一

す。乞食道の邊に多く、愁へ悲しぶ聲耳にみてり。

さきの年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は、立ちなほるべきかと思ふに、あまさへ疫病うちそひて、まさるやうに跡方なし。世の人皆飢ゑ死にければ、日を經つゝきはまり行くさま、少水の魚のたとへに叶へり。はてには笠うち著、足ひきつゝみ、よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく。かくわびしれたるものども、歩くかと見ればすなはちたふれ死ぬ。築地のつら、路頭に飢ゑ死ぬる類は數も知らず。取り捨つるわざもなければ、臭き香、世界にみち〳〵て、變り行くかたちありさま、目もあてられぬこと多かり。況や河原などには、馬車の行きちがふ道だにもなし。

賤、山がつも、力盡きて、薪にさへ乏しくなりゆけば、賴むかたなき人は、みづから家を毀ちて、市に出でて之を賣るに、一人が持ち出でたる價、なほ一日が命をさゝふるにだに及ばずとぞ。怪しき事は、かゝる薪の中に、丹つき、白銀黄金の箔など、所々につきて見ゆる木のわれあひまじれり。これを尋ぬれば、すべなき者の、古寺にいたりて、佛

茅を葺き―史記韓に、子曰堯之有二天下一也堂高三尺采椽不レ刊茅茨不レ翦云々

ぞめき―さわぎ

さのみやは云々―さうさう品格を保ちても居られず……

は、いかになりにけるにか、悉くもとのやうにも作らず。ほのかに傳へ聞くに、いにしへのかしこき御代には、憐をもて國を治め給ふ。すなはち御殿に茅を葺きて、軒をだに整へず。煙の乏しきを見給ふ時は、かぎりある貢物をさへゆるされき。これ民を惠み、世をたすけ給ふによりてなり。今の世の中のありさま、昔になぞらへて知りぬべし。

又養和のころかとよ。久しくなりてたしかにも覺えず。二年が間、世の中飢渇して、あさましきこと侍りき。あるは春夏日でり、あるは秋冬大風大水など、よからぬ事どもうち續きて、五穀悉く實らず。空しく春耕し、夏植うる營のみありて、秋かり冬收むるぞめきはなし。これによりて、國々の民、あるは地を捨てゝ境を出で、あるは家をわすれて山に住む。さま〳〵の御祈はじまりて、なべてならぬ法ども行はるれども、更にそのしるしなし。京の習、何わざにつけても、みなもとは田舍をこそ頼めるに、絶えてのぼる者なければ、さのみやは操も作りあへん。念じわびつゝ、寶物かたはしより捨つるが如くすれども、更に目みたつる人もなし。たま〳〵易ふる者は、金を輕くし、粟を重く

條里—拾芥抄に、條起ㇾ從ㇾ北行二於南一、里起ㇾ西行二於東一、三十六町爲二一里一、六里爲ㇾ條

木丸殿—新古今、天智天皇御製、朝倉や木の丸殿に我が居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ

しろく—果して其通り

なし。西南海の所領をのみ願ひ、東北國の庄園をば好まず。

その時、おのづから事の便ありて、津の國今の京に到れり。所のありさまを見るに、その地ほどせばくて、條里をわるに足らず。北は山にそひて高く、南は海に近くて下れり。波の音常にかまびすしくて、鹽風殊にはげしく、內裏は山の中なれば、かの木丸殿もかくやと、なかなか樣かはりて、優なるかたも侍りき。日々にこほちて、川もせきあへず運びくだす家は、いづくに作れるにかあらん、なほ空しき地は多く、作れる家は少なし。故鄕は既に荒れて、新都はいまだ成らず。ありとしある人、皆浮雲のおもひをなせり。もとよりこの處に居たるものは、地を失ひて愁へ、今うつり住む人は、土木の煩あることを歎く。道の邊を見れば、車に乘るべきは馬に乘り、衣冠布衣なるべきは直垂を著たり。都のてぶり忽に改りて、たゞ鄙びたる武士に異ならず。これは世の亂るゝ瑞相とか聞きおけるもしるく、日を經つゝ世の中うき立ちて、人の心も治らず、民の愁遂に空しからざりければ、同年の冬、なほこの京に歸り給ひにき。されど毀ちわたせりし家ども

さとし―祥、前兆

ことなる故―特別の譯

時を失ひ云云―羽振り惡くなり世間に用ひられずして

たはづけるもの、數を知らず。この風未申の方に移り行きて、多くの人の歎をなせり。辻風は常に吹くものなれど、かゝることやはある。たゞごとにあらず、さるべき物のさとしかなとぞ、疑ひ侍りし。

又おなじ年の六月の頃、俄に都遷り侍りき。いと思の外なりし事なり。おほかたこの京のはじめを聞けば、嵯峨の天皇の御時、都と定りにけるより後、既に數百歳を經たり。ことなる故なくて、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の人たやすからず愁へあへるさま、ことわりにも過ぎたり。されどとかくいふかひなくて、御門より始め奉りて、大臣、公卿、こと〴〵く攝津國難波の京に遷り給ひぬ。世に仕ふる程の人、誰かひとり故鄕に殘り居らん。官位におもひをかけ、主君の蔭をたのむ程の人は、一日なりとも疾く移らんとはげみあへり。時を失ひ世にあまされて、期する所なき者は、愁へながらとまり居たり。軒を爭ひし人の住居、日を經つゝ荒れ行く。家はこぼたれて淀川に浮び、地は目の前に畠となる。人の心皆あらたまりて、唯馬鞍をのみ重くす、牛車を用とする人

辻風—廻飆旋風

業風—劫風也、佛說に世界破滅の時三災とて火災水災と共に起る風災

ながら灰燼となりにき。その費いくそばくぞ。このたび公卿の家十六燒けたり。ましてその外は數を知らず。すべて都のうち三分が一に及べりとぞ。男女死ぬる者數千人、馬牛の類邊際を知らず。人の營みな愚なるなかに、さしも危き京中の家をつくるとて、寶を費し心をなやますことは、勝れてあぢきなくぞ侍るべき。

また治承四年卯月二十九日の頃、中御門京極のほどより、大なる辻風おこりて、六條わたりまで、いかめしく吹きけること侍りき。三四町をかけて吹きまくるに、その中にこもれる家ども、大なるも小きも、一つとして破れざるはなし。さながら平にたふれたるもあり、桁柱ばかり殘れるもあり。又門の上を吹き放ちて、四五町がほどに置き、又垣を吹き拂ひて、隣と一つになせり。いはんや家の內の寶、數を盡して空にあがり、檜皮葺、板の類、冬の木の葉の風に亂るゝがごとし。塵を煙の如くに吹き立てたれば、すべて目も見えず。おびたゞしくなり動む音に、物いふ聲も聞えず。かの地獄の業風なりとも、かくこそはとぞ覺えける。家の損亡せるのみならず、これを取り繕ふ間に、身を害ひて、か

いぬる——一本いにしに作る

たつみ、いぬゐ——東南、西北

死にぬ——一本死しぬ、又死ぬに作る

れり。殘るといへども朝日に枯れぬ。或は花は萎みて露なほ消えず。消えずといへどもゆふべを待つことなし。

およそ物の心を知りしより以來、四十あまりの春秋を送れる間に、世の不思議を見ること、やゝ度々になりぬ。いぬる安元三年四月二十八日かとよ。風烈しく吹きて靜ならざりし夜、戌の時ばかり、都のたつみより火出で來りて、いぬゐに至る。はてには朱雀門、大極殿、大學寮、民部省まで移りて、一夜が程に、塵灰となりにき。火元は樋口富小路とかや、病人を宿せる假屋より出で來けるとなむ。吹き迷ふ風に、とかく移り行くほどに、扇をひろげたるが如く、末廣になりぬ。遠き家は煙にむせび、近き邊はひたすら焰を地に吹きつけたり。空には灰を吹きたてたれば、火の光に映じて、あまねく紅なるなかに、風に堪へず吹き切られたる焰、飛ぶがごとくにして、一二町を越えつゝ移り行く。その中の人、現心ならんや。或は煙にむせびてたふれ伏し、或は焰にまぐれて忽に死にぬ。あるはまた、僅に身一つ辛くして遁れたれども、資財を取り出づるに及ばず、七珍萬寶、さ

うたかた——泡沫
破れて——一本やけてに作る

方丈記

行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉敷の都の中に、棟を竝べ甍を爭へる、尊き卑しき人の住居は、代々を經てつきせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年破れて今年は造り、あるは大家滅びて小家となる。住む人もこれにおなじ。處もかはらず、人もおほかれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、僅に一人二人なり。朝に死し、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來りて、何方へか去る。又知らず、假の宿、誰が爲に心をなやまし、何によりてか目を悦ばしむる。その主人と住家と、無常を爭ひ去るさま、いはゞ朝顏の露に異ならず。或は露おちて花殘

枕草紙終

人なみ〳〵なる云々——人なみ〳〵の評を聞くべき物ならず、耳を聞くは目を見ると同一の語法

ほどよりはわろし、心見えなりともそしられめ。たゞ心ひとつに、おのづから思ふことを、たはぶれに書きつけたれば、物に立ちまじり、人なみ〳〵なるべき耳をも聞くべきものかはと思ひしに、はづかしきなども、見る人はの給ふなれば、いとあやしくぞあるや。實(げ)にそれもことわり、人の憎むをもよしといひ、譽(ほ)むるをもあしといふは、心の程こそおしはからるれ。たゞ人に見えけんぞねたきや。

ほその云々—生絹はすき通りて膚まで見ゆればと戯れいふ也

きようかくしたり云々—一本ようかくしたりと思ひしを心よりほかにこそもり出でにけれに作る

こよや——一本こじや

寐はれて、ようせずば、頬ゆがみもしつべし。互に見かはしたらん程の、いけるかひなさよ。色黒き人の、生絹單著たる、いと見ぐるしかし。のしひとへも同じくすきたれど、それはかたはにも見えず。ほその通りたればにやあらん。

ものくらうなりて、文字もかゝれずなりたり。筆も使ひはてて、これを書きはてばや。この草紙は、目に見え、心に思ふ事を、人やは見んずると思ひて、徒然なる里居のほどに、書き集めたるを、あいなく、人のため便なきいひ過しなどしつべき所々もあれば、きようかくしたりと思ふを、涙せきあへずこそなりにけれ。宮の御前に、内大臣の奉り給へりけるを、「これに何を書かまし。うへの御前には、史記といふ文を書かせ給へる」などの給はせしを、「枕にこそはし侍らめ」と申しゝかば、「さば得よ」とて賜はせたりしを、あやしきを、こよや何やと、つきせずおほかる紙の數を、書きつくさんとせしに、いと物おぼえぬことぞおほかるや。大かたこれは世の中にをかしき事を、人のめでたしなど思ふべき事、なほ選り出でて、歌などをも、木、草、鳥、蟲をもいひ出したらばこそ、思ふ

したゝかに―一本しらかみに

のけくび―つき襟

清げなる童の髪ながき。また大やかなるが、髯生ひたれど、思はずに髮うるはしき。又したゝかに、むくつけげなるなど多くて、いとなげにて、こゝかしこに、やんごとなきおぼえあるこそ、法師もあらまほしきわざなゝめれ。親などいかに嬉しからんとこそ、おしはからるれ。

見ぐるしきもの

衣の背縫かたよせて著たる人。又のけくびしたる人。下簾穢げなる上達部の御車。例ならぬ人の前に子を率ていきたる。袴著たる童の足駄はきたる、それは今樣のものなり。つぼ裝束したる者の、急ぎて歩みたる。法師、陰陽師の、紙冠して祓したる。また色黒う、痩せ、にくげなる女のかづらしたる。髯がちにやせ〳〵なる男と晝寢したる、何の見るかひに臥したるにかあらん。夜などばかたちも見えず、又おしなべてさる事となりにたれば、我にくげなりとて、起き居るべきにもあらずかし。翌朝疾く起き往ぬる、めやすし。夏晝寐して起きたる、いとよき人こそ今少しをかしけれ。えせかたちはつやめき

どす、からる程に作る

まかり申して—いとまごひをして

ほうちはうたう—ほうちはほそちの誤にて熟瓜、はうたうは餠餡(ボウタウ)などの說あれど、一本まゐらせんまで十二字無きをよしとすべし

ながらいそいでくるや。單など淸げに、薄色の裳など萎えかゝりてはあらず、いと淸げなり。申の時にぞ、いみじうことわりいはせなどして許しつ。「几帳の内にとこそ思ひつれ、あさましうも出でにけるかな。いかなる事ありつらん」と恥しがりて、髮を振りかけてすべり入りぬれば、しばしとゞめて、加持少しして、「いかに、さわやかになり給へりや」とてうち笑みたるも恥しげなり。「しばし侍ふべきを、時のほどにもなり侍りぬべければ」とまかり申して出づるを、「しばし、ほうちはうたう參らせん」などとゞむるを、いみじう急げば、所につけたる上﨟とおぼしき人、簾のもとにゐざり出でて、「いと嬉しく立ちよらせ給へりつるしるしに、いと堪へがたく思ひ給へられつるを、只今おこたるやうに侍れば、かへすがへす悅び聞えさする。明日も御暇の隙には、物せさせ給へ」などいひつゝ。「いとしうねき御物怪に侍るめるを、たゆませ給はざらんなんよく侍るべき。よろしく物せさせ給ふなるをなん、悅び申し侍る」と、詞ずくなにて出づるは、いと尊きに、佛のあらはれ給へるとこそ覺ゆれ。

いたうなやむ人にや—一本いたうなやめばに作る
集ひまもらへ—一本つとまもらへ
兄—一說姉
ひきつくろひ—一本この下た、な

に、母屋に四尺の几帳立てて、前に圓座をおきて、三十餘ばかりの僧の、いとにくげならぬが、薄墨の衣、羅の袈裟など、いとあざやかにうちさうぞきて、香染の扇うちつかひ、千手陀羅尼讀み居たり。物怪にいたうなやむ人にや、うつすべき人とて、おほきやかなる童の、髮など麗しき、生絹の單、あざやかなる袴長く著なして、ゐざり出でて、横ざまに立てたる三尺の几帳の前に居たれば、外ざまにひねり向きて、いとほそう、にほやかなる獨鈷を取らせて、をゝと目うち塞ぎて讀む陀羅尼も、いとたふとし。顯證の女房あまた居て、集ひまもらへたり。久しくあらでふるひ出でぬれば、もとの心失ひて、行ふまゝに隨ひ給へる護法も、げにたふとし。兄の袿きたる、細冠者どもなどの、後に居て團扇するもあり。皆たふとがりて集りたるも、例の心ならば、いかに恥しと惑はん。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび歎きたるさまの心苦しさを、附人の知人などは、らうたく覺えて、几帳のもと近く居て、衣ひきつくろひなどする程に、よろしとて、御湯など北面に取り次ぐほどをも、わかき人々は心もとなし。盤も引きさげ

註、いふ事もなきに任せてざつと書く

まひろげ—前註、一一九頁参照

錄—古人の語錄

てなどはあらず、心とゞめて書く。まひろげ姿をかしう見ゆ。白き衣どものうへに、山吹紅などをぞ著たる。白き單衣のいたく萎みたるを、うちまもりつゝ書き立てて、前なる人にも取らせず、わざとたちて、小舍人童のつき〲しきを、身近く呼び寄せて、うちさゝめきて、往ぬる後も久しく詠めて、經のさるべき所々など、忍びやかに口ずさびに爲居たり。奧のかたに、御手水、粥などしてそゝのかせば、歩み入りて、文机に押しかゝりて文をぞ見る。おもしろかりける所々は、うち誦じたるもいとをかし。手洗ひて、直衣ばかりうち著て、錄をぞそらに讀む。實にいとたふとき程に、近き所なるべし、ありつる使うちけしきばめば、ふと讀みさして、返事に心入るゝこそいとほしけれ。

淸げなるわかき人の、直衣も袍も狩衣も、いとよくて、きぬがちに、袖口あつく見えたるが、馬に乗りて往くまゝに、供なるをのこ、たて文を、目をそらにて取りたるこそをかしけれ。

前の木だち高う庭廣き家の、東南の格子どもあけ渡したれば、涼しげに透きて見ゆる

月の有りつつも君し來まさば我戀ひめやも

頓の事なりと云々—急用なりとも再び車借らんとは言ひ入れじと也

わが從者—やはり業遠の從者

事なしびに云々—春

ともしたるやうなる月の光、催されて驚かさるゝ心地しければ、やをら立ち出でにけりとこそかたりしか。

女房のまゐりまかでするには、車を借る折もあるに、こゝろよそひしたる顔にうちいひて貸したるに、牛飼童の、例の牛よりもしもざまにうちいひて、いたう走り打つも、あなうたてと覺ゆかし。男どもなどの、物むづかしげなる氣色にて、「いかで夜更けぬさきに、追ひて歸りなん」といふは、なほ主の心おしはかられて、頓の事なりと、又いひ觸れんとも覺えず。業遠朝臣の車のみや、夜中あかつきわかず人の乘るに、聊さる事なかりけん、よくぞ教へ習はせたりしか。道に逢ひたりける女車の、深き所におとし入れて、え引き上げで、牛飼のはらだちければ、わが從者してうたせさへしければ、まして心のまゝに、誡めおきたるに見えたり。

すき／＼しくて獨住する人の、夜はいづらにありつらん、曉に歸りて、やがて起きたる、まだねぶたげなる氣色なれど、硯とり寄せ、墨こまやかに押し磨りて、事なしびに任せ

匠ども居並みて物くふを、東面に出で居て見れば、まづ持てくるや遲きと、汁物取りて皆飲みて、土器はついすゑつゝ、次にあはせを皆くひつれば、おものは不用なゝめりと見るほどに、やがてこそ失せにしか。二三人居たりし者、皆させしかば、工匠のさるなめりと思ふなり。あなもたいなの事どもや。

物語をもせよ、昔物語もせよ、さかしらに答うちして、こと人どものいひまぎらはす人、いと憎し。

ある所に、中の君とかやいひける人の許に、君達にはあらねども、その心いたくすきたる者にいはれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに往きて、有明の月のいみじう照りておもしろきに、名殘思ひ出でられんと、言の葉を盡していへるに、今はいぬらんと遠く見送るほどに、えもいはず艶なる程なり。出づるやうに見せて立ち歸り、立蔀あいたる陰のかたに添ひ立ちて、猶ゆきやらぬさまもいひ知らせんと思ふに、「有明の月のありつつも」とうちいひて、さしのぞきたるかみの頭にも寄りこず、五寸ばかりさがりて、火

あはせ、おもの―菜、飯

もたいな―勿體なにて品なしの意

こと人云々―春註に下の人の字衍といふ、抄に、こと人と物いひ、まぎらはす人に作る

有明の月の―拾遺、長月の有明の

たのもし人の師—萬事を賴む宿坊

序のまゝに—其順序通り

猫の土に云云—春註に、衍文なるべし、一說品惡しきたとへ、又下の物食ふに掛る副詞

立居額づきたるは、押し倒しつべき心地こそすれ。いとやんごとなき人の局ばかりこそ、前はらひあれ、よろしき人は、制しわづらひぬかし。たのもし人の師を呼びていはすれば、「足下ども少し去れ」などいふ程こそあれ、歩み出でぬれば、おなじやうになりぬ。

いひにくきもの

人の消息、仰事などの多かるを、序のまゝに、初より奥までいといひにくし。返事また申しにくし。恥しき人の物おこせたるかへりごと。おとなになりたる子の、思はずなること聞きつけたる、前にてはいといひにくし。

四位五位は冬、六位は夏。宿直すがたなども、品こそ男も女もあらまほしきことなゝめれ。家の君にてあるにも、誰かはよしあしを定むる。それだに物見知りたる使人ゆきて、おのづからいふべかめり。ましてまじらひする人はいとこよなし。猫の土におりたるやうにて。工匠の物くふこそいと怪しけれ。新殿を建てて、東の對だちたる屋を作るとて、工

なか〳〵なろ―却りて悪しき

さてなん―それまでの事なり

猶ぞある―やはりよろしからず

ふ、心づきなきなめり。おとなになりても、思ひ後見もて騒ぐほどに、なか〳〵なる事こそおほかゝめれ。わびしくにくき人に思ふ人の、はしたなくいへど、添ひつきてねんごろがる。いさゝか心あしなどいへば、常よりも近く臥して、物くはせ、いとほしがり、その事となく思ひたるに、まつはれ追従し、とりもちて惑ふ。宮仕人の許に來などする男の、そこにて物くふこそいとわろけれ。くはする人もいとにくし。思はん人の、「まづ」など志ありていはんを、忌みたるやうに口をふたぎて、顔を持てのくべきにもあらねば、くひ居るにこそあらめ。いみじう醉ひなどして、わりなく夜更けて泊りたりとも更にゆづけだにくはせじ。心もなかりけりとて來ずばさてなん。さとにて、北面よりし出してはいかゞせん。それだに猶ぞある。初瀬に詣でて局に居たるに、あやしき下種どもの、後さしまぜつゝ、居並みたるけしきこそ、ないがしろなれ。いみじき心を起して詣でたるに、川の音などの恐しきに、榑階をのぼり困じて、いつしか佛の御顔を拜み奉らんと、局に急ぎ入りたるに、蓑蟲のやうなるものの、あやしき衣著たるが、いとにくき

人知れぬ中—忍び男

見來て—見え來りて、見舞に來るなり

數多ある云云—其子の乳母の詞

など、事なしびに問ふ人もあり。心かけたる人は、誠にいみじと思ひ歎き、人知れぬ中(なか)などは、まして人目思ひて、寄るにも近くもえ寄らず、思ひ歎きたるこそをかしけれ。いと麗しく長き髪を引きゆひて、物つくとて起きあがりたる氣色(けしき)も、いと心苦しくらうたげなり。うへにも聞し召して、御讀經(みどきやう)の僧の聲よき給はせたれば、訪人(とぶらひびと)どももあまた見來て、經(きやう)聞きなどするもかくれなきに、目をくばりつゝ讀み居たるこそ、罪や得らんとおぼゆれ。

こゝろづきなきもの

物へゆき、寺へも詣づる日の雨。使ふ人の我をばおぼさず、「某(なにがし)こそ只今の人」などいふをほの聞きたる。人よりはなほ少しにくしと思ふ人の、推量事(おしはかりごと)うちし、すゞろなる物恨(ものうらみ)し、我かしこげなる。心あしき人の養ひたる子、さるはそれが罪にもあらねど、かゝる人にしもと覺ゆる故にやあらん。「數多(あまた)あるが中(なか)に、この君をば思ひおとし給ひてや、にくまれ給ふよ」などあらゝかにいふ。兒(ちご)は思ひも知らぬにやあらん、もとめて泣き惑

片つかた—原本片ばかまに作る

そこはかとなく—何となく、別段これといふ事もなく

ず。なほ昔より、さまよく著たるこそよけれ。左右のゆだけなるはよし。それもなほ女房の裝束にては、所せかゝめり。男の數多かさぬるも、片つかた重くぞあらんかし。淸らなる裝束の、織物、うすものなど、今は皆さこそあゝめれ。今樣に又さまよき人の著給はん、いと便なきものぞかし。かたちよき君達の、彈正にておはする、いと見ぐるし。宮の中將などの口惜しかりしかな。

やまひは

胸。物怪。脚氣。唯そこはかとなく物食はぬ。十八九ばかりの人の、髮いと麗しくて、たけばかりすそふさやかなるが、いとよく肥えて、いみじう色しろう、顏あいぎやうづき、よしと見ゆるが、齒をいみじく病みまどひて、額髮もしとゞに泣きぬらし、髮の亂れかゝるも知らず、面赤くて抑へ居たるこそをかしけれ。八月ばかり、白き單衣、なよらかなる袴よきほどにて、紫苑の衣の、いとあざやかなるを引きかけて、胸いみじう病めば、友だちの女房たちなどかはる〴〵來つゝ、「いといとほしきわざかな、例もかくや惱み給ふ」

唐衣は

あかいろ。ふぢ。夏はふたあゐ。秋は枯野。

裳　は

大海。しびら。

汗衫は

春は躑躅、櫻。夏は青朽葉、朽葉。

織物は

むらさき。しろき。萠黄に柏葉織りたる。紅梅もよけれども、なほ見ざめこよなし。

紋　は

あふひ。かたばみ。

夏うすもの、片つ方のゆだけ著たる人こそにくけれど、數多かさね著たれば、ひかれて著にくし。綿など厚きは、胸などもきれて、いと見ぐるし。まぜて著るべき物にはあら

しびら―春註に、褶裳とて裳の一やうと見えたり

かたばみ―一本この下に、あられぢとあり

の心に偏せりとにや

いぶき―春註、伊吹は美濃近江の堺なるにはあらず、下野國なりと能因が坤元儀に出でたるよし袖中抄に見ゆ

ける。「定澄僧都に袿なし、すいせい君に袙なし」といひけん人もこそをかしけれ。

「まことや、下野にくだる」といひける人に、

おもひだにかからぬ山のさせも草たれかいぶきの里は告げしぞ

ある女房の、遠江守の子なる人をかたらひてあるが、おなじ宮人をかたらふと聞きて恨みければ、「親などもかけて誓はせ給ふ。いみじき虚言なり、夢にだに見ずとなんいふ。いかゞいふべき」といふと聞きて、

誓へきみ遠つあふみのかみかけてむげに濱名のはし見ざりきや

「便なき所にて人に物をいひけるに、胸のいみじうはしりける、などかくはある」といひける答に、

逢坂はむねのみつねにはしり井のみつくる人やあらんと思へば

女のうはぎは、

薄色。葡萄染。萌黄。さくら。紅梅。すべて薄色の類。

故上―亡母

すき〲しき云々―不平の餘好色

いくらばかりにか」といへば、「まづよめかし」といふ。「いかでか、片日もあき仕うまつらでは」といへば、「人にも見せよ、只今召せば、頓にてうへへ參るぞ。さばかりめでたき物を得ては、何をか思ふ」とて皆笑ひ惑ひてのぼりぬれば、「人にや見せつらん。里にいきて、いかに腹立たん」など、御前に參りて、まゝの啓すれば、また笑ひさわぐ。御前にも、「などかく物ぐるほしからん」と笑はせ給ふ。

男は女親なくなりて、親ひとりある、いみじく思へども、わづらはしき北の方の出で來て後は、内にも入れられず、裝束などの事は、乳母、また故上の人どもなどしてせさす。西東の對のほどに、客人にもいとをかしう、屛風障子の繪も見所ありてすまひたり。殿上のまじらひのほど、口惜しからず、人々も思ひたり。うへにも御氣色よくて、常に召しつゝ、御あそびなどのかたきには、思しめしたるに、なほ常に物なげかしう、世のなか心にあはぬ心地して、すき〲しき心ぞ、かたはなるまであるべき。上達部のまたなきに、もてかしづかれたる妹一人あるばかりにぞ、思ふ事をもうちかたらひ、慰め所なり

の月に行けば」と誦じ給へる、又いみじうめでたし。「かやうの事めで惑ふ」とて笑ひ給へど、いかでか、猶いとをかしきものをば。僧都の君の御乳母のまゝと、御匣殿の御局に居たれば、男ある板敷のもと近く寄り來て、「辛いめを見候ひつる。誰にかはうれへ申し候はんとてなん」と泣きぬばかりの氣色にていふ。「何事ぞ」と問へば、「あからさまに物へまかりたりし間に、きたなく侍る所の燒けはべりにしかば、日ごろは寄居蟲のやうに、人の家に尻をさし入れてなん侍ふ。馬寮の御秣積みて侍りける家よりなん、出でまうで來て侍るなり。たゞ垣を隔てて侍れば、よどのに寢て侍りける童もほと〳〵燒け侍りぬべくなん、いさゝか物もとうで侍らず」などいひ居る。御匣殿も聞き給ひて、いみじう笑ひ給ふ。

みまくさをもやすばかりの春のひによどのさへなど殘らざるらん

と書きて、「これを取らせ給へ」とて投げ遣れば、笑ひのゝしりて、「このおはする人の、家の燒けたりとていとほしがりて給ふめる」とて取らせたれば、「何の御短策にか侍らん、物

佳人盡飾二於晨粧一魏宮鐘動遊子猶行二於殘月一函谷鷄鳴

男ある―或男といふに同じ

よどの―夜殿に淀野を掛く

又人の云々─他に人のあらば我言も紛れもすべけれど我一人なれば紛れん樣もなしと也

聲明王の云云─朗詠、鷄人曉唱聲驚ニ明王之眠ー

遊子なほ云云─朗詠、

たて何しにさ申しつらんと思へども、又人のあらばこそはまぎれもせめ。うへの御前の柱に寄りかゝりて、少し眠らせ給へるを、「かれ見奉り給へ、今は明けぬるに、かくおほとのごもるべき事かは」と申させ給ふ。「實に」など宮の御前にも笑ひ申させ給ふも知らせ給はぬほどに、長女が童の、鷄を捕へて持ちて、明日里へ往かんといひて隱し置きたりけるが、いかゞしけん、犬の見つけて追ひければ、廊の先に逃げ往きて、恐しう泣きのゝしるに、みな人起きなどしぬなり。うへもうち驚かせおはしまして、「いかにありつるぞ」と尋させ給ふに、大納言殿の、聲明王の眠を驚すといふ詩を、高ううち出し給へる、めでたうをかしきに、一人ねぶたかりつる目も大になりぬ。「いみじき折の事かな」と宮も興ぜさせ給ふ。なほかゝる事こそめでたけれ。又の日は、夜の御殿に入らせ給ひぬ。夜半ばかりに、廊に出でて人呼べば、「おるゝか、われ送らん」との給へば、裳唐衣は屏風にうち懸けていくに、月のいみじう明くて、直衣のいと白う見ゆるに、指貫の半ふみくゝまれて、袖をひかへて、「たふるな」といひて率ておはするまゝに、「遊子なほ殘

求めんとて拾レ薪設レ食仙人に仕ふ（提婆品）

いよ〳〵見まく――老いぬればさらぬ別の有りといへばいよいよ見まくほしき君哉（伊勢物語）

と詠み給ひけんこそめでたけれ。こゝもとは打聞になりぬるなめり。

また業平が母の宮の、いよ〳〵見まくとの給へる、いみじうあはれにをかし。引きあけて見たりけんこそ思ひやらるれ。

をかしと思ひし歌などを、草紙に書きておきたるに、下種のうち歌ひたるこそ心憂けれ。よみにもよむかし。

よろしき男を、下種女などの譽めて、「いみじうなつかしうこそおはすれ」などいへば、やがて思ひおとされぬべし。そしらるゝはなか〳〵よし。下種にほめらるゝは女だにわろし。また譽むるまゝにいひそこなひつるものをば。

大納言殿まゐり給ひて、文の事など奏し給ふに、例の夜いたう更けぬれば、御前なる人人、一二人づつうせて、御屛風几帳の後などに、みな隱れふしぬれば、唯一人になりて、ねぶたきを念じてさぶらふに、丑四つと奏するなり。「明け侍りぬなり」とひとりごつに、大納言殿、「今更におほとのごもりおはしますよ」とて、寢べきものにも思したらぬを、う

し船の跡の白浪、萬葉には朝開き漕ぎいにし船のあとなきがごととと見ゆ

盆―今も行はるゝ于蘭盆の供養

薪こる―釋迦法華經を

けありく、いと危く、うしろべたくはあらぬにや、蜑ものぼらんとては、その繩をなん引く。取り惑ひ繰り入るゝさまぞ、理なるや。船のはたを抑へて、放ちたる息などこそ、まことに唯見る人だにしほたるゝに、落し入れて漂ひありく男は、目もあやにあさまし。更に人の思ひかくべきわざにもあらぬことにこそあめれ。

右衛門尉なる者の、えせ親をもたりて、人の見るにおもてぶせなど、見ぐるしう思ひけるが、伊豫國よりのぼるとて、海に落し入れてけるを、人の心うがり、あさましがりけるほどに、七月十五日、盆を奉るとていそぐを見給ひて、道命阿闍梨、

わたつ海に親をおし入れてこの主のぼんする見るぞあはれなりける

とよみ給ひけるこそ、いとほしけれ。

又小野殿の母うへこそは、普門寺といふ所に八講しけるを聞きて、又の日小野殿に人々集りて、あそびし、文つくりけるに、

薪こることはきのふにつきにしを今日はをののえこゝにくたさん

早緒―又早絲とも云ふ、櫓に著くる繩

すきかげ―一本すかけに作る、簾掛けなり

遊艇―はしけ也、つけては名附けて

あとのしら浪―沙彌滿誓、世の中を何にたとへん朝ぼらけ漕ぎいに

うほうと投げ入れなどするこそいみじけれ。蓬庫といふ物にぞおはす。されど奥なるはいさゝかたのもし。端に立てる者どもこそ、目くるゝ心地すれ。早緒つけて、のどかにすげたる物の弱げさよ。絶えなば何にかはならん、ふと落ち入りなんを、それだにいみじう太くなどもあらず。わが乗りたるはきよげに、帽額のすきかげ、妻戸格子あげなどして、されどひとしう重げになどもあらねば、たゞ家の小きにてあり。他船見やるこそいみじけれ。遠きはまことに笹の葉を作りて、うち散したるやうにぞいと能く似たる。泊りたる所にて、船ごとに火ともしたる、をかしう見ゆ。遊艇とつけて、いみじう小きに乗りて漕ぎありく早朝など、いとあはれなり、あとのしら浪は、誠にこそ消えてもゆけ。よろしき人は、乗りてありくまじき事とこそ猶おぼゆれ。陸路も又いとおそろし。されどそれは、いかにも〱地につきたれば、いとたのもしと思ふに、蜑のかづきしたるは憂きわざなり。腰につきたる物絶えなば、いかゞせんとなん。男だにせば、さてもありぬべきを、女はおぼろげの心ならじ。男は乗りて、歌なッどうちうたひて、この栲繩を海にう

うちたる—擣ちて光澤を出せる布

さまはかなき—一本さるはかなき

うちとくまじきもの

あしと人にいはるゝ人。さるはよしと知られたるよりは、うらなくぞ見ゆる。船の路。日のうらゝかなるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑のうちたるを引き渡したるやうに見えて、聊恐しき氣色もなき若き女の、衵ばかり著たる、侍の者の若やかなる諸共に、櫓といふもの押して、歌をいみじううたひたる、いとをかしう、やんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたう吹き、海のおもてのたゞ荒れにあしうなるに、物もおぼえず、泊るべき所に漕ぎつくるほど、船に浪のかけたるさまなどは、さばかり和かりつる海とも見えずかし。思へば船に乘りてありく人ばかり、ゆゝしきものこそなけれ。よろしき深さにてだに、さまはかなき物に乘りて、漕ぎ往くべき物にぞあらぬや。ましてそこひも知らず、千尋などもあらんに、物いと積み入れたれば、水際はたゞ一尺ばかりだになきに、下種どもの、聊恐しとも思ひたらず、走りありき、つゆ荒くもせば沈みやせんと思ふに、大なる松の木などの、二三尺ばかりにてまろなるを、五つ六つほ

月十五夜、秦甸之一千餘里凜々氷鋪

内外のはし――一本、内、殿原に作る

くる人もあるは――訪れ來る人など有る場合には

詩を、がへす〴〵誦じておはするは、いみじうをかしうて、夜一夜もありかまほしきに、往く所の近くなるもくちをし。

宮仕する人々の出で集りて、君々の御事めで聞え、宮の内外のはしの事ども、互に語り合せたるを、おのが君々、その家あるじにて聞くこそをかしけれ。

家廣く淸げにて、親族は更なり、唯うちかたらひなどする人には、宮づかへ人、片つ方にするゐてこそあらまほしけれ。さるべき折は、一所に集りゐて物語し、人の詠みたる歌、何くれと語りあはせ、人の文など持てくる、もろともに見、返事かき、また睦しうくる人もあるは、淸げにうちしつらひて入れ、雨など降りてえ歸らぬも、をかしうもてなし、參らん折はその事見入れて、思はんさまにして出し立てなどせばや。よき人のおはします御有樣など、いとゆかしきぞ、けしからぬ心にやあらん。

見ならひするもの

欠伸。兒ども。なまけしからぬえせもの。

かれなど云云—銀など云々、白雪に殘月の映じて皚々たる樣也

凜々として—朗詠、八

し。里へも出で、もしは忍びたる所へも、夜のほど出づるにもあれ、合ひ乗りたる道の程こそをかしけれ。日ごろ降りつる雪の、今朝はやみて、風などのいたう吹きつれば、垂氷のいみじうしだり、土などこそむら／＼黒きなれ、屋のうへは唯おしなべて白きに、あやしき賤の屋もおもがくして、有明の月のくまなきに、いみじうをかし。かねなどおしへぎたるやうなるに、水晶の莖などいはまほしきやうにて、長く短く、殊更かけ渡したると見えて、いふにもあまりてめでたき垂氷に、下簾も懸けぬ車の簾を、いと高く上げたるは、奥までさし入りたる月に、薄色、紅梅、しろきなど、七つ八つばかり著たるうへに、濃き衣のいとあざやかなる艶など、月に映えて、をかしう見ゆる傍に、葡萄染の堅紋の指貫、白き衣どもあまた、山吹、紅など著こぼして、直衣のいと白き引きときたれば、ぬぎ垂れられて、いみじうこぼれ出でたり。指貫の片つかたは、軾の外にふみ出されたるなど、道に人の逢ひたらば、をかしと見つべし。月影のはしたなさに、後ざまへすべり入りたるを、引き寄せあらはになされて笑ふもをかし。凜々として氷鋪けりといふ

らしわぶてふとあり、后宮の御歌なり

少將にや云云—深草の少將百夜通へといひし女の許へ九十九夜通ひ今一夜待ちあへで死したる故事を取りて、今宵の内もえ堪へずして死にもすべしと云へる也

給はんだにをかしかるべきを、まして仰事のさまには、おろかならぬ心地すれど、啓せん事とはおぼえぬこそ。

雲のうへにくらしかねけるはるの日を所がらともながめつる哉

私には、「今宵の程も、少將にやなり侍らんずらん」とて、曉に參りたれば、「昨日の返し、暮しかねけるこそいとにくし。いみじうそしりき」と仰せらるゝ、いとわびしう誠にさることも。

清水に籠りたる頃、茅蜩のいみじう鳴くをあはれと聞くに、わざと御使しての給はせたりし。唐の紙の赤みたるに、

山ちかき入相の鐘のこゑごとに戀ふるこゝろのかずは知るらん

ものを、こよなのながゐやと書かせ給へる。紙などのなめげならぬも取り忘れたるたびにて、紫なる蓮の花びらに書きてまゐらする。

十二月二十四日、宮の御佛名の初夜の御導師聞きて出づる人は、夜半も過ぎぬらんか

堂初成偶題東壁五首之内

春のおもてをふす—春の面目を失はしむ、柳の葉の廣ごりにくげなるを誹れる也

くらしわづらふ—千載集には、く

事、人はなほこそ聞け。そと立ちはしりて、白き水いかけさせよともいはぬに、爲ありくさまの、例知り、いさゝか主に物いはせぬこそ羨しけれ。さらん人もがな、つかはんとこそ覺ゆれ。

三月ばかり物忌しにとて、かりそめなる人の家にいきたれば、木どもなどはかゞしからぬ中に、柳といひて、例のやうになまめかしくはあらで、葉廣う見えてにくげなるを、「あらぬものなゝめり」といへば、「かゝるもあり」などいふに、

さかしらに柳のまゆのひろごりて春のおもてをふする宿かな

とこそ見えしか。そのころ又おなじ物忌しに、さやうの所に出でたるに、二日といふ晝つかた、いとゞ徒然まさりて、只今も參りぬべき心地する程にしも、仰事あれば、いとうれしくて見る。淺綠の紙に、宰相の君いとをかしく書き給へり。

いかにしてすぎにしかたを過しけん暮しわづらふ昨日けふ哉

となん。わたくしには、「今日しも千年の心地するを、曉だに疾く」とあり。この君のの

月次―年中行事の繪也

香爐峯の雪―遺愛寺鐘欹レ枕聽、香爐峯雪撥レ簾看、白樂天香爐峰下新卜山居草

聞えたる。月次の御屏風もをかし。
方違などして夜ふかくかへる、寒きこといとわりなく、頤なども皆おちぬべきを、辛うじて來つきて、火桶引き寄せたるに、火の大きにて、つゆ黑みたる所なくめでたきを、こまかなる灰の中よりおこし出でたるこそ、いみじう嬉しけれ。物などいひて、火の消ゆらんも知らず居たるに、こと人の來て、炭入れておこすこそいとにくけれ。されどめぐりに置きて、中に火をあらせたるはよし。皆火を外ざまにかき遣りて、炭を重ね置きたるいたゞきに、火ども置きたるがいとむつかし。
雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火起して、物語などして集り侍ふに、「少納言よ、香爐峯の雪はいかならん」と仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷き上げたれば、笑はせたまふ。人々も「皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ。なほこの宮の人には、さるべきなめり」といふ。
陰陽師の許なる童こそ、いみじく物は知りたれ。祓など爲に出でたれば、祭文など讀む

ければ、すそ薄になりたるを開けたれば、いと細く卷きて、結びたる卷目は、こま〴〵とくぼみたるに、墨のいと黑う薄く、くだりせばに、裏表書きみだりたるを、うち返し久しう見るこそ、何事ならんと、よそにて見やりたるもをかしけれ。まいてうちほゝゑむ所はいとゆかしけれど、遠う居たるは、黑き文字などばかりぞ、さなゝめりと覺ゆるかし。額髮ながやかに、おもやうよき人の、暗きほどに文を得て、火ともす程も心もとなきにや、火桶の火を挾みあげて、たど〴〵しげに見居たるこそをかしけれ。

きら〳〵しきもの

大將の御さきおひたる。孔雀經の御讀經。御修法は五大尊。藏人式部丞。白馬の日、大路ねりたる。御齋會、左右衞門佐摺衣やりたる。季の御讀經。熾盛光の御修法。神のいたく鳴るをりに、雷鳴の陣こそいみじうおそろしけれ。左右大將、中少將などの、御格子のつらに侍ひ給ふ、いとをかしげなり。はてぬるをり、大將の仰せて、のぼりおりとの給ふらん。坤元錄の御屛風こそ、をかしう覺ゆる名なれ。漢書の御屛風は、雄々しくぞ

すばれ、一本むすびに作る

くだりせばに—行間狹く

熾盛光—春註に、妖星のたゝり國大臣などの居所の祈禱などに行ふ云々

みじかりし
あらず—別義ならず、手紙の詞

今は—この下に、文をもやらじ若しくは契絶えなんなど補ふ

水ます雨の—古今、眞菰刈る淀の河水雨ふれば常より殊にまさる我が戀
むすべ—む

しものを、かく聞きて、雨にありかぬ人やはあらんずらん。月のいとあかき夜、紅の紙のいみじう赤きに、唯「あらず」とも書きたるを、廂にさし入れたるを、月にあてて見しこそをかしかりしか。雨降らん折はさはありなんや。

常に文おこする人の、「何かは今はいふかひなし。今は」などいひて、又の日音もせねば、さすがにあけたてば、文の見えぬこそさう〴〵しけれと思ひて、「さてもきは〴〵しかりける心かな」などいひて暮しつ。又の日、雨いたう降る晝まで音もせねば、「無下に思ひ絶えにけり」などいひて、端のかたに居たる夕暮に、笠さしたる童の持てきたるを、常よりも疾くあけて見れば、「水ます雨の」とある、いと多くよみ出しつる歌どもよりはをかし。ただ朝はさしもあらず、さえつる空の、いと暗うかき曇りて、雪のかきくらし降るに、いと心ぼそく、見出すほどもなく、白く積りて、猶いみじう降るに、隨身だちて細やかに美美しき男の、傘さして、側の方なる家の戸より入りて、文をさし入れたるこそをかしけれ。いと白き檀紙、白き色紙のむすべたる、うへにひきわたしける墨の、ふと氷りに

交野少將云云―落窪物語に、左近の少將落窪の君に通ひ殊に雨夜厚き志を見えて同時に思をかけし交野少將を凌げること見ゆ……

綠衫―六位の袍の色

をかしかりし―一本い

からねど、月に昔を思ひ出でて、むしばみたる蝙蝠とり出でて、もと見し駒にといひて立てる、いとあはれなり。雨は心もとなきものと思ひしみたればにや、片時降るもいとにくくぞある。やんごとなき事、おもしろかるべき事、尊くめでたかるべき事も、雨だに降ればいふかひなく口惜しきに、何かその濡れてかこちたらんがめでたからん。實に交野少將もどきたる落窪少將などはをかし。それも昨夜一昨日の夜も、ありしかばこそをかしけれ。足洗ひたるぞ、にくきたなかりけん。さらでは何か、風などの吹く、荒荒しき夜きたるは、たのもしくをかしうもありなん。雪こそいとめでたけれ。忘れめやなどひとりごちて、忍びたることは更なり。いとさあらぬ所も、直衣などは更にもいはず、狩衣、袍、藏人の青色などの、いとひやゝかに濡れたらんは、いみじうをかしかるべし。綠衫なりとも、雪にだに濡れなばにくかるまじ。昔の藏人は、夜など人の許などに、たゞ青色を著て、雨にぬれても、しぼりなどしけるとか。今は晝だに著ざゝめり。ただ綠衫をのみこそ、うちかづきたゝめれ。衞府などの著たるは、ましていとをかしかり

もとよりのよすが—以前より夫婦の契りを交はしたる女

こそ覺ゆれ—一本、ぞ覺ゆる

こまのゝ物語—今傳らず

へ、人の心々なればにやあらん、物見しり、思ひ知りたる女の、心ありと見ゆるなどをばかたらひて、數多いく所もあり、もとよりのよすがなどもあれば、繁うしもえ來ぬを、猶さるいみじかりし折に來りし事など、人にも語りつがせ、身をほめられんと思ふ人のしわざにや。それも無下に志なからんには、何しにかは、さも作事しても見えんとも思はん。されど雨の降る時は、唯むつかしう、今朝まではれ〴〵しかりつる空とも覺えずにくくて、いみじき廊のめでたき所ともおぼえず。ましていとさらぬ家などは、疾く降り止みねかしとこそ覺ゆれ。月のあかきに來らん人はしも、十日二十日一月、もしは一年にても、まして七八年になりても、思ひ出でたらんは、いみじうをかしと覺えて、え逢ふまじうわりなきところ、人目つゝむべきやうありとも、かならず立ちながらも、ものいひて返し、又とまるべからんをば留めなどしつべし。月のあかき見るばかり、遠く物思ひやられ、過ぎにし事、憂かりしも、嬉しかりしも、をかしと覺えしも、只今のやうに覺ゆる折やはある。こまのゝ物語は、何ばかりをかしき事もなく、詞もふるめき、見物多

物いふ—兵部のいふなり

とはなどて云々—以下清少の評論と見るべし、春註にはよべも昨日の夜も云云より以下を兵部が詞のあやしき子細をことわる也といへり

う叩く人のあるに、「うるさし」などいひ合せて、寐たるやうにてあれば、猶いみじうかしかましう呼ぶを、「あれおこせ、虚寐ならん」と仰せられければ、この兵部來て起せど、寐たるさまなれば、「更に起き給はざりけり」といひに往きたるが、やがて居つきて物いふなり。しばしかとおもふに、夜いたう更けぬ。權中將にこそあンなれ。「こは何事をかうはいふ」とてたゞ密に笑ふも、いかでか知らん。あかつきまでいひ明して歸りぬ。「この君いとゆゝしかりけり。更におはせんに物いはじ。何事をさは言ひあかすぞ」など笑ふに、遣戸をあけて女は入りぬ。翌朝例の廂に物いふを聞けば、「雨のいみじう降る日きたる人なん、いとあはれなる。日ごろおぼつかなうつらき事ありとも、さて濡れて來らば、憂き事も皆忘れぬべし」とはなどていふにかあらんを。昨夜も昨日の夜も、それがあなたの夜も、すべてこのごろは、うちしきり見ゆる人の、今宵もいみじからん雨にさはらで來らんは、一夜も隔てじと思ふなンめりと、あはれなるべし。さて日ごろも見えず、おぼつかなくて過さん人の、かゝる折にしも來んをば、更にまた志あるにはえせじとこそ思

めでたし。

成信の中將は、入道兵部卿の宮の御子にて、かたちいとをかしげに、心ばへもいとをかしうおはす。伊豫守兼輔がむすめの忘られて、伊豫へ親のくだりしほど、いかに哀なりけんとこそ覺えしか。あかつきに往くとて、今宵おはしまして、有明の月に歸り給ひけん直衣すがたなどこそ。そのかみ常に居て、ものがたりし、人のうへなど、わろきは「わろし」などの給ひしに。物忌などくすしうするものの、名を姓にて持たる人のあるが、ことびとの子になりて、平などいへど、唯もとの姓を、若きひと〲言種にて笑ふ。ありさまも異なることなし。兵部とて、をかしき方などもかたきが、さすがに人などにさしまじり心などのあるは、御前わたりに「見苦し」など仰せらるれど、腹ぎたなく知り告ぐる人もなし。一條の院つくられたる一間のところには、つらき人をば更に寄せず。東の御門につと向ひて、をかしき小廂に、式部のおもと諸共に、夜も晝もあれば、うへも常に物御覽じに出でさせ給ふ。「今宵は皆内に寐ん」とて南の廂に二人臥しぬる後に、いみじ

一二三四の四剋に分つ部合四十八剋、而して子四つ丑四つの如く四つ時に限りて時の杭をさすと也

名を姓にて―紫式部などの如く呼名を姓とせるを云ふ

おもと―原本おとゞに作る

なぎの花の御輿―葱花輦、鳳輦の次也

貫之が歌―千早振神の嚴籬に這ふ葛も秋にはあへず色づきにけり

四つのみぞ云々―一日を二時間づつ十二支に配し其各を

て、紅葉のいろ〳〵ありし、秋にはあへずと、貫之が歌おもひ出でられて、つく〴〵と久しうたゝれたりし。水分神いとをかし。

崎は

唐崎。いかゞ崎。三保が崎。

屋は

丸屋。四阿屋。

時奏するいみじうをかし。いみじう寒きに、夜中ばかりなどに、こほ〳〵とごほめき、沓すり來て、弦うちなどして、「何家の某、時丑三つ、子四つ」など、あてはかなる聲にいひて、時の杭さす音などいみじうをかし。子九つ、丑八つなどこそ、さとびたる人はいへ。すべて何も〳〵、四つのみぞ杭はさしける。

日のうら〳〵とある晝つかた、いたう夜ふけて、子の時など思ひ參らするほどに、男ども召したるこそ、いみじうをかしけれ。夜中ばかりに、また御笛の聞えたる、いみじう

に係る、然らば括弧を取去るべき也

總點――一說批點

この國の云云―男山八幡の祭神は應神天皇、神功皇后、玉依姫三柱なればなり

おとりする事なり。

下襲は

冬は躑躅、掻練襲、蘇枋襲。夏は二藍、白襲。

扇の骨は

青色はあかき、むらさきはみどり。

檜扇は

無紋。から繪。

神は

松尾。八幡、この國の帝にておはしましけんこそいとめでたけれ。行幸などに、なぎの花の御輿に奉るなど、いとめでたし。大原野。賀茂は更なり。稻荷。春日いとめでたく覺えさせ給ふ。佐保殿などいふ名さへをかし。平野はいたづらなる屋ありしを、「こゝは何する所ぞ」と問ひしかば、「神輿宿」といひしもめでたし。嚴籬に蔦などの多くかゝり

歳本にはいろしたるの五字なし

あて―上品

物語こそ―一本こそをさへに作る

なほす―春註によればいと口惜し

る單など著たるは、いと心づきなし。練色のきぬも著たれど、なほ單は白うてぞ、男も女もよろづの事まさりてこそ。

わろきものは

詞の文字あやしくつかひたるこそあれ。たゞ文字一つに、あやしくも、あてにも、いやしくもなるは、いかなるにかあらん。さるはかう思ふ人、萬の事に勝れてもえあらじかし。いづれを善き惡しきとは知るにかあらん。さりとも人を知らじ、唯さうち覺ゆるもいふめり。難義の事をいひて、「その事させんとす」といはんといふを、と文字をうしなひて、唯「いはんずる」「里へ出でんずる」などいへば、やがていとわろし。まして文を書きては、いふべきにもあらず。物語こそあしう書きなどすれば、いひがひなく、作者さへいとほしけれ。「なほす」「定本のまゝ」など書きつけたる、いと口惜し。「祕點つくるまに」などいふ人もありき。「もとむ」といふ事を「見ん」と皆いふめり。いと怪しき事を、男などは、わざとつくろはで、殊更にいふはあしからず。わが詞にもてつけていふが、心

心おちゐ理なり。

たふときもの

九條錫杖。念佛の回向。

歌は

杉たてる門。神樂歌もをかし。今樣はながくてくせづきたる。風俗よくうたひたる。

指貫は

紫の濃き。萠黄。夏は二藍。いと暑き頃、夏蟲の色したるもすゞしげなり。

狩衣は

香染のうすき。白きふくさの赤色。松の葉いろしたる。青葉。さくら。やなぎ。又あをき。ふぢ。男は何色のきぬも。

ひとへは

白き。ひの裝束の紅のひとへ。袙などかりそめに著たるはよし。されどなほ色きばみた

おちゐ—一本おごりもに作る

くせ—曲節

夏蟲の色—裏なき生絹にて所謂蟬の羽衣（桃華蘂葉）

白きふくさの—萬歲本にはのの字無く、ふくさにて句

松の葉いろしたる—萬

―讀經の音頭取りをなす

などす――本なんとす

千賀の鹽竈―續後撰、陸奧の千賀の鹽竈近ながらからきは人に逢はぬなりけり

る、日ぐらし見るに、目もたゆく苦しう。うちの御使に、五位の藏人まゐりたり。御棧敷の前に胡床立てて居たるなど、實にぞ猶めでたき。夜さりつかた、式部丞則理まゐりたり。「やがて夜さり入らせ給ふべし。御供に侍へ」と、宣旨侍りつ」とて歸りも參らず。宮は「なほ歸りて後に」との給はすれども、また藏人の辨まゐりて、殿にも御消息あれば、唯「仰のまゝ」とて、入らせ給ひなどす。院の御棧敷より、千賀の鹽竈などやうの御消息、をかしき物など持て參り通ひたるなどもめでたし。事はてて院還らせ給ふ。院司上達部など、このたびはかたへぞ仕う奉り給ひける。宮は内裏へ入らせ給ひぬるも知らず、女房の從者どもは、「二條の宮にぞおはしまさん」とて、そこに皆往き居て、待てども〳〵見えぬ程に、夜いたう更けぬ。内裏には宿直物持て來らんと待つに、きよく見えず。あざやかなる衣の、身にもつかぬを著て、寒きまゝに、にくみ腹立てどかひなし。翌朝きたるを、「いかにかく心なきぞ」などいへば、となふる如もさ言はれたり。又の日雨降りたるを、殿は「これになん、わが宿世は見え侍りぬる。いかゞ御覽ずる」と聞えさせ給ふ。御

せ給へるは、おぼろけのことか」とてうち泣かせ給ふ。實にと、見る人も涙ぐましきに、赤色櫻の五重の唐衣を著たるを御覽じて、「法服ひとくだり足らざりつるを、俄にまとひしつるに、これをこそかり申すべかりけれ。さらばもし又、さやうの物を切り調めたるに」との給はするに、又笑ひぬ。大納言殿少し退き居給へるが、聞き給ひて、「淸僧都のにやあらん」との給ふ。一言としてをかしからぬ事ぞなきや。僧都の君、赤色の羅の御衣、紫の袈裟、いと薄き色の御衣ども、指貫著たまひて、菩薩の御樣にて、女房にまじりありき給ふもいとをかし。「僧綱の中に、威儀具足してもおはしまさで、見ぐるしう女房の中に」など笑ふ。父の大納言殿、御前より松君率て奉る。葡萄染の織物の直衣、濃き綾のうちたる、紅梅の織物など著給へり。例の四位五位いと多かり。御棧敷に女房の中に入れ奉る。何事のあやまりにか、泣きのゝしり給ふさへいとはえぐ〳〵し。事始りて、一切經を、蓮の花のあかきに、一花づつに入れて、僧俗、上達部、殿上人、地下六位、何くれまでもて渡る、いみじうたふとし。大行道導師まゐり、回向しばし待ちて舞などす

らへに作る非也

調め――調べに同じ、調べ製するを云ふ

僧都の君――隆圓

僧綱――僧正、僧都、律師をいふ

導師まゐり

うまさへ—馬副童、一本うまそへに作る
ふきがたり—濱臣の說に、吹き語り卽ち吹聽の義
いかゞは—此語の下に辭し申すべきと補ふ
繪に云々—關白道隆の詞
いらい—以來、原本い

給へば、しもに居たる人々、「殿上許さるゝ内舍人なゝめりと笑はせんと思へるか」といへば、「うまさへのほどぞ」などいへば、そこに入り居て見るは、いとおもだたし。かゝる事などをみづからいふは、ふきがたりにもあり、また君の御ためにも輕々しう、かばかりの人をさへ思しけんなど、おのづから物しり、世の中もどきなどする人は、あいなく畏き御事にかゝりて、かたじけなけれど、あな辱き事などは、又いかゞは。誠に身の程過ぎたる事もありぬべし。院の御棧敷、所々の棧敷ども見渡したる、めでたし。殿はまづ院の御棧敷に參り給ひて、暫時ありてこゝに參り給へり。大納言二所、三位中將は陣近う參りけるまゝにて、調度を負ひて、いとつきづきしうをかしうておはす。殿上人、四位五位、こちたううち連れて、御供に侍ひ竝み居たり。入らせ給ひて見奉らせ給ふに、女房あるかぎり、裳、唐衣、御匣殿まで著給へり。殿のうへは、裳のうへに小袿をぞ著給へる。「繪に書きたるやうなる御さまどもかな。今いらい今日はと申し給ひそ。三四の君の御裳ぬがせ給へ。この中の主君には、御前こそおはしませ。御棧敷の前に陣をすゑさ

地摺—白き地にはなだ色の小紋等を摺りし物

なども—など申上ぐるも

釵子—婦人儀式の時前髪に插す具

色の唐の御衣、地摺の唐の羅に、象眼重ねたる御裳など奉りたり。織物の色、更になべて似るべきやうなし。「我をばいかゞ見る」と仰せらる。「いみじうなん候ひつる」なども、言に出でてはよのつねにのみこそ。「久しうやありつる。それは殿の大夫の、院の御供にきて、人に見えぬる、おなじ下襲ながら、宮の御供にあらん、わろしと人思ひなんとて、殊に下襲ぬはせ給ひけるほどに、遅きなりけり。いとすき給へり」などとうち笑はせ給へる、いとあきらかに晴れたる所は、今少しけざやかにめでたう、御額あげさせ給へる釵子に、御分目の御髪の聊よりて、著く見えさせ給ふなどさへぞ、聞えんかたなき。三尺の御几帳一雙をさしちがへて、こなたの隔にはして、その後には、疊一枚を、長ざまに縁をして、長押の上に敷きて、中納言の君といふは、殿の御伯父の兵衛督忠君と聞えけるが御女、宰相の君とは、富小路の左大臣の御孫、それ二人ぞうへに居て見え給ふ。御覽じわたして、「宰相はあなたに居て、うへ人どもの居たる所、往きて見よ」と仰せらるるに、心得て、「こゝに三人いとよく見侍りぬべし」と申せば、「さば」とて召し上げさせ

乘りつる所だに云々—さきに乘車したる所すら恥しくありたるにまして此所はあかるくあらはなる所なるに云々

むねたかかなどに云々—以下中宮の御詞を大納言の取次ぎて清少に言ふ也、思ひぐまなきは思ふ甲斐なしの義

りよ」との給ふ。乘りつる所だにありつるを、今少しあかう顯證なるに、大納言殿、いとものものしく淸げにて、御下襲のしりいと長く所せげにて、簾うちあげて、「はや」とのたまふ。つくろひそへたる髪も、唐衣の中にてふくだみ、あやしうなりたらん。色の黑さ赤ささへ見わかれぬべき程なるが、いとわびしければ、ふとも得降りず。「まづ後なるこそは」などいふほども、それも同じこゝろにや、「退かせ給へ、かたじけなし」などいふ。「恥ぢ給ふかな」と笑ひて、立ちかへり、辛うじておりぬれば、寄りおはして、「むねたかなどに見せで、隱しておろせと、宮の仰せらるれば來たるに、思ひぐまなき」とて引きおろして率て參り給ふ。さ聞えさせ給ひつらんと思ふもかたじけなし。參りたれば初おりける人どもの、物の見えぬべき端に、八人ばかり出で居にけり。一尺と二尺ばかりの高さの長押のうへにおはします。こゝに立ち隱して、「率て參りたり」と申し給へば、「いづら」とて几帳のこなたに出でさせ給へり。まだ唐の御衣裳奉りながらおはしますぞいみじき。紅の御衣よろしからんや、中に唐綾の柳の御衣、葡萄染の五重の御衣に、赤

頭の毛など云々―めでたさに慄然として毛髮も立つと人の言ふも事實也

屛幔―和名抄に、小帳曰レ斗（俗云斗帳、一云屛幔）形如ニ覆斗一也

井の大納言は笑ひ給ひて、皆乘り續きて立てるに、今ぞ御輿出でさせ給ふ。めでたしと見え奉りつる御有樣に、これは比ぶべからざりけり。朝日はな〴〵とさしあがる程に、木の葉のいと花やかに輝きて、御輿の帷子の色艶などさへぞいみじき。御綱はりて出でさせ給ふ。御輿の帷子のうちゆるぎたるほど、實に頭の毛など、人のいふは更に虛言ならず。さて後に髮あしからん人もかこちつべし。あさましう、いつくしう、猶いかでかゝる御前に馴れ仕うまつるらんと、わが身もかしこうぞ覺ゆる。御輿過ぎさせ給ふほど、車の榻ども、人給にかきおろしたりつる、また牛どもかけて、御輿の後につゞきたる心地の、めでたう興あるありさま、いふかたなし。おはしましつきたれば、大門のもとに高麗唐土の樂して、獅子狛犬をどり舞ひ、笙の音、鼓の聲に物もおぼえず。こはいづくの佛の御國などに來にけるにかあらんと、空に響きのぼるやうにおぼゆ。內に入りぬれば、いろ〳〵の錦のあげばりに、御簾いと靑くてかけ渡し、屛幔など引きたるほど、なべてたゞにこの世とおぼえず。御棧敷にさし寄せたれば、又この殿ばら立ち給ひて、「疾くお

尼の車—原本尼車に作る
袈裟衣—原本けさぎぬに作る
かとり—絲、堅織（カタオリ）の約、生絹なり
いと久し—原本此一句なし
いと心ことなり—原本此一句なし

後、宮は出させ給ふべしとあれば、いと心もとなしと思ふほどに、日さしあがりてぞおはします。御車ごめに十五、四つは尼の車、一の御車は唐の車なり。それに續きて尼の車、後口より水精の珠數、薄墨の袈裟衣などいみじくて、簾はあげず。下簾も薄色の裾少し濃き。次にたゞの女房の十、櫻の唐衣、薄色の裳、紅をおしわたし、かとりの表著ども、いみじうなまめかし。日はいとうららかなれど、空は淺緑に霞み渡るに、女房の裝束の匂ひあひて、いみじき織物のいろ〳〵の唐衣などよりも、なまめかしう、をかしき事限なし。關白殿、その御次の殿ばら、おはする限もてかしづき奉らせ給ふ、いみじうめでたし。これら見奉り騒ぐ、この車どもの二十立ち竝べたるも、又をかしと見ゆらんかし。いつしか出でさせ給はゞなど、待ち聞えさするに、いと久し。いかならんと心もとなく思ふに、辛うじて、采女八人馬に乘せて引き出づめり。青末濃の裳、裙帶、領巾などの風に吹きやられたる、いとをかし。豐前といふ采女は、典藥頭重正が知る人なり。葡萄染の織物の指貫を著たれば、いと心ことなり。「重正は色許されにけり」と山の

書立—順序書

さ見る—人も亦左樣に物見車とは見るならん

ずとて、御簾の中に、宮、淑景舍、三四の君、殿のうへ、その御弟三所、立ち竝みておはします。車の左右に、大納言、三位中將二所して、簾うちあげ、下簾ひきあげて乘せ給ふ。皆うち群れてだにあらば、隱れ所やあらん。四人づつ書立に隨ひて、それ〴〵と呼び立てて、乘せられ奉り、歩み行く心地、いみじう實にあさましう、顯證なりとも世の常なり。御簾のうちに、そこらの御目どもの中に、宮の御前の見ぐるしと御覽ぜんは、更にわびしき事かぎりなし。身より汗のあゆれば、繕ひ立てたる髮などもあがりやすらんと覺ゆ。辛うじて過ぎたれば、車のもとに、いみじう恥しげに、淸げなる御さまどもして、うち笑みて見給ふも現ならず。されど倒れず、そこまでは往き著きぬるこそ、かしこき顏もなきかと覺ゆれど、皆乘りはてぬれば、引き出でて、二條の大路に榻立てて、物見車のやうにて立ち竝べたる、いとをかし。人もさ見るらんかしと、心ときめきせらる。四位五位六位など、いみじう多う出で入り、車のもとに來て、つくろひ物いひなどす。まづ院の御むかへに、殿を始め奉りて、殿上と地下と皆參りぬ。それ渡らせ給ひて

おり侍る云云―私共の降りてあるが待遠しく苦しければ他の人々先に乘車せしならん、清少申譯之言也
給ふべかなる―原本給へるなりに作る

しと聞くらんと聞ゆ。「さまあしうて、かく乘りたらんもかしこかるべき事かは。定めたらんさまの、やんごとなからんこそよからめ」とものしげに思し召したり。「おり侍るほどの待遠に、苦しきによりてにや」とぞ申しなほす。

御經のことに、明日渡らせおはしまさんとて、今宵參りたり。南院の北面にさしのぞきたれば、たかつきどもに火をともして、二人三人四人、さるべきどち、屛風引き隔てつるもあり、几帳中にへだてたるもあり。又さらでも集り居て、衣ども閉ぢ重ね、裳の腰さし、假粧ずるさまは、更にもいはず、髮なゝどいふものは、明日より後はありがたけにぞ見ゆる。「寅の時になん渡らせ給ふべかなる。などか今まで參り給はざりつる。扇もたせて、尋ね聞ゆる人ありつ」など告ぐ。「まて、實に寅の時か」とさうぞき立ちてあるに、明け過ぎ、日もさし出でぬ。西の對の唐廂になん、さし寄せて乘るべきとて、あるかぎり渡殿へ行く程に、まだうひ〴〵しきほどなる今參どもは、いとつゝましげなるに、西の對に殿すませ給へば、宮にもそこにおはしまして、まづ女房車に乘せさせ給ふを御覽

にあれば、火もいと暗きを、笑ひて、二條の宮に參りつきたり。御輿は疾く入らせ給ひて、皆しつらひ居させ給ひけり。「こゝに呼べ」と仰せられければ、左京、小左近などいふ若き人々、參る人ごとに見れど、なかりけり。おるゝに隨ひ、四人づつ御前に參り集ひて侍ふに、「いかなるぞ」と仰せられけるも知らず、ある限おりはててぞ、辛うじて見つけられて、「かばかり仰せらるゝには、などかくおそく」とて率ゐて參るに、見れば、いつの間に、かうは年ごろの住居のさまに、おはしましつきたるにかとをかし。「いかなればかう何かと尋ぬばかりは見えざりつるぞ」と仰せらるゝに、とかくも申さねば、諸共に乘りたる人、「いとわりなし。さいはての車に侍らん人は、いかでか疾くは參り侍らん。これもほと〳〵え乘るまじく侍りつるを、みづしがいとほしがりて、ゆづり侍りつるなり。暗う侍りつる事こそ、わびしう侍りつれ」と笑ふ〳〵啓するに、「行事するもののいとあやしきなり。又などかは心知らざらん者こそつゝまめ、右衛門などはいへかし」などゝ仰せらる。「されどいかでか走りさきだち侍らん」などいふも、かたへの人、にく

左京―原本右京に作る

さいはて―最終

ほと〳〵―殆ど

笑ふ〳〵―傍註本笑ひ笑ひに作る

右衛門―淸少と同車の女房ならん

にの義

花のこゝろ云々―白氏文集、二月東來草析花必開云々、又その前に、思レ君秋夜長、一夜魂升云々

かうか―これだけか

得選―釆女の中より選出せられし厨子所の女房

て八日九日の程にまかゝづるを、「今少し近うなして」など仰せらるれど、出でぬ。いみじう常よりものどかに照りたる晝つかた、「花のこゝろ開けたりや、いかゞいふ」との給はせたれば、「秋はまだしく侍れど、よにこの度なんのぼる心地し侍る」など聞えさせつ。出させ給ひし夜、車の次第もなく、まづ〳〵とのり騷ぐがにくければ、さるべき人三人と、「猶この車に乘るさまのいとさわがしく、祭のかへさなどのやうに、倒れぬべく惑ふいと見ぐるし。たゞさはれ、乘るべき車なくてえ參らずば、おのづから聞しめしつけて賜はせてん」など笑ひ合ひて立てる前より、押し凝りて、惑ひ乘り果てて出でて、「かうか」といふに、「まだこゝに」と答ふれば、宮司寄り來て、「誰々かおはする」と問ひ聞きて、「いと怪しかりけることかな。今は皆乘りぬらんとこそ思ひつれ。こはなどてかくは後れさせ給へる。今は得選を乘せんとしつるに。めづらかなるや」など驚きて寄せさすれば、「さばまづ、その御志ありつらん人を乘せ給ひて、次にも」といふ聲聞きつけて「けしからず腹ぎたなくおはしけり」などいへば、乘りぬ。その次には、誠にみづしが車

でたき。殿おはしませば、寐くたれの朝顔も、時ならずや御覽ぜんと引き入らる。おはしますまゝに、「かの花うせにけるは、いかにかくは盗ませしぞ、いぎたなかりける女房たちかな。知らざりけるよ」と驚かせ給へば、「されど我よりさきにとこそ思ひて侍るめりつれ」と忍びやかにいふを、いと疾く聞きつけさせ給ひて、「さ思ひつる事ぞ、世に他人いでて見つけじ、宰相とそことの程ならんと推し量りつ」とて、いみじう笑はせ給ふ。「さりげなるものを、少納言は春風におほせける」と宮の御前にうちゑませ給へる、めでたし。「虚言をおほせ侍るなり。今は山田も作るらん」とうち誦ぜさせ給へるも、いとなまめきをかし。「さてもねたく見つけられにけるかな。さばかり誡めつるものを、人の所に、かゝるしれもののあるこそ」との給はす。「春風はそらにいとをかしうも言ふかな」と誦ぜさせ給ふ。「たゞことには、うるさく思ひよりて侍りつかし。今朝のさまいかに侍らまし」とて笑はせ給ふを、小若君「されどそれはいと疾く見て、雨にぬれたりなど、おもてぶせなりといひ侍りつ」と申し給へば、いみじうねたがらせ給ふもをかし。さ

我よりさきに―新拾遺、鶯のなく音を聞けば山深み我より先に春は知りけり

今は山田も―貫之集、山田さへ今は作るを散る花のかごとは風におほせざらなん

うるさく―一本うるせくに作る、何れもえらく又は功者

いはゞ云々—後撰、山守はいはゞいはなん高砂の尾上の櫻折りてかざさん

うしろめたさに—氣に掛る爲めに、不安心にて

れ、明け過ぎにけり、不便なるわざかな、疾く〳〵」と倒し取るに、いとをかしくて、いはゞいはなんと、兼澄が事を思ひたるにやとも、よき人ならばいはまほしけれど、「かの花盗む人は誰ぞ、あしかゝめり」といへば、笑ひて、いとゞ逃げて引きもていぬ。なほ殿の御心はをかしうおはすかし。莖どもにぬれまろがれつきて、いかに見るかひなからましと見て入りぬ。掃殿寮まゐりて御格子まゐり、主殿の女官御きよめまゐりはてて、起きさせ給へるに、花のなければ、「あなあさまし。かの花はいづちいにける」と仰せらる。「あかつき盗人ありといふなりつるは、なほ枝などを少し折るにやとこそ聞きつれ」がしつるぞ。見つや」と仰せらる。「さも侍らず。いまだ暗くて、よくも見侍らざりつるを、しろみたるものの侍れば、花を折るにやと、うしろめたさに申し侍りつる」と申す。「さりともかくはいかでか取らん。殿の隱させ給へるなゝめり」とて笑はせ給へば、「いで、よも侍らじ。春風の爲て侍りなん」と啓するを、「かくいはんとて隱すなりけり。ぬすみにはあらで、ふりにこそふるなりつれ」と仰せらるゝも、珍しき事ならねど、いみじうめ

うへなど云云—大人び給ひて、うへなど申上げんにふさはしと也、うへは奥方の義

むとく—無得、甲斐なく見所なし

納言殿にも申して立ちぬ。君達などいみじう假粧し給ひて、紅梅の御衣も劣らじと著給へるに、三の御前は御匣殿なり。中の姫君よりも大に見え給ひて、うへなど聞えんにぞよかゝめる。うへも渡らせ給へり。御几帳ひき寄せて、新しく參りたる人々には見え給はねば、いぶせき心地す。さし集ひて、かの日の裝束、扇などの事をいひ合するもあり。又挑みかはして、「まろは何か、唯あらんにまかせてを」などいひて、「例の君」などにくまる。夜さりまかゞづる人も多かり。かゝる事にまかゞづれば、え止めさせ給はず。うへ日々に渡り、夜もおはします。君達などおはすれば、御前人少く候はねばいとよし。内裏の御使日々に參る。御前の櫻、色はまさらで、日などにあたりて、萎みわるうなるだにわびしきに、雨の夜降りたる翌朝、いみじうむとくなり。いと疾く起きて、「泣きて別れん顔に、心おとりこそすれ」といふを聞かせ給ひて、「げに雨のけはひしつるぞかし、いかならん」とて驚かせ給ふに、殿の御方より侍の者ども、下種など來て、數多花のもとに唯よりによりて、引き倒し取りて、「密に往きて、まだ暗からんに取れとこそ仰せられつ

しみせさせ給ふ宮とて、われは生れさせ給ひしより、いみじう仕うまつれど、まだおろしの御衣一つ給はぬぞ。何かしりうごとには聞えん」などの給ふがをかしきに、みな人々笑ひぬ。「まことぞ、をこなりとてかく笑ひいまするが恥し」などの給はする程に、内裏より御使にて、式部丞某まゐれり。御文は、大納言殿取り給ひて、殿に奉らせ給へば、ひき解きて、「いとゆかしき文かな。ゆるされ侍らば、あけて見侍らん」との給はすれば、怪しうとおぼいたゝめり。「辱くもあり」とて奉らせ給へば、取らせ給ひても、ひろげさせ給ふやうにもあらず、もてなさせ給ふ、御用意などぞありがたき。すみのまより、女房茵さし出でて、三四人御几帳のもとに居たり。「あなたにまかりて、祿の事ものし侍らん」とてたゝせ給ひぬる後に、御文御覽ず。御返しは紅梅の紙に書かせ給ふが、御衣のおなじ色ににほひたる、猶斯うしも推し量り參らする人はなくやあらんとぞ口をしき。今日は殊更にとて、殿の御かたより祿は出させ給ふ。女の裝束に、紅梅の細長そへたり。肴などあれば、醉はさまほしけれど、「今日はいみじき事の行幸に、あが君許させ給へ」と大

しりうごと―後言、陰口

辱く―畏おほく

すみのまより―一本みすのうちよりに作る

御階のもとに—一本、御階の東に作る．

うるさかり—巧みに麗しき義

直衣—一本御直衣に作る。

立紋—一説綾紋、（リウモン）地紋ありて織目高くなれる綾

櫻の一丈ばかりにて、いみじう咲きたるやうにて、御階のもとにあれば、いと疾う咲きたるかな、梅こそ只今盛なゝめれと見ゆるは、作りたるなゝめり。すべて花のにほひなど、咲きたるに劣らず、いかにうるさかりけん。雨降らば、萎みなんかしと見るぞ口惜しき。小家などいふ物の多かりける所を、今作らせ給へれば、木立などの見所あるは、いまだなし。たゞ宮のさまぞ、けぢかくをかしげなる。殿渡らせ給へり。青鈍の堅紋の御指貫、櫻の直衣に、紅の御衣三つばかり、唯直衣にかさねてぞ奉りたる。御前より初めて、紅梅の濃きうすき織物、堅紋、立紋など、あるかぎり著たれば、唯ひかり滿ちて、唐衣は萌黃、柳、紅梅などもあり。御前に居させ給ひて、物など聞えさせ給ふ。御答のあらまほしさを、里人に僅にのぞかせばやと見奉る。女房どもを御覽じ渡して、「宮に何事を思しめすらん。こゝらめでたき人々を竝べすゑて御覽ずるこそ、いと羨しけれ。一人わろき人なしや、これ家々の女ぞかし。あはれなり。よくかへりみてこそさぶらはせ給はめ。さてもこの宮の御心をば、いかに知り奉りて集り參り給へるぞ。いかにいやしく物惜

すゞろにさるわざは—やたらに斯樣な物すきな事なば

積善寺—原本釋泉寺に作る、寺は道隆が法興院内に別に造營せる堂、法興院は二條北にあり元は道兼の邸也

しに參らせまほしけれど、なほ誰すゞろにさるわざはせん、仰事なめりといみじうをかし。二日ばかり音もせねば、うたがひもなく、左京の君の許に、「かゝる事なんある。さる事やけしき見給ひし。忍びて有樣のたまひて、さる事見えずば、かく申したりとも、な漏し給ひそ」と言ひ遣りたるに、「いみじうかくさせ給ひし事なり。ゆめ〳〵まろが聞えたるとなく、後にも」とあれば、さればよと、思ひしもしるく、をかしくて、文かきて、又密に御前の高欄におかせしものは、惑ひしほどに、やがてかきおとして、御階のもとにおちにけり。

關白殿、二月十日のほどに、法興院の積善寺といふ御堂にて、一切經供養せさせ給ふ。女院、宮の御前もおはしますべければ、二月朔日のほどに、二條の宮へ入らせ給ふ。夜更けてねぶたくなりにしかば、何事も見入れず。翌朝、日のうらゝかにさし出でたる程に起きたれば、いと白うあたらしうをかしげに作りたるに、御簾より始めて、昨日かけたるなゝめり。御しつらひ、獅子、狛犬など、いつのほどにや入り居けんとぞをかしき。

御座といふ疊—春註に貴人のしかるゝ疊といふ心也、疊は卷き疊むといふ義より出でし語にて元は今の所謂ござの類に云へる也

とをかし。無下に思ひ忘れたりつることを、思しおかせ給へりけるは、猶たゞ人にてだにをかし、ましておろかならぬ事にぞあるや。心も亂れて、啓すべきかたもなければ、ただ、

　かけまくもかしこきかみのしるしには鶴のよはひになりぬべきかな

あまりにやと啓せさせ給へとてまゐらせつ。臺盤所の雜仕ぞ、御使には來たる。青き單衣などぞ取らせて。まことにこの紙を、草紙に作りてもてさわぐに、むつかしき事も紛るゝ心地して、をかしう心のうちもおぼゆ。二月ばかりありて、赤衣著たる男の、疊を持て來て「これ」といふ。「あれは誰そ、あらはなり」など物はしたなういへば、さし置きて往ぬ。「いづこよりぞ」と問はすれば、「まかりにけり」とて取り入れたれば、殊更に御座といふ疊のさまにて、高麗などいと淸らなり。心の中にはさにやあらんと思へど、猶おぼつかなきに、人ども出しもとめさすれど、うせにけり。怪しがり笑へど、使のなければいふかひなし。所たがへなどならば、おのづからも又いひに來なん。宮のほとりに案内

むつかしう —心煩はしく、じれつたき義

姥捨山の月 —古今集、我心なぐさめかねつ更科や姥捨山に入る月を見て

前に人々所もなく居たるに、今のぼりたれば、少し遠き柱のもとなどに居たるを、御覽じつけて、「こち來」と仰せられたれば、道あけて、近く召し入れたるこそ嬉しけれ。御前に人々あまた、物仰せらるゝ序などにも、「世の中のはらだたしう、むつかしう、片時あるべき心地もせで、いづちもいづちも行きうせなばやと思ふに、たゞの紙のいと白う淸らなる、よき筆、白き色紙、檀紙など得つれば、かくても暫時ありぬべかりけりとなん覺え侍る。また高麗緣の疊の筵、靑うこまかに、緣の紋あざやかに、黑う白う見えたる、引き廣げて見れば、何か猶さらに、この世はえおもひはなつまじと、命さへ惜しくなんなる」と申せば、「いみじくはかなき事も慰むなるかな。姥捨山の月は、いかなる人の見るにか」と笑はせ給ふ。さぶらふ人も、「いみじくやすき息災のいのりかな」といふ。さて後にほど經て、すゞろなる事を思ひて、里にあるころ、めでたき紙を二十つゝみに裹みて賜はせたり。仰事には、「疾く參れ」などのたまはせて、「これは聞しめし置きたる事ありしかばなん。わろかゝめれば、壽命經もえ書くまじげにこそ」と仰せられたる、い

にて句、其下にうれしと補ふ

物の中―何か書物の中

はかり―たばかりだます

たう―春註黨、だまさるゝ人の加擔、一説たふの誤、答にて其だましたる返報の義

らるゝ、みづからのうへには、まだ知らぬ事なれど、猶思ひやらるゝよ。いたううち解けたらぬ人のいひたる古き事の知らぬを、聞き出でたるもうれし。後に物の中などにて、見つけたるはをかしう、唯これにこそありけれと、かのいひたりし人ぞをかしき。檀紙、白き色紙、たゞのも、白う清きは得たるもうれし。恥しき人の、歌の本末問ひたるに、ふとおぼえたる、われながらうれし。常にはおぼゆる事も、又人の問ふには、清く忘れて止みぬる折ぞ多かる。頓に物もとむるに、見出でたる。只今見るべき文などを、もとめ失ひて、萬の物をかへすがへす見たるに、捜し出でたる、いとうれし。物あはせ、何くれと挑むことに勝ちたる、いかでか嬉しからざらん。又いみじうわれはと思ひて、したりがほなる人はかり得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これがたうは必せんずらんと、常に心づかひせらるゝもをかしきに、いとつれなく、何とも思ひたらぬやうにて、たゆめ過すもをかし。にくき者のあしきめ見るも、罪は得らんと思ひながらうれし。指櫛むすばせて、をかしげなるも又うれし。思ふ人は、我身よりも勝りてうれし。御

みにくきも—みにくき顔も

やり捨て—破り捨て

合せ—夢合はせ

われに云々—我目を見合はせ給ひて云々

のたまふものゝ折—一説のたまふ

でたけれども見もやられず。人の貌はをかしうこそあれ。にくげなる調度の中にも、一つよき所のまもらるゝよ。みにくきもさこそはあらめと思ふこそわびしけれ。

うれしきもの

まだ見ぬ物語の多かる。又一つを見て、いみじうゆかしう覺ゆる物語の、二つ見つけたる。心おとりするやうもありかし。人のやり捨てたる文を見るに、同じつゞき數多見つけたる。いかならんと夢を見て、恐しと胸つぶるゝに、ことにもあらず合せなどしたる、いとうれし。よき人の御前に、人々數多侍ふ折に、昔ありける事にもあれ、今聞しめし、世にいひける事にもあれ、かたらせ給ふを、われに御覽じ合せてのたまはせ、いひきかせ給へる、いとうれし。遠き所は更なり、おなじ都の内ながら、身にやんごとなく思ふ人の惱むを聞きて、いかに〳〵と覺束なく歎くに、おこたりたる消息得たるもうれし。思ふ人の、人にも譽められ、やんごとなき人などの、口をしからぬものに思しのたまふものゝ折、もしは人と言ひかはしたる歌の聞えてほめられ、うちきゝなどに譽め

說には法界吝氣の語によくあたるといへり

かど—瑕疵缺點

いとほし云々—缺點を擧げんはいたはしと我心に思ひ解き我慢していはぬと也

思ふらんなどいひけるを傳へて聞きたるは、さし向ひていふよりもうれし。いかでこの人に、思ひ知りけりとも見えにしがなと、常にこそおぼゆれ。必(かならず)思ふべき人、訪ふべき人は、さるべきことなれば、取りわかれしもせず。さもあるまじき人のさし答(いらへ)をも、心易くしたるは嬉しきわざなり。いと易き事なれど、更にえあらぬ事ぞかし。大かた心よき人の、實(まこと)にかどなからぬは、男も女もありがたきことなゝめり。又さる人も多かるべし。

人のうへいふを、腹立つ人こそ、いとわりなけれ。いかでかはあらん、我身をさし置きて、さばかりもどかしく、いはまほしきものやはある。されどけしからぬやうにもあり。又おのづから聞きつけて恨もぞする、あいなし。また思ひ放つまじきあたりは、いとほしなど思ひ解けば、念じていはぬをや。さだになくば、うち出で笑ひもしつべし。

人の顔に、とりわきてよしと見ゆる所は、度ごとに見れども、あなをかし、珍しとこそ覺ゆれ。繪など數多(あまた)たび見れば、目もたゝずかし。近う立てる屛風の繪などは、いとめ

いかで—契らんと望願するなり

おほやけはらだち—我が關せぬ事ながら傍より見聞きて腹立つをいふ、宣長の

かたらふ人にも人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。

男こそ猶いとありがたく、怪しき心地したるものはあれ。いと淸げなる人をすてて、にくげなる人をもたるもあやしかし。おほやけ所に入りたちする男、家の子などは、あるが中に、よからんをこそは選りて思ひ給はめ。及ぶまじからん際をだに、めでたしと思はんを、死ぬばかりも思ひかくれかし。人のむすめ、まだ見ぬ人などをも、よしと聞くをこそは、いかでとも思ふなれ。かつ女の目にも、わろしと思ふをおもふは、いかなる事にかあらん。かたちいとよく、心もをかしき人の、手もよう書き、歌をもあはれに詠みておこせなどするを、返事はさかしらにうちするものから、寄りつかず、らうたげにうち泣きて居たるを、見捨てて往きなどするは、あさましうおほやけはらだちて、眷屬の心地も心憂く見ゆべけれど、身のうへにては、つゆ心ぐるしきを思ひ知らぬよ。よろづの事よりも、情ある事は、男はさらなり、女もこそめでたく覺ゆれ。なげの詞なれど、せちに心にふかく入らねど、いとほしき事をいとほしとも、あはれなるをば實にいかに

とみのを—鵄尾（トビノヲ）、鳶の如くにて牛車の後に出でしもの

かなし—可憐、可愛などの義

し。

六月に、人の八講し給ひし所に、人々集りて聞くに、この藏人になれる壻の、綾のうへの袴、蘇芳襲、黒半臂などいみじう鮮かにて、忘れにし人の車のとみのをに、半臂の緒ひきかけつばかりにて居たりしを、いかに見るらんと、車の人々も、知りたる限はいとほしがりしを、他人どもも、「つれなく居たりしものかな」など後にもいひき。なほ男は物のいとほしさ、人の思はんことは知らぬなゝめり。

世の中に猶いと心憂きものは、人ににくまれんことこそあるべけれ。誰てふ物ぐるひか、われ人にさおもはれんとは思はん。されど自然に、宮づかへ所にも、親はらからの中にても、思はるゝおもはれぬがあるぞ、いとわびしきや。よき人の御事は更なり、げすなどのほども、親などのかなしうする子は、目だち見たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるはことわり、いかゞ思はざらんと覺ゆ。ことなることなきは、又これをかなしと思ふらんは、親なればぞかしとあはれなり。親にも君にも、すべてうち

がうし—和名抄三器四部に合子とあり、それにや、今の朱塗椀の類

たのめたる—たのましめたる

まが〳〵しき—呪咀などする程にいふなり

蚰蜒（なめくぢ）。えせ板敷の箒（はゝき）。殿上のがうし。

せめておそろしきもの

夜鳴る神。近き隣に盗人（ぬすびと）の入りたる。わが住む所に入りたるは、唯物もおぼえねば、何とも知らず。

たのもしきもの

心地あしきころ、僧あまたして修法（ずほふ）したる、思ふ人の心地あしきころ、眞（まこと）にたのもしき人の言ひ慰めたのめたる。物おそろしき折の親どものかたはら。

いみじうしたてて壻取りたるに、いとほどなくすまぬ壻の、さるべき所などにて舅（しうと）に逢ひたる、いとほしとや思ふらん。ある人の、いみじう時に逢ひたる人の壻になりて、一（ひと）月（つき）もはかぐ〳〵しうも來（こ）で止（や）みにしかば、すべていみじう言ひ騒ぎ、乳母（めのと）などやうの者は、まが〳〵しき事どもいふもあるに、そのかへる年の正月（むつき）に藏人（くらうど）になりぬ。「あさましうかゝるなからひに、いかでとこそ人は思ひたゝめれ」など言ひあつかふは聞くらんか

いかなりし人か―春註には之も俗歌といへど抄により清少の評言と見るべからむ、なかだか云々は歌詞

鶯は―重出錯簡にや

早苗とりしか―古今集、昨日こそ早苗とりしかいつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く

なるにかあらん、をかしと見る程に、郭公をいとなめくうたふ聲ぞ心憂き。「ほとゝぎすよ、おれよ、かやつよ、おれなきてぞ、われは田にたつ」とうたふに、聞きも果てずいかなりし人か、いたくなきてぞといひけん。「なかだかわらはおひ、いかでおどす人」と。鶯に郭公は劣れるといふ人こそ、いとつらう憎くけれ。鶯は夜なかぬいとわろし。すべて夜なくものはめでたし。兒どもぞはめでたからぬ。

八月晦日がたに、太秦にまうづとて見れば、穂に出でたる田に、人多くてさわぐ。稲刈るなりけり。早苗とりしか、いつの間にとはまこと。實にさいつごろ賀茂に詣づとて見しが、哀にもなりにけるかな。これは女もまじらず、男の片手に、いと赤き稲の、もとは青きを刈りもちて、刀か何にあらん、もとを切るさまのやすげに、めでたき事にいとせまほしく見ゆるや。いかでさすらん、穂をうへにて竝み居る、いとをかしう見ゆ。庵のさまことなり。

いみじくきたなきもの

廊の遣戸、いと疾う押しあけたれば、御湯殿の馬道よりおりてくる殿上人の、萎えたる直衣指貫の、いたくほころびたれば、いろ〳〵の衣どもの、こぼれ出でたるを、押し入れなどして、北の陣のかたざまに歩み行くに、あきたる遣戸の前を過ぐとて、纓をひきこして、顔にふたぎて過ぎぬるもをかし。

たゞすぎにすぐるもの

帆あげたる舟。人のよはひ。春夏秋冬。

ことに人にしられぬもの

人の女親の老いたる。凶會日。

五六月の夕かた、青き草を細う麗しくきりて、赤衣著たる子兒の、ちひさき笠を著て、左右にいと多くもちてゆくこそ、すゞろにをかしけれ。

賀茂へ詣づる道に、女どもの、新しき折敷のやうなるものを笠にきて、いと多くたてりて、歌をうたひ、起き伏すやうに見えて、唯何すともなく、うしろざまに行くは、いか

纓を云々―冠の後に垂れたる纓を前に引越して顔をふさぐなり

凶會日―暦に記しあれど世人さまで忌み憚らぬ日なりしならん、拾芥抄に、凶會日正月庚寅、辛卯、甲寅云々

て佛事を忌めば也

御琴もたりし—賀茂臨時祭に所の雜色、或は所の衆など御琴を舁く也

おどろおどろしき—ことごとしき、色の麗はしきをいふ

身をかへたらん人などはかくやあらんと見ゆるもの

たゞの女房にて侍ふ人の、御乳母になりたる。唐衣も著ず、裳をだに用意なく、白衣にて御前に添ひ臥して、御帳のうちを居所にして、女房どもを呼びつかひ、局に物いひやり、文とりつがせなどしてあるさまよ。言ひ盡すべくだにあらず。雜色の藏人になりたるめでたし。去年の霜月の臨時の祭に御琴もたりし人とも見えず。君達に連れてありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ。外よりなりたるなどは、おなじ事なれどさしもおぼえず。

雪たかう降りて、今もなほふるに、五位も四位も、色うるはしう若やかなるが、袍の色いと淸らにて、革の帶のかたつきたるを、宿直すがたにひきはこえて、紫の指貫も、雪に映えて、濃さ勝りたるを著て、衵の紅ならずば、おどろ〳〵しき山吹を出して、傘をさしたるに、風のいたく吹きて、横ざまに雪を吹きかくれば、少し傾きて歩みくる、深沓半靴などのきはまで、雪のいと白くかゝりたるこそをかしけれ。

頭の辨―辨官にして藏人頭を兼ぬる者

内供―内供奉に同じ、禁中奉仕の僧

罪深けれど―齋院は神を祀る役に

上達部は

春宮大夫。左右の大將。權大納言。權中納言。宰相中將。三位の中將。東宮權大夫。侍從宰相。

公達は

頭辨。頭中將。權中將。四位少將。藏人辨。藏人少納言。春宮亮。藏人兵衛佐。

法師は

律師。内供。

女は

典侍。掌侍。

宮仕所は

内。后宮。その御腹の姫宮。一品の宮。齋院は罪深けれどをかし。ましてこのころはめでたし。春宮の御母女御。

に撒けるにや

宮のめ—巫覡の類、かんなぎ

おし—一本をし、をは強勢辭、しは爲の義といへり

してかけ—作りて懸け、一本してかけに作る、垂れかけ也

女官どもの髪あげたるすがた。唐繪の革の帶のうしろ。聖僧の擧動。

ことばなめげなるもの

宮のめの祭文よむ人。舟こぐものども。雷鳴の陣の舍人。相撲。

さかしきもの

今やうの三年子。兒の祈、祓などする女ども。物の具こひ出でて、いのりの物どもつくるに、紙あまたおし重ねて、いと鈍き刀してきるさま、ひとへだに斷つべくも見えぬに、さる物の具となりにければ、おのが口をさへ引きゆがめておし、切目おほかるものどもしてかけ、竹うち切りなどして、いとかうぐ〵しうしたてて、うちふるひ、祈る事どもいとさかし。かつは「何の宮のその殿の若君、いみじうおはせしを、かいのごひたるやうにやめ奉りしかば、祿多く賜はりし事、その人々召したりけれど、しるしもなかりければ、今に女をなん召す。御徳を見ること」など語るもをかし。げすの家の女あるじ。しれたるものそひしもをかし。まことに賢しき人を、をしへなどすべし。

黒き雲云々―一本、くろきもをかし

朝にさる色―文選宋玉賦に朝爲行雲暮爲行雨などあるを云ふにや

産飯―散飯ならん、飲食物の端を食前神佛に供ふるもの、後取り下げて家根

雲は

しろき。むらさき。黒き雲あはれなり。風吹くをりの天雲。明け離るゝほどの黒き雲の、やうやう白うなりゆくもいとをかし。朝にさる色とかや、文にも作りけり。月のいと明き面に、薄き雲いとあはれなり。

霧は

川霧。

さわがしきもの

はしり火。板屋のうへにて、烏の齋の産飯くふ。十八日淸水に籠りあひたる。くらうなりて、まだ火もともさぬほどに、外々より人の來集りたる。まして遠き所、他國などより家の主ののぼりたる、いと騒がし。近き程に火出で來ぬといふ、されど燃えは附かざりける。物見はてて車のかへり騒ぐほど。

ないがしろなるもの

まじりたる―一本、まじりてふるに作る

庭―一本には庭の字なし

昴星―七曜の星、和名抄に、六星火神也云々

とのたまひけると、人のかたりし。

ふるものは

雪。霰。霙はにくけれど、雪の眞白にてまじりたるをかし。雪は檜皮葺いとめでたし。少し消えがたになりたるほど、又いと多うは降らぬが、瓦の目ごとに入りて、黒う眞白に見えたる、いとをかし。時雨。霰は板屋。霜も板屋。庭。

日は

入日、入りはてぬる山際に、ひかりの猶とまりて、赤う見ゆるに、うす黄ばみたる雲のたなびきたる、いとあはれなり。

月は

有明。東の山の端に、ほそうて出づるほどあはれなり。

星は

昴星。牽牛。明星。長庚。流星をだになからましかば、まして。

ずわえの假名なりと云へり、木の若枝

なほ—やはりの義

老いたる父母—自己の父母のみに限らず廣く世間一般に對する禁令を解き給へとの意にて言へりと見ゆ

みじからん物の上手不用ならん。そこらの上達部より始めて、ありとある人知らずといふに、又いきて、かくなんといへば、「大なる蟻を二つ捕へて、腰に細き糸をつけ、又それに今少しふときをつけて、あなたの口に蜜を塗りて見よ」といひければ、さ申して、蟻を入れたりけるに、蜜の香を嗅ぎて、實にいと疾う穴のあなた口に出でにけり。さてその糸の貫かれたるを遣したりける後になん、なほ日本はかしこかりけりとて、後々はさる事もせざりけり。この中將をいみじき人に思しめして、「何事をし、いかなる位をか賜はるべき」と仰せられければ、「更に官位をも賜はらじ、唯老いたる父母の隱れうせて侍るを尋ねて、都にすますることを許させ給へ」と申しければ、「いみじうやすき事」とて許されにければ、よろづの人の親これを聞きて、よろこぶ事いみじかりけり。中將は大臣までになさせ給ひてなんありける。さてその人の神になりたるにやあらん、この明神の許へ詣でたりける人に、夜現れてのたまひける、

七曲にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとも知らずやあるらん

まろに―丸く

かへりて―向き返り先に立ちて

すばえ―末生（すゑばえ）又は直生（すぐばえ）の義か、普通には末條の義にて

て、この國うち取らむとて、常にこゝろみ、爭事をしておくり給ひけるに、つや〳〵と、まろに、美しげに削りたる木の二尺ばかりあるを、「これが本末いづかたぞ」と問ひ奉りたるに、すべて知るべきやうなければ、帝思しめし煩ひたるに、いとほしくて、親の許に行きて、かう〳〵の事なんあるといへば、「只はやからん川に立ちながら、横ざまに投げ入れ見んに、かへりて流れん方を、末と記してつかはせ」と教ふ。參りて我しり顏にして、「こころみ侍らん」とて、人々具して投げ入れたるに、さきにして行くかたに印をつけて遣したれば、實にさなりけり。又二尺ばかりなる蛇の同じやうなるを、「これはいづれか雄雌」とて奉れり。又更に人え知らず。例の中將行きて問へば、「二つをならべて、尾のかたに細きすばえをさしよせんに、尾はたらかさんを雌と知れ」といひければ、やがてそれを內裏のうちにてさ爲ければ、實に一つは動さず、一つは動しけるに、又しるしつけて遣しけり。ほど久しうて、七曲にわだかまりたる玉の中通りて、左右に口あきたるが小さきを奉りて、「これに緒通してたまはらん、この國に皆し侍ることなり」とて奉りたるに、い

輪の社、しるしはしるしの杉也、古今集に、我庵はみわの山本こひしくばとぶらひ來ませ杉たてる門

家に云々—老人の出で仕へずして家に居らん者をば云々

かしき。蟻通の明神、貫之が馬のわづらひけるに、この明神のやませ給ふとて、歌よみて奉りけんに、やめ給ひけん、いとをかし。この蟻通とつけたる意は、まことにやあらん、昔おはしましける帝の、唯若き人をのみ思しめして、四十になりぬるをば、失はせ給ひければ、他の國の遠きに往きかくれなどして、更に都のうちにさる者なかりけるに、中將なりける人の、いみじき時の人にて、心なども賢かりけるが、七十ちかき親ふたりをもたりけるが、かう四十をだに制あるに、ましていとおそろしと懼ぢ騒ぐを、いみじう孝ある人にて、遠き所には更に住ませじ、一日に一度見ではえあるまじとて、密によるよる家の内の土を掘りて、その内に屋を建てて、それに籠めすゑて、往きつゝ見る。おほやけにも人にも、うせ隠れたるよしを知らせてあり。などてか、家にいり居たらん人をば、知らでもおはせかし、うたてありける世にこそ。親は上達部などにやありけん、中將など子にてもたりけんは。いと心かしこく、萬の事知りたりければ、この中將若けれど、才あり、いたり賢くして、時の人に思すなりけり。唐土の帝、この國の帝を、いかで謀り

ものは堅き物、やりは遣戸の義といへり

笹の云々―神樂歌に、この笹はいづこの笹ぞ舍人等が腰にさがれる鞆岡の笹

杉の社―三

きつかざらめど、こゝろゆく心地こそすれ。文といふ事なからましかば、いかにいぶせく、くれふたがる心地せまし。よろづの事思ひ〳〵て、その人の許へとて、こま〴〵と書きて置きつれば、おぼつかなさをも慰む心地するに、まして返事見つれば、命を延ぶべかめる、實にことわりにや。

むまやは

梨原。ひくれの驛。望月の驛。野口の驛。やまの驛、あはれなる事を聞き置きたりしに、又あはれなる事のありしかば、なほ取りあつめてあはれなり。

岡は

船岡。片岡。鞆岡は笹の生ひたるがをかしきなり。かたらひの岡。人見の岡。

社は

布留の社。活田の社。龍田の社。はなふちの社。美久理の社。杉の御社、しるしあらんとをかし。任事の明神いとたのもし。さのみ聞きけんとやいはれ給はんと思ふぞいとを

龜形の水入、一說には瓶

人わろし―體裁惡し

こはものやりと―一說こはものへやるとてに作る、落合直文氏は假名にこはものやりと細櫃の蓋などに書き散らしてならん、こは

磁の龜の口おちて、首のかぎり穴のほど見えて、人わろきなども、つれなく人の前にさし出づかし。人の硯を引き寄せて、手ならひをも文をも書くに、「その筆な使ひたまひそ」と言はれたらんこそ、いとわびしかるべけれ。うち置かんも人わろし、猶つかふもあやにくなり。さ覺ゆることも知りたれば、人の爲るもいはで見るに、手などよくもあらぬ人の、さすがに物かゝまほしうするが、いとよくつかひかためたる筆を、あやしのやうに、水がちにさしぬらして、こはものやりと、假名に細櫃の蓋などに書きちらして、横ざまに投げ置きたれば、水に頭はさし入れてふせるも、にくき事ぞかし。されどさいはんやは。人の前に居たるに、「あなくら、奥より給へ」といひたるこそ、又わびしけれ。さしのぞきたるを見つけては、驚きいはれたるも。思ふ人の事にはあらずかし。

めづらしといふべきことにはあらねど、文こそ猶めでたきものなれ。遙なる世界にある人の、いみじくおぼつかなく、いかならんと思ふに、文を見れば、唯今さし向ひたるやうにおぼゆる、いみじきことなりかし。わが思ふ事を書き遣りつれば、あしこまでも行

云―列子湯問篇の比喩にもとづく

勞多きに云云―墨の久しく使はれしをいふ、

さゝし―一本さし、墨挾み也、傍註には、たる(句)かささしなど云云筆のかさ也とあれど如何

青磁の龜―

ありしか。職の御曹司の西おもてに住みしころ、大殿の四位少將と物いふに、側にある人、この少將に、扇の繪の事いへとさゝめけば、「今かの君立ち給ひなんにを」と密にいひ入るゝを、その人だにえ聞きつけで、「何とかく」と耳をかたぶくるに、手をうちて、「にくし、さのたまはゞ今日はたゞじ」とのたまふこそ、いかで聞き給ひつらんと、あさましかりしか。

硯きたなげに塵ばみ、墨の片つかたにしどけなくすりひらめかし、勞多きになりたるが、さゝしなどしたるこそ心もとなしと覺ゆれ。萬の調度はさるものにて、女は鏡硯こそ心のほど見ゆるなンめれ。おきぐちのはざめに、塵ゐるなど打ち捨てたるさま、こよなしかし。男はまして文机清げに押し拭ひて、重ねならずば、ふたつ懸子の硯のいとつきづきしう、蒔繪のさまもわざとならねどをかしうて、墨筆のさまなども、人の目とむばかりしたてたるこそ、をかしけれ。とあれどかゝれどおなじ事とて、黑箱の蓋も片方おちたる硯、わづかに墨のゐたたる、塵のこの世には拂ひがたげなるに、水うち流して、青

あをさし—青麥にて作れる菓子
ませこし—ませがき越しの麥
あたらしき—可惜しき又は目新しく風變りの義ならん
よくも云々—よくも靭負佐に似たまひしかなと言ひてやがて靭負佐と渾名したりと也
蚊の睫の云

らせたるに、あをさしといふものを人の持てきたるを、青き薄樣を艶なる硯の蓋に敷きて、「これませこしにさふらへば」とてまゐらせたれば、

みな人は花やてふやといそぐ日もわがこゝろをば君ぞ知りける

と、紙の端を引き破りて、書かせ給へるもいとめでたし。

十月十餘日の月いとあかきに、ありきて物見んとて、女房十五六人ばかり、皆濃き衣をうへに著て、引きかくしつゝありし中に、中納言の君の、紅の張りたるを著て、頸より髮をかいこし給へりしかば、「あたらしきぞ」とて、「よくも似たまひしかな。靭負佐」とぞわかき人々はつけたりし。後に立ちて笑ふも知らずかし。

成信の中將こそ、人の聲はいみじうよう聞き知り給ひしか。同じ所の人の聲などは、常に聞かぬ人は、更にえ聞き分かず、殊に男は、人の聲をも手をも、見わき聞きわかぬものを、いみじう密なるも、かしこう聞き分き給ひしこそ。

大藏卿ばかり耳とき人なし。まことに蚊の睫の落つるほども、聞きつけ給ひつべくこそ

手のかぎり—手だけ

こと紙—別の紙

菖蒲輿—菖蒲にて飾れる小さき輿

しの事やと思ふほどに、うへより御文もて來て、「返事只今」と仰せられたり。何事にかと思ひて見れば、大笠の繪をかきて、人は見えず、唯手のかぎり笠をとらへさせて、下に、

三笠山やまの端あけしあしたより

とかゝせ給へり。猶はかなき事にても、めでたくのみ覺えさせ給ふに、恥しく心づきなき事は、いかで御覽ぜられじと思ふに、さるそらごとなどの出でくるこそ苦しけれと、をかしうて、こと紙に、雨をいみじう降らせて、下に、

雨ならぬ名のふりにけるかな

さてや濡れぎぬには侍らんと啓したれば、右近内侍などにかたらせ給ひて、笑はせ給ひけり。

三條の宮におはしますころ、五日の菖蒲輿など持てまゐり、藥玉まゐらせなど、わかき人々、御匣殿など、藥玉して、姫宮若宮つけさせ奉り、いとをかしき藥玉ほかよりも參

おぼえある—良家の、世に時めく
簾も—一本ながえどもに作る
人給—副車
所ある—すきたる場所のある
げすも—一本げすどもに作る
便なき人—宿らすまじき人

すとて、棧敷のもとに馬ひき寄するに、おぼえある人の子どもなどは、雜色などおりて、馬の口などしてをかし。さらぬものの、見もいれられぬなどぞ、いとほしげなる。御輿の渡らせ給へば、簾もあるかぎり取りおろし、過ぎさせ給ひぬるに、まどひあぐるもをかし。その前に立てる車は、いみじう制するに、などて立つまじきぞと、强ひて立つれば、いひわづらひて、消息などするこそをかしけれ。所もなく立ち重りたるに、よき所の御車、人給ひきつゞきて多くくるを、いづくに立たんと見る程に、御前ども唯おりに下りて、立てる車どもを唯のけに退けさせて、人給つゞきて立てるこそ、いとめでたけれ。逐ひのけられたるえせ車ども、牛かけて、所あるかたにゆるがしもて行くなど、いとわびしげなり。きら〳〵しきなどをば、えさしも推しひしがずかし。いと淸げなれど、又ひなび怪しく、げすも絶えず呼びよせ、ちご出しすゑなどするもあるぞかし。廊に便なき人なん、曉に笠さゝせて出でけるといひ出でたるを、よく聞けば我がうへなりけり。地下などいひても、めやすく、人に許されぬばかりの人にもあらざンめるを、怪

あながち云云—あまり甚しくやつしたる樣にてあらんは

何しに—此語の下にかくは出立ちけんなど補ふべし

れ。

行幸はめでたきもの、上達部、公だち車などのなきぞ少しさうぐしき。よろづの事よりも、わびしげなる車に、裝束わろくて物見る人、いともどかし。說經などはいとよし。罪うしなふかたの事なれば。それだに猶あながちなるさまにて、見苦しかるべきを、まして祭などは、見でありぬべし。下簾もなくて、白きひとへうち垂れなどしてあゝめりかし。唯その日の料にとて、車も下簾もしたてて、いと口をしうはあらじと出でたるだに、まさる車など見つけては、何しになど覺ゆるものを、ましていかばかりなる心地にて、さて見るらん。おりのぼりありく公達の車の、推し分けて近う立つ時などこそ、心ときめきはすれ。よき所に立てんといそがせば、疾く出でて待つほどいと久しきに、居張り立ちあがりなど、あつく苦しく、まち困ずる程に、齋院の垣下に參りたる殿上人、所の衆、辨、少納言など、七つ八つ引きつゞけて、院のかたより走らせてくるこそ、事なりにけりと驚かれて、嬉しけれ。殿上人の物言ひおこせ、所々の御前どもに水飯くは

びら—一本山吹櫻のはなびら

かき板—物を載せて運ぶ板

竹王繪—一説に作り繪の誤かといへり

そあゝめれ。

みじかくてありぬべきもの

とみの物ぬふ糸。燈臺。下種女の髮、うるはしく短くてありぬべし。人の女の聲。

人の家につき〴〵しきもの

厨。侍の曹司。箒のあたらしき。懸盤。童女。はしたもの。衝立障子。三尺の几帳。裝束よくしたる餌嚢。からかさ。かきいた。棚厨子。ひさげ。銚子。中盤。圓座。ひぢをりたる廊。竹王繪かきたる火桶。

ものへ行く道に、清げなる男の、竪文のほそやかなる持ちて急ぎ行くこそ、何地ならんとおぼゆれ。又清げなる童女などの、袙いと鮮かにはあらず、萎えばみたる、屐子のつやゝかなるが、革に土多くついたるをはきて、白き紙に包みたる物、もしは箱の蓋に、草紙どもなど入れて持て行くこそ、いみじう、呼び寄せて見まほしけれ。門ちかなる所をわたるを、呼び入るゝに、愛敬なく答もせで往く者は、つかふらん人こそ推しはからる

口惜しく、さやうなるほどに、牛の鞦の香の、怪しうかぎ知らぬさまなれど、うち嗅がれたるが、をかしきこそ物ぐるほしけれ。いと暗闇なるに、さきにともしたる松の煙の、かの車にかゝれるもいとをかし。

五日の菖蒲の、秋冬過ぐるまであるが、いみじう白み枯れて怪しきを、引き折りあげたるに、その折の香殘りて、かゞへたるもいみじうをかし。よくたきしめたる薫物の、昨日、一昨日、今日などはうち忘れたるに、衣を引きかづきたる中に、煙の殘りたるは、今のよりもめでたし。

月のいとあかきに川を渡れば、牛の歩むまゝに、水晶などのわれたるやうに、水のちりたるこそをかしけれ。

おほきにてよきもの

法師。くだもの。家。餌嚢。硯の墨。男の目、あまりほそきは女めきたり、又鋺のやうならんはおそろし。火桶。酸漿。松の木。山吹のはなびら。馬も牛も、よきは大にこ

かゞへたる｜一説かゞへたろ、香殘りて含まれ居るなり

山吹のはな

雑沓して也
峯にわかるゝ
る—古今、
風吹けば峯
に別るゝ白
雲の絶えて
つれなき君
が心か

おぼめかし
きに—黄昏
時にて判然
と見えざる
に

もてゆけば、さしもあらざりつるこそをかしけれ。男の車の誰とも知らぬが、後に引きつゞきてくるも、たゞなるよりはをかしと見る程に、引き別るゝ所にて、「峯にわかるゝ」といひたるもをかし。

五月ばかり、山里にありく、いみじくをかし。澤水も實にたゞいと青く見えわたるに、うへはつれなく草生ひ茂りたるを、なが〱とたゞざまに行けば、下はえならざりける水の、深うはあらねど、人の歩むにつけて、とばしりあげたるいとをかし。左右にある垣の枝などのかゝりて、車のやかたに入るも、急ぎてとらへて折らんと思ふに、ふとはづれて過ぎぬるも口惜し。蓬の車に押しひしがれたるが、輪のまひたちたるに、近うかゞへたる香もいとをかし。

いみじう暑きころ、夕すゞみといふ程の、物のさまなどおぼめかしきに、男車のさきおふはいふべき事にもあらず、たゞの人も、後の簾あげて、二人も一人も乗りて、走らせて行くこそ、いと涼しげなれ。まして琵琶ひきならし、笛の音聞ゆるは、過ぎていぬるも

をさ〳〵しく—尤もらしく、きちんとして

わりなく—詮方なく

おどろかしげに—亂れ茂りて

えも通るまじう—車の

衆の青色白襲を、けしきばかり引きかけたるは、卯の花垣根ちかうおぼえて、杜鵑もかげに隠れぬべう覺ゆかし。昨日は車ひとつに數多乘りて、二藍の直衣、あるは狩衣など亂れ著て、簾取りおろし、物ぐるほしきまで見えし公達の、齋院の垣下にて、ひの裝束うるはしくて、今日は一人づつ、をさ〳〵しく乘りたる後に、殿上童のせたるもをかし。わたりはてぬる後には、などかさしも惑ふらん。我も〳〵と、危くおそろしきまで、前に立たんと急ぐを、「かうな急ぎそ、のどやかに遣れ」と扇をさし出でて制すれど、聞きも入れねば、わりなくて、少し廣き所に強ひてとゞめさせて立ちたるを、心もとなくにくしとぞ思ひたる、きほひかゝる車どもを見やりてあるこそをかしけれ。少しよろしき程にやり過して、道の山里めきあはれなるに、うつ木垣根といふ物の、いと荒々しう、おどろかしげにさし出でたる枝どもなど多かるに、花はまだよくもひらけはてず、つぼみがちに見ゆるを折らせて、車のこなたかなたなどに插したるも、桂などの萎みたるが口惜しきに、をかしうおぼゆ。遠きほどは、えも通るまじう見ゆる行くさきを、近う行き

御綱助―春註に、鳳輦の御綱を奉行する大舍人をいふにや

あえしを―原本あへしをに作る

をかしけれ―原本をかしに作る

奉りて―齋院の乘らせ給ひて

うちぎみさへぞ、やんごとなう珍しう覺ゆる。御綱助、中少將などいとをかし。祭のかへさいみじうをかし。きのふは萬の事うるはしうて、一條の大路の廣う淸らなるに、日の影もあつく、車にさし入りたるもまばゆければ、扇にて隱し、居なほりなどして、久しう待ちつるも見苦しう、汗などもあえしを、今日はいと疾く出でて、雲林院、知足院などのもとに立てる車ども、葵かつらもうちなえて見ゆ。日は出でたれど、空は猶うち曇りたるに、いかで聞かんと、目をさまし、起き居て待たるゝ杜鵑の、數多さへあるにやと聞ゆるまで、鳴きひゞかせば、いみじうめでたしと思ふ程に、鶯の老いたる聲にて、かれに似せんとおぼしく、うち添へたるこそ、憎けれど又をかしけれ。いつしかと待つに、御社の方より、赤き衣など著たる者どもなど連れ立ちてくるを、「いかにぞ、事成りぬや」などいへば、「まだ無期」など答へて、御輿、腰輿など持てかへる。これに奉りておはしますらんもめでたく、けぢかく如何でさる下司などの侍ふにかとおそろし。はるかげにいふ程もなく歸らせ給ふ。葵より始めて、青朽葉どものいとをかしく見ゆるに、所の

―餘り面白さにぞつとして毛髮も立つ

やうしたる　―樣したる、又は耀(えう)したるにて磨き立てたる義にや

賀茂の社の　―古今集、千早振賀茂の社のゆふだすきひと日も君をかけぬ日はなし

をかし。

見るものは

行幸。祭のかへさ。御賀茂詣。臨時の祭、空くもりて寒げなるに、雪少しうち散りて、插頭の花、青摺などにかゝりたる、えもいはずをかし。太刀の鞘の、きはやかに黑うまだらにて、白く廣う見えたるに、半臂の緒のやうしたるやうにかゝりたる。地摺袴の中より、氷かと驚くばかりなる打目など、すべていとめでたし。今少し多く渡らせまほしきに、使は必にくげなるもあるたびは、目もとまらぬ。されど藤の花に隱されたる程はをかしう、猶過ぎぬるかたを見送らるゝに、陪從のしなおくれたる、柳の下襲に、かざしの山吹おもなく見ゆれども、扇いと高くうちならして、「賀茂の社のゆふだすき」と歌ひたるは、いとをかし。

行幸になずらふるものは何かあらん。御輿に奉りたるを見參らせたるは、明暮御前に侍ひ、仕う奉る事もおほえず、かう〴〵しういつくしう、常は何ともなきつかさ、ひめま

ふきなしありかし—異本ふきなしなめりかし
むつかしう—異本かしがまし
うちそへて—篳篥を也
立ちあがり

横笛いみじうをかし。遠うより聞ゆるが、やう〳〵近うなりゆくもをかし。近かりつるがはるかになりて、いとほのかに聞ゆるも、いとをかし。車にても徒歩にても馬にても、すべて懐にさし入れてもたるも、何とも見えず。さばかりをかしきものはなし。まして聞き知りたる調子など、いみじうめでたし。曉などに、忘れて枕のもとにありたるを見つけたるも、猶をかし。人の許より取りにおこせたるを、おし包みて遣るも、たゞ文のやうに見えたり。笙の笛は、月のあかきに、車などにて聞えたる、いみじうをかし。所せく、もてあつかひにくくぞ見ゆる。吹く顔やいかにぞ。それは横笛もふきなしありかし。篳篥は、いとむつかしう、秋の蟲をいはゞ、轡蟲などに似て、うたてけぢかく聞かまほしからず。ましてわろう吹きたるはいとにくきに、臨時の祭の日、いまだ御前には出ではてで、物の後にて、横笛をいみじう吹き立てたる、あなおもしろと聞くほどに、半ばかりより、うちそへて吹きのぼせたる程こそ、唯いみじう麗しき髪もたらん人も、皆立ちあがりぬべき心地ぞする。やう〳〵琴笛あはせて歩み出でたる、いみじう

夜人の顔見えぬほど。あそびわざは、さまあしけれども、鞠もをかし。小弓。掩韻。碁。

舞は

駿河舞。求子。太平樂はさまあしけれど、いとをかし。太刀などうたてくあれど、いとおもしろし。漢土に敵に具して遊びけんなど聞くに。鳥の舞。拔頭は、頭の髪ふりかけたるまみなどはおそろしけれど、樂もいとおもしろし。落蹲は、二人して膝ふみて舞ひたる。こまがた。

ひきものは

琵琶。箏のこと。

しらべは

風香調。黄鐘調。蘇香の急。鶯のさへづりといふしらべ。相府蓮。

笛は

漢土に云々—鴻門の會に項莊項伯の劍を拔いて舞へるをいふ

まみ—目つき

鶯のさへづり—春鶯轉

殿うつり―以下世に傳らず

かはぼり―扇

そうけ野―國不詳、僧毛にとりなしての洒落にや

あかつき―曉讀むが尊しと也

物語は

すみよし、うつぼの類は、殿うつり。月まつ女。交野の少將。梅壺の少將。人め。國ゆづり。むもれ木。道心すゝむる松が枝。こまのの物語は、ふるきかはぼりさし出でてもいにしが、をかしきなり。

野は

嵯峨野さらなり。印南野。交野。こま野。粟津野。飛火野。しめぢ野。そうけ野こそすずろにをかしけれ。などさつけたるにかあらん。安倍野。宮城野。春日野。紫野。

陀羅尼は

あかつき。

讀經は

ゆふぐれ。

あそびは

文集―白氏文集七十卷
申文―願書

生の浦。鹽竈の浦。志賀の浦。名高の浦。こりずまの浦。和歌の浦。

寺は

壺坂。笠置。法輪。高野は、弘法大師の御住處なるがあはれなるなり。石山。粉川。志賀。

經は

法華經はさらなり。千手經。普賢十願。隨求經。尊勝陀羅尼。阿彌陀の大呪。千手陀羅尼。

文は

文集。文選。博士の申文。

佛は

如意輪は、人の心をおぼしわづらひて、頰杖を突きておはする、世に知らずあはれにはづかし。千手、すべて六觀音。不動尊。藥師佛。釋迦。彌勒。普賢。地藏。文珠。

おこしたる火の光に、御几帳の紐のいとつやゝかに見え、御簾の帽額のあげたる、鈎のきはやかなるもけざやかに見ゆ。よく調じたる火桶の、灰清げにおこしたる火に、よく書きたる繪の見えたる、をかし。はしのいときはやかにすぢかひたるもをかし。夜いたう更けて、人の皆寢ぬる後に、外のかたにて、殿上人など物いふに、奥に、碁石笥にいる音のあまた聞えたる、いと心にくし。簀子に火ともしたる。物へだてて聞くに、人の忍ぶるが、夜半などうち驚きて、いふ事は聞えず、男も忍びやかに笑ひたるこそ、何事ならんとをかしけれ。

島は

浮島。八十島。たはれ島。水島。松が浦島。籬の島。豐浦の島。たと島。

濱は

そとの濱。吹上の濱。長濱。打出の濱。諸寄の濱。千里の濱こそ廣うおもひやらるれ。

浦は

はしの云々―火箸を眞筋違に立てたる

驚きて―目を覺して

たと島―萬歲抄に、たくのしまの誤か然らば出雲也

花もかへり―花色も褪め
宿直物―寢衣
そぎすゑ―髮の切り揃へたるさき
物まゐる―食事をする

母屋より少しゐざり出でたる、髮は風に吹きまよはされて、少しうちふくだみたるが、肩にかゝりたるほど、實にめでたし。物あはれなる氣色見るほどに、十七八ばかりにやあらん、ちひさくはあらねど、わざと大人などは見えぬが、生絹の單衣のいみじうほころびたる、花もかへり、濡れなどしたる、薄色の宿直物を著て、髮は尾花のやうなるそぎすゑも、長ばかりは衣の裾にはづれて、袴のみあざやかにて、そばより見ゆる。わらはべの、若き人の根籠に吹き折られたる前栽などを取り集め起し立てなどするを、羨しげに推し量りて、つき添ひたるうしろもをかし。

こゝろにくきもの

物へだてて聞くに、女房とは覺えぬ聲の、忍びやかに聞えたるに、答わかやかにして、うちそよめきて參るけはひ、物まゐる程にや、筯飯匙などのとりまぜて鳴りたる、提の柄のたふれ伏すも、耳こそとゞまれ。打ちたる衣の鮮かなるに、騷しうはあらで、髮のふりやられたる。いみじうしつらひたる所の、おほとなぶらは參らで、長炭櫃に、いと多く

この生絹だに云々ーこの語の上に、夏の程は、又はさいつ頃はなど補ふべし

おもはずー心外

格子のつぼー格子の目をいふにや

をかし。この生絹だにいとあつかはしう、捨てまほしかりしかば、いつの間にかうなりぬらんと思ふもをかし。あかつき、格子妻戸など押しあけたるに、嵐のさと吹きわたりて、顔にしみたるこそいみじうをかしけれ。九月三十日、十月一日のほどの空うち曇りたるに、風のいたう吹くに、黄なる木の葉どもの、ほろ〳〵とこぼれ落つる、いとあはれなり。櫻の葉、椋の葉などこそ落つれ。十月ばかりに、木立多かる所の庭は、いとめでたし。

野分の又の日こそ、いみじう哀におぼゆれ。立蔀、透垣などのふしなみたるに、前栽ども心ぐるしげなり。大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるだに惜しきに、萩女郎花などのうへに、よろぼひ這ひ伏せる、いとおもはずなり。格子のつぼなどに、颯と際を殊更にしたらんやうに、こま〴〵と吹き入りたるこそ、あらかりつる風のしわざともおぼえね。いと濃き衣のうはぐもりたるに、朽葉の織物、羅などの小袿著て、まことしく淸げなる人の、夜は風のさわぎにねざめつれば、久しう寐おきたるまゝに、鏡うち見て、

供奉—内供奉とて宮中奉仕の僧

なりかゝり—なり形のみ氣にかけ繕ふ、一說に、あなづられてなり(句)かゝりこそすれ

花風—一本あまかぜ

あゝめれ。數多國に行きて、大貳や四位などになりて、上達部になりぬれば、おも〱し。されど、さりとてほど過ぎ、何ばかりの事かはある。又多くやはある。受領の北の方にてくだるこそ、よろしき人の幸福には思ひてあゝめれ。只人の上達部の女にて、后になり給ふこそめでたけれ。されどなほ男は、わが身のなり出づるこそめでたくうち仰ぎたるけしきよ。法師の、なにがし供奉などいひてありくなどは、何とかは見ゆる。經たふとく讀み、みめ淸げなるにつけても、女にあなづられて、なりかゝりこそすれ、僧都僧正になりぬれば、佛のあらはれ給へるにこそとおぼし惑ひて、かしこまるさまは、何にかは似たる。

風は

嵐。こがらし。三月ばかりの夕暮にゆるく吹きたる花風、いとあはれなり。八九月ばかりに、雨にまじりて吹きたる風、いとあはれなり。雨のあし橫ざまに、さわがしう吹きたるに、夏とほしたる綿絹の、汗の香などかわき、生絹の單衣に、引き重ねて著たるも

ふくつけき―欲深き、原本ふくつけさに作る

あり〳〵て―長き間待ちに待ちて

ぬべし。こはき物怪調じたる驗者。掩韻の明疾うしたる。小弓射るに、片つ方の人咳嗽をし紛はして騷ぐに、念じて音高う射てあてたるこそ、したり顔なるけしきなれ。碁をうつに、さばかりと知らで、ふくつけきは、又こと所にかゝぐりありくに、ことかたより、目もなくして、多くひろひ取りたるも嬉しからじや。ほこりかに打ち笑ひ、たゞの勝よりはほこりかなり。あり〳〵て受領になりたる人の氣色こそうれしげなれ。僅にある從者の無禮にあなづるも、妬しと思ひ聞えながら、いかゞせんとて念じ過しつるに、我にもまさる者どもの、かしこまり、たゞ仰承らむと追從するさまは、ありし人とやは見えたる。女房うちつかひ、見えざりし調度裝束の湧き出づる。受領したる人の中將になりたるこそ、もと公達のなりあがりたるよりも、氣高うしたり顔に、いみじう思ひたゝめれ。位こそ猶めでたきものにはあれ。同じ人ながら、大夫の君や、侍從の君など聞ゆるをりは、いと侮り易きものを、中納言、大納言、大臣などになりぬるは、無下にせんかたなく、やんごとなく覺え給ふ事のこよなさよ。ほど〳〵につけては、受領もさこそは

御けしきは｜中宮の思召はこの御歌の如しと取次の人の詞也

職の神｜陰陽家に使はれ咒咀などにて災禍をなす神

きしろふ云云｜競爭激しき際の藏人に我愛する子をなしたる人

おりたるすなはち、淺緑なる薄樣に、艶なる文をもてきたり。見れば、

いかにしていかに知らましいつはりをそらにたゞすの神なかりせば

となん、御けしきはとあるに、めでたくも口をしくも思ひ亂るゝに、なほ昨夜の人ぞたづね聞かまほしき。

うすきこそそれにもよらねはなゆゑにうき身の程を知るぞわびしき

猶こればかりは啓しなほさせ給へ、職の神もおのづからいと畏しとて、參らせて後も、うたて、折しもなどてさはたありけん、いとをかし。

したりがほなるもの

正月一日のつとめて、最初にはなひたる人。きしろふたびの藏人に、かなしうする子なしたる人のけしき。除目に、その年の一の國得たる人の、よろこびなどいひて、「いとかしこうなり給へり」など人のいふ答に、「何か、いと異樣に亡びて侍るなれば」などいふも、したり顏なり。また人多く挑みたる中に、選られて壻に取られたるも、我はと思ひ

一所—御ひと方

我も—其人御自身も

鼻を云々—當時人と會話中傍に嚔する人あれば對手の言を虛言と思ふ俗ありしなり

給へ。それぞ世にある人の手は見知りて侍らん」と怪しき事どもを、唯答させんとのたまふ。一所だにあるに、又さきうちおはせて、同じ直衣の人參らせ給ひて、これは今少し花やぎ、猿樂ことなどうちし、譽め笑ひ興じ、我も、なにがしがとある事、かゝる事など、殿上人のうへなど申すを聞けば、猶いと變化の物、天人などのおり來るにやと覺えてしを、侍ひ馴れ、日ごろ過ぐれば、いとさしもなきわざにこそありけれ。かく見る人々も、家のうち出で初めけん程は、さこそは覺えけめど、かく爲もて行くに、おのづから面馴れぬべし。物など仰せられて、「我をば思ふや」と問はせ給ふ。御いらへに、「いかにかは」と啓するに合せて、臺盤所のかたに、鼻をたかくひたれば、「あな心う、虛言するなりけり。よし〳〵」とていらせ給ひぬ。いかでか虛言にはあらん。よろしうだに思ひ聞えさすべき事かは。鼻こそは虛言しけれとおぼゆ。さても誰かかくにくきわざしつらんと、大かた心づきなしと覺ゆれば、わがさる折も、おしひしぎかへしてあるを、ましてにくしと思へど、まだうひ〳〵しければ、ともかくも啓しなほさで、明けぬれば

ふに、御几帳隔てて、よそに見やり奉るだに恥しかりつるを、いとあさましう、さし向ひ聞えたる心地、うつゝとも覺えず。行幸など見るに、車のかたにいさゝか見おこせ給ふは、下簾ひきつくろひ、透影もやと扇をさし隱す。猶いと我心ながらも、おほけなくいかで立ち出でにしぞと、汗あえていみじきに、何事をか聞えん。かしこきかげと捧げたる扇をさへ取り給へるに、振りかくべき髮のあやしささへ思ふに、すべて誠にさる氣色やつきてこそ見ゆらめ、疾く立ち給へなど思へど、扇を手まさぐりにして、「繪は誰が書きたるぞ」などの給ひて、頓にも立ち給はねば、袖を押しあてて、うつぶし居たるも、唐衣にしろい物うつりて、まだらにならんかし。久しう居給ひたりつるを、論なう苦しと思ふらんと心得させ給へるにや、「これ見給へ、これは誰が書きたるぞ」と聞えさせ給ふを、嬉しと思ふに、「賜ひて見侍らん」と申し給へば、「猶こゝへ」との給はすれば、「人をとらへてたて侍らぬなり」との給ふ。いといまめかしう、身のほど年には合はず、かたはらいたし。人の草假字書きたる草紙、取り出でて御覽ず。「誰がにかあらん、かれに見せさせ

猶いと云々―此語の上に、然るに今かく近く添はれ奉りてはと補ひ見るべし、おほけなく云々は身分不相應に如何で斯く出仕したりしと也

たて―立たせ、清少が我を捉へて立たしめずと也

道もなし―拾遺集、山里は雪降りつみて道もなし今日來ん人を哀とは見ん

さぞ―斯樣斯々の者なり

たり。大納言殿の參らせ給ふなりけり。御直衣指貫の紫の色、雪にはえてをかし。柱のもとに居給ひて、「昨日今日物忌にて侍れど、雪のいたく降りて侍れば、おぼつかなさに」などのたまふ。「道もなしと思ひけるに、いかでか」とぞ御答あンなる。うち笑ひ給ひて、「あはれともや御覽ずるとて」などの給ふ御有樣は、これよりは何事かまさらん。物語にいみじう口にまかせて言ひたる事ども、違はざンめりとおぼゆ。宮は白き御衣どもに、紅の唐綾二つ、白き唐綾と奉りたる、御髮のかゝらせ給へるなど、繪に書きたるをこそ、かかることは見るに、現にはまだ知らぬを、夢の心地ぞする。女房と物いひ戲れなどし給ふを、答いさゝか恥しとも思ひたらず聞えかへし、空言などの給ひかくるを、爭ひ論じなど聞ゆるは、目もあやに、あさましきまで、あいなく面ぞ赤むや。御菓子まゐりなどして、御前にも參らせ給ふ。「御几帳の後なるは誰ぞ」と問ひ給ふなるべし。さぞと申すにこそあらめ、立ちておはするを、外へにやあらんと思ふに、いと近う居給ひて、物などの給ふ。まだ參らざりしとき聞きおき給ひける事などの給ふ。「實にさありし」などの給

あへなきまで—暇もなき程
急がせば—原本出せばに作る
御まかなひ—御配膳
あうよりて—奥へよりて

ゐざり歸るや遲きとあけちらしたるに、「雪いとをかし、今日は晝つかた參れ、雪にくもりてあらはにもあるまじ」など、たび〳〵召せば、この局主人も、「さのみや籠り居給ふらんとする。いとあへなきまで御前許されたるは、思しめすやうこそあらめ。思ふに違ふはにくきものぞ」と、唯いそがしに急がせば、我にもあらぬ心地すれば、參るもいとぞ苦しき。火燒屋のうへに降り積みたるも珍しうをかし。御前近くは、例の炭櫃の火こちたくおこして、それにはわざと人も居ず。宮は沈の御火桶の梨繪したるに向ひておはします。上臈御まかなひし給ひけるまゝに近くさぶらふ。次の間に長炭櫃に間なく居たる人人、唐衣著垂れたるほどなり。安らかなるを見るも羨しく、御文とりつぎ、立ち居ふるまふさまなど、つゝましげならず、物いひゑみわらふ。いつの世にか、さやうに交ひならんと思ふさへぞつゝましき。あうよりて、三四人集ひて繪など見るもあり。暫時ありて、さき高うおふ聲すれば、「殿參らせ給ふなり」とて、散りたる物ども取りやりなどするに、奥に引き入りて、さすがにゆかしきなゝめりと、御几帳のほころびより僅に見入れ

語に、御形の宣旨といふ人は優にやさしく形めでたかりけり

念じて―恥しさを耐へて

葛城の神―前註引歌、一八六頁參照

はなたせ給へ―格子を開け給へ、上にまゐらずとあるは開けずの意

るをこそ、いみじうせさせ給ひけれ。

宮に始めて參りたるころ、物の恥しきこと數知らず、涙も落ちぬべければ、夜々まゐりて、三尺の御几帳の後に侍ふに、繪など取り出でて見せさせ給ふだに、手もえさし出すまじうわりなし。これはとあり、かれはかゝりなどの給はするに、高杯にまゐりたるおほとの油なれば、髮のすぢなども、なか〳〵晝よりは顯證に見えてまばゆけれど、念じて見などす。いとつめたきころなれば、さし出させ給へる御手のわづかに見ゆるが、いみじう匂ひたる薄紅梅なるは、限なくめでたしと、見知らぬさとび心地には、いかゞはかゝる人こそ世におはしましけれと、驚かるゝまでぞまもりまゐらする。曉には疾くなど急がるゝ。「葛城の神も暫し」など仰せらるゝを、いかですぢかひても御覽ぜんとて臥したれば、御格子もまゐらず。女官まゐりて、「これはなたせ給へ」といふを、女房聞きてはなつを、「待て」など仰せらるれば、笑ひてかへりぬ。物など問はせ給ひの給はするに、久しうなりぬれば、「おりまほしうなりぬらん、さは早」とて、「よさりは疾く」と仰せらるゝ。

とは見ん
雪何の山―朗詠、曉入ニ梁王之苑ー雪滿ニ群山ー
いと高う―一本いみじうに作る
雪月花の時―朗詠、琴詩酒件皆抛レ我雪月花時最憶レ君
沖―炭火（おき）に掛けしならん
御形の宣旨―女房の名、今昔物

に滿てるとうち誦じたるは、いとをかしきものなり。女のかぎりしては、さもえ居明さざらましを、たゞなるよりはいとをかしう、すきたる有樣などを言ひあはせたる。

村上の御時、雪のいと高う降りたりけるを、楊器にもらせ給ひて、梅の花をさして、月いと明きに、「これに歌よめ、いかゞいふべき」と兵衛の藏人に賜びたりければ、雪月花の時と奏したりけるこそ、いみじうめでさせ給ひけれ。「歌などよまんには世の常なり、かう折にあひたる事なん、言ひ難き」とこそ仰せられけれ。同じ人を御供にて、殿上に人侍はざりける程、佇ませおはしますに、すびつの烟の立ちければ、「かれは何の烟ぞ、見て來」と仰せられければ、見てかへり參りて、

わたつみの沖にこがるゝ物見ればあまの釣してかへるなりけり

と奏しけるこそをかしけれ。蛙の飛び入りてこがるゝなりけり。

御形の宣旨、五寸ばかりなる殿上わらはのいとをかしげなるをつくりて、髻結ひ、裝束などうるはしくして、名かきて奉らせたりけるに、ともあきらのおほきみと書きたりけ

おぼえなく―ふと、突然

今日來ん人を―拾遺、山里は雪ふりつみて道もなし今日來ん人を哀

れ。有明などはましていとをかし。笛など吹きて出でぬるを、我は急ぎても寢られず、人のうへなどもいひ、歌など語り聞くまゝに、寢いりぬるこそをかしけれ。

雪のいと高くはあらで、うすらかに降りたるなどは、いとこそをかしけれ。又雪のいと高く降り積みたる夕暮より、端ちかう、同じ心なる人二三人ばかり、火桶中に居ゐて、物語などするほどに、暗うなりぬれば、こなたには火もともさぬに、大かた雪の光いと白う見えたるに、火箸して灰などかきすさびて、あはれなるもをかしきも、いひあはするこそをかしけれ。よひも過ぎぬらんと思ふほどに、沓の音近う聞ゆれば、怪しと見出したるに、時々かやうの折、おぼえなく見ゆる人なりけり。今日の雪をいかにと思ひきこえながら、何でふ事にさはり、そこに暮しつるよしなどいふ。今日來ん人をなどやうのすぢをぞ言ふらんかし。晝よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひ笑ひ、圓座さし出したれど、片つ方の足はしもながらあるに、鐘の音の聞ゆるまでになりぬれど、內にも外にも、いふ事どもは飽かずぞおぼゆる。昧爽のほどに歸るとて、雪何の山

門番の答
供なるものども—わらふの主語
ぬる—一本いぬる
らいさうと—未詳、一説に衍文、一説に今宵らはさぞとの誤

おはすれば」など、なまふせがしげに思ひて答ふるに、「人出で給ひなば疾くさせ。このごろは盗人いと多かり」などいひたる、いとむつかしう、うち聞く人だにあり。この人の供なるものども、この客今や出づると、絶えずさしのぞきて、けしき見るものどもを、わらふべかゝめり。眞似うちするも、聞きてはいかにいとゞ嚴しういひ咎めん。いと色に出でていはぬも、思ふ心なき人は、必來などやずる。されど健なるかたは、「夜更けぬ、御門もあやふかゝなる」といひてぬるもあり。誠に志ことなる人は、「はや」などあまた度やらはるれど、猶居あかせば、たび〳〵ありくに、あけぬべきけしきをめづらかに思ひて、「いみじき御門を、今宵らいさうとあけひろげて」と聞えごちて、あぢきなく曉にぞさすなる。いかゞにくき。親そひぬるは猶こそあれ。まして誠ならぬは、いかに思ふらんとさへつゝましうて。兄の家なども、實に聞くにはさぞあらん。夜中曉ともなく、門いと心がしこくもなく、何の宮、内裏わたりの殿ばらなる人々の出であひなどして、格子などもあげながら、冬の夜を居あかして、人の出でぬる後も、見出したるこそをかしけ

いたづらなる—明家となれる
またからず—全からず、崩れて
おのづから—さしのぞくに係る
まだ人の—

さらなり、伯父兄などの住まぬ家、そのさるべき人のなからんは、おのづからむつましう、うち知りたる受領、又國へ行きていたづらなる、さらずば女院、宮腹などの屋あまたあるに、官まち出でて後、いつしかとよき所尋ね出でて住みたるこそよけれ。女のひとり住む家などは、唯いたう荒れて、築土などもまたからず、池などのある所は、水草ゐ、庭なども、いと蓬茂りなどこそせねども、所々砂の中より青き草見え、淋しげなるこそあはれなれ。物かしこげに、なだらかに修理して、門いたうかため、きはぐ〵しきは、いとうたてこそ覺ゆれ。

宮仕人の里なども、親ども二人あるはよし。人しげく出で入り、奥のかたにあまたさまざまの聲多く聞え、馬の音して騷しきまであれどかなし。されど忍びてもあらはれても、おのづから、「出で給ひけるを知らで」とも、又「いつか參り給ふ」などもいひにさしのぞく。心かけたる人は、「いかがは」と門あけなどするを、うたて騷しうあやふげに、夜半までなど思ひたるけしき、いとにくし。「大御門はさしつや」など問はすれば、「まだ人の

飛鳥井、みもひも寒しと譽めたるこそをかしけれ。玉の井。少將の井。櫻井。后町の井。千貫の井。

受領は

紀伊守。和泉。

やどりのつかさの權の守は

下野。甲斐。越後。筑後。阿波。

大夫は

式部大夫。左衞門大夫。史大夫。六位藏人、おもひかくべき事にもあらずかうぶりえて、何の大夫、權の守などいふ人の、板屋せばき家もたりて、また小檜垣など新しくし、車やどりに車ひきたて、前ちかく木おほくして、牛つながせて、草などかはするこそいとにくけれ。庭いと淸げにて、紫革して、伊豫簾かけわたして、布障子はりて住居たる。夜は「門强くさせ」など事行ひたる、いみじうおひさきなくこゝろづきなし。親の家、舅は

影さへ見ゆる山の井の淺き心は我思はなくに

飛鳥井—催馬樂、飛鳥井に宿りはすべしかげもよしみもひもさむしみま草もよし、みもひは飲料水

やどりのつかさ—一時任官し暫らくして目的の官に轉ぜしむる官

て讀む

ことなしがほ—その事を成就せんといふかほつき

十二月の云云—十二月の晦日と正月一日との間

山の井—萬葉、淺香山

萍水草しげりて。

たのもしげなきもの

心みじかくて人忘れがちなる。聟の夜がれがちなる。六位の頭しろき。虚言する人の、さすがに人のことなしがほに大事うけたる。一番に勝つ雙六。六七八十なる人の、心地あしうして日ごろになりぬる。風はやきに帆あげたる船。經は不斷經。

近くてとほきもの

宮のほとりの祭。思はぬ兄弟、親族の中。鞍馬の九折といふ道。十二月の晦日、正月一日のほど。

遠くてちかきもの

極樂。船の道。男女の中。

井は

堀兼の井。走井は逢阪なるがをかしき。山の井、さしもあさきためしになりはじめけん。

ほとほり―あつくなる立腹する

さまこそ―譯が

笑ふ―人々がうちふしとの關係を笑ひ居るぞと殿上人宣方に言ひ聞かせし也

花かへり―花色のかへりさめたる

衛士―一説繪師、清み

つる。更に聞きとゞめ給ふことなし」などいふ。傍なる人を引きゆるがせば、「さるべきこともなきを、ほとほり出で給ふ、さまこそあらめ」とて、花やかに笑ふに、「これもかのいはせ給ふならん」とて、いとものしと思へり。「更にさやうの事をなんいひ侍らぬ。人のいふだににくきものを」といひて、引き入りにしかば、後にもなほ、「人にはぢがましき事いひつけたる」と恨みて、「殿上人の、笑ふとていひ出でたるなり」との給へば、「さては一人を恨み給ふべくもあらざゝめる、あやし」などいへば、その後は絶えてやみ給ひにけり。

昔おぼえてふようなるもの

繧繝縁の疊の舊りてふし出できたる。唐繪の屏風の表そこなはれたる。藤のかゝりたる松の木枯れたる。地摺の裳の花かへりたる。衛士の目くらき。几帳のかたびらのふりぬる。帽額のなくなりぬる。七尺のかづらのあかくなりたる。葡萄染の織物の灰かへりたる。色好の老いくづをれたる。おもしろき家の木立やけたる。池などはさながらあれど、

云—前漢書に見ゆ、三十の期を宣方の年齡にとりなしたる洒落

宿直所—語らふ女房の意にていへるならん

聞ゆれば—參らするに

へけん年にはしも」と書きてやりたりしを、又ねたがりて、うへの御前にも奏しければ、宮の御かたにわたらせ給ひて、「いかでかゝる事は知りしぞ。四十九になりける年こそ、さは誡めけれとて、宣方はわびしういはれにたりといふめるは」と笑はせ給ひしこそ、物ぐるほしかりける君かなとおぼえしか。

弘徽殿とは、閑院の太政大臣の女御とぞ聞ゆる。その御方に、うちふしといふ者の女、左京といひてさぶらひけるを、「源中將かたらひて思ふ」など人々笑ふ頃、宮の職におはしまいしに參りて、「時々は御宿直など仕うまつるべけれど、さるべきさまに女房などもてなし給はねば、いと宮づかへおろかにさぶらふ。宿直所をだに賜りたらんは、いみじうまめにさぶらひなん」などいひ居給ひつれば、人々げになどいふ程に、「誠に人は、うちふしやすむ所のあるこそよけれ。さるあたりには、しげく參り給ふなるものを」とさし答へたりとて、「すべて物きこえず。方人と頼み聞ゆれば、人のいひふるしたるさまに取りなし給ふ」など、いみじうまめだちてうらみ給ふ。「あなあやし、いかなる事をか聞え

粋源英明の詩に未レ至二三十期一とあるなどにや

そなたに―一本四方に作る

朱買臣が云

いへば、「わびしの事や、いかで、あれがやうに誦ぜで」などの給ふ。「三十の期といふ所なん、すべていみじう、愛敬づきたりし」などいへば、ねたがりて笑ひありくに、陣につき給へりけるをりに、わきて呼び出でて、「かうなんいふ。猶そこ教へ給へ」といひければ、笑ひて教へけるも知らぬに、局のもとにて、いみじくよく似せて詠むに、あやしくて、「こは誰そ」と問へば、ゑみごゑになりて、「いみじき事聞えん。かう〳〵昨日陣につきたりしに、問ひ來てたちにたるなめり。誰ぞと、にくからぬ氣色にて問ひ給へれば」といふも、わざとさ習ひ給ひけんをかしければ、これだに聞けば、出でて物などいふを、「宰相の中將の德見る事、そなたに向ひて拜むべし」などいふ。下にありながら、「うへに」などいはするに、これをうち出づれば、「誠はあり」などいふ。御前にかくなど申せば、笑はせ給ふ。內裏の御物忌なる日、右近のさうくわんみつなにとかやいふものして、疊紙に書きておこせたるを見れば、「參ぜんとするを、今日は御物忌にてなん。三十の期におよばずは、いかゞ」といひたれば、返事に、「その期は過ぎぬらん、朱買臣が妻を教

定め―貞操

詩を云々―清少が帝の前にて齊信の朗詠をほめ暫し宰相にもならであれといふなり

蕭會稽云々―朗詠の句

三十の期―古詩の句ならん本朝文

の給へ」と怨みられて、よき中なれば聞せてけり。いとあへなく言ふ程もなく、近うなりぬるをば、「押小路のほどぞ」などいふに、我も知りにけると、いつしか知られんとて、わざと呼び出でて、「碁盤侍りや、まろもうたんと思ふはいかゞ、手はゆるし給はんや。頭中將とひとし碁なり。なおぼしわきそ」といふに、「さのみあらば定めなくや」と答へしを、かの君に語り聞えければ、「嬉しく言ひたる」とよろこび給ひし。なほ過ぎたること忘れぬ人はいとをかし。宰相になり給ひしを、うへの御前にて、「詩をいとをかしう誦じ侍りしものを、蕭會稽の古廟をも過ぎにしなども、誰か言ひはべらんとする。暫しならでもさぶらへかし。口惜しきに」など申しゝかば、いみじう笑はせ給ひて、「さなんいふとて、なさじかし」など仰せられしもをかし。されどなり給ひにしかば、誠にさう〲しかりしに、源中將おとらずと思ひて、ゆゑだちありくに、宰相中將の御うへをいひ出でて、「いまだ三十の期に逮ばずといふ詩を、こと人には似ず、をかしう誦じ給ふ」などいへば、「などかそれに劣らん、まさりてこそせめ」とて詠むに、「更にわろくもあらず」と

別涙㆑珠空落云々

いそぎたる云々—三月三十日に七夕の詩を誦すればなり

葛城の神云云—拾遺、岩橋の夜の契もたえぬべし明くる佗しき葛城の神、貌醜き神なり

男は張騫—清少と齊信との暗號ならん意未詳

びしうもあるわざかな」と、「すべてこのわたりにては、かゝる事思ひまはさずいふは、口惜しきぞかし」などいひて、あまりあかくなりにしかば、「葛城の神、今ぞすぢなき」とて、わけておはしにしを、七夕のをり、この事を言ひ出でばやと思ひしかど、宰相になり給ひにしかば、必しもいかでかは、その程に見つけなどもせん、文かきて、主殿司してやらんなど思ひし程に、七日に參り給へりしかば、うれしくて、その夜の事などいひ出でば、心もぞえたまふ。すゞろにふといひたらば、怪しなどやうちかたぶき給はん。さらばそれには、ありし事いはんとてあるに、つゆおぼめかで答へ給へりしかば、實にいみじうをかしかりき。月ごろいつしかと思ひ侍りしだに、わが心ながらすき〴〵しと覺えしに、いかでさはた思ひまうけたるやうにの給ひけん。もろともにねたがり言ひし中將は、思ひもよらで居たるに、「ありし曉の詞いましめらるゝは、知らぬか」との給ふにぞ、「實にさしつ」などいひ、「男は張騫」などいふことを、人には知らせず、この君と心えていふを、「何事ぞ〳〵」と源中將はそひつきて問へど、いはねば、かの君に「猶これ

人間の四月
—白氏文集
大林寺桃花
人間四月芳
菲盡云々

露は別の涙
—菅家文草
七月七日
代ニ牛女ニ惜
レ曉、露應ニ

たまへば、七夕祭などにて、例より近う見ゆるは、ほどのせばければなゝめり。

宰相中將齊信、宣方の中將と參り給へるに、人々出でて物などいふに、ついでもなく、「明日はいかなる詩をか」といふに、いさゝか思ひめぐらし、とゞこほりなく、「人間の四月をこそは」と答へ給へる、いみじうをかしくこそ。過ぎたることなれど、心えていふはをかしき中にも、女房などこそさやうの物わすれはせね、男はさもあらず、詠みたる歌をだになまおぼえなるを、まことにをかし。内なる人も、外なる人も、心えずとおもひたるぞ理なるや。

この三月三十日、廊の一の口に、殿上人あまた立てりしを、やう〳〵すべりうせなどして、たゞ頭中將、源中將、六位ひとりのこりて、よろづのことといひ、經よみ、歌うたひなどするに、「明けはてぬなり、歸りなん」とて、露は別の涙なるべしといふことを、頭中將うち出し給へれば、源中將もろともに、いとをかしう誦じたるに、「いそぎたる七夕かな」といふを、いみじうねたがりて、曉の別のすぢの、ふと覺えつるまゝにいひて、わ

おしあげられたる―上﨟高位の
過したる―年たけたる
秋ばかり云云―詩句ならん、やかうは野郊又は野干にや

屋にのぼりたるを、これより見あぐれば、薄鈍の裳、唐衣、同じ色の單衣襲、紅の袴どもを著てのぼりたるは、いと天人などこそえいふまじけれど、空よりおりたるにやとぞ見ゆる。おなじわかさなれど、おしあげられたる人はえまじらで、うらやましげに見あげたるもをかし。日暮れてくらまぎれにぞ、過したる人々皆立ちまじりて、右近の陣へ物見に出できて、たはぶれ騒ぎ笑ふもあめりしを、「かうはせぬ事なり、上達部のつき給ひしなどに、女房どものぼり、上官などの居る障子を皆打ち通しそこなひたり」など苦しがるものもあれど、きゝも入れず。屋のいと古くて、瓦葺なればにやあらん、暑さの世に知らねば、御簾の外に夜も臥したるに、ふるき所なれば、蜈蚣といふもの、日ひと日おちかゝり、蜂の巣のおほきにて、つき集りたるなど、いとおそろしき。殿上人日ごとに參り、夜も居明し、物言ふを聞きて、「秋ばかりにや、太政官の地の、今やかうのにはとならん事を」と誦し出でたりし人こそをかしかりしか。秋になりたれど、かたへ涼しからぬ風の、所がらなゝめり。さすがに蟲の聲などは聞えたり。八日にかへらせ

心もとなし—原本ひさしに作る

はぐろめ—歯黒、原本まつはぐろめに作る、衍ならん

むべ〳〵しき—歴々の厳格なる

こす、いと心もとなし。人の歌の返し疾くすべきを、え詠み得ぬほど、いと心もとなし。懸想人などはさしも急ぐまじけれど、おのづから又さるべきをりもあり。又まして女も男も、たゞに言ひかはすほどは、疾きのみこそはと思ふほどに、あいなく僻事も出でくるぞかし。又心地あしく、物おそろしきほど、夜の明くるまつこそ、いみじう心もとなけれ。はぐろめのひる程も心もとなし。

故殿の御服の頃、六月三十日の御祓といふ事に出でさせ給ふべきを、職の御曹司は方あしとて、官のつかさのあいたる所に渡らせ給へり。その夜は、さばかり暑くわりなき闇にて、何事もせばう瓦葺にてさまことなり。例のやうに格子などもなく、唯めぐりて御簾ばかりをぞかけたる、なか〳〵珍しうをかし。女房庭におりなどして遊ぶ。前栽には萱草といふ草を、架垣ゆひていと多く植ゑたりける、花きはやかに重りて咲きたる、むべ〳〵しき所の前栽にはよし。時づかさなどは唯かたはらにて、鐘の音も例には似ず聞ゆるを、ゆかしがりて、若き人々二十餘人ばかり、そなたに行きてはしり寄り、たかき

事なりにけりとて—もはや通り過ぎぬとて、原本とての二字なし

我はさるものにて—自分がすげる場合は兎に角として

たてるが—一本たてるに

見に急ぎ出でて、事なりにけりとて、白き笞など見つけたるに、近くやりよする程、佗しうおりてもいぬべき心地こそすれ。知られじと思ふ人のあるに、前なる人に教へて物いはせたる。いつしかと待ち出でたる兒の、五十日百日などのほどになりたる、行末いと心もとなし。頓のもの縫ふに、くらきをり針に糸つくる。されど我はさるものにて、ありぬべき所をとらへて人につけさするに、それも急げばにやあらん、頓にもえさし入れぬを、「いで唯なすげそ」といへど、さすがになどてかはと思ひがほにえさらぬは、にくささへそひぬ。何事にもあれ、急ぎて物へ行くをり、まづわがさるべき所へ行くとて、「只今おこせん」とて出でぬる車待つ程こそ心もとなけれ。大路往きけるを、さなりけると喜びたれば、外ざまに往ぬるいとくちをし。まして物見に出でんとてあるに、「事はなりぬらん」などいふを聞くこそわびしけれ。子うみける人の、後のこと久しき。物見にや、又御寺まうでなどに、諸共にあるべき人を乘せに往きたるを、車さし寄せたてるが、頓にも乘らで待たするもいと心もとなく、うちすてゝも往ぬべき心地する。とみに煎炭お

だ習ひ出にて拙書なるをいふ、難波津の言の葉は手習ふ人の初(古今集序)、旁註には、和泉式部の筆もつゐゆがみてものの書かるゝは難波わたりのあしてなるらんと云ふ歌を引證して手の善惡も分れざる程といへり

には、心ことに、うへより始めてつくろはせ給へるを、集りて、戲にねたがりいふめり。琴笛ならふに、さこそはまだしき程は、かれがやうにいつしかと覺ゆめれ。うち東宮の御乳母、うへの女房の御かた〴〵ゆるされたる。三昧堂たてて、よひあかつきにいのられたる人。雙六うつに、かたきの賽きゝたる。まことに世を思ひすてたるひじり。

とくゆかしきもの

卷染、村濃、括物など染めたる。人の子産みたる、男女疾く聞かまほし。よき人はさらなり、えせもの、下種の分際だにきかまほし。除目のまだつとめて、かならずしる人のなるべきをりも聞かまほし。思ふ人のおこせたる文。

こゝろもとなきもの

人の許に、頓の物ぬひにやりて待つほど。物見に急ぎ出でて、今や〳〵とくるしう居入りつゝ、あなたをまもらへたる心地。子産むべき人の、ほど過ぐるまでさるけしきのなき。遠き所より思ふ人の文を得て、かたく封じたる續飯など放ちあくる、心もとなし。物

四たびは云云—殘る四回はいとたやすし

さがりば—髮の下げぎは

鳥の跡云々—字の拙劣なる形容、挿入句なり

なにはわたり云々—ま

さへなりて、まことにわびしう、かゝらぬ人も世にあらんものを、何しに詣でつらんとまで涙落ちてやすむに、三十餘ばかりなる女の、つぼ裝束などにはあらで、たゞ引きはこえたるが、「まろは七たびまうでし侍るぞ。三たびはまうでぬ、四たびはことにもあらず、未には下向しぬべし」と道に逢ひたる人にうち言ひて、くだりゆきしこそ、たゞなる所にては目もとまるまじきことの、かれが身に只今ならばやとおぼえしか。男も、女も、法師も、よき子もちたる人、いみじううらやまし。髪長く麗しう、さがりばなどめでたき人。やんごとなき人の、人にかしづかれ給ふも、いとうらやまし。手よく書き、歌よく詠みて、物のをりにもまづとり出でらるゝ人。よき人の御前に、女房いと數多さぶらふに、心にくき所へ遣すべき仰書などを、誰も鳥の跡などのやうにはなどかはあらん、されど下などにあるをわざと召して、御硯おろしてかゝせ給ふ、うらやまし。さやうの事は、所のおとななどになりぬれば、實になにはわたりの遠からぬも、事に隨ひて書くを、これはさはあらで、上達部のもと、又始めてまゐらんなど申さする人の女など

一の所—攝政關白
こゝろいられしたる—氣の短き、いらいらしたる

男。こはき物怪あづかりたる驗者。驗だに早くばよかるべきを、さしもなきを、さすがに人わらはれにあらじと念ずる、いとくるしげなり。理なく物うたがひする男に、いみじう思はれたる女。一の所にときめく人も、え安くはあらねど、それはよかゝめり。こゝろいられしたる人。

うらやましきもの

經など習ひて、いみじくたど〱しくて、忘れがちにて、かへす〲おなじ所を讀むに、法師は理、男も女も、くる〱とやすらかに讀みたるこそ、あれがやうに、いつの折とこそ、ふと覺ゆれ。心地など煩ひて臥したるに、うち笑ひ物いひ、思ふ事なげにて歩みありく人こそ、いみじくうらやましけれ。稲荷に思ひおこして參りたるに、中の御社のほど、わりなく苦しきを念じてのぼる程に、いさゝか苦しげもなく、後れて來と見えたる者どもの、唯ゆきにさきだちて詣づる、いとうらやまし。二月午の日の曉に、いそぎしかど、坂のなからばかり歩みしかば、巳の時ばかりになりにけり。やう〱暑く

むさくろし

あつかひ―困る、一說養ふ

手―屠蘇をまづ嘗め試みしむる童女

繡物のうら。猫の耳のうち。鼠のいまだ毛も生ひぬを、巣の中より數多まろばし出したる。裏まだつかぬかはぎぬの縫目。殊に淸げならぬ所のくらき。ことなる事なき人の、ちひさき子どもなど數多持ちてあつかひたる。いと深うしも志なき女の、心地あしうして久しく惱みたるも、男の心の中にはむつかしげなるべし。

えせものの所うるをりの事

正月の大根。行幸のをりの姬大夫。六月十二月の三十日の節折の藏人。季の御讀經の威儀師。赤袈裟著て僧の文ども讀みあげたる、いとらう〱じ。御讀經佛名などの、御裝束の所の衆。春日祭の舍人ども。大饗の所のあゆみ。正月の藥子。卯杖の法師。五節の試の御髮上。節會御陪膳の釆女。大饗の日の史生。七月の相撲。雨降る日の市女笠。渡するをりの檝取。

くるしげなるもの

夜泣といふ物する兒の乳母。思ふ人二人もちて、こなたかなたに恨みふすべられたる

そいとにくけれ。それを「まさな」とばかり打ち言ひて、取り隱さで、「さなせそ、そこなふな」とばかり笑みていふ親もにくし。われえはしたなくもいはで見るこそ心もとなけれ。

名おそろしきもの

青淵。谷の洞。鰭板。鐵。土塊。雷は名のみならず、いみじうおそろし。暴風。ふさう雲。ほこぼし。おほかみ。牛はさめ。らう。ろうの長。いにすし。それも名のみならず、みるもおそろし。繩筵。强盜、又よろづにおそろし。ひぢかさ雨。地楊梅。生靈。鬼薢。鬼蕨。荊棘。枳殼。いりずみ。牡丹。うしおに。

見るにことなることなき物の文字にかきてことごとしきもの

覆盆子。鴨頭草。みづぶき。胡桃。文章博士。皇后宮の權大夫。楊梅。いたどりはまして虎の杖と書きたるとか。杖なくともありぬべき顏つきを。

むつかしげなるもの

ほこぼし—一本ひこぼしに作る、牽牛星

ひぢかさ雨—餓雨、肘を笠にする義にや

鴨頭草—原本つゆくさに作る

むつかし—

かりの子―家鴨の卵

かなしく―いとほしく

あなたこなたに住む―父子別居する

し。いみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし。鷄の雛の、足だかに、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子。舍利の壺。瞿麥の花。

ひとばえするもの

ことなることなき人の子の、かなしくしならはされたる。しはぶき。恥しき人に物いはんとするにも、まづさきにたつ。あなたこなたに住む人の子どもの、四つ五つなるは、あやにくだちて、物など取りちらして損ふを、常は引きはられなど制せられて、心のまゝにもえあらぬが、親のきたる所えて、ゆかしかりける物を、「あれ見せよや母」などひきゆるがすに、おとななど物いふとて、ふとも聞き入れねば、手づから引き捜し出でて見るこ

も明かに知れぬ

ふり―瓜也　瓜の形卽ち瓜ざれ顏の意にや、一本、うり

紅粉―一說淸音にて繳（へニ）卽ち

いとぐろみ

あまにそぎたる―垂髮かぶ〳〵

じくにくき人の來るも　いみじくこそあれ。昨夜きたる人の、今朝の文のおそき、聞く人さへつぶる。思ふ人の文とりてさし出でたるも、またつぶる。

うつくしきもの

ふりに書きたる兒の顏。雀の子のねずなきするにをどりくる。又紅粉などつけて居ゑたれば、親雀の蟲など持て來てくゝむるも、いとらうたし。三つばかりなる兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目敏に見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の目に、髮のおほひたるを搔きは遣らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられて步くもうつくし。をかしげなる兒の、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度。蓮のうき葉のいとちひさきを、池よりとりあげて見る。葵のちひさきもいとうつくし。何も〳〵ちひさき物はいとうつくし

いやしき―一本いやしげ

人の子に―人の子及び法師子―法弟、小僧

むねつぶる―胸がどきつく

いちじるからぬ―誰と

色の衣こそきたなげなれ。

いやしげなるもの

式部丞の爵。黒き髪のすぢふとき。布屏風の新しき。舊り黒みたるは、さるいふかひなき物にて、なか〳〵何とも見えず。新しくしたてて、櫻の花多くさかせて、胡粉、朱砂など色どりたる繪書きたる。遣戸、厨子、何も田舍物はいやしきなり。筵張の車のおそひ。檢非違使の袴。伊豫簾の筋ふとき。人の子に法師子のふとりたる。まことの出雲筵の疊。

むねつぶるゝもの

競馬見る。元結よる。親などの心地あしうして、例ならぬけしきなる。まして世の中などさわがしきころ、萬の事おほえず。又物いはぬ兒の泣き入りて乳をも飲まず、いみじく乳母の抱くにも止まで、久しう泣きたる。例の所などにて、殊に又いちじるからぬ人の聲聞きつけたるはことわり、人などのそのうへなどいふに、まづこそつぶるれ。いみ

拾ひおく―石を拾ひおく
およびて―およびて腰になりて
橡のかさ―どんぐりの實の笠
つきはな―吐鼻汁

かに見ゆれ。

碁をやんごとなき人のうつとて、紐うち解き、ないがしろなるけしきに拾ひおくに、おとりたる人の、ゐずまひもかしこまりたる氣色に、碁盤よりは少し遠くて、およびつつ、袖の下いま片手にて引きやりつゝうちたるもをかし。

おそろしきもの

橡のかさ。燒けたる所。みづぶき。菱。髮おほかる男の頭洗ひてほすほど。栗のいが。

きよしと見ゆるもの

土器。新しき鋺。疊にさす薦。水を物に入るゝ透影。新しき細櫃。

きたなげなるもの

鼠の住處。翌朝手おそく洗ふ人。白きつきはな。すゝばなしありく兒。油入るゝ物。雀の子。暑きほどに久しくゆあみぬ。衣の萎えたるは、いづれも〳〵きたなげなる中に、練

に—若枝多くさして

はこえたる—上に引上げて袋の如くくゝりたる也

ほこりか—ほこり顔、得意滿面

て、蘇枋やうに見えたるに、細やかなる童の、狩衣はかけやりなどして、髪は麗しきがのぼりたれば、又紅梅の衣白きなど、ひきはこえたる男子、半靴はきたる、木のもとに立ちて、「我によき木切りて、いで」など乞ふに、又髪をかしげなる童女の、袙ども綻びがちにて、袴は萎えたれど、色などよきうち著たる、三四人、「卯槌の木のよからん切りておろせ、こゝに召すぞ」などいひて、おろしたれば、はしりがひ、とりわき、「我に多く」などいふこそをかしけれ。黒き袴著たる男走り來て乞ふに、「まて」などいへば、木のもとによりて引きゆるがすに、危ふがりて、猿のやうにかいつきて居るもをかし。梅などのなりたるをりも、さやうにぞあるかし。

清げなるをのこの、雙六を日ひと日うちて、なほ飽かぬにや、みじかき燈臺に火を明くかゝげて、敵の采をこひせめて、とみにも入れねば、筒を盤のうへにたてて待つ。狩衣の領の顔にかゝれば、片手しておし入れて、いとこはからぬ烏帽子をふりやりて、「さはいみじう呪ふとも、うちはづしてんや」と、心もとなげにうちまもりたるこそ、ほこり

めて卑近の謎なり
をここに—馬鹿氣て
しもとがち

しうなりて、いとにくく愛敬なくて、「あなたによりて、殊更にまけさせんとしけるを」など、片時のほどに思ふに、右の人をこにおもひて、うち笑ひて、「やゝさらに知らず」と、口ひきたれて猿樂しかくるに、「數させ〳〵」とてさゝせつ。「いと怪しき事、これ知らぬもの誰かあらん。更に數さすまじ」と論ずれど、「知らずといひ出でんは、などてかまくるにならざらん」とて、つぎ〳〵のも、この人に論じかたせける。いみじう人の知りたる事なれど、覺えぬ事はさこそはあれ。「何しかはえ知らずといひし」と、後に恨みられて、罪さりける事を語り出でさせ給へば、御前なるかぎりは、さは思ふべし。「口をしく思ひけん、こなたの人の心地聞し召したりけん、いかににくかりけん」など笑ふ。これは忘れたることかは、皆人知りたることにや。

正月十日、空いとくらう、雲も厚く見えながら、さすがに日はいとけざやかに照りたるに、えせものの家の後、荒畠などいふものの、土もうるはしうあをからぬに、桃の木わかだちて、いとしもとがちにさし出でたる、片つ方は青く、いま片枝は濃くつやゝかに

人のなぞなぞ云々―以下罪さりける事まで中宮の御物語を間接に敍したるなり

たのむる―他をして己を頼みに思はしむる

天にはり弓―弦月即ち三日月、極

し。童に教へられしことばなど啓すれば、いみじく笑はせ給ひて、「さる事ぞ、あまりあなづるふる事は、さもありぬべし」など仰せられて、ついでに、人のなぞ〳〵あはせしける所に、「かたくなにはあらで、さやうの事にらう〳〵じかりけるが、「左の一番はおのれいはん、さ思ひ給へ」などたのむるに、さりともわろき事は言ひ出でじと選り定むるに、「その詞を聞かん、いかに」など問ふ。「唯まかせてものし給へ、さ申していと口惜しうはあらじ」といふを、實にと推しはかる。日いと近うなりぬれば、「なほこの事のたまへ、非常にをかしき事もこそあれ」といふを、「いさ知らず。さらばなたのまれそ」などむつかれば、覺束なしと思ひながら、その日になりて、みな方人の男女居分けて、殿上人など、よき人々多く居並みてあはするに、左の一番にいみじう用意しもてなしたるさまの、いかなる事をか言ひ出でんと見えたれば、あなたの人も、こなたの人も、心もとなく打ちまもりて、「なぞ〳〵」といふほど、いと心もとなし。「天にはり弓」といひ出でたり。右の方の人は、いと興ありと思ひたるに、こなたの方の人は、物もおぼえずあさま

り、關係あり等の義

いはで思ふぞ—古今六帖、心には下ゆく水のわき返りいはで思ふぞいふにまされる

まづ知るさま—まづ涙ぐむ樣子、古今集、まづしろ物は涙なりけり

給はず、山吹の花びらを唯一つ包ませたまへり。それに「いはで思ふぞ」と書かせ給へるを見るもいみじう、日ごろの絶間思ひ歎かれつる心も慰みて嬉しきに、まづ知るさまを長女も打ちまもりて、「御前にはいかに、物のをりごとに思し出で聞えさせ給ふなるものを」とて、「誰も怪しき御ながゐとのみこそ侍るめれ。などか參らせ給はぬ」などいひて、「こゝなる所に、あからさまにまかりて參らん」といひていぬる後に、御返事書きてまゐらせんとするに、この歌のもと更に忘れたり。「いとあやし。同じふる事といひながら、知らぬ人やはある。こゝもとに覺えながら、言ひ出でられぬはいかにぞや」などいふを聞きて、ちひさき童の前に居たるが、「下ゆく水のとこそ申せ」といひたる。などてかく忘れつるならん。これに敎へらるゝもをかし。御かへりまゐらせて、少しほど經て參りたり。いかゞと、例よりはつゝましうて、御凡帳にはたかくれたるを、「あれは今參か」など笑はせ給ひて、「にくき歌なれど、このをりは、さも言ひつべかりけりとなん思ふを、見つけでは暫時えこそ慰むまじけれ」などの給はせて、かはりたる御氣色もな

いさ―否、いやなに

おいらかにも―この語の下にあれかしと補ふ、心を廣く持て

左大臣の云云―清少が道長方に心を通ずる由に傍輩の私語き合ふ也

しるは緣あ

覺えつるかな。御里居いと心憂し。かゝる所に住居せさせ給はんほどは、いみじき事ありとも、必侍ふべき物に思し召されたるかひもなくなど、あまた言ひつる。語りきかせ奉れとなめりかし。參りて見給へ。あはれげなる所のさまかな。露臺の前に植ゑられたりける牡丹の、唐めきをかしき事」などの給ふ。「いさ人のにくしと思ひたりしかば、又にくく侍りしかば」と答へ聞ゆ。「おいらかにも」とて笑ひ給ふ。實にいかならんと思ひまゐらする御氣色にはあらで、さぶらふ人たちの、「左大殿のかたの人しるすぢにてあり」などさゝめき、さし集ひて物などいふに、下より參るを見ては言ひ止み、はなち立てたるさまに見ならはずにくければ、「まゐれ」などあるたびの仰をも過して、實に久しうなりにけるを、宮の邊には、唯彼方がたになして、虚言なども出で來べし。例ならず仰事などもなくて、日頃になれば、心細くて打ちながむる程に、長女文をもてきたり。「御前より左京の君して、忍びて賜はせたりつる」といひて、こゝにてさへひき忍ぶもあまりなり。人傳の仰事にてあらぬなめりと、胸つぶれてあけたれば、かみには物もかゝせ

たゆみつるに—油断して居たるに
故殿—關白道隆

りしものかな。さしもや有らざらんと打ちたゆみつるに、舞人前に召すを聞きつけたる心地、物にあたるばかり騒ぐもいと物ぐるほしく、下にある人々まどひのぼるさまこそ、人の從者、殿上人などの見るらんも知らず、裳を頭にうちかづきてのぼるを、笑ふもことわりなり。

故殿などおはしまさで、世の中に事出でき、物さわがしくなりて、宮又うちにもいらせ給はず、小二條といふ所におはしますに、何ともなくうたてありしかば、久しう里に居たり。御前わたりおぼつかなさにぞ、猶えかくてはあるまじかりける。左中將おはして物語し給ふ。「今日は宮にまゐりたれば、いみじく物こそあはれなりつれ。女房の裝束、裳唐衣などの折にあひ、たゆまずをかしうても侍ふかな。御簾のそばのあきたるより見入れつれば、八九人ばかり居て、黄朽葉の唐衣、薄色の裳、紫苑、萩などをかしう居なみたるかな。御前の草のいと高きを、などかこれは茂りて侍る。はらはせてこそといひつれば、露おかせて御覽ぜんとて殊更にと、宰相の君の聲にて答へつるなり。をかしくも

ろものにや
才の男―御神樂の歌人也(和訓栞)

あンなる―その靈を祀りてある

渡るを見るに、飽かねば、御社まで行きて見るをりもあり。大なる木のもとに車たてたれば、松の烟たなびきて、火のかげに半臂の緒、きぬのつやも、晝よりはこよなく勝りて見ゆる。橋の板を踏みならしつゝ、聲合せて舞ふ程もいとをかしきに、水の流るゝ音、笛の聲などの合ひたるは、實に神も嬉しとおぼしめすらんかし。

少將といひける人の、年ごとに舞人にて、めでたきものに思ひしみけるに、なくなりて、上の御社の一の橋のもとにあンなるを聞けば、ゆゝしう、せちに物おもひいれじと思へど、猶このめでたき事をこそ、更にえ思ひすつまじけれ。

「八幡の臨時の祭の名殘こそいとつれ〴〵なれ。などてかへりて又舞ふわざをせざりけん、さらばをかしからまし。祿を得て後よりまかゝづるこそ口惜しけれ」などいふを、うへの御前に聞し召して、「明日かへりたらん、めして舞はせん」など仰せらるゝ。「實にやさふらふらん、さらばいかにめでたからん」など申す。うれしがりて、宮の御前にも、「猶それまはせさせ給へ」と集りて申しまどひしかば、そのたびかへりて舞ひしは、嬉しか

竹―呉竹臺

うちたるきぬ―打衣とて、糊附の布を打ち光澤を出した

ろひ、冠袍の領などつくろひて、あやもなきこま山などうたひて舞ひ立ちたるは、すべていみじくめでたし。大比禮など舞ふは、日一日見るとも飽くまじきを、終てぬるこそいと口惜しけれど、又あるべしと思ふはたのもしきに、御琴かきかへして、このたびやがて竹の後から舞ひ出でて、ぬぎ垂れつるさまどものなまめかしさは、いみじくこそあれ。搔練の下襲など亂れあひて、こなたかなたにわたりなどしたる、いで更にいへば世の常なり。このたびは又もあるまじければにや、いみじくこそ終てなん事は口惜しけれ。上達部なども、つゞきて出で給ひぬれば、いとさう〴〵しう口をしきに、賀茂の臨時の祭は、還立の御神樂などにこそなぐさめらるれ。庭燎の烟の細うのぼりたるに、神樂の笛のおもしろうわなゝき、ほそう吹きすましたるに、歌の聲もいとあはれに、いみじくおもしろく、寒くさえ氷りて、うちたるきぬもいとつめたう、扇もたる手のひゆるもおぼえず。

才の男ども召して飛びきたるも、人長の心よげさなどこそいみじけれ。里なる時は、唯

どかにて、うら〳〵とあるに、清涼殿の御前の庭に、掃部司のたゝみどもを敷きて、使は北おもてに、舞人は御前のかたに、これらは僻事にもあらん。所の衆ども、衝重どもとりて前ごとに居ゑわたし、陪従もその日は御前に出で入るぞかし。公卿殿上人は、かはる〴〵盃とりて、はてにはやくがひといふ物、男などのせんだにうたてあるを、御前に女ぞ出でて取りける。思ひかけず人やあらんとも知らぬに、火焼屋よりさし出でて、多く取らんと騒ぐものは、なか〳〵うちこぼしてあつかふ程に、かろらかにふと取り出でぬるものには遅れて、かしこき納殿に、火焼屋をして、取り入るゝこそをかしけれ。掃部司のものども、たゝみとるやおそきと、主殿司の官人ども、手ごとに箒とり、すなごならす。承香殿の前のほどに、笛を吹きたて、拍子うちて遊ぶを、疾く出でこなんと待つに、有度濱うたひて、竹のませのもとに歩み出でて、御琴うちたる程など、いかにせんとぞ覺ゆるや。一の舞のいとうるはしく袖をあはせて、二人はしり出でて、西に向ひて立ちぬ。つぎ〳〵出づるに、足踏を拍子に合せては、半臂の緒つく

所—藏人所
陪從—舞人に從へる地下のもの
やくがひ—青螺の盃、屋久島の産
かしこき云云—火燒屋を納殿にして也、納殿は重器所藏の所なればかしこきといふ

つれ〴〵なぐさむるもの

物語。碁。雙六。三四ばかりなる兒の物をかしういふ。又いとちひさき兒の物語したるが、笑みなどしたる。菓子。男のうちさるがひ、物よくいふがきたるは、物忌なれどいれつかし。

とりどころなきもの

かたちにくげに心あしき人。みそひめの濡れたる。これいみじうわろき事いひたると、萬の人にくむなることとて、今とゞむべきにもあらず。又あとびの火箸といふ事、などてか、世になき事ならねば、皆人知りたらん。實に書きいで人の見るべき事にはあらねど、この草紙を見るべきものと思はざりしかば、怪しき事をも、にくき事をも、唯思はん事のかぎりを書かんとてありしなり。

なほ世にめでたきもの

臨時の祭の御前ばかりの事は、何事にかあらん。試樂もいとをかし。春は空のけしきの

—常に居る所を去りて他に行きたる

さるがひ—滑稽にて、道戯て

みそひめ—御衣ひめのり

あとび—跡火、葬禮の送り火

そは―見えし料紙にこそは

所さりたる

ほゝゑませ給ひて、今一すぢ御厨子のもとなりけるを、取り出でさせ給へれば、「いであな心う、これおほされよ、あな頭いたや、いかで聞き侍らん」と、たゞせめに責め申して、恨み聞えて笑ひ給ふに、やう〳〵仰せられ出でて、「御使にいきたりける鬼童は、臺盤所の刀自といふものの供なりけるを、小兵衛が語ひ出したるにやありけん」など仰せらるれば、宮も笑はせ給ふを、引きゆるがし奉りて、「などかく謀らせおはします。なほうたがひもなく、手を打ち洗ひて伏し拜み侍りしことよ」と笑ひねたがり居給へるさまも、いとほこりかに愛敬づきてをかし。さてうへの臺盤所にも笑ひのゝしりて、局におりて、この童尋ね出でて、文取り入れし人に見すれば、「それにこそ侍るめれ」といふ。「誰が文を、誰がとらせしぞ」といへば、しれ〴〵とうち笑みて、ともかくもいはで走りにけり。藤大納言後に聞きて、笑ひ興じ給ひけり。

つれ〴〵なるもの

所さりたる物忌。馬おりぬ雙六。除目に官得ぬ人の家。雨うち降りたるはましてつれ〴〵なり。

ろ經の巻數を記し附けたる紙
しひしばの袖―四位の異名、歌は藤三位の四位より三位に加階せるをいへる也

見えしにこ

じげなるが手にて、

　これをだにかたみと思ふに都には葉がへやしつるしひしばの袖

とかきたり。あさましくねたかりけるわざかな。誰がしたるにかあらん。仁和寺の僧正のにやと思へど、よもかゝる事のたまはじ。なほ誰ならん。藤大納言ぞかの院の別當におはせしかば、そのし給へる事なめり。これをうへの御前、宮などに、疾うきこしめさせばやと思ふに、いと心もとなけれど、なほ恐しう言ひたる物忌をしはてんと念じくらして、まだつとめて、藤大納言の御許に、この御返しをしてさしおかせたれば、すなはち又返事しておかせ給へりけり。それを二つながら取りて、急ぎ參りて、「かゝる事なん侍りし」と、うへもおはします御前にて語り申し給ふを、宮はいとつれなく御覽じて、「藤大納言の手のさまにはあらで、法師にこそあめれ」との給はすれば、「さはこは誰がしわざにか。すき〲しき上達部、僧綱などは誰かはある。それにやかれにや」など、おぼめきゆかしがり給ふに、うへ「このわたりに見えしにこそは、いとよく似たゝめれ」と打ち

花の衣に―遍昭、皆人は花の衣になりぬなり苔の袂よ乾きだにせよ

卷數―寺にて經供養するに讀みた

で聞ゆ。翌朝、いと疾く、少納言の命婦といふが御文まゐらせたるに、この事を啓したれば、しもなるを召して、「さる事やありし」と問はせ給へば、「知らず、何とも思はでいひ出で侍りしを、行成の朝臣のとりなしたるにや侍らん」と申せば、「とりなすとても」と打ち笑ませ給へり。誰が事をも、殿上人譽めけりと聞かせ給ふをば、さ言はるゝ人をよろこばせ給ふもをかし。

圓融院の御はての年、皆人御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけより始めて、院の人も、花の衣になどいひけん世の御事など思ひ出づるに、雨いたう降る日、藤三位の局に、蓑蟲のやうなる童の、大なる木のしろきにたて文をつけて、「これ奉らん」といひければ、「いづこよりぞ、今日明日御物忌なれば、御蔀もまゐらぬぞ」とて、しもは立てたる蔀のかみより取り入れて、さなんとはきかせ奉らず、「物忌なればえ見ず」とて、上についさして置きたるを、つとめて手洗ひて、「その卷數」とこひて、伏し拜みてあけたれば、胡桃色といふ色紙の厚肥えたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老法師のいみ

このきみ―竹の異名、晉の王子猷の故事

この君と稱す―朗詠に出でたる藤篤茂の詩序の詞

をかしがれば―一說をかしかれば

呉竹の枝なりけり。「おい、このきみにこそ」といひたるを聞きて、「いざや、これ殿上に行きて語らん」とて、中將、新中將、六位どもなどありけるはいぬ。頭辨はとまり給ひて、「怪しくいぬるものどもかな。御前の竹ををりて歌よまんとしつるを、職にまゐりて、同じくば、女房など呼び出でてをと言ひてきつるを、呉竹の名をいと疾くいはれて、いぬるこそをかしけれ。誰が敎をしりて、人のなべて知るべくもあらぬ事をばいふぞ」などのたまへば、「竹の名とも知らぬものを、なまねたしとや思しつらん」といへば、「實ぞえ知らじ」などの給ふ。まめごとなど言ひ合せて居給へるに、この君と稱すといふ詩を誦して、又集り來れば、「殿上にていひ期しつる本意もなくては、などかへり給ひぬるぞ。いと怪しくこそありつれ」との給へば、「さる事には何の答をかせん。いとなかなかならん。殿上にても言ひのゝしりつれば、うへも聞しめして、興ぜさせ給ひつる」とかたる。辨もろともに、かへすがへす同じ事を誦じて、いとをかしがれば、人々出でて見る。とりどりに物ども言ひかはして歸るとて、なほ同じ事を諸聲に誦じて、左衞門の陣に入るま

—清少の詞

思へど—一本思へに作る

思ふ人の中に—私があなたの思ふ人の數の中に

御文はいみじく隱して、人につゆ見せ侍らぬ志のほどをくらぶるに、ひとしうこそは」といへば、「かう物思ひしりていふこそ、なほ人々には似ず思へど、思ひ隈なくあしうしたりなど、例の女のやうにいはんとこそ思ひつるに」とて、いみじう笑ひ給ふ。「こはなぞ、よろこびをこそ聞えめ」などいふ。「まろが文をかくし給ひける、又猶うれしきことなり、いかに心憂くつらからまし。今よりもなほ賴み聞えん」などの給ひて、後に經房の中將。「頭辨はいみじう譽め給ふとは知りたりや。一日の文のついでに、ありし事など語り給ふ。思ふ人々の譽めらるゝは、いみじく嬉しく」など、まめやかにの給ふもをかし。「うれしきことも二つにてこそ。かの譽めたまふなるに、また思ふ人の中に侍りけるを」などいへば、「それはめづらしう、今の事のやうにもよろこび給ふかな」との給ふ。

五月ばかりに、月もなくいとくらき夜、「女房やさぶらひ給ふ」と、こゑ〴〵していへば、「出でて見よ。例ならずいふは誰ぞ」と仰せらるれば、出でて、「こは誰ぞ。おどろ〴〵しうきはやかなるは」といふに、物もいはで、御簾をもたげて、そよろとさし入るゝは、

孟嘗君—史記列傳に出でたり

さてその文—行成の詞めでたき事

きかさねて、「後のあしたは殘り多かる心地なんする。夜を通して昔物語も聞え明さんとせしを、鷄の聲に催されて」と、いといみじう淸げに、裏表に事多く書き給へる、いとめでたし。御返に、「いと夜深く侍りける鷄のこゑは、孟嘗君のにや」ときこえたれば、たちかへり、「孟嘗君の鷄は、函谷關を開きて、三千の客僅にされりといふは、逢阪の關の事なり」とあれば、

夜をこめて鳥のそらねははかるとも世にあふ阪の關はゆるさじ

心かしこき關守侍るめりと聞ゆ。立ちかへり、

逢阪は人こえやすき關なれば鳥も鳴かねどあけてまつとか

とありし文どもを、はじめのは、僧都の君の額をさへつきて取り給ひてき。後々のは御前にて、「さて逢阪の歌はよみへされて、返しもせずなりにたる、いとわろし」と笑はせ給ふ。「さてその文は、殿上人皆見てしは」との給へば、實に覺しけりとは、これにてこそ知りぬれ。「めでたき事など人のいひ傳へぬは、かひなき業ぞかし。また見苦しければ、

さらなり―勿論也
いかでか―契ある身となりては如何で譽むるを得んと也

おのづからあふ所にては、「などかまろを、まほに近くは語ひ給はぬ。」さすがににくしなど思ひたるさまにはあらずと知りたるを、いと怪しくなん。さばかり年ごろになりぬる得意の、疎くてやむはなし。殿上などに明暮なきをりもあらば、何事をかおもひでにせん」との給へば、「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらん後には、え譽め奉らざらんが口惜しきなり。うへの御前などにて、役とあつまりて譽め聞ゆるに、いかでか。たゞおほせかし。かたはらいたく、心の鬼いで來て、言ひにくく侍りなんものを」といへば、笑ひて、「などさる人しも、他目より外に、譽むるたぐひ多かり」との給ふ。「それがにくからずばこそあらめ。男も女も、けぢかき人をかたひき、思ふ人のいさゝかあしき事をいへば、腹だちなどするが、わびしう覺ゆるなり」といへば、「たのもしげなの事や」との給ふもをかし。

頭辨の職にまゐり給ひて、物語などし給ふに、夜いと更けぬ。「明日御物忌なるにこもるべければ、丑になりなば惡しかりなん」とてまゐり給ひぬ。つとめて、藏人所の紙屋紙ひ

夜居の僧の—此下に寐たらんはと補ふ

月と秋と—和漢朗詠集菅三品の句

けうのこと—希有の事又は興の事

もなぞ、あしぎぬ、もしはさやうのものは、足ぶくろなどもいへかし」など、萬の事をいひのゝしるを、「いであなかしがまし、今はいはじ、寐給ひね」といふ答に、「夜居の僧のいとわろからん、夜ひと夜こそ猶のたまはめ」と、にくしと思ひたる聲ざまにていひ出でたりしこそ、をかしかりしにそへて驚かれにしか。

故殿の御ために、月ごとの十日、御經佛供養せさせ給ひしを、九月十日、職の御曹司にてせさせ給ふ。上達部、殿上人いとおほかり。清範講師にて、説く事どもいとかなしければ、殊に物のあはれふかゝるまじき若き人も、皆泣くめり。終てて酒のみ詩誦じなどするに、頭中將齊信の君、月と秋と期して身いづくにかといふ事をうち出し給へりしかば、いみじうめでたし。いかでかは思ひいで給ひけん。おはします所に分け參るほどに、立ち出でさせ給ひて、「めでたしな。いみじうけうの事にいひたる事にこそあれ」とのたまはすれば、「それを啓しにとて、物も見さして參り侍りつるなり。猶いとめでたくこそ思ひはべれ」と聞えさすれば、「まして覺ゆらん」と仰せらるゝ。わざと呼びもいで、

戻道、一説冷淡の音便

事どもを―事どもよ

につけて奉るを、すなはちおはしまして、「下部さぶらふ」との給へば、出でたるに、「さやうのものぞ、歌よみして遣せ給へると思ひつるに、美々しくもいひたりつるかな。女少しわれはと思ひたるは、歌よみがましくぞある。さらぬこそ語ひよけれ。まろなどにさる事いはん人は、かへりて無心ならんかし」との給ふ。「則光、成康など、笑ひて止みにし事を、殿の前に人々いと多かりけるに、語りまをしたまひければ、いとよく言ひたるとなんの給はせし」と人の語りし。これこそ見苦しき我ぼめどもなりかし。「などてつかさえはじめたる六位笏に、職の御曹司のたつみの隅の築地の板をせしぞ、更に西東をもせよかし、又五位もせよかし」などいふことを言ひ出でて、「あぢきなき事どもを。衣などにすゞろなる名どもをつけけん、いとあやし。衣の名に、ほそながをばさもいひつべし。なぞ汗衫は、しりながといへかし。男の童の著るやうに。なぞからぎぬは、みじかきぎぬとこそいはめ。されどそれは、唐土の人の著るものなれば。うへのきぬの袴、さいふべし。下襲もよし。また大口、長さよりは口ひろければ。袴いとあぢきなし。指貫

讀を例とす

解文—舊説花文といへるは不可、願書目錄などの如く態と事々しく書ける也

うるはし—中宮のお召と思ひ威儀を整へ來るなり

れいたう—

いふものを、二つ竝べてつゝみたるなりけり。添へたるたて文に、解文のやうに書きて、「進上餅餤一つゝみ、例によりて進上如件、少納言殿に」とて、月日かきて、「任那成行」とて、奥に、「この男はみづから參らんとするを、晝はかたちわろしとてまゐらぬなり」と、いみじくをかしげに書き給ひたり。御前に參りて御覽ぜさすれば、「めでたくもかゝれたるかな。をかしうしたり」など譽めさせ給ひて、御文はとらせ給ひつ。「返事はいかがすべからん。この餅餤もてくるには、物などやとらすらん。知りたる人もがな」といふを聞しめして、「惟仲が聲しつる、呼びて問へ」との給はすれば、はしに出でて、「左大辨にもの聞えん」と、侍していはすれば、いとよくうるはしうてきたり。「あらず、私事なり。もしこの辨少納言などのもとに、かゝる物もてきたる下部などには、することやある」と問へば、「さる事も侍らず、唯とゞめてくひ侍る。何しに問はせ給ふ。もし上官のうちにて、えさせ給へるか」といへば、「いかゞは」と答ふ。唯返しをいみじう赤き薄樣に、「みづから持てまうでこぬ下部は、いとれいたうなりとなん見ゆる」とて、めでたき紅梅

つめど―摘むに抓れるを掛く、又みゝなに耳無し、菊に聞くを掛けし洒落

定考―六位以下の考課選敍也、反

がりたる、いみじういとをかしといひたる、こと人の心地には、つゆをかしからじと思ふこそ又をかしけれ。

七日の若菜を、人の六日にもてさわぎとりちらしなどするに、見も知らぬ草を、子供の持てきたるを、「何とか是をばいふ」といへど、頓にもいはず。「いざ」など此彼見合せて、「みゝな草となんいふ」といふ者のあれば、「うべなりけり、聞かぬ顔なるは」など笑ふに、又をかしげなる菊の生ひたるを持てきたれば、

つめどなほみゝな草こそつれなけれあまたしあれば菊もまじれり

といはまほしけれど、聞き入るべくもあらず。

二月官廳に、定考といふ事するは何事にあらん。釋奠もいかならん。孔子などは掛け奉りてする事なるべし。聰明とて、上にも宮にも、怪しき物など土器に盛りてまゐらする。「頭辨の御許より」とて、主殿司、繪などやうなる物を、白き色紙につゝみて、梅の花のいみじく咲きたるにつけてもてきたり。繪にやあらんと急ぎ取り入れて見れば、餅餤と

―道長
居させ―下座し
くすしがり―奇特に
羅文―立蔀板垣などの上に✕の如く細き木を菱形に組みたるもの

ふまじきなゝめりと見る程に、少し歩み出でさせ給へば、ふと居させ給ひしこそ、猶いかばかりの昔の御行のほどならんと見奉りしこそいみじかりしか。中納言の君の忌の日とて、くすしがり行ひ給ひしを、「たべ、その珠數しばし。行ひてめでたき身にならんとか」とて集りて笑へど、なほいとこそめでたけれ。御前に聞しめして、「佛になりたらんこそ、これよりは勝らめ」とて打ち笑ませ給へるに、又めでたくなりてぞ見まゐらする。大夫殿の居させ給へるを、かへす〴〵聞ゆれば、「例の思ふ人」と笑はせ給ふ。ましてこの後の御ありさま、見奉らせ給はましかば、理とおぼしめされなまし。

九月ばかり、夜一夜降りあかしたる雨の、今朝はやみて、朝日の花やかにさしたるに、前栽の菊の露、こぼるばかりぬれかゝりたるも、いとをかし。透垣、羅文、薄などの上にかいたる蜘蛛の巣の、こぼれ殘りて、所々に糸も絶えざまに雨のかゝりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなりつるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も手ふれぬに、ふと上樣へあ

そのつぎつぎさらぬ人人—其弟、及び兄弟ならぬ人々

宮の大夫殿

て、御輿のもとにて奏し給ひし程、いふも愚なりや。さてうち渡らせ給ふを見奉らせ給ふらん女院の御心、思ひやりまゐらするは、飛び立ちぬべくこそ覺えしか。それには長泣をして笑はるゝぞかし。よろしききはの人だに、なほこの世にはめでたきものを、かうだに思ひまゐらするもかしこしや。

關白殿の黑戸より出でさせ給ふとて、女房の廊に隙なくさぶらふを、「あないみじの御許だちや、翁をばいかにをこなりと笑ひ給ふらん」と分け出でさせ給へば、戸口に人々の、色々の袖口して御簾を引き上げたるに、權大納言殿、御沓取りてはかせ奉らせ給ふ。いとも〳〵しうきよげに、よそほしげに、下襲の裾ながく、所狹くさぶらひ給ふ。まづあなめでた、大納言ばかりの人に沓をとらせ給ふよと見ゆ。山井の大納言、そのつぎつぎ、さらぬ人々、くろきものをひきちらしたるやうに、藤壺のへいのもとより、登華殿の前まで居竝みたるに、いとほそやかにいみじうなまめかしうて、御太刀など引きつくろひやすらはせ給ふに、宮の大夫殿の、清涼殿の前にたゝせ給へれば、それは居させ給

はしたなき—きまりの悪い

ふつと—ふつつりと、全く

こぼるれば—涙が也

申し—取次ぎて啓し

他人(こゝびと)を呼ぶに、我もとてさし出でたるもの。まして物とらするをりはいとゞ。おのづから人のうへなどうち言ひ誹(そし)りなどもしたるを、幼(をさな)き人の聞き取りて、その人のあるまへにいひ出でたる。あはれなる事など人のいひてうち泣くに、實(げ)にいとあはれとは聞きながら、涙のふつと出でこぬ、いとはしたなし。泣顔つくり、けしきことになせど、いとかひなし。めでたき事を聞くには、又すゞろに唯いできにこそ出でくれ。八幡(やはた)の行幸(みゆき)のかへらせ給ふに、女院御棧敷(にようゐんおんさじき)のあなたに御輿(みこし)を留めて、御消息(おんせうそこ)申させ給ひしなど、いみじくめでたく、さばかりの御有様にて、かしこまり申させ給ふが、世に知らずいみじきに、誠にこぼるれば、化粧(けさう)したる顔も皆あらはれて、いかに見苦しかるらん。宣旨(せんじ)の御使(つかひ)にて、齊信(たゞのぶ)の宰相中將(さいしやうちうじやう)の御棧敷に參り給ひしこそ、いとをかしう見えしか。たゞ隨身(ずゐじん)四人(よたり)、いみじうさうぞきたる、馬ぞひのほそうしたてたるばかりして、二條の大路(おほぢ)、廣うきよらにめでたきに、馬をうちはやして急ぎ參りて、少し遠くよりおりて、そばの御簾(みす)の前に侍ひ給ひし、院の別當(べつたう)ぞ申し給ひし。御返し承りて、又はしらせ歸り參り給ひ

もどき―非難し

たゞにもあらず―懷妊

うしろ手―うしろ姿

心と―己が心から

狛犬しく―狛犬めきて、狛犬は今の獅子舞

も思はぬも、いかなる心ぞとこそあさましけれ。さすがに人のうへをばもどき、物をいとよくいふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕の人などをかたらひて、たゞにもあらずなりたる有樣などをも、知らでやみぬるよ。

むごくなるもの

潮干の潟なる大なる船。髪みじかき人の、かづらとりおろして髪けづるほど。大なる木の風に吹きたふされて、根をさゝげてよこたはれふせる。相撲のまけているうしろ手。えせものの從者かんがふる。翁の髻はなちたる。人の妻なッどの、すゞろなる物怨じして隱れたるを、かならず尋ねさわがんものをと思ひたるに、さしも思ひたらず、ねたげにもてなしたるに、さてもえ旅だち居たらねば、心と出できたる。狛犬しく舞ふものの、おもしろがりはやり出でて踊る足音。

修法は、佛眼眞言など讀みたてまつりたる、なまめかしうたふとし。

はしたなきもの

いさとき—目ざとき、
たのむる—頼ましむ、契る

男の心のうち。いさとき夜居の僧。密盗人のさるべき隈に隠れ居て、いかに見るらんを、誰かはしらん、暗きまざれに、懐に物引き入るゝ人もあらんかし。それは同じ心にをかしとや思ふらん。夜居の僧は、いとはづかしきものなり。若き人の集りては、人のうへをいひ笑ひ、謗り憎みもするを、つく〴〵と聞き集むる心のうちもはづかし。「あなうたて、かしがまし」など、御前近き人々の物けしきばみいふを聞き入れず、いひ〳〵てのはては、うち解けてねぬる後もはづかし。男はうたて思ふさまならず、もどかしう心づきなき事ありと見れど、さし向ひたる人をすかし、たのむるこそ恥しけれ。まして情あり、このましき人に知られたるなどは、愚なりと思ふべくももてなさずかし。心のうちにのみもあらず。又皆これが事はかれに語り、かれが事はこれに言ひきかすべかゝめるを、我が事をば知らで、かく語るをば、こよなきなゝめりと思ひやすらんと思ふこそ恥しけれ。いであはれ、又あはじと思ふ人に逢へば、心もなきものなゝめりと見えて、恥しくもあらぬものぞかし。いみじくあはれに、心苦しげに見すてがたき事などを、いさゝか何事と

はりむしろ―雨覆の筵

出居の少將―恒例の儀式に弓箭を執り主上出御に警蹕する役

人などの、我をばおほさず、「某こそ只今時の人」などいふをほのきゝたる。人よりは少しにくしと思ふ人の、おしはかりごとうちし、すゞろなる物怨し、われさかしがる。

わびしげに見ゆるもの

六七月の午未の時ばかりに、穢げなる車にえせ牛かけて、ゆるがし行くもの。雨ふらぬ日はりむしろしたる車。降る日はりむしろせぬも。年老いたる乞兒。いと寒きをりも、暑きにも、下種女のなりあしきが子を負ひたる。ちひさき板屋の黒うきたなげなるが、雨にぬれたる。雨のいたく降る日、ちひさき馬に乗りて前駈したる人の、かうぶりもひしげ、袍も下襲もひとつになりたる、いかにわびしからんと見えたり。夏はされどよし。

あつげなるもの

随身の長の狩衣。衲の袈裟。出居の少將。いみじく肥えたる人の髪おほかる。琴の袋。六七月の修法の阿闍梨。日中の時など行ふ。又おなじころの銅の鍛冶。

はづかしきもの

頃は菓子など入れたるにや
さぞかし―其人ぞかし

こゝろづきなき―氣にくはぬ、此條は前後の條と重複せり衍文にや

など折らせて、侍めきて、細やかなるものなど具して、金鼓うつこそをかしけれ。さぞかしと見ゆる人あれど、いかでかは知らん。打ち過ぎていぬるこそ、さすがにさう〳〵しけれ。「氣色を見せましものを」などいふもをかし。かやうにて寺ごもり、すべて例ならぬ所に、つかふ人のかぎりしてあるは、かひなくこそ覺ゆれ。猶おなじほどにて、一つ心にをかしき事も、さま〳〵いひ合せつべき人、かならず一人二人、あまたも誘はまほし。そのある人の中にも、口をしからぬもあれども、目馴れたるなるべし。男などもさ思ふにこそあめれ。わざと尋ね呼びもてありくめるはいみじ。

こゝろづきなきもの

祭、御禊など、すべて男の見る物見車に、たゞ一人乘りて見る人こそあれ。いかなる人にかあらん。やんごとながらずとも、わかき男どもの物ゆかしと思ひたるなど、引きのせて見よかし。すきかげに唯一人かゞよひて、心ひとつにまもり居たらんよ、いかばかり心せばく、けにくきならんとぞ覺ゆる。物へもいき、寺へもまうづる日の雨。つかふ

み寐ぬる耳に、その寺の佛經を、いとあら〳〵しう、高くうち出でて讀みたるに、わざとたふとしともあらず。修行者だちたる法師のよむなゝめりと、ふとうち驚かれて、あはれに聞ゆ。また夜などは、顔知らで、人々しき人の行ひたるが、青鈍の指貫のはたばりたる、白き衣どもあまた著て、子どもなゝめりと見ゆる若き男の、をかしううちさうぞきたる、童などして、さぶらひの者ども、あまたかしこまり圍遶したるもをかし。かりそめに屏風たてて、額などすこしつくめり。顔知らぬは誰ならんといとゆかし。知りたるは、さなゝめりと見るもをかし。若き人どもは、とかく局どもなどの邊にさまよひて、佛の御かたに目見やり奉らず、別當など呼びて、打ちさゝめき物語して出でぬる、えせものとは見えずかし。二月晦日、三月朔日ごろ、花盛に籠りたるもをかし。清げなる男どもの、忍ぶと見ゆる二三人、櫻青柳などをかしうて、くゝりあげたる指貫の裾も、あてやかに見なさるゝ、つきづきしき男に、裝束をかしうしたる餌袋いだかせて、小舍人童ども、紅梅萌黄の狩衣に、いろ〳〵のきぬ、摺りもどろかしたる袴など著せたり。花

はたばり——巾廣き

童などして——一本童など具して

餌袋——もと鷹狩などの用なれど此

たゞなる折―平素

ほうと―立つる音、巻きて立つるなり

これならん―一本たれならん

やんごとなき所の名うちいひて、「御産たひらかに」など教化などしたる、すゞろにいかならんと覺束なく念ぜらるゝ。これはたゞなる折の事なゝめり。正月などには、唯いと物さわがしく、物のぞみなどする人の隙なく詣づる見るほどに、行もしやられず。日のうち暮るゝにまうづるは、籠る人なゝめり。小法師ばらの、もたぐべくもあらぬ屛風などの高き、いとよく進退し、疊などほうとたておくと見れば、たゞ局に出でて、犬ふせぎに簾垂をさら〱とかくるさまなどぞいみじく、しつけたるは安げなり。そよ〱とあまたおりて、大人だちたる人の、いやしからず、忍びやかなる御けはひにて、かへる人にやあらん、「そのうちあやふし。火の事制せよ」などいふもあり。七つ八つばかりなる男子の、愛敬づきおごりたる聲にて、さぶらひ人呼びつけ、物などいひたるけはひもいとをかし。また三つばかりなるちごのねおびれて、うちしはぶきたるけはひもうつくし。乳母の名、母などうち出でたらんも、これならんといと知らまほし。夜ひと夜、いみじうのゝしりおこなひあかす。寐も入らざりつるを、後夜などはてて、少しうちやす

いぬるすなはち―立去るとすぐ又引返し來て

鼻など云々―忍びて泣く樣也、鼻はかみたるに係る客語

とよく申し侍りぬ。幾日ばかり籠らせ給ふべき」など問ふ。「しかじかの人こもらせ給へり」などいひ聞かせていぬるすなはち、火桶菓子など持てきつゝ貸す。半挿に手水など入れて、盥の手もなきなどあり。「御供の人はかの坊に」などいひて呼びもて行けば、かはりがはりぞ行く。誦經の鐘の音、わがなゝりと聞けば、たのもしく聞ゆ。傍によろしき男の、いと忍びやかに額などつく。立居のほども心あらんと聞えたるが、いたく思ひ入りたる氣色にて、いも寢ず行ふこそいとあはれなれ。うちやすむ程は、經高くは聞えぬほどに讀みたるも尊げなり。高くうち出させまほしきに、まして鼻などを、けざやかに聞きにくくはあらで、少し忍びてかみたるは、何事を思ふらん、かれをかなへばやとこそ覺ゆれ。日ごろこもりたるに、晝は少しのどかにぞ、早うはありし。法師の坊に、男ども童などゆきてつれづれなるに、たゞ傍に貝をいと高く、俄に吹き出したるこそおどろかるれ。淸げなるたて文など持せたる男の、誦經の物うち置きて、堂童子など呼ぶ聲は、山響きあひてきらきらしう聞ゆ。鐘の聲ひゞきまさりて、いづこならんと聞く程に、

べし
しばし云々—しばし待ち給へ貴人の云々

心—信仰心
ろぎ—春注論議となす旁注ひろぎに作り、てひろぎと續け讀みて印を結ぶ義といへり

て又をかし。内外など許されたる若き男ども、家の子など、又立ちつゞきて、「そこもとはおちたる所に侍るめり。あがりたる」など教へゆく。何者にかあらん。いと近くさし歩み、さいだつものなどを、「しばし、人のおはしますに、かくはまじらぬわざなり」などいふを、實にとて少し立ち後るゝもあり。又聞きも入れず、われまづ疾く佛の御前にとゆくもあり。局にゆくほども、人の居並みたる前を通り行けば、いとうたてあるに、犬ふせぎの中を見入れたる心地、いみじく尊く、などて月頃もまうでず過しつらんとて、まづ心もおこさる。御燈常燈にはあらで、うちに又人の奉りたる、おそろしきまで燃えたるに、佛のきら〲と見え給へる、いみじくたふとげに、手ごとに文を捧げて、禮盤に向ひてろぎ誓ふも、さばかりゆすりみちて、これはと取り放ちて聞きわくべくもあらぬに、せめてしぼり出したるこゑ〲の、さすがに又紛れず。「千燈の御志は、なにがしの御ため」と僅に聞ゆ。帶うちかけて拜み奉るに、「こゝにかうさぶらふ」といひて、樒の枝を折りて持てきたるなどの尊きなども猶をかし。犬ふせぎのかたより法師よりきて、「い

黒き衣—喪服、一說古き衣

榑階—荒木のまゝ皮もはがずして作れる階

局したり—小僧など來りて局の用意なりぬと告ぐるなる

も清げなるが黒き衣著たる。二十六七日ばかりの曉に、物語して居明して見れば、あるかなきかに心細げなる月の、山の端近く見えたるこそいとあはれなれ。秋の野。年うち過したる僧たちの行したる。荒れたる家に葎はひかゝり、蓬など高く生ひたる庭に、月の隈なく明き。いと荒うはあらぬ風の吹きたる。

正月に寺に籠りたるはいみじく寒く、雪がちにこほりたるこそをかしけれ。雨などの降りぬべき景色なるはいとわろし。初瀬などに詣でて、局などするほどは、榑階のもとに車引きよせて立てるに、帶ばかりしたる若き法師ばらの、屐といふものをはきて、聊つつみもなく下り上るとて、何ともなき經のはしうち讀み、倶舍の頌を少しいひつゞけありくこそ、所につけてをかしけれ。わが上るはいとあやふく、傍によりて高欄おさへてゆくものを、たゞ板敷などのやうに思ひたるもをかし。「局したり」などいひて、沓ども持てきておろす。衣かへさまに引きかへしなどしたるもあり。裳唐衣などこは〴〵しくさうぞきたるもあり。深沓半靴などはきて、廊のほどなど沓すり入るは、内裏わたりめき

人わろき―體裁惡し

やつれて―姿をやつして

しろき―白き直衣、又は新しき意にて下につづくべきにや

せくかた―障害

とめでたけれ。烏帽子のさまなどぞ少し人わろき。なほいみじき人と聞ゆれど、こよなくやつれてまうづとこそは知りたるに、右衛門佐信賢は「あぢきなきことなり。たゞ清き衣を著てまうでんに、なでふ事かあらん。必よもあしくてよと、御嶽のたまはじ」とて、三月晦日に、紫のいと濃き指貫、しろき、青山吹のいみじくおどろ〳〵しきなどにて、隆光が主殿亮なるは、青色の紅の衣、摺りもどろかしたる水干袴にて、うちつゞき詣でたりけるに、歸る人もまうづる人も、珍しく怪しき事に、「すべてこの山道に、かゝる姿の人見えざりつ」とあさましがりしを、四月晦日に歸りて、六月十餘日の程に、筑前の守うせにしかはりになりにしこそ、實にいひけんに違はずもと聞えしか。これはあはれなる事にはあらねども、御嶽のついでなり。九月三十日、十月一日の程に、唯あるかなきかに聞きつけたる蟋蟀の聲。鷄の子いだきて伏したる。秋深き庭の淺茅に、露のいろいろ玉のやうにて光りたる。川竹の風に吹かれたる夕ぐれ。曉に目覺したる夜なども。すべて思ひかはしたる若き人の中に、せくかたありて心にしも任せぬ。山里の雪。男も女

かろとも我は知らで頼まむ、類歌多し

物の音―やはり曉の也

へだて居て―家の者とは隔り居りて

湯は

七久里の湯。有馬の湯。玉造の湯。

常よりもことにきこゆるもの

元三の車の音。鳥のこゑ。曉のしはぶき。物の音はさらなり。

繪にかきておとるもの

瞿麥。さくら。山吹。物語にめでたしといひたる男女のかたち。

かきまさりするもの

松の木。秋の野。山里。山路。鶴。鹿。冬はいみじくさむき。夏は世にしらずあつき。

あはれなるもの

孝ある人の子。鹿の音。よき男のわかきが御嶽精進したる。へだて居てうちおこなひたる曉のぬかなど、いみじうあはれなり。むつましき人などの目さまして聞くらん思ひやり、まうづる程のありさま、いかならんとつゝしみたるに、平にまうでつきたるこそい

正反對なるを、たとへ比し難しといへる也

思ひ返し云云―よしなを由無し即ちつまらぬの義に取りなしたる洒落

高瀬の淀に―古今六帖に、こも枕高瀬の淀に刈るこもの

なよしなの關こそ、いかに思ひ返したるならんと、いと知らまほしけれ。それを勿來の關とはいふにやあらん。逢阪などをまで思ひ返したらば、佗しからんかし。足柄の關。

森は

大荒木の森。忍の森。こゞひの森。木枯の森。信太の森。生田の森。うつきの森。きくだの森。いはせの森。立聞の森。常磐の森。くるべきの森。神南備の森。假寐の森。浮田の森。うへ木の森。石田の森。かうたての森といふが耳とゞまるこそあやしけれ。森などいふべくもあらず、たゞ一木あるを、何につけたるぞ。こひの森。木幡の森。

卯月の晦日に、長谷寺にまうづとて、淀の渡といふものをせしかば、船に車をかき居ゑてゆくに、菖蒲菰などの末みじかく見えしを、取らせたれば、いと長かりける。菰つみたる船のありきしこそ、いみじうをかりしかりか。高瀬の淀には、これをよみけるなゝめりと見えし。三日といふに歸るに、雨のいみじう降りしかば、菖蒲かるとて、笠のいとちひさきを著て、脛いとたかき男童などのあるも、屏風の繪にいとよく似たり。

ど四五人ばかりといふに、「又は」と問へば、「さてはいぬる人どもぞありつる」といふを、また笑ふも、又あやしき事にこそはあらめ。「人間に寄りきて、わが君こそまづ物きこえん。まづ〳〵人ののたまへる事ぞといへば、何事にかとて几帳のもとによりたれば、軀籠により給へといふに、五體ごめにとなんいひつる」といひて、また笑ふ。除目の中の夜、指油するに、燈臺のうちしきを踏みて立てるに、新しき油單なれば、つようとらへられにけり。さし歩みて歸れば、やがて燈臺はたふれぬ。襪はうちしきにつきてゆくに、まことに道こそ震動したりしか。頭つき給はぬほどは、殿上の臺盤に人もつかず。それに方弘は豆一盛を取りて、小障子のうしろにてやをら食ひければ、ひきあらはして笑はる る事ぞかぎりなきや。

關は

逢阪の關。須磨の關。鈴鹿の關。くきだの關。白川の關。衣の關。たゞこえの關は、はばかりの關と、たとしへなくこそ覺ゆれ。よこばしりの關。淸見が關。みるめの關。よし

いふに――いふべきに

道こそ云々――歩き方の荒々しき樣子なり

たとしへなく――其名の

定せりと也

人々しき―氣の利いた

なでふ事―何といふ事

竈に云々―せはしき例なるが云ひ樣田舍びたり

ほど。うまれたる兒のおとなになるほど。大般若經御讀經一人して讀み始むる。十二年の山ごもりの始めてのぼる日。

方弘はいみじく人に笑はるゝものかな。親などいかに聞くらん。供にありくものども、いと人々しきを呼びよせて、「何しにかゝるものにはつかはるゝぞ、いかゞ覺ゆる」など笑ふ。物いとよくするあたりにて、下襲の色、うへのきぬなども、人よりはよくて著たるを、「これは他人に著せばや」などいふに、實にぞ詞遣などのあやしき。里に宿直物とりにやるに、「男二人まかれ」といふに、「一人して取りにまかりなんものを」といふに、「あやしの男や、一人して二人の物をばいかで持つべきぞ。一升瓶に二升は入るや」といふを、なでふ事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて「御返事疾く」といふを、「あなにくの男や、竈に豆やくべたる。この殿上の墨筆は、何者の盗みかくしたるぞ。飯酒ならばこそ、ほしうして人の盗まめ」といふを、又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、「院の殿上人は誰々かありつる」と人の問へば、それかれな

ことなしび―事なしぶり、何でもない事の樣に

遲くさへ―拙き上に也

内侍に云々―歌に感激してやはり非凡の才女なれば奏進して内侍になさんと評

すこし春あるこゝちこそすれ

とあるは、實に今日のけしきにいとよくあひたるを、これがもとは、いかがつくべからんと思ひ煩ひぬ。「誰々か」と問へば、それ〳〵といふに、皆恥しき中に、宰相中將の御答をば、いかゞことなしびにいひ出でんと、心ひとつに苦しきを、御前に御覧ぜさせんとすれども、うへのおはしまして、おほとのごもりたり。主殿司はとく〳〵といふ。實に遲くさへあらんはとりどころなければ、さばれとて、

そらさむみ花にまがへてちるゆきに

と、わなゝく〳〵書きてとらせて、いかゞ見たまふらんと思ふもわびし。これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじと覺ゆるを、俊賢の中將など、なほ内侍に申してなさんと定めたまひしとばかりぞ、兵衛佐中將にておはせしが語りたまひし。

はるかなるもの

千日の精進はじむる日。半臂の緒ひねりはじむる日。陸奥國へゆく人の逢阪の關こゆる

まづさば云云—中宮の御詞

うちはし—打橋、移橋の約にて臨時にいづこにも打渡す橋なり

かうして云云—かく用事ありて參れり

宮のなども參りて、「疾く」とそゝのかし聞ゆ。「まづさば、かの君わたし聞え給ひて」との給はすれば、「さりともいかでか」とあるを、「なほ見おくり聞えん」などの給はするほど、いとをかしうめでたし。「さらば遠きをさきに」とて、まづ淑景舍わたり給ひて、殿などかへらせ給ひてぞ、のぼらせ給ふ。道のほども、殿の御猿樂ことにいみじく笑ひて、ほとほとうちはしよりも落ちぬべし。

殿上より梅の花の皆散りたる枝を、「これはいかに」といひたるに、「唯はやく落ちにけり」と答へたれば、その詩を誦じて、黑戸に殿上人いと多く居たるを、うへの御前きかせおはしまして、「よろしき歌など詠みたらんよりも、かゝる事はまさりたりかし。ようい らへたり」と仰せらる。

二月つごもり、風いたく吹きて、空いみじく黑きに、雪すこしうち降りたるほど、黑戸に主殿司きて、「かうしてさぶらふ」といへば、よりたるに、公任の君、宰相中將殿のとあるを見れば、ふところ紙に、たゞ、

さる事―皇子御誕生、事の次になきと補ふべし

かしこければ―陛下の御裝束を申立てんは畏多ければ

いりたゝぬ―別腹の

この大納言―伊周公

になどか、今までさる事のとぞ心もとなき。未の時ばかりに、筵道まゐるといふ程もなく、うちそよめき入らせ給へば、宮もこなたに寄らせ給ひぬ。やがて御帳に入らせ給ひぬれば、女房南おもてにそよめき出でぬめり。廊に殿上人いと多かり。殿の御前に宮司召して菓子肴めさす。「人々醉はせ」などおほせらる。誠に皆ゑひて、女房と物いひかはすほど、かたみにをかしと思ひたり。日の入るほどに起きさせ給ひて、山井の大納言召し入れて、御うちぎまゐらせ給ひて、かへらせ給ふ。櫻の御直衣に、紅の御衣のゆふばえなども、かしこければとゞめつ。山井の大納言は、いりたゝぬ御兄にても、いとよくおはすかし。にほひやかなる方は、この大納言にもまさり給へるものを、世の人は、せちにいひおとし聞ゆるこそいとほしけれ。殿、大納言、山井の大納言、三位中將、藏人頭など皆さぶらひ給ふ。宮のぼらせ給ふべき御使にて、馬の内侍のすけ參り給へり。「今宵はえ」などしぶらせ給ふを、殿聞かせ給ひて、「いとあるまじき事、はやのぼらせ給へ」と申させ給ふに、また春宮の御使しきりにある程いとさわがし。御むかへに、女房、春

殿をばさるものにて—殿の幸福は云ふ迄もなく

某が云々—父関白の詞なり、間もなくは隙なく、たえずの義

への御宿世こそめでたけれ。御圓座など聞え給へど、「陣につき侍らん」とて急ぎ立ち給ひぬ。しばしありて、式部の丞なにがしとかや、御使にまゐりたれば、御膳やどりの北によりたる間に、褥さし出でて居ゑたり。御かへりは今日は疾く出させ給ひつ。まだ褥も取り入れぬほどに、東宮の御使に、ちかよりの少将まゐりたり。御文とり入れて、渡殿は細き縁なれば、こなたの縁に褥さし出でたり。御文とり入れて、殿、うへ、宮など御覧じわたす。「御返はや」などあれど、頓にも聞え給はぬを、「某が見侍れば出で給はぬなゝめり。さらぬをりは間もなくこれよりぞ聞え給ふなる」など申し給へば、御面はすこし赤みながら、少しうち微笑み給へる、いとめでたし。「疾く」などうへも聞え給へば、奥ざまに向きて書かせ給ふ。うへ近く寄り給ひて、もろともに書かせ奉り給へば、いとどつゝましげなり。宮の御かたより、萠黄の織物の小袿袴おし出されたれば、三位中將かづけ給ふ。くるしげに思ひて立ちぬ。松君のをかしう物のたまふを、誰も〳〵うつくしがり聞え給ふ。「宮の御子たちとて引出でたらんに、わろくは侍らじかし」などの給はする。げ

まかなひの―自分の役目の

垣間見の人―清少也

霞の間より―古今に、「山櫻霞の間よりほのかにも見てし人こそ戀しかりけれ」

猿樂こと―戯れ、滑稽

所せき―窮屈な、事々しき

おほやけしう唐めきてをかし。御膳のをりになりて、御髪あげまゐりて、藏人どもまかなひの髪あげてまゐらする程に、隔てたりつる屛風も押しあけつれば、垣間見の人、かくれ蓑とられたる心地して、あかずわびしければ、御簾と几帳との中にて、柱のもとよりぞ見奉る。衣の裾裳など、唐衣は皆御簾のそとに押し出されたれば、殿の、端のかたより御覽じ出して「誰そや、霞の間よりみゆるは」と咎めさせ給ふに、「少納言が、物ゆかしがりて侍るならん」と申させ給へば、「あなはづかし。かれはふるき得意を、いとにくげなる女ども持ちたりともこそ見侍れ」などのたまふ御けしき、いとしたり顔なり。あなたにも御膳まゐる。「羨しく、かた〴〵のは皆まゐりぬめり。疾くきこしめして、翁女におろしをだに給へ」など、たゞ日ひと日、猿樂ことをし給ふ程に、大納言殿、三位中將、松君も將てまゐり給へり。殿いつしかと抱き取り給ひて、膝にすゑ給へる、いとうつくし。狹き緣に、所せき日の御裝束の下襲など引きちらされたり。大納言殿はもの〳〵しう清げに、中將殿はらう〳〵じう、いづれもめでたきを見奉るに、殿をばさるものにて、う

かの御かた—淑景舎の御方

唐廂—屋根をそらせて作れる廂

かたへ—半數

の固紋のわかやかなる御衣奉りて、扇をつとさし隱し給へり。いといみじく、げにめでたく美しく見え給ふ。殿は薄色の直衣、萠黄の織物の御指貫、紅の御衣ども、御紐さして、廂の柱に後をあてて、こなたざまに向きておはします。めでたき御有樣どもを、うちゑみて、例の戲言をせさせ給ふ。淑景舎の、繪に書きたるやうに、美しげにてゐさせ給へるに、宮いとやすらかに、今すこしおとなびさせ給へる御けしきの、紅の御衣ににほひ合せ給ひて、なほ類はいかでかと見えさせ給ふ。御手水まゐる。かの御かたは宣耀殿、貞觀殿を通りて、童二人、下仕四人して持てまゐるめり。唐廂のこなたの廊にぞ、女房六人ばかりさぶらふ。狹しとて、かたへは御おくりして皆歸りにけり。櫻の汗衫、萠黄紅梅などいみじく、汗衫長く裾引きて、取り次ぎまゐらす、いとなまめかし。織物の唐衣どもこぼれ出でて、すけまさの馬頭のむすめ、少將の君、北野の三位の女、宰相の君などぞ近くはある。あなをかしと見るほどに、この御かたの御手水番の采女、青末濃の唐衣、裙帶、領巾などして、おもてなどいと白くて、下仕など取り次ぎてまゐるほど、これはた

紅梅の固紋云々―中宮の御裝束也

ことよき人―他の美しき人、淑景舍をいふ

うへ―道隆の室、中宮淑景舍の御母貴子

問はせ給へば、「まだいかでか。積善寺供養の日、御うしろをわづかに」と聞ゆれば、「その柱と屛風とのもとによりて、わがうしろより見よ。いとうつくしき君ぞ」との給はすれば、うれしくゆかしさまさりて、いつしかと思ふ。紅梅の固紋、浮紋の御衣どもに、紅のうちたる御衣、三重がうへに唯引き重ねて奉りたるに、「紅梅には濃き衣こそをかしけれ。今は紅梅は著でもありぬべし。されど萌黄などのにくければ。紅にはあはぬなり」との給はすれど、唯いとめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣に、やがて御容のにほひ合せ給ふぞ、なほことよき人も、かくやおはしますらんとぞゆかしき。さてゐざり出でさせ給ひぬれば、やがて御屛風に添ひつきてのぞくを、「あしかゝめり、うしろめたきわざ」と聞えごつ人々もいとをかし。御障子の廣うあきたれば、いとよく見ゆ。うへは白き御衣ども、紅のはりたる二つばかり、女房の裳なゝめり、引きかけておくによりて、東面におはすれば、たゞ御衣などぞ見ゆる。淑景舍は北にすこしよりて南向におはす。紅梅どもあまた濃く薄くて、濃きあやの御衣、少しあかき蘇枋の織物の袿、萌黄

作物所云々—一說、これも信經に關する話

淑景舍—中宮定子の妹東宮妃

まゐりわたして—殘らず上げて

作物所の別當するころ、誰が許にやりけるにかあらん、物の繪やうやるとて、「これがやうにつかうまつるべし」と書きたる眞字のやう、文字の世に知らずあやしきを見つけて、それが傍に、「これがまゝにつかうまつらば、異樣にこそあるべけれ」とて、殿上にやりたれば、人々取りて見ていみじう笑ひけるに、大腹だちてこそうらみしか。

淑景舍春宮にまゐり給ふほどの事なゝど、いかゞはめでたからぬ事なし。正月十日にまゐり給ひて、宮の御方に御文などは繁う通へど、御對面などはなきを、二月十日、宮の御方に渡り給ふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつくろひ、女房なども皆用意したり。夜半ばかりに渡らせ給ひしかば、いくばくもなくて明けぬ。登華殿の東の二間に御しつらひはしたり。翌朝いと疾く御格子まゐりわたして、あかつきに、殿、うへ、ひとつ御車にて參り給ひにけり。宮は御曹司の南に、四尺の屏風西東に隔てて、北向に立てて、御疊褥うち置きて、御火桶ばかりまゐりたり。御屏風の南御帳の前に、女房いと多くさぶらふ。こなたにて御髪などまゐるほど、「淑景舍は見奉りしや」と

の音センジヨクレウな洗足料に云ひかけたる洒落

はやう云々―一説、直に前行に接し時柄の一條も信經と清少との物語と解す、後文立ちぬとあるは信經也

手もいみじう云々―女房達の評定なり

らず、信經が足形の事を申さゞらましかば、えの給はざらまし」とて、かへすぐいひしこそをかしかりしか。あまりなる御身ほめかなと傍いたく。

「はやう皇太后宮に、ゑぬたきといひて名高き下仕なんありける。美濃守にてうせにける藤原時柄、藏人なりける時、下仕どもある所に立ち寄りて、これやこの高名のゑぬたき、などさも見えぬといひける返事に、それは時柄もさも見ゆる名なりといひたりけるなん、敵に選りてもいかでかさる事はあらん。殿上人上達部までも、興ある事にの給ひける。又さりけるなめりと、今までかくいひ傳ふるは」と聞えたり。「それ又時柄がいはせたるなり。すべて題出しがらなん、詩も歌もかしこき」といへば、「實にさる事あることなり。さらば題出さん、歌よみ給へ」といふに、「いとよき事、ひとつはなにせん、同じうは數多つかう奉らん」などいふほどに、御題は出でぬれば、「あなおそろし、まかりいでぬ」とて立ちぬ。「手もいみじう眞字も假字もあしう書くを、人も笑ひなどすれば、かくしてなんある」といふもをかし。

九品蓮臺云云―皇后に思はれんにはたとひ下品にても可也、朗詠に、九品蓮臺之間雖二下品一應レ足

ことたかく―得意に

せんぞくれう―氈褥料

そ思はめ」と仰せらるゝもいとをかし。

中納言殿まゐらせ給ひて、御扇奉らせ給ふに、「隆家こそいみじき骨をえて侍れ。それをはらせて參らせんとするを、おぼろけの紙ははるまじければ、もとめ侍るなり」と申し給ふ。「いかやうなるにかある」と問ひ聞えさせ給へば、「すべていみじく侍る。さらにまだ見ぬ骨のさまなりとなん人々申す。まことにかばかりのは侍らざりつ」とことたかく申し給へば、「さて扇のにはあらで海月のなり」と聞ゆれば、「これは隆家がことにしてん」とて笑ひ給ふ。かやうの事こそ、かたはらいたき物のうちに入れつべけれど、人ごと「な落しそ」と侍ればいかゞはせん。

雨のうちはへ降るころ、今日も降るに、御使にて式部丞信經まゐりたり。例の茵さし出したるを、常よりも遠く押し遣りてゐたれば、「あれは誰が料ぞ」といへば、笑ひて「かかる雨にのぼり侍らば足形つきて、いとふびんに汚なげになり侍りなん」といへば、「など、せんぞくれうにこそはならめ」といふを、「これは御前にかしこう仰せらるゝにはあ

これよりぞ―仰なくともこなたより

一乘の法―法華經、清少が第一の人と思はれんと云ふより附けし渾名

とあるを見るに、をかしき事ぞ類なきや、いみじく笑へば、「何事ぞ〳〵」と大臣ものたまふ。

その人の後といはれぬ身なりせばこよひの歌はまづぞよままし。

「つゝむ事さふらはずば、千歌なりとも、これよりぞ出でまうで來まし」と啓しつ。

御かた〳〵公達上人など、御前に人多く侍へば、廂の柱によりかゝりて、女房と物語してゐたるに、物をなげ賜はせたる。あけて見れば、「思ふべしやいなや、第一ならずばいかが」と問はせ給へり。御前にて物語などする序にも、「すべて人には一に思はれずば、さらに何にかせん。唯いみじうにくまれ、惡しうせられてあらん。二三にては死ぬともあらじ、一にてをあらん」などいへば、一乘の法なりと人々わらふ事のすぢなめり。筆紙たまはりたれば、「九品蓮臺の中には下品といふとも」と書きてまゐらせたれば、「無下に思ひ屈じにけり。いとわろし。いひそめつる事は、さてこそ有らめ」とのたまはすれば、「人に隨ひてこそ」と申す。「それがわろきぞかし。第一の人に、又一に思はれんとこ

内大臣―伊周公

けぎよう―きつばりと

く、われはと思へるさまに最初に詠みいで侍らんなん、なき人のためいとほしく侍る」などまめやかに啓すれば、笑はせ給ひて、「さらばたゞ心にまかす。われは詠めともいはじ」とのたまはすれば、「いと心やすくなり侍りぬ。今は歌のこと思ひかけ侍らじ」などいひてあるころ、庚申せさせ給ひて、内大臣殿、いみじう心まうけせさせ給へり。夜うち更くるほどに題出して、女房に歌よませ給へば、皆けしきだちゆるがし出すに、宮の御前に近くさぶらひて、物啓しなど他事をのみいふを、大臣御覽じて、「などか歌はよまで離れゐたる、題とれ」とのたまふを、「さる事承りて、歌よむまじくなりて侍れば、思ひかけ侍らず」「異樣なる事、まことにさる事やは侍る。などかは許させ給ふ。いとあるまじき事なり。よし異時は知らず、今宵はよめ」など責めさせ給へど、けぎよう聞きも入れで侍ふに、こと人ども詠み出して、よしあしなど定めらるゝほどに、いさゝかなる御文を書きて賜はせたり。あけて見れば、

もとすけが後といはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

じて、今は云々となすうじは慍じ又は偬じ也この說に從ふ時は括弧の附け方を改むべし

うけばりたる―憚る所なし、一本うけたまはりたりに作る、我意を迎へたる哉の義

歌よむと云云―清少は深養父の孫元輔の子

ら折りたるといひし下蕨は」とのたまふを聞かせ給うて、「思ひ出づることのさまよ」と笑はせ給ひて、紙のちりたるに、

　したわらびこそこひしかりけれ

とかゝせ給ひて、「もといへ」と仰せらるゝもをかし。

　ほとゝぎすたづねてきゝし聲よりも

と書きて參らせたれば、「いみじううけばりたりや。かうまでだに、いかで杜鵑の事をかけつらん」と笑はせ給ふも恥しながら、「何か、この歌すべて詠み侍らじとなん思ひ侍るものを、物のをりなど人のよみ侍るにも、よめなど仰せらるれば、えさぶらふまじき心地なんし侍る。いかでかは、文字の數知らず、春は冬の歌をよみ、秋は春のをよみ、梅のをりは菊などをよむ事は侍らん。されど歌よむといはれ侍りしすゑ〴〵は、少し人にまさりて、そのをりの歌はこれこそありけれ、さはいへどそれが子なればなどいはれたらんこそ、かひある心地し侍らめ。露とり分きたるかたもなくて、さすがに歌がまし

おろしにおろす―格子を也

くらくなりぬ―夕暮になりたり

どうじて―春註動轉しての心とあれど如何、同じてにて一同申合せての義か、一説に、日なりと、う

かへしまつらんなど、局へ硯とりに遣れば、「たゞこれして疾くいへ」とて、御硯の蓋に紙など入れて賜はせたれば、「宰相の君かきたまへ」といふを、「なほそこに」などいふほどに、かきくらし雨降りて、雷もおどろおどろしう鳴りたれば、物も覺えず、唯おろしにおろす。職の御曹子は、蔀をぞ御格子にまゐり渡し惑ひしほどに、歌のかへりごとも忘れぬ。いと久しく鳴りて、少し止むほどはくらくなりぬ。只今なほその御返事たてまつらんとて、取りかゝるほどに、人々上達部など、雷の事申しにまゐり給ひつれば、西面に出でて物など聞ゆるほどにまぎれぬ。人はた、「さしてえたらん人こそ知らめ」とてやみぬ。「大かたこの事に宿世なき日なり」、どうじて、今はいかでさなん往きたりしとだに人に聞かせじ」などぞ笑ふを、「今もなどそれ往きたりし人どものいはざらん。されどもさせじと思ふにこそあらめ」と物しげに思しめしたるもいとをかし。「されど今はすさまじくなりにて侍るなり」と申す。「すさまじかるべき事かは」などのたまはせしかば、やみにき。二日ばかりありて、その日の事などいひ出づるに、宰相の君、「いかにぞ手づか

あう―一本あらに作る咏歎の語か又は彼方様の義ならん

儀式―一本儀式だち又は儀式にに作る

と思ひつるに、人目も知らず走られつるを、あう往かんこそいとすさまじけれ」とのたまへば、「いざ給へかし、うちへ」などいふ。「それも烏帽子にてはいかでか」「とりに遣り給へ」などいふに、まめやかにふれば、笠なき男ども、唯ひきにひき入れつ。一條より笠を持てきたるをさゝせて、うち見かへりうち見かへり、このたびはゆる〳〵と、物憂げにて、卯の花ばかりを取りおはするもをかし。さて参りたれば、ありさまなど問はせ給ふ。うらみつる人々、怨じ心うがりながら、藤侍従、一條の大路走りつるほど語るにぞ、皆笑ひぬる。「さていづら歌は」と問はせ給ふ。かう〳〵と啓すれば、「くちをしの事や。うへ人などの聞かんに、いかでかをかしき事なくてあらん。その聞きつらん所にて、ふとこそよまましか。あまり儀式ことざめつらん怪しきや。こゝにてもよめ。いふかひなし」などのたまはすれば、げにと思ふに、いとわびしきを、いひ合せなどする程に、藤侍従の、ありつる卯の花につけて、卯の花の薄様に、

ほとゝぎすなく音たづねに君ゆくときかば心をそへもしてまし

侍從殿―恒德公六男公信なり

間擴げて―著物の前などはだけたる樣にや、一說室を取片付けて

しば〳〵―一本しばしばしに作る

うへもなく―屋根もなく

法師、あやしのいふがひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いとくちをし。近う來ぬれば、「さりともいとかうて止まんやは。この車のさまをだに人に語らせてこそ止まめ」とて、一條殿の許にとゞめて、「侍從殿やおはす、杜鵑の聲聞きて、今なんかへり侍る」といはせたる。使「只今まゐる。あが君〳〵となんの給へる。さぶらひに間擴げて、指貫たてまつりつ」といふに、待つべきにもあらずとて、はしらせて、土御門ざまへやらするに、いつの間にか裝束しつらん、帶は道のまゝにゆひて、しば〳〵と追ひくる。供に、侍、雜色、ものはかで走るめる。とくやれどいとゞ忙しくて、土御門にきつきぬるにぞ、喘ぎ惑ひておはして、まづこの車のさまをいみじく笑ひ給ふ。「うつゝの人の乘りたるとなん更に見えぬ。猶おりて見よ」など笑ひ給へば、御供なりつる人どもも興じ笑ふ。「歌はいかにか、それ聞かん」とのたまへば、「今御前に御覽ぜさせてこそは」などいふ程に、雨まことに降りぬ。「などか他御門のやうにあらで、この土御門しもうへもなく造りそめけんと、今日こそいとにくけれ」などいひて、「いかで歸らんずらん。こなたざまは唯後れじ

くるべきもの―くるべきといふもの、和名抄蠶糸具に、反轉久流閉枳、糸繰器なるべし
あるもなど云々―ある物何にても出せと責めて云々

の家のむすめ、女などひきゐて來て、五六人してこかせ、見も知らぬくるべきもの二人してひかせて、歌うたはせなどするを、珍しくて笑ふに、杜鵑の歌よまんなどしつる、忘れぬべし。唐繪にあるやうなる懸盤などして物くはせたるを、見いるゝ人なければ、家あるじ「いとわろくひなびたり。かゝる所に來ぬる人は、ようせずばあるもなど責め出してこそ參るべけれ。無下にかくてはその人ならず」などいひてとりはやし、「この下蕨は手づから摘みつる」などいへば、「いかで女官などのやうに、つきなみてはあらん」などいへば、とりおろして、「例のはひぶしに習はせ給へる御前たちなれば」とて、とりおろしまかなひ騷ぐほどに、「雨ふりぬべし」といへば、急ぎて車に乘るに、「さてこの歌は、こゝにてこそ詠まめ」といへば、「さばれ道にても」などいひて、卯の花いみじく咲きたるを折りつゝ、車の簾傍などに長き枝を葺き指したれば、たゞ卯花重をこゝに懸けたるやうにぞ見えける。供なる男どももいみじう笑ひつゝ、網代をさへつきうがちつつ、「こゝまだし、こゝまだし」とさし集むなり。人もあはなんと思ふに、更にあやしき

五月雨は―五月雨の時には

いへばいな―一本いへどいまとあり、いへどは聞きも入れずに接す

いまは今しばし侍てと中宮の仰なり

手結―乘馬の射手二人づつ組合ひて射る事

車の事いひて、北の陣より、「五月雨はとがめなきものぞ」とて、さしよせて四人ばかりぞ乘りて行く。うらやましがりて、「今一つして同じくば」などいへば、「いな」と仰せらるれば、聞きも入れず、なさけなきさまにて行くに、馬場といふ所にて人多くさわぐ。「何事するぞ」と問へば、「手結にて眞弓射るなり。しばし御覧じておはしませ」とて車止めたり。「右近の中將みな著き給へる」といへど、さる人も見えず。六位などの立ちさまよへば、「ゆかしからぬことぞ、はやく過ぎよ」とて行きもて行けば、道も祭のころ思ひ出でられてをかし。かういふ所には、明順朝臣の家あり。そこもやがて見んといひて車よせておりぬ。田舍だち事そぎて、馬の繪書きたる障子、網代屛風、三稜草簾など、殊更に昔の事を寫し出でたり。屋のさまもはかなだちて、端近くあさはかなれど、をかしきに、げにぞかしがましと思ふばかりに鳴きあひたる杜鵑の聲を、くちをしう御前に聞しめさず、さばかり慕ひつる人々にもなど思ふ。所につけては、かゝる事をなん見るべきとて、稲といふもの多く取り出でて、わかき女どものきたなげならぬ、そのわたり

いとなみ—經營して

このもしうこぼれ出でて—衣裳など好ましく車よりこぼれ出でて

塗籠—周圍を壁にして妻戸より出入するやうに造れる所

る。いとなみいつしかと思ひたる事の、さはる事出で來て俄にとまりたる。いみじうする人の、子うまで年ごろ具したる。あそびをもし、見すべき事もあるに、かならず來なんと思ひて呼びに遣りつる人の、さはる事ありてなどいひて來ぬ、くちをし。男も女も宮仕所などに、同じやうなる人、諸共に寺へまうで、物へも行くに、このもしうこぼれ出でて、用意はけしからず、あまり見苦しとも見つべくはあらぬに、さるべき人の、馬にても車にても行きあひ見ずなりぬる、いとくちをし。わびては、すき〲しからん下衆などにても、人に語りつべからんにてもがなと思ふも、けしからぬなめりかし。

五月の御精進のほど職におはしますに、塗籠の前、二間なる所を、殊にしつらひしたれば、例ざまならぬもをかし。朔日より雨がちにて曇りくらす。「つれ〲なるを、杜鵑の聲たづねありかばや」といふを聞きて、われも〱と出でたつ。「賀茂の奧になにがしとかや、七夕の渡る橋にはあらで、にくき名ぞ聞えし。そのわたりになん日ごとに鳴く」と人の言へば、「それは蜩なり」と答ふる人もあり。そこへとて、五日のあした、宮づかさ

知りつる人の前にて彈く。いとどしう住まぬ聟の、さるべき所にて舅にあひたる。

あさましきもの

指櫛みがくほどに、物にさへて折れたる。車のうちかへされたる。さるおほのかなる物は、ところせく久しくなどやあらんとこそ思ひしか。たゞ夢の心地してあさましうあやなし。人のために恥しき事、つゝみもなく、兒も大人もいひたる。かならず來なんと思ふ人を待ち明して、曉がたに、唯いさゝか忘れて寐入りたるに、烏のいと近くかうと鳴くに、うち見あげたれば、晝になりたるいとあさまし。てうばみにどう取られたる。無下に知らず、見ず、きかぬ事を、人のさし向ひて、あらがはすべくもなくいひたる。物うちこぼしたるもあさまし。賭弓にわなゝくわなゝく久しうありてはづしたる矢の、もて離れてことかたへ行きたる。

くちをしきもの

節會、佛名に雪ふらで、雨のかき暮し降りたる。節會、さるべきをりの、御物忌に當りた

意にて

いとどしう―一本いととうに作る疾うに也

あさましき―驚きあきるゝ

どう―才を入るゝ筒

賭弓―正月十八日天子弓場殿に出御ありて弓を御覽ずる式

たらん怪しくて、夜の更くるまゝに、ねたく起きてぞいぬべかりけるなど思ひ臥したるに、奥にも外にも物うちなりなどして恐しければ、やをらまろび寄りて衣ひきあぐるに、虚寐したるこそいとねたけれ。「猶こそこはがり給はめ」などうちいひたるよ。

かたはらいたきもの

客人などにあひて物いふに、奥の方にうち解けごと人のいふを、制せで聞く心地。思ふ人のいたく醉ひておなじ事したる。聞きゐたるをも知らで人のうへいひたる。それは何ばかりならぬつかひ人なれど、かたはらいたし。旅だちたる所ちかき所などにて、下衆どものざれかはしたる。にくげなる兒を、おのれが心地にかなしと思ふまゝに、うつくしみあそばし、これが聲の眞似にていひける事など語りたる。才ある人の前にて、才なき人の物おぼえがほに人の名などいひたる。殊によしとも覺えぬわが歌を人に語りきかせて、人の譽めし事などいふもかたはらいたし。人の起きて物語などする傍に、あさましう打ちとけて寐たる人。まだ音も彈きとゝのへぬ琴を、心一つをやりて、さやうのかた

起き居たらん怪しくて―起きて居らんも變にて

おなじ事したる―繰言いひたる

かなし―いとし、可愛し

心一つをやりて―自慢して、大得

知らん―知れ

よろしき人―相當な人

せめて之を制止すべき男

身じくり出づ―身じろき出づ、女のすねたるさまなり

ほらせ給はんとて、「疾く縫ひたらん人を思ふと知らん」と仰せられしか。

見すまじき人に、外へ遣りたる文取り違へて持て行きたる、ねたし。「げに過ちてけり」とはいはで、口かたうあらがひたる、人目をだに思はずば、走りもうちつべし。おもしろき萩薄などを植ゑて見るほどに、長櫃もたるもの、鋤など提げて、たゞほりに掘りていぬるこそ、侘しうねたかりけれ。よろしき人などのある折は、さもせぬものを、いみじう制すれど「唯すこし」などいひていぬる、いふがひなくねたし。受領などの來て無禮に物いひ、さりとて我をばいかゞと思ひたるけはひに、いひ出でたる、いとねたげなり。見すまじき人の、文を引き取りて、庭におりて見たてる、いとわびしうねたく、追ひて行けど、簾の許にとまりて見るこそ、飛びも出でぬべき心地すれ。すゞろなる事腹だちて、同じ所にも寝ず、身じくり出づるを、忍びて引きよすれど、わりなく心ことなれば、あまりになりて、人も「さはよかゝなり」と怨じて、かいくゞみて臥しぬる後、いと寒き折などに、唯ひとへ衣ばかりにて、あやにくがりて、大かた皆人も寝たるに、さすがに起き居

の尻結ばでありき

ふれあそび—戯れ遊びなり、一説鬼事の類

弓長—左の身頃

裏を見ざらん云々—裏を見ずして縫違へし人の云々

り。又かへさまに縫ひたるもいとねたし。

南の院におはします頃、西の對に殿のおはします方に宮もおはしませば、寢殿に集りゐて、さう〴〵しければ、ふれあそびをし、渡殿に集り居などしてあるに、「これ只今とみのものなり、誰も〳〵集りて、時かはさず縫ひて參らせよ」とて平縫の御衣を給はせたれば、南面に集り居て、御衣片身づつ、誰か疾く縫ひ出づると挑みつゝ、近くも向はず縫ふさまもいと物狂ほし。命婦の乳母いと疾く縫ひはててうち置きつる。弓長のかたの御身を縫ひつるが、そむきざまなるを見つけず、とぢめもしあへず、惑ひ置きて立ちぬるに、御背合せんとすれば、早う違ひにけり。笑ひのゝしりて、「これ縫ひ直せ」といふを、「誰があしう縫ひたりと知りてか直さん、綾などならばこそ、裏を見ざらん縫ひたがへの人のげになほさめ。無紋の御衣なり。何をしるしにてか直す人誰かあらん。たゞまだ縫ひ給はざらん人に直させよ」とて聞きも入れねば、「さいひてあらんや」とて、源少納言、新中納言など、いひ直し給ひし顏見やりて居たりしこそをかしかりしか。これはよさりの

の詞
心地もなきを―琵琶行など知りもしない癖に
井手の中將―物語中の人物などにや、未詳
ことばに―詞書の様に
はやう云々―元より糸

かうはあらざりけんかし。それはたゞ人にこそありけめ」といふを聞きて、心地もなきを、わりなく分け入りて啓すれば、笑はせ給ひて、「われは知りたりや」となん仰せらるゝと傳ふるもをかし。

御乳母の大輔の、けふ日向へくだるに、賜はする扇どもの中に、片つかたには、日いと花やかにさし出でて旅人のある所、井手の中將の館などいふさまいとをかしう書きて、今片つかたには、京のかた雨いみじう降りたるに、ながめたる人などかきたるに、

あかねさす日にむかひても思ひいでよ都は晴れぬながめすらんと

ことばに御手づから書かせ給ひし、あはれなりき。さる君をおき奉りて、遠くこそえいくまじけれ。

ねたきもの

これよりやるも、人のいひたる返しも、書きて遣りつる後、文字一つ二つなど思ひなほしたる。頓の物ぬふに、縫ひはてつと思ひて針を抜きたれば、はやうしりを結ばざりけ

本おぼえに作る、おぼしの音便

聞ゆる―原本聞ゆに作る

宜陽殿の云云―西宮抄に、納殿累代御物在二宜陽殿一云云、珍器とて譽むる詞なるべし

半かくし云云―琵琶行

の御笛の名を僧都の君もえ知り給はざりければ、たゞうらめしとぞおぼしたゝめる。これは職の御曹司におはしましゝ時の事なり。うへの御前に、いなかへじといふ御笛のさふらふなり。御前に侍ふ者どもは、琴も笛も皆めづらしき名つきてこそあれ。琵琶は玄象、牧馬、井上、渭橋、無名など、また和琴なども、朽目、鹽竈、二貫などぞ聞ゆる。水龍、小水龍、宇多法師、釘打、葉二、なにくれと多く聞えしかど忘れにけり。宜陽殿の一の棚にといふことぐさは、頭中將こそしたまひしか。

うへの御局の御簾の前にて、殿上人日ひと日、琴、笛吹き遊びくらして、まかで別るゝほど、まだ格子をまゐらぬに、おほとなぶらをさし出でたれば、戸の開きたるがあらはなれば、琵琶の御琴をたゞざまにもたせ給へり。紅の御衣のいふも世の常なる、袿又はりたるも數多たてまつりて、いと黑くつやゝかなる御琵琶に、御衣の袖をうちかけて、挿へさせ給へるめでたきに、そばより御額のほど白くけざやかにて、僅に見えさせ給へるは、譬ふべき方なくめでたし。近く居給へる人にさし寄りて、「半かくしたりけんも、え

理の立たぬけしき―蔵人の様子
名もなし―無名といふ琴なれば也
宮の御前―中宮
おぼい―原

しづきども皆入る。けしきいとねたげなり。うへもおはしまして、いとをかしと御覽じおはしますらんかし。童舞の夜はいとをかし。燈臺に向ひたる顔ども、いとらうたげにをかしかりき。

無名といふ琵琶の御琴を、うへの持てわたらせ給へるを、見などして、搔き鳴しなどすと言へば、ひくにはあらず、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかにとかや」など聞えさするに、「たゞいとはかなく名もなし」との給はせたるは、なほいとめでたくこそ覺えしか。

淑景舍などわたり給ひて、御物語のついでに、「まろがもとにいとをかしげなる笙の笛こそあれ。故殿の得させ給へり」との給ふを、僧都の君の「それは隆圓にたうべ。おのれが許にめでたき琴侍り、それにかへさせ給へ」と申し給ふを、きゝも入れ給はで、猶他事をのたまふに、答させ奉らんと數多たび聞え給ふに、なほ物のたまはねば、宮の御前の「否かへじとおぼいたるものを」との給はせけるが、いみじうをかしき事ぞ限なき。こ

の札附けたる樣にて
色ふし―色節、晴の場合
つかさまされと云々―昇官の令頻りに來るの義ならん、當時の童謠などにや、まされどと濁るは如何
うらやみあり―怨みあひ生ず
すぢなき―譯の分らぬ

そり橋に、髻の村濃いとけざやかにて出でたるも、さま〲につけてをかしうのみ、上雑仕童ども、いみじき色ふしと思ひたる、いとことわりなり。山藍日蔭など柳筥にいれて、冠したる男もてありく、いとをかしう見ゆ。殿上人の直衣ぬぎたれて、扇やなにやと拍子にして、「つかさまされとしきなみぞたつ」といふ歌をうたひて、局どもの前わたるほどはいみじく、添ひたちたらん人の心さわぎぬべしかし。まして颯と一度に笑ひなどしたる、いとおそろし。行事の藏人の掻練重、物よりことにきよらに見ゆ。褥など敷きたれど、なか〲えものぼりゐず。女房の出でたるさま讃めそしり、このごろは他事はなかゝめり。帳臺の夜、行事の藏人いと嚴しうもてなして、かいつくろひ二人、童より外は入るまじとおさへて、面にくきまでいへば、殿上人など「猶これ一人ばかりは」などのたまふ。「うらやみあり。いかでか」などかたくいふに、宮の御かたの女房二十人ばかりおし凝りて、ことゞしういひたる藏人何ともせず、戸をおしあけてさゞめき入れば、あきれて「いとこはすぢなき世かな」とて立てるもをかし。それにつきてぞ、か

きえいり―いたく恥ぢて

の給はせしかば―中宮の是非上り來れとのたまひしによりて

物忌のやうにて―物忌

と辨のおもとといふに傳へさすれば、きえいりつゝえもいひやらず。「などか〳〵」と耳を傾けて問ふに、少しことどもりする人の、いみじうつくろひ、めでたしと聞かせんと思ひければ、えも言ひつゞけずなりぬるこそ、なか〳〵恥かくす心地してよかりしか。おりのぼるおくりなどに、なやましといひ入れぬる人をも、の給はせしかば、あるかぎり群れ立ちて、ことにも似ず、あまりこそうるさげなゝめれ。舞姫は、すけまさの馬頭の女、染殿の式部卿の宮の御弟の四の君の御はら、十二にていとをかしげなり。はての夜も、おひかづきいくもさわがず。やがて仁壽殿よりとほりて、清涼殿の前の東のすのこより、舞姫をさきにて、うへの御局へ參りしほど、をかしかりき。

細太刀の平緒つけて、清げなる男のもてわたるも、いとなまめかし。紫の紙を包みて封じて、房長き藤につけたるも、いとをかし。

内裏は五節のほどこそすゞろにたゞならで、見る人もをかしう覺ゆれ。主殿司などの、いろ〳〵の細工を、物忌のやうにて、彩色つけたるなども、めづらしく見ゆ。清涼殿の

るに—原本立ちすゑたるに作る

局を—一本此語の下に日もくれぬ程にとあり

山井—小忌衣は山藍摺なれば掛けていへる也

ねたうこそ—この上に返しせぬはと補ふべし

くてあらする、いと異様なり。「その夜までは猶うるはしくこそあらめ」との給はせて、さも惑はさず、几帳どものほころびゆひつゝ、こぼれ出でたり。小兵衛といふが赤紐の解けたるを、「これを結ばばや」といへば、實方の中將、よりつくろふに、たゞならず。

あしびきの山井の水はこほれるをいかなる紐のとくるならん

といひかく。年わかき人の、さる顯證の程なれば、いひにくきにやあらん、返しもせず。そのかたはらなるおとな人達も、打ち捨てつゝ、ともかくもいはぬを、宮司などは耳とゞめて聽きけるに、久しくなりにけるかたはらいたさに、ことかたより入りて、女房の許によりて、「などかうはおはする」などぞさゝめくなるに、四人ばかりを隔てて居たれば、よく思ひ得たらんにもいひにくし、まして歌よむと知りたらん人の、おぼろけならざらんは、いかでかと、つゝましきこそはわろけれ。「よむ人はさやはある。いとめでたからねど、ねたうこそはいへ」と爪はじきをしてありくも、いとをかしければ、

うす氷あはにむすべる紐なればかざす日かげにゆるぶばかりぞ

形は蟲喰ひ形にて人の如き模樣なりとぞ

他所には云云ー御息所の人を他所に出すは云云、この御息所は中宮の妹淑景舍

やうしー瑩しの音、磨き立てたる

立ちいでぬ

まめいたり。五月の節のあやめの藏人、菖蒲のかづらの、赤紐の色にはあらぬを、領巾裙帶などして、藥玉を皇子たち上達部などの立ち竝み給へるに奉るも、いみじうなまめかし。取りて腰にひきつけて、舞踏し拜し給ふもいとをかし。火取の童。小忌の公達もいとなまめかし。六位の靑色のとのゐすがた。臨時の祭の舞人。五節の童なまめかし。

宮の五節出させ給ふに、かしづき十二人、他所には御息所の人出すをばわろき事にぞするると聞くに、いかにおぼすか、宮の女房を十人出させ給ふ。今二人は女院、淑景舍の人、やがて姉妹なりけり。辰の日の靑摺の唐衣、汗衫を著せ給へり。女房にだにかねてさしも知らせず、殿上人にはましていみじう隱して、みな裝束したちて、暗うなりたるほどに持て來て著す。赤紐いみじう結び下げて、いみじくやうしたる白き衣に、樫木のかた繪にかきたる、織物の唐衣のうへに著たるは、誠にめづらしき中に、童は今少しなまめきたり。下づかへまでつゞき立ちいでぬるに、上達部、殿上人驚き興じて、小忌の女房とつけたり。小忌の公達は、外に居て物いひなどす。五節の局を皆こぼちすかして、いと怪し

几帳のした云々—几帳の裾を几帳の手の所に掛けて。
鬚籠—編み捨てたる端を長く殘せる竹籠
朽木形の云云—一本几帳のくち木がた、朽木

御覽じ遊ばせ給へる、思ふ事おはせじとおぼゆる。

なまめかしきもの

ほそやかに淸げなる公達の直衣すがた。をかしげなる童女の、うへの袴など、わざとにはあらで、ほころびがちなる汗衫ばかり著て、藥玉など長くつけて、高欄のもとに、扇さしかくして居たる。若き人のをかしげなる、夏の几帳のしたうち懸けて、しろき綾、二藍ひき重ねて、手ならひしたる。薄樣の草紙、村濃の糸してをかしくとぢたる。柳の萠えたるに青き薄樣に書きたる文つけたる。鬚籠のをかしう染めたる、五葉の枝につけたる。三重がさねの扇。五重はあまり厚くなりて、もとなどにくげなり。能くしたる檜破子。白き組のほそき。新しくもなくて、いたく舊りてもなき檜皮屋に、菖蒲うるはしく葺きわたしたる。青やかなる御簾の下より、朽木形のあざやかに、紐いとつやゝかにて、かゝりたる紐の吹きなびかされたるもをかし。夏の帽額のあざやかなる、簾の外の高欄のわたりに、いとをかしげなる猫の、赤き首綱に白き札つきて、碇の緒くひつきて引きありくもな

などぞ猶いとめでたきや—原本などに猶いとめでたきなりに作る

みやはじめ—立后

葡萄染—紫の黑みた帶びたる色

ごとなき者に思はれ、かしこき御前に近づきまゐり、さるべき事など問はせ給ふ御文の師にて侍ふは、めでたくこそおぼゆれ。願文も、さるべきものの序作り出して譽めらる、いとめでたし。法師のざえある、すべていふべきにあらず。持經者の一人して讀むよりも、數多が中にて、時など定りたる御讀經などぞ、なほいとめでたきや。くらうなりて「いづら御讀經あぶらおそし」などいひて、讀みやみたる程、忍びやかにつゞけ居たるよ。后の晝の行啓。御うぶや。みやはじめの作法。獅子、狛犬、大床子などもてまゐりて、御帳の前にしつらひすゑ、內膳、御竈わたしたてまつりなどしたる。姫君など聞えしたゞ人とこそつゆ見えさせ給はね。一の人の御ありき。春日まうで。葡萄染の織物。すべて紫なるは、なにも〳〵めでたくこそあれ、花も、糸も、紙も。紫の花の中には杜若ぞ少しにくき。色はめでたし。六位の宿直すがたのをかしきにも、紫のゆゑなめり。ひろき庭に雪のふりしきたる。今上一の宮、まだ童にておはしますが、御叔父の上達部などの、わかやかに淸げなるに抱かれさせ給ひて、殿上人など召しつかひ、御馬引かせて

臣大饗の時朝廷より蘇(牛乳)甘栗(平栗)を持ち行く使者

みづから—一本御てづからに作る

覺ゆらん—一本いかゞ覺ゆらんに作る

おりんこと—六位藏人退職の事

はしりくらべ—競爭

に參りたるを、もてなし饗應し給ふさまは、いづこなりし天降人ならんとこそ覺ゆれ。御むすめの女御后におはします、まだ姫君など聞ゆるも、御使にてまゐりたるに、御文とり入るゝよりうちはじめ、しとねさし出づる袖口など、明暮見しものともおぼえず。下襲の裾ひきちらして、衞府なるは今すこしをかしう見ゆ。みづから盃さしなどしたまふを、わが心にも覺ゆらん。いみじうかしこまり、べちに居し家の公達をも、けしきばかりこそかしこまりたれ、同じやうにうちつれありく。うへの近くつかはせ給ふ樣など見るは、ねたくさへこそ覺ゆれ。御文かゝせ給へば、御硯の墨すり、御團扇などまゐり給へば、われつかふまつるに、三年四年ばかりのほどを、なりあしく物の色よろしうてまじろはんは、いふかひなきものなり。かうぶり得て、おりんこと近くならんだに、命よりはまさりて惜しかるべき事を、その御たまはりなど申して惑ひけるこそ、いと口をしけれ。昔の藏人は、今年の春よりこそ泣きたちけれ。今の世には、はしりくらべをなんする。博士のざえあるは、いとめでたしといふも愚なり。顏もいとにくげに、下臈なれども、世にやん

多くの人―普通一般の人

はべりしか―かは詠歎の辭なるべし

もく―木理

甘栗使―大

たれ」など御前にもの給はせ、人々もの給へど、「なにせんにか、さばかりの事を承りながら啓し侍らん」などまめやかに憂く心うがれば、うへも渡らせ給ひて、「まことに年ごろは多くの人なゝめりと見つるを、これにぞ怪しく思ひし」など仰せらるゝに、いとゞつらく、うちも泣きぬべき心地ぞする。「いであはれ、いみじき世の中ぞかし。後に降り積みたりし雪をうれしと思ひしを、それはあいなしとて、かき捨てよと仰事はべりしか」と申せば、「實にかたせじとおぼしけるらん」とうへも笑はせおはします。

めでたきもの

唐錦。錺太刀。作佛のもく。色あひよく花房長くさきたる藤の、松にかゝりたる。六位の藏人こそなほめでたけれ。いみじき公達なれども、えしも著給はぬ綾織物を、心にまかせて著たる青色すがたなど、いとめでたきなり。所衆雜色、たゞの人の子どもなどにて、殿原の四位五位六位も、官位あるが下にうち居て、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや。宣旨などもてまゐり、大饗の甘栗使など

蓋のかぎり—蓋だけ

その翁—木守

かのより來らん人—彼の清少の方より來らん者、一說雪山に寄り來らん人にてやがて清少をいふ

りて取りすて侍るにやとなん推しはかり侍ると啓せさせ給へ」と聞えさせつ。さて二十日に參りたるにも、まづこの事を御前にてもいふ。「みな消えつ」とて蓋のかぎりひきさげて持てきたりつる。帽子のやうにて、すなはちまうで來りつるが、あさましかりし事、物のふたに小山うつくしうつくりて、白き紙に歌いみじく書きて參らせんとせし事など啓すれば、いみじく笑はせ給ふ。御前なる人々も笑ふに、「かう心に入れて思ひける事を違へたれば罪得らん。まことには、四日の夕さり、侍どもやりて取りすてさせしぞ。かへりごとに、いひあてたりしこそをかしかりしか。その翁出できて、いみじう手をすりていひけれど、おほせごとぞ、かのより來らん人にかうきかすな。さらば屋うち毀たせんといひて、左近のつかさ、南の築地の外にみな取りすてし。いと高くて多くなんありつといふなりしかば、實に二十日までも待ちつけて、ようせずば今年の初雪にも降りそひなまし。うへにも聞し召して、いと思ひよりがたくあらがひたりと、殿上人などにも仰せられけり。さてもかの歌をかたれ、今はかくいひ顯しつれば、同じこと勝ちたり。か

て作れる數物

折櫃―廣蓋の類

いひ屈ず―心の鬱したる意か、春註には理屈にいひつめし心といへり

後日までもさふらひぬべし。祿たまらんと申す」といへば、いみじくうれしく、いつしか明日にならば、いと疾う歌よみて、物に入れてまゐらせんと思ふも、いと心もとなうわびしう、まだくらきに、大なる折櫃などもたせて、「これにしろからん所、ひたもの入れてもてこ。きたなげならんはかき捨てて」などいひくゝめて遣りたれば、いと疾く、もたせてやりつる物ひきさげて、「はやう失せ侍りにけり」といふに、いとあさまし。をかしうよみ出でて、人にもかたり傳へさせんとうめき誦じつる歌も、いとあさましくかひなく、「いかにしつるならん。昨日さばかりありけんものを、夜のほどに消えぬらんこと」といひ屈ずれば、「木守が申しつるは、昨日いと暗うなるまで侍りき。祿をたまはらんと思ひつるものを、たまはらずなりぬる事と、手をうちて申し侍りつる」といひさわぐに、內裏より仰事ありて、「さて雪は今日までありつや」との給はせたれば、いとねたくくちをしけれど、「年のうち朔日までだにあらじと人々啓し給ひし。昨日の夕暮まで侍りしを、いとかしこしとなん思ひ給ふる。今日まではあまりの事になん。夜の程に、人のにくが

わたくしにも—自分よりも

其程も—七日間禁中にありし程も

すまし、をさめ—共に賤しき女役

圓座—藁に

十五日までさふらはせ。よくよく守りて、その日にあたらば、めでたき祿たまはせんとす。わたくしにも、いみじき悦いはん」など語らひて、常に臺盤所の人、下司などに乞ひて、くるゝ菓子や何やと、いと多くとらせたれば、うち笑みて、「いと易きこと、たしかに守り侍らん。童などぞのぼり侍らん」といへば、「それを制して聞かざらん者は、事のよしを申せ」などいひ聞かせて、入らせ給ひぬれば、七日まで侍ひて出でぬ。其程も、これが後めたきまゝに、おほやけ人、すまし、をさめなどして、絶えずいましめにやり、七日の御節供のおろしなどをやりたれば、拜みつる事など、かへりては笑ひあへり。里にても、明くるすなはちこれを大事にして見せにやる。十日のほどには五六尺ばかりありといへば、うれしく思ふに、十三日の夜雨いみじく降れば、これにぞ消えぬらんと、いみじく口惜し。今一日もまちつけでと、夜も起き居て歎けば、聞く人も物狂ほしと笑ふ。人の起きて行くにやがて起きいで、下司おこさするに、更に起きねば、にくみ腹だたれて、起きいでたるを遣りて見すれば、「圓座ばかりになりて侍る。木守いとかしこう童も寄せで守りて、明日明

これより―これを音信の始めにして、一說、此方より改め使を立てて
蘇枋なるは云々―蘇枋色に見えたるは梅の五衣なるべし使者への祿
ゆかしかりつる―此先の結果が知りたかりし
あはせて―其間に

山とよむ斧のひゞきをたづぬればいはひの杖の音にぞありける

御返しかゝせ給ふほどもいとめでたし。齋院にはこれより聞えさせ給ふ。御返しも猶心ことにかきけがし、多く御用意見えたる。御使に、白き織物の單衣、蘇枋なるは梅なめりかし。雪の降りしきたるに、かづきて參るもをかしう見ゆ。このたびの御返事を知らずなりにしこそ口惜しかりしか。雪の山は、誠に越のにやあらんと見えて、消えげもなし。くろくなりて、見るかひもなきさまぞしたる。勝ちぬる心地して、いかで十五日まちつけさせんと念ずれど、「七日をだにえ過さじ」と猶いへば、いかでこれ見はててんと皆人おもふほどに、俄に三日内裏へ入らせ給ふべし。いみじうくちをしく、この山のはてを知らずなりなん事と、まめやかに思ふほどに、人も「實にゆかしかりつるものを」などいふ。御前にも仰せらる。同じくはいひあてて御覽ぜさせんと思へるかひなければ、御物の具はこび、いみじうさわがしきにあはせて、木守といふ者の、築地のほどに廂さしてゐたるを、緣のもと近く呼びよせて、「この雪の山いみじく守りて、童などに踏みちらさせ毀たせで、

て—不都合を働いて

さて雪山は—原本さての字なし

おこなはんなど—上げんなど思ひて

片つかたなれば云々—格子を一人にて上ぐる故片方が上り片方が下りてがたつくなり

しけれ」とあるを又わらふ。さて雪山はつれなくて年もかへりぬ。ついたちの日また雪多くふりたるを、うれしくも降り積みたるかなと思ふに、「これはあいなし。初のをばおきて、今のをばかき棄てよ」と仰せらる。うへにて局へいと疾うおるれば、侍の長なるもの、柚葉の如くなる宿直衣の袖の上に、青き紙の松につけたるをおきて、わなゝき出でたり。「そはいづこのぞ」と問へば、「齋院より」といふに、ふとめでたく覺えて、取りて參りぬ。まだ大殿ごもりたれば、母屋にあたりたる御格子おこなはんなど、かきよせて、一人ねんじてあぐる、いと重し。片つ方なればひしめくに、おどろかせ給ひて、「などさはする」との給はすれば、「齋院より御文の候はんには、いかでか急ぎあけ侍らざらん」と申すに、「實にいと疾かりけり」とて起きさせ給へり。御文あけさせ給へれば、五寸ばかりなる卯槌二つを、卯杖のさまに頭つゝみなどして、山たちばな、ひかげ、やますげなど美しげに飾りて、御文はなし。たゞなるやう有らんやはとて御覽ずれば、卯槌の頭つゝみたるちひさき紙に、

ふり―降りに古りを掛く

あざれたり―あまり感じて我風流心も腐れたり、一本あざれたる御簾に作る、然らば風流なる女房などの居る前にての意

目も見いれねば―見向きもしないので

はしたなく

こゝにのみめづらしと見る雪の山ところ〴〵にふりにけるかな

と傍なる人していはすれば、たび〳〵傾きて、「返しはえ仕うまつりけがさじ、あざれたり。御簾の前に人にをかたり侍らん」とてたちにき。歌はいみじく好むと聞きしに、あやし。御前にきこしめして、「いみじくよくとぞ思ひつらん」とぞの給はする。晦日がたに、少しちひさくなるやうなれど、なほいと高くてあるに、晝つかた縁に人々出居などしたるに、常陸介いできたり。「などいと久しく見えざりつる」といへば、「なにか、いと心憂き事の侍りしかば」といふに、「いかに、何事ぞ」と問ふに、「なほかく思ひ侍りしなり」とてながやかによみ出づ。

うらやまし足もひかれずわたつ海のいかなるあまに物たまふらん

となん思ひ侍りしといふをにくみ笑ひて、人の目もみいれねば、雪の山にのぼり、かゝづらひありきていぬる後に、右近の内侍にかくなんといひやりたれば、「などか人そへてこゝには給はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山までかゝりつたひけんこそ、いと悲

なる雪を取り加へて

かたへさらで—雪山の傍去らず狩衣姿にて在るにや

さまでなくと—よしやそれ迄なくとも

二ゆひとらせて、緣に投げ出づるを、一つづつとりに寄りて、をがみつゝ腰にさして皆まかゝでぬ。袍など著たるは、かたへさらで狩衣にてぞある。「これいつまでありなん」と人々のたまはするに、「十餘日はありなん」たゞこの頃のほどをあるかぎり申せば、「いかに」と問はせ給へば、「正月の十五日まで候ひなん」と申すを、御前にも、えさはあらじと思すめり。女房などは、すべて年の内、晦日までもあらじとのみ申すに、あまり遠くも申してけるかな。實にえしもさはあらざらん。朔日などぞ申すべかりけると下にはおもへど、さばれさまでなくと、言ひそめてんことはとて、かたうあらがひつ。二十日のほどに雨など降れど、消ゆべくもなし。長ぞ少しおとりもてゆく。白山の觀音、これ消させ給ふなと祈るも物狂ほし。さてその山つくりたる日、式部丞忠隆御使にてまゐりたれば、褥さし出し物などいふに、「今日の雪山つくらせ給はぬ所なんなき。御前のつぼにも作らせ給へり。春宮弘徽殿にもつくらせ給へり。京極殿にもつくらせ給へり」などいへば、

いかで見侍らん—何卒見たし
見えねど—常陸介が也
仰事にていへば—中宮の仰事なりとて侍に命ずれば
こと加へ—言加へ、命令しての意
一說、異加へにて他所

ば、「あれいかで見侍らん、かならず見せさせ給へ、御得意なゝなり。更によもかたらひとらじ」など笑ふ。その後また、尼なるかたはのいとあてやかなるが出できたるを、又呼びいでて物など問ふに、これははづかしげに思ひてあはれなれば、衣ひとつたまはせたるを、伏し拜むはされどよし。さてうち泣き悅びて出でぬるを、はやこの常陸介いきあひて見てけり。その後いと久しく見えねど、誰かは思ひ出でん。さて十二月の十餘日のほどに、雪いと高うふりたるを、女房どもなどして、物の蓋に入れつゝいと多くおくを、おなじくば庭にまことの山をつくらせ侍らんとて、侍召して仰事にていへば、集りてつくるに、主殿司の人にて御きよめに參りたるなども皆よりて、いと高くつくりなす。宮づかさなど參り集りて、こと加へことにつくれば、所の衆三四人まゐりたる。主殿司の人も二十人ばかりになりにけり。里なる侍召しに遣しなどす。「今日この山つくる人には祿賜はすべし。雪山に參らざらん人には、同じからずとゞめん」などいへば、聞きつけたるは惑ひまゐるもあり。里遠きはえ告げやらず。作りはてつれば、宮づかさ召して、衣

よるは云々
男山の云々
―共に尼の歌ふ謠

白くて著よ
―新しく著かへよ

舞ふものか
―かは詠歎辭、あきれたる口吻也

て、萬の事をかたる。若き人々いできて、「男やある、いづこにか住む」など口々に問ふに、をかしきこと、そへごとなどすれば、「歌はうたふや、舞などするか」と問ひもはてぬに、「よるはたれと寐ん、常陸介と寐ん、ねたる膚もよし。」これが末いと多かり。また「男山の峯のもみぢ葉、さぞ名はたつ／＼」と頭をまろがしふる。いみじくにくければ笑ひにくみて「いね／＼」といふもいとをかし。「これに何取らせん」といふを聞かせ給ひて、「いみじう、などかくかたはらいたき事はせさせつる。えこそ聞かで、耳をふたぎてありつれ。その衣一つとらせて、疾くやりてよ」と仰事あれば、とりて「それ賜はらするぞ、きぬすゝけたり、白くて著よ」とて投げとらせたれば、伏し拜みて、肩にぞうちかけて舞ふものか。誠ににくくて皆入りにし。後にはならひたるにや、常に見えしらがひてありく。やがて常陸介とつけたり。衣もしろめず、同じすゝけにてあれば、いづち遣りにけんなどにくむに、右近の内侍の參りたるに、「かゝるものなんかたらひつけて置きたゝめる。かうして常にくることと」と、ありしやうなど、小兵衞といふ人してまねばせて聞かせ給へ

止めん
よろし、いみじ|よろしは並一通
いみじは非常
うたても|餘りひどく
取り申し|御願申す、
春註機嫌を取ると解く

は、命もさながら捨ててなんとて參りにき。

職の御曹司におはしますころ、西の廂に不斷の御讀經あるに、佛などかけ奉り、法師のゐたるこそ更なる事なれ。二日ばかりありて、緣のもとにあやしき者の聲にて、「なほその佛供のおろし侍りなん」といへば、「いかでまだきには」と答ふるを、何のいふにかあらんと立ち出でて見れば、老いたる女の法師の、いみじく煤けたる狩袴の、筒とかやのやうに細く短きを、帶より下五寸ばかりなる、衣とかやいふべからん、同じやうに煤けたるを著て、猿のさまにていふなりけり。「あれは何事いふぞ」といへば、聲ひきつくろひて、「佛の御弟子にさぶらへば、佛のおろし賜べと申すを、この御坊達の惜みたまふ」といふ、はなやかにみやびかなり。「かゝるものは、うちくんじたるこそ哀なれ、うたても花やかなるかな」とて「他物は食はで、佛の御おろしをのみ食ふが、いとたふとき事かな」といふけしきを見て、「などか他物もたべざらん。それがさふらはねばこそ取り申し侍れ」といへば、菓子、ひろきもちひなどを、物に取り入れて取らせたるに、無下に中よくなり

給へ

にくくして―中直りもせずして

まゆぬくも―原本も文字なし、年頃の女は眉を抜き墨にて描きし也

中なるをとめ―宇津保物語吹上の巻、朝ぼらけほのかに見ればあかぬかな中なる少女暫し

といひ遣りたりしも、誠に見ずやなりけん、返事もせず。さてかうぶり得て遠江介などいひしかば、にくくしてこそやみにしか。

物のあはれ知らせがほなるもの

鼻たるまもなく、かみてものいふ聲。まゆぬくも。

さてその左衛門の陣にいきて後、里に出でて暫しあるに、「疾く參れ」など仰事のはしに、「左衛門の陣へいきし朝ぼらけなん、常におぼし出でらるゝ。いかでさつれなくうちふりてありしならん。いみじくめでたからんとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返事に、かしこまりのよし申して、「私にはいかでかめでたしと思ひ侍らざらん。御前にも、さりとも、中なるをとめとはおぼしめし御覽じけんとなん思ひ給へし」と聞えさせたれば、たち歸り「いみじく思ふべかゝめるなり。誰がおもてぶせなる事をば、いかでか啓したるぞ。たゞ今宵のうちに萬の事をすてて參られよ。さらずばいみじくにくませ給はんとなん仰事ある」とあれば、よろしからんにてだにゆゝし。ましていみじくとある文字に

すゞろなる所—いゝ加減の所
硯のある—硯の傍にある
便なき事—怨めしく思ふ事、面白くない事
よそにても云々—餘所ながらもあの彼の男ぞなど思出し

めて問はれて、すゞろなる所に率てありき奉りて、まめやかにさいなむに、いとからし。さてとかくも御かへりのなくて、そゞろなる和布の端をつゝみて取へりしかば、取りたがへたるにや」といふに、怪しの違物や。人のもとにさる物包みて贈る人やはある。いさゝかも心得ざりけると見るがにくければ、物もいはで、硯のある紙のはしに、

　かづきする蜑の住家はそこなりとゆめいふなとやめをくはせけん

とかきて出したれば、「歌よませ給ひつるか、更に見侍らじ」とてあふぎかへして遁げていぬ。かう互に後見かたらひなどする中に、何事ともなくて、少し中あしくなりたるころ、文おこせたり。「便なき事侍るとも、ちぎり聞えし事は捨て給はで、よそにてもさぞなどは見給へ」といひたり。常にいふ事は、「おのれをおほさん人は、歌などよみてえさすまじき。すべて仇敵となん思ふべき。今はかぎりありて絶えなんと思はん時、さる事はいへ」といひしかば、この返しに、

　くづれよる妹脊の山のなかなればさらによし野のかはとだに見じ

中間に―時ならぬに、中途半端の時に

すぢなし―隱すべきすべなし、遁辭なし

に、更に知らぬよし申しゝに、あやにくに強ひたまひし事などいひて、一ある事あらがふは、いと佗しうこそありけれ。ほと／＼笑みぬべかりしに、左中將のいとつれなく知らず顏にて居給へりしを、かの君に見だにあはせば笑みぬべかりしに佗びて、臺盤のうへに怪しき和布のありしを、唯とりに取りて食ひまぎらはしゝかば、中間にあやしの食物やと人も見けんかし。されど、かしこうそれにてなん申さずなりにし。笑ひなましかば不用ぞかし。まことに知らぬなめりと思したりしも、をかしうこそ」など語れば、「更にな聞え給ひそ」などいとゞいひて、日ごろ久しくなりぬ。夜いたく更けて、門おどろ／＼しく叩けば、何のかく心もとなく遠からぬ程を叩くらんと聞きて、問はすれば、瀧口なりけり。左衞門の文とて、文をもてきたり。皆ねたるに、火近く取りよせて見れば、「明日御讀經の結願にて、宰相中將の御物忌に籠り給へるに、妹の在處申せと責めらるゝに、すぢなし、更にえ隱し申すまじき。そことや聞かせ奉るべき。いかに。仰に隨はん」とぞいひたる。返事も書かで、和布を一寸ばかり紙に包みてやりつ。さて後にきて、「一夜責

かはらの松—白氏文集四、樂府に、牆有レ衣兮瓦有レ松云云、西去ニ都門ニ幾多地云々

なしなども—不在など いひても

かゞやき—氣恥しく

に、物語の事にまぎれて」とて、ありつる事を語り聞えさすれば、「誰も〳〵見つれど、いとかく縫ひたる絲針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。西の京といふ所の荒れたりつる事、諸共に見る人あらましかばとなん覺えつる、垣なども皆破れて、苔生ひてなど語りつれば、宰相の君の、「かはらの松はありつや」と答へたりつるを、いみじうめでて、「西のかた都門を去れることいくばくの地ぞ」と口ずさびにしつる事など、かしがましきまでいひしこそをかしかりしか。

里にまかでたるに、殿上人などの來るも、安からずぞ人々いひなすなる。いとあまり心に引きいりたる覺はたなければ、さいはん人もにくからず。また夜も晝もくる人をば、何かはなしなどもかゞやきかへさん。誠に睦じくなどあらぬも、さこそは來めれ。あまりうるさくも實にあれば、このたび出でたる所をば、いづくともなべてには知らせず。經房、濟政の君などばかりぞ知り給へる。左衞門尉則光が來て、物語などするついでに、昨日も宰相中將殿の、妹のあり處さりとも知らぬやうあらじと、いみじう問ひ給ひし

時中宮の女官共御緣邊の喪服なりしならん

仲忠—宇津保物語中の人物、幼にして孝、種種の奇特あり、琴をよくし帝の一の内親王降嫁の宣旨下りし事あり

に、局をたゝきしほど、辛うじて寐おびれて起き出でたりしけしき、答のはしたなさなど語りてわらひ給ふ。「無下にこそ思ひうんじにしか。などさるものをばおきたる」など實にさぞありけんと、いとほしくもをかしくもあり。暫しありて出で給ひぬ。外より見ん人はをかしう、内にいかなる人のあらんと思ひぬべし。奧のかたより見いだされたらんうしろこそ、外にさる人やともえ思ふまじけれ。暮れぬればまゐりぬ。御前に人々多くつどひゐて、物語のよきあしき、にくき所などをぞ、定めいひしろひ誦じ、仲忠がことなど、御前にも、おとりまさりたる事など仰せられける。「まづこれは如何にとことわれ。仲忠が童生のあやしさを、せちに仰せらるゝぞ」などいへば、「何かは、琴なども天人おるばかり彈きて、いとわろき人なり。みかどの御むすめやはえたる」といへば、仲忠が方人と心を得て「さればよ」などいふに、「この事どもよりは、ひる齊信が參りたりつるを見ましかば、いかにめで惑はましとこそ覺ゆれ」と仰せらるゝに、人々「さてまことに常よりもあらまほしう」などいふ。「まづそのことこそ啓せめと思ひて參り侍りつる

擣目—衣などの擣ちたる處、ころは直衣の下の御衣の色をいふ

片つかた—片足

ありて—原本ての字なし

さだ過ぎ—壯年を過ぎて、以下淸少自身の樣

大かた色ことなる—當

うらなるに、葡萄染のいと濃き指貫に、藤のをり枝こと〴〵しく織りみだりて、紅の色擣目など、輝くばかりぞ見ゆる。次第に白きうす色など、あまた重りたる、狹きまゝに、片つかたはしもながら、少し簾のもと近く寄り居給へるぞ、まことに繪に書き、物語のめでたきことにいひたる、これにこそはと見えたる。御前の梅は、西は白く東は紅梅にて、少しおちかたになりたれど、猶をかしきに、うら〳〵と日の氣色のどかにて、人に見せまほし。簾の内に、まして若やかなる女房などの、髮うるはしく長くこぼれかゝりなど、そひ居たゝめる、今少し見所ありて、をかしかりぬべきに、いとさだ過ぎ、ふる〳〵しき人の、髮なども我にはあらねばや、處々わなゝきちりぼひて、大かた色ことなるころなれば、あるかなきかなる薄にびども、あはひも見えぬ衣どもなどあれば、露のはえも見えぬに、おはしまさねば裳も著ず、袿すがたにて居たるこそ、物ぞこなひに口をしけれ。「職へなんまゐる、ことづけやある、いつかまゐる」などのたまふ。さても昨夜あかしもはてで、されどもかねてさ言ひてしかば待つらんとて、月のいみじう明きに、西の京よりくるまゝ

給ふめりし。

かへる年の二月二十五日に、宮、職の御曹司に出でさせ給ひし。御供にまゐらで梅壺に殘り居たりし又の日、頭中將の消息とて、「きのふの夜鞍馬へ詣でたりしに、こよひ方の塞がれば、違になん行く、まだ明けざらんに歸りぬべし。必いふべき事あり、いたくたゝかせで待て」との給へりしかど、「局に一人はなどてあるぞ、こゝに寐よ」とて御匣殿めしたれば參りぬ。久しく寐おきておりたれば、「夜いみじう人のたゝかせ給ひし。辛うじて起きて侍りしかば、うへにかたらば斯くなんとの給ひしかども、よもきかせ給はじとて臥し侍りにき」と語る。心もとなの事やとて聞くほどに、主殿司きて、「頭の殿の聞えさせ給ふなり。只今まかり出づるを、聞ゆべき事なんある」といへば、「見るべきことありて、うへになんのぼり侍る。そこにて」といひて、局はひきもやあけ給はんと、心ときめきして、わづらはしければ、梅壺の東おもての半蔀あげて、「こゝに」といへば、めでたくぞ歩み出で給へる。櫻の直衣いみじく花々と、うらの色つやなどえもいはずけ

袖几帳など云々—頭中將との隔もなくなれり

御匣殿—中關白道隆公の四君

うへ—清少をいふ、侍女の用ふる敬稱

けうら—清ら

言加へ―上の句を附加へよと訊くは如何、批評し又意味を了解せよと云々の意なるべし

人―あなた

せうと―則光の渾名となしたる也

語り聞え―帝が中宮になり

褒め感じて、兄こそ聞けとのたまひしかば、下心にはいとうれしけれど、さやうのかたには更にえ侍ふまじき身になんはべると申しゝかば、言加へ聞き知れとにはあらず、ただ人に語れとてきかするぞとの給ひしなん、少し口をしき兄のおぼえに侍りしかど、これがもとつけ試るにいふべきやうなし。殊に又これが返しをやすべきなどいひ合せ、わろき事いひてはなか〳〵ねたかるべしとて、夜中までなんおはせし。これは身のためにも人のためにも、さていみじきよろこびには侍らずや。司召に少將のつかさ得て侍らんは、何とも思ふまじくなん」といへば、實に數多して、さる事あらんとも知らで、ねたくもありけるかな。これになん胸つぶれて覺ゆる。この妹兄といふことをば、うへまで皆しろしめし、殿上にも官名をばいはで、「せうと」とぞつけたる。物語などして居たる程に、「まづ」と召したれば參りたるに、この事仰せられんとてなりけり。うへの渡らせ給ひて、語り聞えさせ給ひて、「男ども皆扇に書きて持たる」と仰せらるゝにこそ、あさましう何のいはせける事にかと覺えしか。さて後に袖几帳など取りのけて、思ひなほり

―前に此方より遣したる文

ぬす人―ひどい奴、其老巧を譽むる言葉

心もとなく―夜の明くるが待遠しく

兄―自らいふ

なれば、かへしてけるかとうち見るにあはせてをめけば、あやし、いかなる事ぞとてみな寄りて見るに、いみじきぬす人かな。なほえこそすつまじけれと見さわぎて、これがもとつけてやらん、源中將つけよなどいふ。夜更くるまでつけ煩ひてなん止みにし。この事かならず語り傳ふべき事なりとなん定めし」と、いみじくかたはらいたきまでいひきかせて、「御名は今は草の庵となんつけたる」とて急ぎたちたまひぬれば、「いとわろき名の末まであらんこそ口惜しかるべけれ」といふほどに、修理亮則光「いみじきよろこび申しに、うへにやとて參りたりつる」といへば、「なぞ司召ありとも聞えぬに、何になり給へるぞ」といへば、「いで實にうれしき事の昨夜侍りしを、心もとなく思ひ明してなん。かばかり面目ある事なかりき」とて、はじめありける事ども、中將の語りつる同じ事どもをいひて、「この返事に隨ひてさる物ありとだに思はじと、頭中將の給ひしに、ただに來りしはなかなかよかりき。持て來りしたびは、如何ならんと胸つぶれて、まことにわろからんは、兄のためもわろかるべしと思ひしに、なのめにだにあらず。そこらの人の

たるが其程の事にてはなかりき

草の庵—白氏文集十七蘭省の句下に廬山雨夜草庵中

このもの—清少納言をいふ、頭中將の詞

こひとりて—返事をありつる文

しなど、思ひまはす程もなく、責めまどはせば、唯その奥に、すびつの消えたる炭のあるして、「草の庵を誰かたづねん」と書きつけて取らせつれど、返事もいはで、「みな寐て、翌朝いと疾く局におりたれば、源中將の聲して、「草の庵やある〳〵」とおどろ〳〵しう問へば、「などてか、さ人げなきものはあらん。玉の臺もとめ給はましかば、いで聞えてまし」といふ。「あなうれし、下にありけるよ。上まで尋ねんとしつるものを」とて、昨夜ありしやう、「頭中將の宿直所にて、少し人々しきかぎり、六位まで集りて、萬の人のうへ、昔今と語りていひし序に、猶このもの無下に絶えはてて後こそ、さすがにえあらね。もしいひ出づる事もやと待てど、いさゝか何とも思ひたらず。つれなきがいとねたきを、今宵惡しとも善しとも定めきりて止みなんかしとて、皆いひ合せたりしことを、只今は見るまじきとて入りたまひぬとて、主殿司來りしを、また追ひ歸して、たゞ袖をとらへて、東西をさせず、こひとり持てこずば、文をかへしとれと誡めて、さばかり降る雨の盛に遣りたるに、いと疾く歸りきたり。これとてさし出でたるが、ありつる文

篇をぞつく―篇突にてつくりを隱し篇にて字をあてる遊戯、眞頼の說には、つぐと濁りて讀む、篇を定めおきてそれにつくりを附くる遊戯

心ときめき云々―何事かと先に心どき〳〵し

給ひにけり。長押の下に火近く取りよせて、さし集ひて篇をぞつく。「あなうれしや、疾くおはせ」など見つけていへど、すさまじき心地して、何しにのぼりつらんとおぼえて、炭櫃のもとにゐたれば、又そこにあつまりゐて物などいふに、「なにがしさぶらふ」といと花やかにいふ。あやしく、「いつの間に何事のあるぞ」と問はすれば殿主司なり。「唯こゝに人傳ならで申すべき事なん」といへば、さし出でて問ふに、「これ頭中將殿の奉らせ給ふ、御かへり疾く」といふに、いみじくにくみ給ふをいかなる御文ならんと思へど、「只今急ぎ見るべきにあらねば、いね、今きこえん」とて懷にひき入れて入りぬ。なほ人の物いふきゝなどするに、すなはち立ちかへりて、「さらばその有りつる文を賜りて來となん仰せられつる。疾く〳〵」といふに、「あやしく伊勢の物語なるや」とて見れば、青き薄樣にいと淸げに書き給へるを、心ときめきしつるさまにもあらざりけり。「蘭省の花の時錦帳の下」と書きて、「末はいかに〳〵」とあるを、如何はすべからん。御前のおはしまさば御覽ぜさすべきを、これがする知り顏に、たど〳〵しき眞字は書きたらんも見ぐる

事取にて長官か、旁註抄などは小鳥に作る

琵琶の聲云云—白樂天が琵琶行の一節

そらごと—清少に關する讒言

よに—よもや、決して

そびあり。道方の少納言琵琶いとめでたし。濟政の君箏の琴、行成笛、經房の中將笙の笛など、いとおもしろうひとわたり遊びて、琵琶ひきやみたるほどに、大納言殿の、「琵琶の聲はやめて物語すること遲し」といふ事を誦じ給ひしに、隱れふしたりしも起き出でて、「罪はおそろしけれど、なほ物のめでたきはえ止むまじ」とて笑はる。御聲などの勝れたるにはあらねど、折のことさらに作りいでたるやうなりしなり。

頭中將そゞろなるそらごとを聞きて、いみじういひおとし、「何しに人と思ひけん」など殿上にてもいみじくなんの給ふと聞くに、はづかしけれど、「實ならばこそあらめ、おのづから聞きなほし給ひてん」など笑ひてあるに、黑戸のかたへなど渡るにも、聲などする折は、袖をふたぎて露見おこせず、いみじうにくみ給ふを、とかくもいはず、見もいれで過ぐす。二月つごもりがた、雨いみじう降りてつれ〴〵なるに、「御物忌にこもりて、さすがにさう〴〵しくこそあれ、物やいひにやらましとなんの給ふ」と人々かたれど、「よにあらじ」など答へてあるに、一日しもに暮して參りたれば、夜のおとゞに入らせ

—娘が也、下なるなげく人はその娘の親

人長—神樂の舞人の長

とりもてるもの—一説にこの語振幡に接し、得たる人まで前の一段の中と云々こととり—

を忍びて壻にとりて、思ふさまならずとなげく人。

いとほしげなきもの

人によみて取らせたる歌の褒めらるゝ、されどそれはよし。遠きありきする人の、つぎつぎ縁尋ねて文えんといはすれば、知りたる人の許等閑にかきて遣りたるに、なまいたはりなりと腹立ちて、返事もとらせで無德にいひなしたる。

こゝちよげなるもの

卯杖の祝言。神樂の人長。池の蓮の村雨にあひたる。御靈會の馬長。また御靈會の振幡。

とりもてるもの

傀儡のこととり。除目に第一の國得たる人。

御佛名のあした、地獄繪の御屛風とりわたして、宮に御覽ぜさせ奉りたまふ。いみじうゆゆしき事かぎりなし。「これ見よかし」と仰せらるれど、「更に見侍らじ」とて、ゆゝしさにうへやに隱れふしぬ。雨いたく降りて徒然なりとて、殿上人うへの御局に召して御あ

おほさきこさき―上達部のは大聲蹕、殿上人のは小聲蹕

なにがし一聲の秋―何とか一聲の秋とおぼろに書ける也　朗詠に、池冷水無二三伏夏一、松高風有二一聲秋一

しぶ〳〵に

はみじかければ、おほさきこさきと聞きつけて騒ぐ。數多たびになれば、その聲どもも皆聞きしられて、それぞかれぞといふに、又「あらず」などいへば、人して見せなどするに、いひあてたるは、「さればこそ」などいふもをかし。有明のいみじう霧わたりたる庭におりて歩くを聞し召して、御前にもおきさせ給へり。うへなる人は皆おりなどして遊ぶに、やう〳〵明けもてゆく。左衛門の陣にまかりて見んとて行けば、われも〳〵と追ひつきて行くに、殿上人あまた聲して、なにがし一聲の秋と誦じて入る音すれば、遁げ入りて物などいふ。「月を見給ひける」などめでて、歌よむもあり。夜も晝も殿上人の絶ゆるをりなし。上達部まかンでまゐり給ふに、おぼろげに急ぐことなきは、必まゐり給ふ。

あぢきなきもの

わざと思ひたちて宮仕に出で立ちたる人の、ものうがりてうるさげに思ひたる。人にもいはれ、むづかしき事もあれば、いかでかまかゝでなんといふ言草をして、出でて親をうらめしければ、また參りなんといふよ。養子の顏にくさげなる。しぶ〳〵に思ひたる人

かも知れざれど

さきは云々—炬火のさきは前なる人にさし附ける程に

まめ人—生眞面な人、忠誠の意より轉じたる嘲笑的口吻

とありて—今少しかくありて後退出し給へ

おはします—中宮の也

祭の調樂などはいみじうをかし。殿主の官人などの長き松を高くともして、頸はひき入れて行けば、さきはさし附けつばかりなるに、をかしうあそび笛ふき出でて、心ことに思ひたるに、公達の日の裝束して立ちとまり物いひなどするに、殿上人の隨身どもの、さきを忍びやかに短く、おのが公達のれうにおひたるも、あそびに交りて、常に似ずをかしう聞ゆ。夜更けぬれば猶あけて歸るを待つに、公達の聲にて、あらたに生ふるとみ草の花と歌ひたるも、このたびは今少しをかしきに、いかなるまめ人にかあらん、すぐすぐしうさし歩みて出でぬるもあれば、笑ふを、「暫しや、など、さ夜をすてて急ぎ給ふ、とありて」などいへど、心地などやあしからん、倒れぬばかり、もし人や追ひてとらふると見ゆるまで、まどひ出づるもあゝめり。

職の御曹司におはしますころ、木立など遙に物ふり、屋のさまも高うけどほけれど、すずろにをかしう覺ゆ。母屋は鬼ありとて皆へだて出して、南の廂に御几帳たてて、またひさしに女房は侍ふ。近衞の御門より左衞門の陣に入り給ふ上達部のさきども、殿上人の

こゝへとしも云々―こゝへ來らんと志せるにあらぬ人も
うけばりて―憚る樣子なく、立てらずにかゝる
いかゞあらん―當らぬ

忍びたれど聞ゆるを、いとゞたゝきまさり、聲にてもいふに、陰ながらすべりよりて聞く折もあり。また數多の聲にて詩を誦し、歌などうたふには、たゝかねどまづあけたれば、こゝへとしも思はぬ人も立ちとまりぬ。入るべきやうもなくて、立ちあかすもをかし。御簾のいと青くをかしげなるに、几帳の帷子いとあざやかに、裾のつま少しうちかさなりて見えたるに、直衣の後にほころび絶えず著たる公達、六位の藏人の青色など著て、うけばりて、遣戸のもとなどにそばよせてえ立てらず、塀の前などに、後押して袖うち合せて立ちたるこそをかしけれ。また指貫いと濃う直衣のあざやかにて、いろ〳〵の衣どもこぼし出でたる人の、簾を押し入れて、なから入りたるやうなるも、外より見るはいとをかしからんを、いと清げなる硯ひきよせて文書き、もしは鏡こひて鬢などかき直したるもすべてをかし。三尺の几帳をたてたるに、帽額のしもは唯少しぞある。外に立てる人、内にゐたる人と物いふ顏のもとに、いとにくく當りたるこそをかしけれ。長のいと高く、短からん人などやいかゞあらん。なほ尋常のはさのみぞあらん。まして臨時の

かへりいはで思ふぞいふにまされる

身じろく〳〵　身動く、内なる女の也

同じ處に住む人の、互に慚ぢかはし、いさゝかの隙なく用意したりと思ふが、遂に見えぬこそかたけれ。物語、集など書きうつす本に墨つけぬ事。よき草紙などは、いみじく心して書けども、必こそきたなげになるめれ。男も女も法師も、ちぎり深くてかたらふ人の、末まで中よき事かたし。つかひよき從者。搔練うたせたるに、あなめでたと見えておこす。内裏の局は、廊いみじうをかし。かみの小蔀あけたれば、風いみじう吹き入りて夏もいとすゞし。冬は雪霰などの風にたぐひて入りたるもいとをかし。せばくて童などののぼり居たるもあしければ、屛風の後などにかくしすゑたれば、他所のやうに聲たかく笑ひなどもせでいとよし。晝などもたゆまず心づかひせらる。夜はたまして聊うちとくべくもなきが、いとをかしきなり。沓の音の夜ひと夜聞ゆるがとまりて、たゞ指一つしてたゝくが、その人なゝりと、ふと知るこそをかしけれ。いと久しくたゝくに音もせねば、寐いりにけるとや思ふらん。ねたく少しうち身じろくおと、衣のけはひも、さなゝなりと思ふらんかし。冬は火桶にやをら立つる火箸の音も、

斧の柄も云云―時間の甚だ長きをいふ、晉の王質の故事

ながめて―一本あくびてに作る

いはずあると―黑川翁云、いはずにて句、あるはあゝの誤

下ゆく水の―六帖に、心には下ゆく水の湧き

らねど、おのづから來などする人の、簾の内にて、あまた人々ゐて、物などいふに、入りてとみに歸りげもなきを、供なる男童など、斧の柄も朽ちぬべきなゝんめりとむつかしければ、永やかにうち詠めて、密にと思ひていふらめども、「あなわびし、煩惱苦惱かな、今は夜中にはなりぬらん」などいひたる、いみじう心づきなく、かのいふ者はとかくも覺えず、この居たる人こそ、をかしう見きゝつる事もうするやうに覺ゆれ。又さは色に出でてはえいはずあると、高やかにうちいひうめきたるも、したゆく水のといとをかし。立蔀、透垣のもとにて、「雨降りぬべし」など聞えたるもいとにくし。よき人公達などの供なるこそ、さやうにはあらね、唯人などさぞある。數多あらん中にも、心ばへ見てぞ率てありくべき。

○ありがたきもの

舅に褒めらるゝ壻。また姑に思はるゝ婦の君。物よく拔くる白銀の毛拔。主謗らぬ人の從者。つゆの癖缺點なくて、かたち心ざまもすぐれて、世にあるほど、聊のきずなき人。

あらぬ人―別人
れおびれたろ―ねぼけたろ
やがて―そのまゝ
けそう―顯證、あらはなる

たとしへなきもの

夏と冬と。夜と晝と。雨ふると日てると。若きと老いたると。人の笑ふと腹だつと。黑きと白きと。思ふと憎むと。藍と黃蘗と。雨と霧と。おなじ人ながらも志うせぬるは、誠にあらぬ人とぞ覺ゆるかし。常磐木おほかる處に烏のねて、夜中ばかりにいねさわがしくおぢ惑ひ、木づたひて、ねおびれたる聲に鳴きたるこそ、晝のみめにはたがひてをかしけれ。忍びたる處にては夏こそをかしけれ。いみじう短き夜のいとはかなく明けぬるに、つゆ寐ずなりぬ。やがて萬の所あけながらなれば、涼しう見わたされたり。なほ今少しいふべき事のあれば、互にいらへどもするほどに、たゞ居たる前より、烏の高く鳴きて行くこそ、いとけそうなる心地してをかしけれ。冬のいみじく寒きに、思ふ人とうづもれ臥して聞くに、鐘の音のたゞ物の底なるやうに聞ゆるもをかし。鳥の聲もはじめは羽のうちに口をこめながら鳴けば、いみじう物深く遠きが、つぎ〳〵になるまゝに近く聞ゆるもをかし。懸想人にて來るはいふべきにもあらず。唯うちかたらひ、又さしもあ

又は老髮の如くぼさぼさとなりたる樣をいふならん

なびきて―この下に立てるさまはと補ふべし

かひろぎ―老人の腰のひよろめく樣

今いで來る者―この頃來たての從者

う似ためれ。よそふる事ありて、それをしもこそ哀ともおもふべけれ。萩はいと色ふかく、枝たをやかに咲きたるが、朝露にぬれてなよ〳〵とひろごりふしたる、牡鹿の分きてたちならすらんも心ことなり。唐葵はとりわきて見えねど、日の影に隨ひて傾くらんぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき。花の色は濃からねど、咲く山吹には山石榴も異なることなけれど、をりもてぞ見るとよまれたる、さすがにをかし。薔薇はちかくて、枝のさまなどはむつかしけれどをかし。雨など晴れゆきたる水のつら、黑木の階などのつらに、亂れ咲きたるゆふばえ。

おぼつかなきもの

十二年の山籠の法師の女親。知らぬ所に闇なるに行きたるに、あらはにもぞあるとて、火もともさで、さすがになみゐたる。今いで來るものの心も知らぬに、やんごとなき物もたせて人の許やりたるに、遲くかへる。物いはぬ兒の、そりくつがへりて人にも抱かれず泣きたる。暗きに覆盆子食ひたる。人の顏見しらぬ物見。

老いていけば云々—黒川翁の説に菫の老い衰へ行けば壺菫も唯の菫も同じ樣になるはいやな心地す

ぬかつき—黒川翁の説に、千生酸漿（センナリホホヅキ）

おほどれたる—老耄、

きにもあらぬさまなれど、鴈來紅の花らうたげなり。名ぞうたてげなる。鴈の來る花と、文字には書きたる。雁緋の花、色は濃からねど、藤の花にいとよく似て、春と秋と咲く、をかしげなり。壺菫、すみれ、同じやうの物ぞかし。老いていけば同じなど憂し。しもつけの花。夕顏は朝顏に似て、いひつゞけたるもをかしかりぬべき花のすがたにて、にくき實のありさまこそいとくちをしけれ。などてさはた生ひ出でけん。ぬかつきなどいふもののやうにだにあれかし。されどなほ夕顏といふ名ばかりはをかし。葦の花、更に見どころなけれど、御幣などいはれたる、心ばへあらんと思ふにたゞならず。萌えしも薄にはおとらねど、水のつらにてをかしうこそあらめと覺ゆ。これに薄を入れぬ、いとあやしと人いふめり。秋の野のおしなべたるをかしさは、薄にこそあれ。穗さきの蘇枋にいと濃きが、朝霧にぬれてうち靡きたるは、さばかりの物やはある。秋の終ぞいと見所なき。いろ／＼に亂れ咲きたりし花の、かたもなく散りたる後、冬の末まで、頭いと白く、おほどれたるをも知らで、昔おもひいで顏になびきて、かひろぎ立てる人にこそいみじ

物おしつけ―葉の大さを物に比べんためにや

古萬葉集―萬葉集なり別物にあらず

むつかし―むくつけし

ひろごりたゞよひてありく、いとをかし。とりあげて物おしつけなどして見るも、よにいみじうをかし。八重葎。麥門冬。山藺。女蘿。濱木綿。葦。葛の風に吹きかへされて裏のいとしろく見ゆる、をかし。

集は

古萬葉集。古今。後撰。

歌の題は

都。葛。三稜草。駒。霰。笹。壺菫。女蘿。蔣。高瀬。鴛鴦。淺茅。芝。青鞭草。梨。棗。槿。

草の花は

瞿麥、唐のは更なり、やまとのもいとめでたし。女郎花。桔梗。菊のところ〴〵うつろひたる。刈萱。龍膽は枝ざしなどもむつかしげなれど、他花みな霜がれはてたるに、いとはなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。わざととりたてて、人めかすべ

心あがり―澤瀉を面高にかけし洒落

生ふる處云云―堀河百首、壁に生ふるいつまで草のいつまでかかれすとふべき篠原の里

草は

菖蒲。菰。葵いとをかし。祭のをり、神代よりしてさるかざしとなりけん、いみじうめでたし。物のさまもいとをかし。澤瀉も名のをかしきなり、心あがりしけんとおもふに。三稜草。蛇床子。苔。木蝎。雪間の青草。酢漿、あやの紋にても他物よりはをかし。あやふ草は岸の額に生ふらんも、實にたのもしげなくあはれなり。いつまで草は生ふる處いとはかなくあはれなり。岸の額よりもこれはくづれやすげなり。まことの石灰などには、えおひずやあらんと思ふぞわろき。ことなし草は思ふ事なきにやあらんと思ふもをかし。又あしき事を失ふにやといづれもをかし。しのぶ草いとあはれなり。屋の端、さし出でたる物の端などに、あながちに生ひ出でたるさま、いとをかし。蓬いとをかし。茅花いとをかし。濱茅の葉はましてをかし。荊三稜。蘋萍。淺茅。青鞭草。木賊といふ物は風に吹かれたらん音こそ、いかならんと思ひやられてをかしけれ。薺。ならしば、いとをかし。蓮のうき葉のらうたげにて、のどかに澄める池の面に、大なると小さきと、

か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬となる

このしたにも—天の川はこの下界にもあるよとの洒落

七夕つめに—古今集に狩り暮し七夕つめに宿からん天の川原に我は來にけり

なり。細谷川。玉星川。貫川、澤田川、催馬樂などのおもひはするなるべし。なのりその川。名取川もいかなる名を取りたるにかと聞かまほし。吉野川。あまの川、このしたにもあるなり。七夕つめに宿からんと業平が詠みけんも、ましてをかし。

橋は

あさむつの橋。長柄の橋。あまびこの橋。濱名の橋。ひとつ橋。佐野の船橋。うたじめの橋。轟の橋。小川の橋。かけはし。勢多の橋。木曾路の橋。堀江の橋。鵲の橋。ゆきあひの橋。小野の浮橋。山菅の橋。一筋わたしたる棚橋、心せばければ名を聞きたるをかし。假寐の橋。

里は

逢坂の里。ながめの里。いさめの里。ひとづまの里。たのめの里。朝風の里。夕日の里。十市の里。伏見の里。長井の里。つまとりの里、人にとられたるにやあらん、わが取りたるにやあらん、いづれもをかし。

さゝの云々―さゝはさく(笏)の誤なるべしといふ、笏の白きを挾めるあたりに

淵瀬云々―古今集に、世の中は何

どさゝげたる、いとうつくし。車とゞめて抱き入れまほしくこそあれ。又さて往くに、薫物の香のいみじくかゝへたる、いとをかし。よき家の中門あけて、檳榔毛の車の白う清げなる、はじ蘇枋の下簾のにほひいときよげにて、榻にたちたるこそめでたけれ。五位六位などの下襲のしりはさみて、さゝのいと白きかたにうちおきなどして、とかくいきちがふに、また装束し、壺胡籙負ひたる隨身の出で入る、いとつきづきし。厨女のいと清げなるがさし出でて、・某殿の人やさぶらふなどいひたる、をかし。

瀧は

音無の瀧。布留の瀧は、法皇の御覽じにおはしけんこそめでたけれ。那智の瀧は熊野にあるがあはれなるなり。轟の瀧はいかにかしがましく怖しからん。

川は

飛鳥川、淵瀬さだめなくはかなからむといとあはれなり。大井川。泉川。水無瀬川。耳敏川、また何事をさしもさかしく聞きけんとをかし。音無川、思はずなる名とをかしき

明に人に知られて悪しければ

心いられたらんー氣が短い、いらいらする

黑き袴ーよごれてきたなき袴

走る車云々ー黑き袴、狩衣、走る車、何れも別々に上の見えぬべきがに接する文脈

痩せからめきたるは、心いられたらんと推し量らる。よろづよりは、牛飼童のなりあしくてもたるこそあれ。他物どもは、されど後にたちてこそ行け、先につとまもられ行くもの、穢げなるは心憂し。車のしりに殊なることなき男どものつれだちたる、いと見ぐるし。ほそらかなる男隨身など見えぬべきが、黑き袴の末濃なる、狩衣は何もうちなればみたる、走る車のかたなどに、のどやかにてうち添ひたるこそ、わが物とは見えね。なほ大かた樣子あしくて、人使ふはわろかりき。破れなど時々うちしたれど、馴ればみて罪なきはさるかたなりや。つかひ人などはありて、わらはべの穢げなることは、あるまじく見ゆれ。家にゐたる人も、そこにある人とて、使にても、客人などの往きたるにも、をかしき童の數多見ゆるはいとをかし。

人の家の前をわたるに、さぶらひめきたる男、つちに居るものなどして、男子の十ばかりなるが、髮をかしげなる、引きはへても、さばきて垂るも、また五つ六つばかりなるが、髮は頸のもとにかいくゝみて、つらいと赤うふくらかなる、あやしき弓、楉だちたる物な

して、うしとらの隅の高欄に、たかひざまづきとかやいふゐずまひに、御前のかたに向ひて、後ざまに「誰々か侍る」と問ふほどこそをかしけれ。細うたかう名のり、また人人さぶらはねばにや、なだいめん仕う奉らぬよし奏するも、いかにと問へばさはる事ども申すに、さ聞きて歸るを、「方弘はきかず」とて公達の教へければ、いみじう腹だちしかりて、勘へて、瀧口にさへ笑はる。御厨子所の御膳棚といふものに、沓おきて、はらへいひのゝしるを、いとほしがりて、「誰が沓にかあらん、え知らず」と主殿司人々のいひけるを、「やゝ方弘がきたなき物ぞや」とりに來てもいとさわがし。わかくてよろしき男の、げす女の名をいひなれて呼びたるこそ、いとにくけれ。知りながらも、何とかや、かたもじは覺えでいふはをかし。宮仕所の局などによりて、夜などぞ、さおほめかんは惡しかりぬべけれど、主殿司、さらぬ處にては、侍、藏人所にあるものを率て行きてよばせよかし、てづからは聲もしるきに。はしたもの、わらはべなどはされどよし。わかき人と兒は肥えたるよし。受領などおとなだちたる人は、ふときいとよし。あまり

亥の一刻卽ち九時半の更行はる

さはる事ども―故障、名謁に出でざる理由を瀧口の長官などが奏上するなり

てづからは云々―自ら呼ぶは聲も

外の顔

さつく〳〵とーその様につく〳〵と

局のすだれ云々ー心安く局の中にも入り給ふ

殿上のなだいめんー清涼殿の名謁宿直の武士等が名を呼ばれて名乗る式、毎夜

帳ひき直しかくるれど、頭辨にこそおはしけれ。見え奉らじとしつるものをと、いとくちをし。もろともに居たる人は、こなたに向きてゐたれば、顔も見えず。立ち出でて、「いみじく名殘なく見つるかな」との給へば、「のりたかと思ひ侍れば、あなづりてぞかし。などかは見じとの給ひしに、さつく〳〵とは」といふに、「女は寢おきたる顔なんいとよきといへば、ある人の局に行きてかいばみして、又もし見えやするとて來りつるなり。まだうへのおはしつる折からあるを、え知らざりけるよ」とて、それより後は、局のすだれうちかづきなどし給ふめり。

殿上のなだいめんこそ猶をしけれ。御前に人さぶらふをりは、やがて問ふもをかし。足音どもしてくづれ出づるを、うへの御局の東面に、耳をとなへて聞くに、知る人の名のりには、ふと胸つぶるらんかし。又ありともよく聞かぬ人をも、この折に聞きつけたらんは、いかゞ覺ゆらん。名のりよしあし、聞きにくく定むるもをかし。はてぬなりと聞くほどに、瀧口の弓ならし、沓の音そゝめき出づるに、藏人のいと高くふみこほめか

眞心に云々―實際うそはいはぬ
式部のおもと―清少と同僚の女房
うへ、宮―一條帝と中宮定子
けしき―陛下の居給ふ樣子
給ひて―後も我等二人はと補ひ見るべし
あらぬ顏―違つた顏、

のづから見つべきをりも顏をふたぎなどして、まことに見給はぬも、眞心にそらごとし給はざりけりと思ふに、三月晦日頃、冬の直衣の著にくきにやあらん、うへの衣がちにて、殿上の宿直すがたもあり。翌朝日さし出づるまで、式部のおもとと廂に寢たるに、奥の遣戸をあけさせ給ひて、うへの御前、宮の御前出でさせ給へれば、起きもあへずまどふを、いみじく笑はせ給ふ。唐衣を髪のうへにうち著て、宿直物も何もうづもれながらある上におはしまして、陣より出で入るものなど御覽ず。殿上人のつゆ知らで、より來て物いふなどもあるを、「けしきな見せそ」と笑はせ給ふ。さてたゝせ給ふに、「二人ながらいざ」と仰せらるれど、今顏などつくろひてこそとてまゐらず。入らせ給ひて、なほめでたき事どもいひあはせてゐたるに、南の遣戸のそばに、几帳の手のさし出でたるにさはりて、簾の少しあきたるより、黑みたるものの見ゆれば、のりたかが居たるなゝめりと思ひて、見も入れで、なほ事どもをいふに、いとよく笑みたる顏のさし出でたるを、「のりたかなゝめり、そは」とて見やりたれば、あらぬ顏なり。あさましと笑ひさわぎて几

ども又も生ふといふ吾跡川柳といふ歌を引く

初いひそめし人—清少

遲く參らば云々—あなたの參向が後るゝ樣ならば我かくかく申したると申し上げに使者を中宮の方へ參らせよ

憚りなし—論語に過則勿憚改

鼻は横ざまにありとも、たゞ口つき愛敬づき、頤のした、頸などをかしげにて、聲にくからざらん人なん思はしかるべき。とはいひながら、なほ顏のいとにくげなるは心憂し」との給へば、まいて頤ほそく愛敬おくれたらん人は、あいなうかたきにして、御前にさへあしう啓する。物など啓せさせんとても、その初いひそめし人をたづね、下なるをも呼びのぼせ、局にも來ていひ、里なるには文書きても、みづからもおはして、「遲く參らば、さなん申したると申しに參らせよ」などの給ふ。「その人の侍ふ」などいひ出づれど、さしもうけひかずなどぞおはする。「あるに隨ひ、定めず、何事ももてなしたるをこそ、よき事にはすれ」とうしろみ聞ゆれど、「わがもとの心の本性」とのみの給ひつゝ、「改らざるものは心なり」との給へば、「さて憚りなしとはいかなる事をいふにか」と怪しがれば、笑ひつゝ、「中よしなど人々にもいはるゝ。かうかたらふとならば何か恥づる、見えなどもせよかし」との給ふを、「いみじくにくげなれば、さあらんはえ思はじとの給ひしによりて、え見え奉らぬ」といへば、「實ににくくもぞなる。さらばな見えそ」とて、お

のしり短くて、隨身なきぞいとわろきや、

職の御曹司の西面の立蔀のもとにて、頭辨の、人と物をいと久しくいひたち給へれば、さし出でて、「それは誰ぞ」といへば、「辨の内侍なり」との給ふ。「何かはさもかたらひ給ふ。大辨見えば、うちすて奉りていなんものを」といへば、いみじく笑ひて、「誰かかゝる事をさへいひ聞かせけん、それさなせそとかたらふなり」との給ふ。いみじく見えて、をかしき筋などたてたる事はなくて、たゞありなるやうなるを、皆人さのみ知りたるに、なほ奥ふかき御心ざまを見知りたれば、「おしなべたらず」など御前にも啓し、又さしろしめしたるを、常に、「女はおのれを悦ぶ者のためにかほづくりす、士はおのれを知れる人のために死ぬといひたる」といひ合せつゝ申し給ふ。「遠江の濱やなぎ」などいひかはしてあるに、わかき人々は唯いひにくみ、見ぐるしき事どもなどつくろはずいふに、「この君こそうたて見にくけれ。他人のやうに讀經し、歌うたひなどもせず、けすさまじ」など謗る。更にこれかれに物いひなどもせず、「女は目はたてざまにつき、眉は額におひかゝり、

下襲のしり―裾(キヨ)

頭辨―行成

それさなせそと云々―それは左樣してはならぬと辨内侍に話し居る所なり

遠江の濱やなぎ―春曙抄に、濱や無き也、黑川翁は、萬葉七、あられふり遠たあふみの吾跡川楊刈れ

念じて云々—我慢して忍び歩きを止めよ

氣色ばみ—様子ぶり

物がたりする—幼兒の何となく愛らしげにさへづる様をいふ、一説に話相手の人の子といふはいかゞ

おもなき—遠慮なき、づう〱し

廊に人とあまたゐて、ありく者ども見、やすからず呼び寄せて、ものなどいふに、清げなる男、小舍人童などの、よき裹袋に衣どもつゝみて、指貫の腰などうち見えたる。袋に入りたる弓、矢、楯、鉾、劍などもてありくを「誰がぞ」と問ふに、ついゐて某殿のといひて行くはいとよし。氣色ばみやさしがりて、「知らず」ともいひ、聞きも入れでいぬる者は、いみじうぞにくきかし。月夜に空車ありきたる。清げなる男のにくげなる妻もちたる。髯黑ににくげなる人の年老いたるが、物がたりする人の兒もてあそびたる。

主殿司こそなほをかしきものはあれ。下女のきははさばかり羨しきものはなし。よき人にせさせまほしきわざなり。若くて容貌よく、容體など常によくてあらんは、ましてよからんかし。年老いて物の例など知りて、おもなきさましたるもいとつき〲しうめやすし。主殿司の顏、愛敬づきたらんをもたりて、裝束時にしたがひて、唐衣など今めかしうて、ありかせばやとこそ覺ゆれ。男はまた隨身こそあめれ。いみじく美々しくをかしき公達も、隨身なきはいとしら〲し。辨などをかしくよき官と思ひたれども、下襲

あかきに、やかたなき車にあひたる。又さる車にあめうしかけたる。老いたるものの腹たかくて喘ぎありく。また若き男もちたる、いと見ぐるしきに、他人の許に行くとて妬みたる。老いたる男の寢惑ひたる。又さやうに髯がちなる男の椎つみたる。齒もなき女の梅くひて酸がりたる。下衆の紅の袴著たる、このごろはそれのみこそあゝめれ。靱負佐の夜行狩衣すがたも、いといやしげなり。また人に恐ぢらるゝやうへの衣はたおどろおどろしく、たちさまよふも、人見つけばあなづらはし。「嫌疑の者やある」と戲にもとがむ。六位藏人、うへの判官とうちいひて、世になくきら〳〵しきものに覺え、里人下衆などは、この世の人とだに思ひたらず、目をだに見あはせで恐ぢわなゝく人の、內裏わたりの細殿などに忍びて入りふしたるこそいとつきなけれ。そらだきものしたる几帳にうちかけたる袴の、おもたげに賤しうきら〳〵しからんもと、推し量らるゝなどよ。さかしらにうへの衣わきあけにて、鼠の尾のやうにて、わがねかけたらん程ぞ、似氣なき夜行の人人なる。この司ほどは、念じてとゞめてよかし。五位の藏人も。

あめうし―黃牛、よき色の牛

つみたる―食ひたる

おどろ〳〵しく―美々しく、亶々しく

廊などに云―廊の內なる女房の許に忍び入りて臥す也

わきあけて―闕腋の袍をいふ

な父よく／＼と聞きなしたる洒落

かたし―頑なり、一本うとましに作る

叩頭蟲またあはれなり。さる心に道心おこして、つきありくらん。又おもひかけず暗き所などにほとめきたる、聞きつけたるこそをかしけれ。蠅こそにくきもののうちに入れつべけれ。愛敬なくにくきものは、人々しう書き出づべきもののやうにあらねど、萬の物にゐ、顔などにぬれたる足して居たるなどよ。人の名につきたるは必かたし。夏蟲いとをかしく廊のうへ飛びありく、いとをかし。蟻はにくけれど、輕びいみじうて、水のうへなどをたゞ歩みありくこそをかしけれ。

七月ばかりに、風のいたう吹き、雨などのさわがしき日、大かたいと涼しければ、扇もうち忘れたるに、汗の香少しかゝへたる衣の薄き引きかづきて、晝寢したるこそをかしけれ。

にげなきもの

髪あしき人のしろき綾の衣著たる。しゞかみたる髪に葵つけたる。あしき手を赤き紙に書きたる。下衆の家に雪の降りたる。また月のさし入りたるもいとくちをし。月のいと

はたかくれ―半ば隠れ
らう／＼じう―勞々じう、巧に
あまづら―甘葛、千歳藁汁
ちゝよ／＼―蓑蟲の聲

の短夜に寝ざめをして、いかで人よりさきに聞かんとまたれて、夜深くうち出でたる聲の、らう／＼じう愛敬づきたる、いみじう心あくがれ、せんかたなし。六月になりぬれば音もせずなりぬる、すべて言ふもおろかなり。夜なくもの、すべていづれも／＼めでたし。兒どものみぞさしもなき。

あてなるもの

薄色に白重の汗衫。かりのこ。削氷のあまづらに入りて、新しき鋺に入りたる。水晶の珠數。藤の花。梅の花に雪のふりたる。いみじう美しき兒の覆盆子くひたる。

蟲は

鈴蟲。松蟲。促織。蟋蟀。蝶。われから。蜉蝣。螢。蓑蟲いとあはれなり。鬼の生みければ、親に似て、これもおそろしき心地ぞあらんとて、親のあしき衣ひき著せて、「今秋風吹かんをりにぞこんずる、侍てよ」といひて逃げていにけるも知らず、風の音聞き知りて、八月ばかりになれば、ちゝよ／＼とはかなげに鳴く、いみじくあはれなり。茅蜩、

いぎたなき—寢坊

今は云々—天性なれば今更何とも仕方なし

人をも云々—人間をも世に衰へすてられたるをば度外視して謗る事なし、鶯をかく謗るも只世にもてはやさるゝ鳥なればとなり

きたよりなりかし。まかゝでて聞けば、あやしき家の見どころもなき梅などには、花やかにぞ鳴く。夜なかぬもいぎたなき心地すれども、今はいかゞせん。夏秋の末まで老聲に鳴きて、むしくひなど、ようもあらぬものは名をつけかへていふぞ、口惜しくすごき心地する。それも雀などのやうに、常にある鳥ならば、さもおぼゆまじ。春なくゆゑこそはあらめ。年立ちかへるなど、をかしきことに、歌にも文にも作るなるは、なほ春のうちならましかば、いかにをかしからまし。人をも人げなう、世のおぼえあなづらはしうなりそめにたるをば、謗りやはする。鳶、烏などのうへは、見いれ聞きいれなどする人、世になしかし。さればいみじかるべきものとなりたればと思ふに、心ゆかぬ心地するなり、祭のかへさ見るとて、雲林院、知足院などの前に車をたてたれば、杜鵑もしのばぬにやあらん鳴くに、いとようまねび似せて、木高き木どのも中に、諸聲に鳴きたるこそさすがにをかしけれ。杜鵑は猶更にいふべきかたなし。いつしかしたり顔にも聞え、歌に。卯の花、花橘などにやどりをして、はたかくれたるも、ねたげなる心ばへなり、五月雨

――共に異名を柏木といふ

谷へだてたるほど云々――山鳥は夜雌雄峯を隔て臥すとぞ

まなこゐ――眼居、目つき

鳥は

他處の物なれど、鸚鵡いとあはれなり。人のいふらんことをまねぶらんよ。杜鵑。水鷄。鴫。みこ鳥。鶸。火燒。山鳥は友を戀ひて鳴くに、鏡を見せたれば慰むらん、いとあはれなり。谷へだてたるほどなどいと心ぐるし。鶴はこちたきさまなれども、鳴く聲雲井まで聞ゆらん、いとめでたし。頭赤き雀斑。斑鳩の雄。巧鳥。鷺はいと見る目もみぐるし。まなこゐなども、うたて萬になつかしからねど、万木の森にひとりは寢じと、爭ふらんこそをかしけれ。容鳥。水鳥は鴛鴦いとあはれなり。互に居かはりて、羽のうへの霜を拂ふらんなどいとをかし。都鳥。川千鳥は友まどはすらんこそ。雁の聲は遠く聞えたるあはれなり。鴨は羽の霜うち拂ふらんと思ふにをかし。鶯は文などにもめでたき物につくり、聲よりはじめて、さまかたちもさばかり貴に美しきほどよりは、九重の内に鳴かぬぞいとわろき。人のさなんあるといひしを、さしもあらじと思ひしに、十年ばかり侍ひて聞きしに、實に更に音もせざりき。さるは竹も近く、紅梅もいとよく通ひぬべ

ぬ例にいはれたるもをかし。白樫などいふもの、まして深山木の中にもいと氣遠くて、三位二位のうへのきぬ染むる折ばかりぞ、葉をだに人の見るめる。めでたき事、をかしき事にとり出づべくもあらねど、いつとなく雪の降りたるに見まがへられて、素盞嗚尊の出雲國におはしける御事を思ひて、人丸が詠みたる歌などを見る、いみじうあはれなり。いふ事にても、をりにつけても、一ふしあはれともをかしとも聞きおきつる物は、草も木も鳥蟲も、おろかにこそ覺えね。楪のいみじうふさやかにつやめきたるは、いと青う淸げなるに、思ひかけず似るべくもあらず。莖の赤うきら〳〵しう見えたるこそ、賤しけれどもをかしけれ。なべての月頃はつゆも見えぬものの、十二月の晦日にしも時めきて、亡人のくひ物にもしくにやとあはれなるに、又齢延ぶる齒固の具にもしてつかひたゝめるは、いかなるにか。紅葉せん世やといひたるもたのもし。柏木いとをかし。葉守の神のますらんもいとかしこし。兵衞佐、尉などをいふらんもをかし。すがたなけれど、棕櫚の木、からめきて、わろき家のものとは見えず。

だに殿づくりせり、さき草は檜、みつば云々は棟多き樣

人丸が詠みたる歌―拾遺集に、足引の山路もしらず白樫の枝にも葉にも雪のふれゝば、素盞嗚尊以下おろかにこそ覺えねまでは過誤錯簡なるべし

兵衞佐、尉

もなけれど―別に木といふ程のものならねど

千枝にわかれて―古今六帖に、いづみなるしのぶの森の楠の木の千枝にわかれて物をこそおもへ

みつばよつば云々―古今集序に、この殿はむべもとみけりさき草のみつばよつ

いとあはれなり。榊、臨時の祭、御神樂のをりなどいとをかし。世に木どもこそあれ、神の御前の物といひはじめけんも、とりわきをかし。くすの木は、木立おほかる所にも殊にまじらひたてらず、おどろ〳〵しき思ひやりなどうとましきを、千枝にわかれて戀する人の例にいはれたるぞ、誰かは數を知りていひ始めけんとおもふにをかし。檜、人ぢかからぬものなれど、みつばよつばの殿づくりもをかし。五月に雨の聲まねぶらんもをかし。楓の木、さゝやかなるにも、もえ出でたる梢の赤みて、同じかたにさし廣ごりたる葉のさま、花もいと物はかなげにて、むしなどの枯れたるやうにてをかし。あすはひの木、この世近くも見えきこえず、御嶽に詣でて歸る人など、しか持てありくめる。枝ざしなどのいと手ふれにくげに荒々しけれど、何の意ありてあすはひの木とつけけん、あぢきなき兼言なりや。誰にたのめたるにかあらんと思ふに、知らまほしうをかし。ねずもちの木、人なみ〳〵なるべき樣にもあらねど、葉のいみじうこまかに小さきがをかしきなり。樗の木。山梨の木。椎の木は、常磐木はいづれもあるを、それしも葉がへせ

よろしう思ふ―輕くなほざりに思ふ
そばへたる―戯れふざけたる
はしたなき―時に合はぬ、間の拔けた樣な
そのものと

とならねどいとをかし。さても春ごとに咲くとて、櫻をよろしう思ふ人やはある。辻ありく童女の、ほど〳〵につけては、いみじきわざしたると、常に袂をまもり、人に見くらべ、えもいはず興ありと思ひたるを、そばへたる小舍人童などにひきとられて、泣くもをかし。紫の紙に樗の花、青き紙に菖蒲の葉、細うまきてひきゆひ、また白き紙を根にしてゆひたるもをかし。いと長き根など文の中に入れなどしたる人どもなども、いと艶なる返事かゝんといひ合せかたらふどちは、見せあはしなどする、をかし。人の女、やんごとなき所々に御文聞え給ふ人も、今日は心ことにぞなまめかしうをかしき。夕暮のほどに杜鵑の名のりしたるも、すべてをかしういみじ。

木は

桂。五葉。柳。橘。そばの木、はしたなき心地すれども、花の木ども散りはてて、おしなべたる緑になりたる中に、時もわかず濃き紅葉のつやめきて、思ひかけぬ青葉の中よりさし出でたる、めづらし。檀更にもいはず。そのものともなけれど、やどり木といふ名

がれくたれ髪を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき

みくりといふ歌—古今六帖、武藏なる狹山が池のみくりこそ引けば絶えすれ我や絶えする

組—組糸

るにやあらん。こひぬまの池。原の池、玉藻はな刈りそといひけんもをかし。ますだの池。

せちは

五月にしくはなし。菖蒲蓬などのかをりあひたるもいみじうをかし。九重の内をはじめて、いひしらぬ民の住家まで、いかでわがもとに繁くふかんと葺きわたしたる、猶いとめづらしく、いつか他折はさはしたりし。空のけしきの曇りわたりたるに、后宮などには、縫殿より、御薬玉とていろ〳〵の糸をくみさげて參らせたれば、御几帳たてまつる母屋の柱の左右につけたり。九月九日の菊を、綾と生絹のきぬに包みて參らせたる、同じ柱にゆひつけて、月ごろある薬玉取り替へて捨つめる。又薬玉は菊のをりまであるべきにやあらん。されどそれは皆糸をひき取りて物ゆひなどして、しばしもなし。御節供まゐり、わかき人々は菖蒲のさしぐしさし、物忌つけなどして、さま〴〵唐衣、汗衫、ながき根、をかしきをり枝ども、村濃の組して結びつけなどしたる、珍しういふべきこ

に、非梧桐ー不栖云々

かればなー枯びてみづみづしからぬ花

采女の云々ー大和物語に見ゆ

ねくたれ髪ーわきもこ

る音の出でくるなど、をかしとは尋常にいふべくやはある。いみじうこそはめでたけれ。

木のさまぞにくげなれど、樗の花いとをかし。かればなに、さまことに咲きて、かならず五月五日にあふもをかし。

池は

勝間田の池。盤余の池。にえのの池、初瀬に參りしに、水鳥のひまなくたちさわぎしが、いとをかしく見えしなり。水なしの池、あやしうなどて附けけるならんといひしかば、五月など、すべて雨いたく降らんとする年は、この池に水といふ物なくなんある、又日のいみじく照る年は、春のはじめに水なん多く出づるといひしなり。無下になく乾きてあらばこそさもつけめ、出づるをりもあるなるを、一すぢにつけけるかなと答へまほしかりし。猿澤の池、采女の身を投げけるを聞しめして、行幸などありけんこそいみじうめでたけれ。ねくたれ髪をと人丸が詠みけんほど、いふもおろかなり。御まへの池、又何の意につけけるならんとをかし。鏡の池。狹山の池、みくりといふ歌のをかしく覺ゆ

似通ひて

つごもり、ついたち―上旬、下旬と漠然いへる例なり。

たとひにいふ―當時愛敬なきを梨の花の如しと譬へいへりしならん

こと〴〵しき名つきたる鳥―鳳凰也、格物論

五月のついたちなどのころほひ、橘の濃くあをきに、花のいとしろく咲きたるに、雨のふりたる翌朝などは、世になく心あるさまにをかし。花の中より、實のこがねの玉かと見えて、いみじくきはやかに見えたるなど、あさ露にぬれたる櫻にも劣らず、杜鵑のよすがとさへおもへばにや、猶更にいふべきにもあらず。梨の花、世にすさまじく怪しき物にして、目にちかく、はかなき文つけなどだにせず。愛敬おくれたる人の顔など見ては、たとひにいふも、實にその色よりしてあいなく見ゆるを、唐土にかぎりなき物にて、文にも作るなるを、さりともあるやうあらんとて、せめて見れば、花びらのはしに、をかしきにほひこそ、心もとなくつきためれ。楊貴妃、皇帝の御使に逢ひて泣きける顔に似せて、梨花一枝春の雨を帶びたりなどいひたるは、おぼろけならじと思ふに、猶いみじうめでたき事は類あらじと覺えたり。桐の花、紫に咲きたるはなほをかしきを、葉のひろごり、さまうたてあれども、又他木どもとひとしう言ふべきにあらず。唐土にこと〴〵しき名つきたる鳥の、これにしも住むらん、心ことなり。まして琴に作りてさま〴〵な

りくるにやと心ときめきせられて、今少し引き入らるゝ。取りて見などして、疎くおぼしたる事などうちかすめ恨みなどするに、あかうなりて、人の聲々し、日もさし出でぬべし。霧の絶間見えぬほどにと急ぎつる文も、たゆみぬるこそうしろめたけれ。出でぬる人も、いつの程にかと見えて、萩の露ながらあるにつけてあれど、えさし出でず。香のかのいみじうしめたる匂いとをかし。あまりはしたなき程になれば、立ち出でて、わがきつる處もかくやと思ひやらるゝもをかしかりぬべし。

木の花は

梅の濃くも薄くも紅梅。櫻の花びらおほきに、葉色こきが、枝ほそくて咲きたる。藤の花、しなひ長く色よく咲きたる、いとめでたし。卯の花は品おとりて何となけれど、咲く頃のをかしう、杜鵑のかげにかくるらんと思ふにいとをかし。祭のかへさに、紫野のわたり近きあやしの家ども、おどろなる垣根などに、いと白う咲きたるこそをかしけれ。青色のうへに白き單襲かづきたる、青朽葉などにかよひていとをかし。四月のつごもり、

男の持てる扇にて枕元に廣ごりたる扇を及び腰にかき寄する也

はしたなき—明け過ぎたる

しなひ長く—房長く垂れて

おどろ—うばら、荊棘

かよひて—

なきかの香染の狩衣、白きすゞし、紅のいとつやゝかなるうちぎぬの、霧にいたくしめりたるをぬぎ垂れて、鬢の少しふくだみたれば、烏帽子の押し入れられたるけしきもしどけなく見ゆ。朝顔の露落ちぬさきに文書かんとて、道のほども心もとなく、おふの下草など口ずさびて、わがかたへ行くに、格子のあがりたれば、御簾のそばをいさゝかあげて見るに、起きていぬらん人もをかし。露をあはれと思ふにや、しばし見たれば、枕がみのかたに、朴に紫の紙はりたる扇、ひろごりながらあり。檀紙の疊紙のほそやかなるが、花か紅か、少しにほひうつりたるも几帳のもとに散りぼひたる。人のけはひあれば、衣の中より見るに、うち笑みて長押におしかゝりゐたれば、はぢなどする人にはあらねど、うちとくべき心ばへにもあらぬに、ねたうも見えぬるかなと思ふ。「こよなき名殘の御あさいかな」とて、簾の中に半ばかり入りたれば、「露よりさきなる人のもどかしさに」といらふ。をかしき事とりたてて書くべきにあらねど、かく言ひかはすけしきどもにくからず。枕がみなる扇を、我もちたるしておよびてかき寄するが、あまり近う寄

おふの下草——新勅撰集に、櫻麻のおふの下草露しあらばあかしてゆかむ親は知るとも

見えぬる——見られぬる

我もちたるして云々——

たまへる事見ゆ、下の答も之によ る

奥のかたに云々―几帳は端に立つべき物なるに奥におしやりたるは奥の方に心おかるゝ為ならんと也

ゆしきものにこそあゝなれ」とのたまひけるこそをかしけれ。さてその二十日あまりに、中納言の法師になり給ひにしこそあはれなりしか。櫻などの散りぬるも、なほ世の常なりや。老を待つまのとだにいふべくもあらぬ御有様にこそ見え給ひしか。

七月ばかり、いみじくあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころは寐起きて見いだすもいとをかし。闇もまたをかし。有明はたいふもおろかなり。いとつややかなる板の端近う、あざやかなる疊一枚かりそめにうち敷きて、三尺の几帳、奥のかたに押しやりたるぞあぢきなき。端にこそ立つべけれ、奥のうしろめたからんよ。人は出でにけるなるべし。薄色のうらいと濃くて、うへは少しかへりたるならずは、濃き綾のつやゝかなるが、いたくはなえぬを、かしらこめてひき著てぞねためる。香染のひとへ、紅のこまやかなるすゞしの袴の、腰いと長く衣の下よりひかれたるも、まだ解けながらなゝめり。傍のかたに髪のうちたゝなはりてゆらゝかなるほど、長さ推しはかられたるに、又いづこよりにかあらん、朝ぼらけのいみじう霧滿ちたるに、二藍の指貫、あるか

―いや何でもない、一體人は一方に偏してひねくれたるよりは如何にもすなほにあらん方却りてよしと也、前の女房の評論

やゝまかり云々―やゝは呼掛けの詞、法華方便品に五千人の增上慢の輩法座を退くに佛退亦佳矣との

らんことよりは、實にと聞えて、なか〱いとよしとぞ覺ゆる。朝座の講師清範、高座のうへも光滿ちたる心地して、いみじくぞあるや。暑さのわびしきにそへて、しさすまじき事の、今日すぐすまじきをうち置きて、唯少し聞きて歸りなんとしつるを、敷並に集ひたる車の奥になんゐたれば、出づべきかたもなし。朝の講はてなば、いかで出でなんとて、前なる車どもに消息すれば、近くたゝんうれしさにや、はや〱と引き出であけて出すを見給ふ。いとかしがましきまで人ごといふに、老上達部さへ笑ひにくむを、きゝも入れず、答もせで狹がり出づれば、權中納言「やゝまかりぬるもよし」とて、うち笑ひ給へるぞめでたき。それも耳にもとまらず、暑きに惑ひ出でて、人して、「五千人の中には入らせ給はぬやうもあらじ」と聞えかけて歸り出でにき。そのはじめより、やがてはつる日までたてる車のありけるが、人寄り來とも見えず、すべてたゞあさましう繪などのやうにて過しければ、「ありがたく、めでたく、心にくく、いかなる人ならん、いかで知らん」と問ひけるを聞き給ひて、藤大納言、「何かめでたからん、いとにくし、ゆ

けに—一層まさりて

いとなほき木を云々—返事の無風流なるをいふならん

聞えやすらん—かの女房の車に也

かいけつ—搔き消す

何かは云々

は、なほすべきにもあらじものをとぞ覺えたる。近く參りつくも心もとなく、「いかにいかに」と誰も問ひ給へどもいはず。權中納言見給へば、そこによりてけしきばみ申す。三位中將、「疾くいへ、あまり有心すぎてしそこなふな」との給ふに、「これも唯おなじ事になん侍る」といふは聞ゆ。藤大納言は人よりもけにのぞきて、「いかゞいひつる」との給ふめれば、三位中將、「いとなほき木をなん押し折りたゝめる」と聞え給ふに、うち笑ひ給へば、皆何となくさと笑ふ聲、聞えやすらん。中納言「さて呼びかへされつるさきには、いかゞいひつる、これやなほしたること」と問ひ給へば、「久しうたちて侍りつれども、ともかくも侍らざりつれば、さは參りなんとてかへり侍るを、呼びて」とぞ申す。「誰が車ならん、見知りたりや」などのたまふ程に、講師ののぼりぬれば、皆居しづまりて、そなたをのみ見る程に、この車はかいけつやうにうせぬ。下簾など、たゞ今日はじめたりと見えて、濃きひとへがさねに、二藍の織物、蘇枋の羅のうはぎなどにて、しりにすりたる裳、やがて廣げながらうち懸けなどしたるは、何人ならん。何かは、人のかたほな

書くべきにあらぬを―一説こゝにて句とならず、ほど經ればまで續きて句となり、其下に、ふと忘れはつるものゆゑかくは書きつけ侍りなど補ひ考ふべし云々

顯證の人々―その上達部のみならず關係なき聽衆の人々

や。上達部の御名など書くべきにもあらぬを。誰なりけんと、少しほど經れば、色あひはなばなといみじく、匂あざやかに、いづれともなき中の帷子を、これはまことに、たゞ直衣一つを著たるやうにて、常に車のかたを見おこせつゝ、物などいひおこせ給ふ。をかしと見ぬ人なかりけんを、後にきたる車の隙もなかりければ、池にひき寄せてたてたるを見給ひて、實方の君に、「人の消息つき〴〵しくいひつべからんもの一人」と召せば、いかなる人にかあらん、選りて率ておはしたるに、「いかゞいひ遣るべき」と、近く居給へるばかりいひ合せて、やり給はん事は聞えず。いみじくよそひして、車のもとに歩みよるを、かつは笑ひ給ふ。後のかたによりていふめり。久しく立てれば、「歌など詠むにやあらん、兵衛佐返しおもひまうけよ」など笑ひて、いつしか返事聞かんと、おとな上達部まで、皆そなたざまに見やり給へり。實に顯證の人々まで見やりしもをかしうありしを、返事きゝたるにや、すこし歩みくるほどに、扇をさし出でて呼びかへせば、歌などの文字をいひ過ちてばかりこそ呼びかへさめ。久しかりつるほどに、あるべきことか

家の子—小一條家の子

關白殿をぞ聞えし—今の關白殿の事をかく申したる也

細塗骨など—細骨塗骨などの意にや

青にびのさしぬき、白き袴もすゞしげなり。安親の宰相なども若やぎだちて、すべてたふときことの限にもあらず、をかしき物見なり。廂の御簾高くまき上げて、長押のうへに上達部奥に向ひて、なが〳〵と居給へり。そのしもには殿上人、わかき公達、かりさうぞく直衣なども、いとをかしくて、居もさだまらず、こゝかしこに立ちさまよひ、あそびたるもいとをかし。實方の兵衛佐、長明の侍從など、家の子にて、今すこしいでいりなれたり。まだ童なる公達など、いとをかしうておはす。少し日たけたるほどに、三位中將とは關白殿をぞ聞えし、香の羅、二藍の直衣、おなじ指貫、濃き蘇枋の御袴に、張りたる白き單衣のいとあざやかなるを著給ひて、歩み入り給へる、さばかりかろび涼しげなる中に、あつかはしげなるべけれど、いみじうめでたしとぞ見え給ふ。細塗骨など、骨はかはれど、たゞ赤き紙を同じなみにうちつかひ持ち給へるは、瞿麥のいみじう咲きたるにぞ、いとよく似たる。まだ講師ものぼらぬほどに、懸盤どもして、何にかはあらん物まゐるべし。義懷の中納言の御ありさま、常よりも勝りて淸げにおはするさまぞ限なき

たかといへば、どうして居らぬ筈がありませうと人にいはると也

さうちう——未詳、家事を忘れて菩提に入りし人にや、一本つれたう

起きて——行きたるにと補び見るべし

し出でたる人の、命長くて見ましかば、いかばかりそしり誹謗せまし。

菩提といふ寺に結縁八講せしが、聽きにまうでたるに、人のもとより疾く歸り給へ、いとさうざうしといひたれば、蓮のはなびらに、

もとめてもかゝる蓮の露をおきてうき世にまたは歸るものかは

と書きてやりつ。誠にいとたふとくあはれなれば、やがてとまりぬべくぞ覺ゆる。さうちうが家の人のもどかしさも忘れぬべし。

小白川といふ所は、小一條の大將殿の御家ぞかし。それにて上達部、結縁の八講し給ふに、いみじくめでたき事にて、世の中の人の集り行きて聽く。遲からん車はよるべきやうもなしといへば、露と共に急ぎ起きて、實にぞひまなかりける。轅の上に又さし重ねて、三つばかりまでは、少し物も聞ゆべし。六月十日餘にて、暑きこと世に知らぬほどなり。池の蓮を見やるのみぞ、少し涼しき心地する。左右の大臣たちをおき奉りては、おはせぬ上達部なし。二藍の直衣指貫、淺黄の帷子をぞすかし給へる。少しおとなび給へるは、

すゞし―生絹
さばかり―同じく三四人。

その人云々―說經などの折必ず列席するため遂にはかゝる會の話ある毎に、だれそれは居

げなる直衣、指貫、すゞしのひとへなど著たるも、狩衣姿にても、さやうにては若くほそやかなる三四人ばかり、侍のもの又さばかりして入れば、もとゐたりつる人も、少しうち身じろきくつろぎて、高座のもと近き柱のもとなどにすゑたれば、さすがに珠數おしもみなどして、伏し拜みゐたるを、講師もはえ〴〵しう思ふなるべし、いかで語り傳ふばかりと說き出でたる、聽問すなど、立ち騷ぎぬかづくほどにもなくて、よきほどにて立ち出づとて、車どものかたなど見おこせて、われどちいふ事も何事ならんと覺ゆ。見知りたる人をば、をかしと思ひ、見知らぬは、誰ならん、それにや彼にやと、目をつけて思ひやらるゝこそをかしけれ。說經しつ、八講しけりなど人いひ傳ふるに、「その人はありつや」「いかゞは」など定りていはれたる、あまりなり。などかは無下にさしのぞかではあらん。あやしき女だに、いみじく聞くめるものをば。さればとて、はじめつかたは徒歩する人はなかりき。たまさかには、つぼ裝束などばかりして、なまめきけさうじてこそありしか。それも物詣をぞせし。說經などは殊に多くも聞かざりき。この頃その折さ

名殘つれづれにて云々——今まで多忙なりし後とて暇も多しと思ふ

車たつる云云——立ちたる他の車をさへ見入れ殊に心を附けたる樣子となり

八講——法華八卷を朝夕二座づつ四日、都合八座に講ず

人の五位とて、それをしもぞ忙しうつかへど、なほ名殘つれ〴〵にて、心一つは暇ある心地ぞすべかゝめれば、さやうの所に急ぎ行くを、一たび二たび聞きそめつれば、常にまうでまほしくなりて、夏などのいとあつきにも、帷子いとあざやかに、薄二藍、青鈍の指貫などふみちらしてゐたゝめり。烏帽子にもの忌つけたるは、今日さるべき日なれど、功徳のかたにはさはらずと見えんとにや。いそぎ來てその事するひじりと物語して、車たつるさへぞ見いれ、ことにつきたるけしきなる。久しく逢はざりける人などの、まうで逢ひたる、めづらしがりて、近くゐより物語し、うなづき、をかしき事など語り出でて、扇ひろうひろげて、口にあてて笑ひ、裝束したる珠數かいまさぐり、手まさぐりにし、こなたかなたうち見やりなどして、車のよしあしほめそしり、なにがしにてその人のせし八講、經供養などいひくらべゐたるほどに、この說經の事もきゝ入れず。なにかは、常に聞くことなれば、耳馴れて、めづらしう覺えぬにこそはあらめ。さはあらで、講師ゐてしばしあるほどに、さきすこしおはする車とゞめておるゝ人、蟬の羽よりも輕

ゆふかみ―木綿鬘か、木綿は純白のものなれば、すべて眞白きをいへる當時の常用語にや

罪はえがた―罪得る樣な事、說經師の惡口など書きたるをいふ

御前―前驅

も、尾のすそ白き。馬は紫の斑づきたる。蘆毛。いみじく黒きが、足肩のわたりなどに、白き處、うす紅梅の毛にて、髪尾などもいとしろき、實にゆふかみともいひつべき。牛飼は大にて、髪赤白髪にて、顔の赤みてかど〳〵しげなる。雜色隨身はほそやかなる。よき男も、なほ若きほどは、さるかたなるぞよき。いたく肥えたるは、ねぶたからん人と思はる。小舍人はちひさくて、髪のうるはしきが、すそさわらかに、聲をかしうて、畏りて物などいひたるぞ、りやう〳〵じき。猫はうへのかぎり黒くて、他はみな白からん。說經師は顔よき、つとまもらへたるこそ、その說く事のたふとさも覺ゆれ。外目しつればふと忘るゝに、にくげなるは罪や得らんと覺ゆ。この詞はとゞむべし。少し年などのよろしきほどこそ、かやうの罪はえがたの詞かき出でけめ。今は罪いとおそろし。又たふときこと、道心おほかりとて、說經すといふ所に、最初に行きぬる人こそ、なほこの罪の心地には、さしもあらで見ゆれ。藏人おりたる人、昔は、御前などいふこともせず、その年ばかり、內裏あたりには、まして影も見えざりける。今はさしもあらざめる。藏

女繪—濱臣の説に男女の中をかきつけし繪卷物といへり
重食—雙六の類
ずそ—呪咀
檳榔毛—檳榔毛の車、束帶正裝の時の乘用

よくかいたる女繪の詞をかしうつゞけておほかる。物見のかへさに乘りこぼれて、男どもいと多く、牛よくやるものの車走らせたる。白く淸げなる檀紙に、いとほそう書くべくはあらぬ筆して文書きたる。川船のくだりざま。齒黑のよくつきたる。重食に丁多くうちたる。うるはしき糸のねりあはせぐりしたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出でてずその祓したる。夜寢起きて飲む水。徒然なるをりに、いとあまり睦しくはあらず、疎くもあらぬ賓客のきて、世の中の物がたり、この頃ある事の、をかしきも、にくきも、怪しきも、これにかゝり、かれにかゝり、公私おぼつかなからず、聞きよきほどに語りたる、いと心ゆくこゝちす。社寺などに詣でて物申さするに、寺には法師、社には禰宜などやうのものの、思ふほどよりも過ぎて、滯なく聞きよく申したる。檳榔毛はのどやかにやりたる。急ぎたるは輕々しく見ゆ。網代は走らせたる。人の門より渡りたるを、ふと見るほどもなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならんと思ふこそをかしけれ。ゆるゆると久しく行けばいとわろし。牛は額いとちひさく白みたるが、腹のした、足のし

で行きたらんは　なごりも出所あり—名殘惜しきもその出で行き方による　見たる—一本見いでたるに作る　さいで—絹のきれ　かはぼり—扇

めきたちて、指貫の腰強くひきゆひ、直衣、うへのきぬ、狩衣も袖かいまくり、よろづさし入れ、帯強くゆふ、にくし。開けて出でぬる所たてぬ人、いとにくし。

心ときめきするもの

雀のこがひ。兒あそばする所の前わたりたる。よき薫物たきて一人臥したる。唐鏡の少しくらき見たる。よき男の車とゞめて物いひ案内せさせたる。頭洗ひ化粧じて、香にしみたる衣著たる。殊に見る人なき所にても、心のうちはなほをかし。待つ人などある夜、雨の脚、風の吹きゆるがすも、ふとぞおどろかるゝ。

すぎにしかたのこひしきもの

枯れたる葵。雛あそびの調度。二藍、葡萄染などのさいでの、おしへされて、草紙の中にありけるを見つけたる。また折からあはれなりし人の文、雨などの降りて徒然なる日さがし出でたる。去年のかはぼり。月のあかき夜。

こゝろゆくもの

一說やんごとなからずとも

とする人は—かく曉の別を惜しむ人は

いひいでに云々—いひいひ靜に出

あてんと、たゝきもわたし、「怪し」などうちいひもとめ出でて、そよ〳〵と懐にさし入れて、扇ひきひろげて、ふた〳〵とうちつかひて、まかり申したる、にくしとは世の常、いと愛敬なし。おなじごと夜深く出づる人の烏帽子の緒強くゆひたる、さしもかためずともありぬべし。やをらさながらさし入れたりとも、人のとがむべきことかは。いみじうしどけなう、かたくなし。直衣狩衣などゆがみたりとも、誰かは見知りて笑ひそしりもせん。とする人は、なほ曉のありさまこそ、をかしくもあるべけれ。わりなくしぶしぶに起きがたげなるを、強ひてそゝのかし、「あけ過ぎぬ、あな見苦し」などいはれて、うちなげくけしきも、げにあかず物うきにしもあらんかしと覺ゆ。指貫なども居ながら著もやらず、まづさしよりて、夜ひと夜いひつることののこりを、女の耳にいひ入れ、何わざすとなけれど、帶などをばゆふやうなりかし。格子あけ、妻戸ある處は、やがて諸共に出で行き、晝のほどのおぼつかなからん事なども、いひいでにすべり出でなんは、見送られて、名殘もをかしかりぬべし。なごりも出所あり。いときはやかに起きて、ひろ

愛敬なくと―愛敬なくとも

さいはざらん―御前より外にて也上の官をいふにかゝろ

やんごとながらずとも―何もその様にえらがらずとも。

そ多かめれ。愛敬なくと、詞しなめきなどいへば、いはるゝ人も聞く人も笑ふ。かく覺ゆればにや、あまり嘲哢するなどいはるゝまである人も、わろきなるべし。殿上人宰相などを、たゞなのる名を、聊つゝましげならずいふは、いとかたはなるを、げによくさいはず、女房の局なる人をさへ、あのおもと君などいへば、めづらかに嬉しと思ひて、譽むる事ぞいみじき。殿上人公達を、御前より外にては官をいふ。また御前にて物をいふとも、きこしめさんには、などてかは、まろがなどいはん。さいはざらんにくし。かくいはんに、わろかるべき事かは。

ことなる事なき男の、ひきいれ聲して艶だちたる。墨つかぬ硯。女房の物ゆかしうする。たゞなるだに、いとしも思はしからぬ人の、にくげごとしたる。一人車に乗りて物見る男、いかなるものにかあらん、やんごとながらずとも、わかき男どもの物ゆかしう思ひたるなど、ひき乗せても見よかし。透影に唯一人かぐよひて、心一つにまもりゐたらんよ。曉にかへる人の、昨夜おきし扇懐紙もとむとて、暗ければ、探りあてん、さぐり

> 綺語抄に賤しき男戀ひたる姫の芹食むをかいまみ常に芹食みて心を慰めたる事見ゆ、童家抄に、芹つみし昔の人もわが如や心に物の叶はざりけん
>
> あらわに——原本あらはにに作る、荒鰐ならん

工允にて藏人にはなりにたる。いみじう荒々しうあれば、殿上人女房は、あらわにとぞつけたるを、歌につくりて、「さうなしのぬし、尾張人の種にぞありける」とうたふは、尾張の兼時が女の腹なりけり。これを笛に吹かせ給ふを、添ひ侍ひて、「なほたかう吹かせおはしませ、え聞きさふらはじ」と申せば、「いかでか、さりとも聞き知りなん」とて密にのみ吹かせ給ふを、あなたより渡らせおはしまして、「このものなかりけり、只今こそふかめ」と仰せられて吹かせたまふ。いみじうをかし。

ふみことばなめき人こそ、いとゞにくけれ。世をなのめに書きなしたる、詞のにくきこそ。さるまじき人のもとに、あまりかしこまりたるも、實にわろき事ぞ。されど我えたらんは理、人のもとなるさへにくくこそあれ。大かたさし向ひても、なめきは、などかく言ふらんとかたはらいたし。ましてよき人などをさ申す者は、さるはをこにて、いとにくし。男しうなどわろくいふ、いとわろし。わが使ふものなど、おはする、のたまふなどいひたる、いとにくし。こゝもとに侍るといふ文字をあらせばやと聞くことこ

するも―もは感歎辭
まが／＼しく―薄氣味惡く
乳母の男云云―乳母の夫こそにくけれ、されど養君の女なるにはその夫も近く來ればよしと也、以下などするよまで、一本宮仕所はの次に入る
芹つみし―

の、いとにくし。蚤もいとにくし。衣の下にをどりありきて、もたぐるやうにするも。また犬のもろ聲に長々となきあげたる、まが／＼しくにくし。乳母の男こそあれ、女はされど近くも寄らねばよし。男子をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じてうしろみ、いさゝかもこの御事に違ふものをば讒し、人をば人とも思ひたらず、怪しけれど、これがとがを心に任せていふ人もなければ、處得いみじきおももちして、事を行ひなどするよ。

小一條院をば、今内裏とぞいふ。おはします殿は清涼殿にて、その北なる殿におはします。西東はわたどのにて渡らせ給ふ。常に參うのぼらせ給ふ。おまへはつぼなれば、前栽などうゑ、笆ゆひていとをかし。二月十日の日の、うら／＼とのどかに照りたるに、わたどのの西の廂にて、うへの御笛ふかせ給ふ。高遠の大貳、御笛の師にて物し給ふを、異笛ふたつして、高砂ををりかへし吹かせ給へば、猶いみじうめでたしと言ふもよのつねなり。御笛の師にて、そのことどもなど申し給ふ、いとめでたし。御簾のもとに集り出でて見奉るをりなどは、わが身に芹つみしなど覺ゆることこそなけれ。すけたゞは木

額といふ、帽額附の簾

才まぐる―えらがる・一說、才捲くるにて才を以て人の言を押し捲くる

起しによりき―原本起しより來に作る

はなひて―くさめして

ほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめく車に乘りて步くもの、耳も聞かぬにやあらんと、いとにくし。わが乘りたるは、その車のぬしさへにくし。物語などするに、さし出でてわれひとり才まぐるもの。すべてさし出は、童も大人もいとにくし。昔物語などするに、われ知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠の走りありく、いとにくし。あからさまにきたる子ども童をらうたがりて、をかしき物など取らするに、ならひて、常に來て居入りて、調度やうち散らしぬる、にくし。家にても宮仕所にても、逢はでありなんと思ふ人の來るに、虛寐をしたるを、わが許にあるものどもの起しによりきては、いぎたなしと思ひ顏に、ひきゆるがしたるいとにくし。新參のさしこえて、物しり顏にをしへやうなる事いひ、うしろみたる、いとにくし。わが知る人にてあるほど、はやう見し女の事、譽めいひ出しなどするも、過ぎてほど經にけれど、なほにくし、ましてさしあたりたらんこそ思ひやらるれ。されどそれは、さしもあらぬやうもありかし。はなひて誦文する人。大かた家の男しうならでは、高くはなひたるも

謠ふやうにする―醉ひて慥には歌へぬ様なり
しらべいふ―調子を合せて尤らしくいふ
さるまじう云々―人など隱すべくもあらぬを無理に工夫したる所に
帽額の簾―御簾の上に横に長くひき延ぶる一幅の絹を帽

人のさし給ひしより、心づきなしと思ふなり。物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らぬをば怨じそしり、又わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かんと思ふほどに泣く兒。烏の集りて飛びちがひ鳴きたる。忍びて來る人見しりて吠ゆる犬は、うちも殺しつべし。さるまじうあながちなる所に、隱し伏せたる人の、鼾したる。又密に忍びてくる所に、長烏帽子して、さすがに人に見えじと惑ひ出づるほどに、物につきさはりて、そよろといはせたる、いみじうにくし。伊豫簾など懸けたるをうちかつぎて、さら〳〵とならしたるも、いとにくし。帽額の簾は、ましてこはき物のうちおかるゝ、いとしるし。それもやをら引きあげて出入するは、更に鳴らず。又遣戸など荒くあくるも、いとにくし。少しもたぐるやうにて開くるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊のほそ聲になのりて、顏のもとに飛びありく、羽風さへ身の

例ある所――いつも居る所

えがちに――心得顔に

老ばみ云々――老境に入れる下品者

わらはべの云々――當時の童謠、こうどのは國府殿にや

るに、例ある所にはあらで、外にある、尋ねありくほどに、待遠にひさしきを、辛うじて待ちつけて、悦びながら加持せさするに、このごろ物怪に困じにけるにや、ゐるまゝに卽ねぶり聲になりたる、いとにくし。何でふことなき人の、すゞろにえがちに物いたうひたる。火桶すびつなどに、手のうらうちかへし、皺おしのべなどしてあぶりをるもの。いつかは若やかなる人などの、さはしたりし。老ばみうたであるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝに、おしすりなどもするらめ。さやうのものは、人のもとに來てゐんとする所を、まづ扇して塵拂ひすてて、ゐも定まらずひろめきて、狩衣の前、下ざまにまくり入れてもゐるかし。かゝることは、いひがひなきものの際にやと思へど、少しよろしき者の式部大夫、駿河前司などいひしがさせしなり。また酒飲みて、赤き口を探り、髯あるものはそれを撫でて、盃人に取らするほどのけしき、いみじくにくしと見ゆ。また「飮め」などいふなるべし、身ぶるひをし、頭ふり、口わきをさへひきたれて、「わらはべのこうどのに參りて」など、謠ふやうにする。それはしも誠によき

あるべき―原本ありしに作る
あへず―出です
心よしと―原本よきとに作る
あなづらはしき人―心安き人

るねしたるは、よりどころなくすさまじくぞあるべき。寝起きてあぶる湯は、腹だたしくさへこそ覺ゆれ。十二月の晦日のなが雨、一日ばかりの精進の懈怠とやいふべからん。八月のしらがさね。乳あへずなりぬる乳母。

たゆまるゝもの

精進の日のおこなひ。日遠きいそぎ。寺に久しくこもりたる。

人にあなづらるゝもの

家の北おもて。あまり心よしと人に知られたる人。年老いたるおきな。又あは〳〵しき女。築土のくづれ。

○にくきもの

急ぐ事あるをりに長言する客人。あなづらはしき人ならば、「後に」などいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りてすられたる。また墨の中に石こもりて、きし〳〵ときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむ

ろに作る

よろしう―相當に

昔覺えて―昔風に、舊式にて

物のをりの扇―祭、物見などに持つべき扇

心ときめきして―よき祿を受くるならんと心もどきつきて

をりつる者も、やう〳〵一人二人づつすべり出でぬ。ふるきものの、さもえ行き離るまじきは、來年の國々を手を折りて數へなどして、ゆるぎ歩きたるも、いみじういとほしう、すさまじげなり。よろしう詠みたりと思ふ歌を、人の許に遣りたるに返しせぬ。懸想文はいかゞせん、それだにをりをかしうなどある返事せぬは、心おとりす。又さわがしう時めかしき處に、うちふるめきたる人の、おのがつれ〴〵と暇あるまゝに、昔覺えて、ことなる事なき歌よみして遣せたる。物のをりの扇、いみじと思ひて、心ありと知りたる人にいひつけたるに、その日になりて、思はずなる繪など書きてえたる。産養、馬餞などの使に、祿などとらせぬ。はかなき藥玉、卯槌などもてありく者などにも、なほ必とらすべし。思ひかけぬことに得たるをば、いと興ありと思ふべし。これはさるべき使ぞと、心ときめきして來るに、たゞなるは、誠にすさまじきぞかし。

聟とりて、四五年までうぶやのさわぎせぬ所。おとなたる子どもあまた、ようせずば、孫などもはひありきぬべき人の親どちの晝寢したる。傍なる子どもの心地にも、親のひ

せみ聲—一本せめ聲に作る、苦しき聲

つかずたちね—護法即ち調伏のしるしつかず立てとよりましに言ふ

あれと—自ら

上達部—任官評議の人人なり

いらふる—原本いひふ

がへすすさまじけれ。驗者の物怪調ずとて、いみじうしたりがほに、獨鈷や珠數などもたせて、せみ聲にしぼり出し讀み居たれど、いさゝか退氣もなく、護法もつかねば、集めて念じゐたるに、男も女も怪しと思ふに、時のかはるまで讀みこうじて、「更につかず、たちね」とて珠數とりかへして、あれと「驗なしや」とうちいひて、額より上ざまに頭さぐりあげて、あくびを己うちして、よりふしぬる。除目に官得ぬ人の家、今年はかならずと聞きて、はやうありし者どもの、外々なりつる、片田舍に住む者どもなど、皆集り來て、出で入る車の轅もひまなく見え、物まうでする供にも、われも〱と參り仕うまつり、物食ひ酒飲み、のゝしりあへるに、はつる曉まで門叩く音もせず。「怪し」など耳立てて聞けば、さきおふ聲して上達部など皆出で給ふ。ものきゝに、宵より寒がりわなゝき居りつるげす男など、いと物うげに歩み來るを、をるものどもは、とひだにもえ問はず。外よりきたる者どもなどぞ、「殿は何にかならせ給へる」など問ふ。答には、「何の前司にこそは」と、必いらふる。まことに頼みける者は、いみじう歎かしと思ひたり。翌朝になりて、隙なく

ふくだめて　―ふく〲にして

牛のかぎり　―牛ばかり

家動りて　―一家大騷して

あからさまとて　―つひ一寸といひて

求むれば　―兒が乳母を探し求むるなり

あやしく遲きと待つほどに、ありつる文の結びたるもたて文も、いときたなげに持ちなしふくだめて、うへにひきたりつる墨さへ消えたるをおこせたりけり。「おはしまさゞりけり」とも、もしは「物忌とて取り入れず」などいひてもて歸りたる、いとわびしくすさまじ。またかならず來べき人の許に、車をやりて待つに、入り來る音すれば、さなゝなりと人々出でて見るに、車やどりに入りて、轅ほうとうち下すを、「いかなるぞ」と問へば、「今日はおはしまさず、渡り給はず」とて、牛のかぎりひき出でていぬる。また家動りてとりたる壻の來ずなりぬる、いとすさまじ。さるべき人の宮仕する許やりて、いつしかと思ふも、いと本意なし。兒の乳母の唯あからさまとて往ぬるを、もとむれば、とかくあそばし慰めて、「疾く來」といひ遣りたるに、「今宵はえ參るまじ」とて返しおこせたる、すさまじきのみにもあらず、にくさわりなし。女などむかふる男、ましていかならん。待つ人ある所に、夜少し更けて、しのびやかに門を叩けば、胸少し潰れて、人出して問はするに、あらぬよしなきものの名のりしてきたるこそ、すさまじといふ中にも、かへす

なも知らしめたしと也

たびしかはら―礫瓦、賤しき者

おもだたし―面目あり

にくみたる―一本死にたるに作る

あるじせぬ―饗應せぬ

女房の從者ども、その里より來るものども、長女、御厠人、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢかくれたりし。殿ばらなどは、いとさしもあらずやあらん。それもある限は、さぞあらん。うへなどいひてかしづきすゑたるに、心にくからず覺えん理なれど、内侍のすけなどいひて、をり／＼内裏へ參り、祭の使などに出でたるも、おもだたしからずやはある。さて籠りゐたる人はいとよし。受領の五節など出すをり、さりともいたうひなび、見知らぬ他人に問ひ聞きなどはせじと、心にくきものなり。

○すさまじきもの

晝ほゆる犬。春の網代。三四月の紅梅のきぬ。嬰兒のなくなりたる産屋。火おこさぬ火桶、すびつ。牛にくみたる牛飼。博士のうちつゞきに女子うませたる。方違にゆきたるにあるじせぬ所。まして節分はすさまじ。人の國よりおこせたる文の物なき。京のをもさこそは思ふらめども、されどそれはゆかしき事をも書きあつめ、世にある事を聞けばよし。人の許にわざと淸げに書きたててやりつる文の、返事見ん、今は來ぬらんかしと

念じ—祈り

うへ—一條帝

數寄—風流

えせさいはひなど云々—つまらぬ男に添ひなどしてゐるは嫌なもの也、相當な人の女はやはり宮仕させ世の有樣

せ給はずなりにけり。うへ渡らせ給ひて後、かゝる事なんと、人々殿に申し奉りければ、いみじう思し騒ぎて、御誦經など數多せさせ給ひて、そなたに向ひてなん念じ暮させ給ひけるも、すき〴〵しくあはれなる事なり」など語り出させ給ふ。うへも聞しめして、めでさせ給ひ、「いかでさ多くよませ給ひけん、われは三卷四卷だにもえよみはてじ」と仰せらる。「昔はえせものも皆數寄をかしうこそありけれ。このごろかやうなる事やは聞ゆる」など、御前に侍ふ人々、うへの女房のこなたゆるされたるなど參りて、口々いひ出でなどしたる程は、誠に思ふ事なくこそ覺ゆれ。おひさきなく、まめやかに、えせさいはひなど見てゐたらん人は、いぶせくあなづらはしく思ひやられて、猶さりぬべからん人の女などは、さしまじらはせ、世の中の有樣も見せならはさまほしう、内侍などにても暫時あらせばやとこそ覺ゆれ。宮仕する人をば、あはく〵しうわろきことに思ひゐたる男こそ、いとにくけれ。げにそもまたさる事ぞかし。かけまくも畏き御前を始め奉り、上達部、殿上人、四位、五位、六位、女房は更にもいはず、見ぬ人は少くこそはあらめ。

おぼめかしからぬ人—古今の歌などによく通じたる女官

せめて—強ひて

夾算—見かけの處に挾みおく竹札

ず御几帳をひきたてさせ給ひければ、女御あやしとおぼしけるに、御草紙をひろげさせたまひて、その年その月、何のをり、その人の詠みたる歌はいかにと、問ひきこえさせたまふに、かうなりと心得させたまふもをかしきものゝ、ひがおぼえもし、わすれたるなどもあらば、いみじかるべき事と、わりなく思し亂れぬべし。そのかたおぼめかしからぬ人、二三人ばかり召し出でて、碁石して數を置かせ給はんとて、聞えさせ給ひけんほど、いかにめでたくをかしかりけん。御前に侍ひけん人さへこそ羨しけれ。せめて申させ給ひければ、賢しうやがて末までなどにはあらねど、すべてつゆ違ふ事なかりけり。いかでなほ少しおぼめかしく、僻事見つけてを止まんと、ねたきまで思しける。十卷にもなりぬ。更に不用なりけりとて、御草紙に夾算して、みとのごもりぬるもいとめでたしかし。いと久しうありて起きさせ給へるに、なほこの事左右なくて止まん、いとわろかるべしとて、下の十卷を、明日にもならば他をもぞ見給ひ合するとて、今宵定めんと、おほとなぶら近くまゐりて、夜更くるまでなんよませ給ひける。されど終に負け聞えさ

げによく云云—この語の上に、然るにかゝる場合に際してはと補ひて見るべし

それもおぼゆるかは—多數の中、十首ばかり思ひ出したりとて、覺え居るといふ程ならんや

きこしめし—村上帝がなり

したるもあり」。古今の草紙を御前に置かせ給ひて、歌どもの本を仰せられて、「これが末はいかに」と仰せらるゝに、すべて夜晝心にかゝりて、おぼゆるもあり。げによく覺えず、申し出でられぬことは、いかなることぞ。宰相の君ぞ十ばかり。それもおぼゆるかは。まいて五つ六つなどは、たゞ覺えぬよしをぞ啓すべけれど、「さやはけ惡く、仰事をはえなくもてなすべき」といひ口をしがるもをかし。知ると申す人なきをば、やがて詠みつゞけさせ給ふを、さてこれは皆知りたる事ぞかし。「などかく拙くはあるぞ」といひ歎く中にも、古今あまた書き寫しなどする人は、皆覺えぬべきことぞかし。「村上の御時、宣耀殿の女御と聞えけるは、小一條の左大臣殿の御女におはしましければ、誰かは知り聞えざらん。まだ姬君におはしける時、父大臣の敎へ聞えさせ給ひけるは、一つには御手を習ひ給へ、次にはきんの御琴を、いかで人にひきまさらんとおぼせ、さて古今の歌二十卷を、皆うかべさせ給はんを、御學問にはさせたまへとなん聞えさせ給ひけると、きこしめしおかせ給ひて、御物忌なりける日、古今をかくして、持てわたらせ給ひて、例なら

年經れば―古今集春上

ついでに―以下中宮の御物語なり

しほのみつ―萬葉第四に類歌ありその他に見えず

思ひみだるゝや。春の歌、花の心など、さいふ〳〵も、上臈二つ三つ書きて、これにとあるに、

年經れば齡は老いぬしかはあれど花をし見れは物おもひもなし

といふことを、君をし見ればと書きなしたるを御覽じて、「唯このこゝろばへどもの、ゆかしかりつるぞ」と仰せらる。ついでに、圓融院の御時、御前にて、草紙に歌一つ書けと、殿上人に仰せられけるを、いみじう書きにくく、すまひ申す人々ありける。更に手の惡しさ善さ、歌の折にあはざらんをも知らじと仰せられければ、わびて皆書きける中に、たゞいまの關白殿の、三位の中將と聞えけるとき、

しほのみついづもの浦のいつも〳〵君をばふかくおもふはやわが

といふ歌の末を、たのむはやわがと書き給へりけるをなん、いみじくめでさせ給ひける」と仰せらるゝも、すゞろに汗あゆる心地ぞしける。若からん人は、さもえ書くまじき事のさまにやとぞ覺ゆる。例いとよく書く人も、あいなく皆つゝまれて、書きけがしなど

けはひ—形勢、様子、旁註けいひつに作ろ、警蹕なり

月も日も云云—萬葉集巻十三に出づ、下の句、み室の山のとこ宮所

程遠き日—伊周の方を眺め居し日

ゆ。うら〳〵とのどかなる日の景色いとをかしきに、終の御飯もたる藏人參りて、御膳奏すれば、中の戸より渡らせ給ふ。御供に大納言參らせ給ひて、ありつる花のもとに歸り居給へり。宮の御前の御几帳押しやりて、長押のもとに出でさせ給へるなど、唯何事もなく萬にめでたきを、さぶらふ人も、思ふことなき心地するに、月も日もかはりゆけどもひさにふるみ室の山のといふ故事を、ゆるゝかにうち詠み出して居給へる、いとをかしと覺ゆる。げにぞ千歳もあらまほしげなる御ありさまなるや。

陪膳つかうまつる人の、男どもなど召すほどもなくわたらせ給ひぬ。「御硯の墨すれ」と仰せらるゝに、目はそらにのみにて、唯おはしますをのみ見奉れば、ほど遠き目も放ちつべし。白き色紙おしたゝみて、「これに只今覺えん故事、一つづつ書け」と仰せらるゝ。外に居給へるに、「これはいかに」と申せば、「疾く書きて參らせ給へ、男はことくはへ侍ふべきにもあらず」とて、御硯とりおろして、「とく〳〵たゞ思ひめぐらさで、難波津も何もふと覺えん事を」と責めさせ給ふに、などさは臆せしにか、すべて面さへ赤みてぞ

淸和院—原本せかゐに作る

大納言殿—中宮定子の御兄伊周なるべし

櫻、藤、山吹—重れの色目

家は

近衛の御門。二條。一條もよし。染殿の宮。淸和院。菅原の院。冷泉院。朱雀院。とうゐん。小野宮。紅梅。縣の井戸。東三條。小六條。小一條。淸涼殿のうしとらの隅の北のへだてなる御障子には、荒海の繪、生きたるものどものおそろしげなる、手長足長をぞ書かれたる。うへの御局の戸、押しあけたれば、常に目に見ゆるを、にくみなどして笑ふほどに、高欄のもとに、靑き瓶の大なる据ゑて、櫻のいみじくおもしろき枝の五尺ばかりなるを、いと多くさしたれば、高欄のもとまでこぼれ咲きたるに、ひるかつた、大納言殿、櫻の直衣の少しなよらかなるに、濃き紫の指貫、白き御衣ども、うへに濃き綾の、いとあざやかなるを出して參り給へり。うへのこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷に居給ひて、ものなど奏し給ふ。御簾のうちに、女房櫻の唐衣どもくつろかにぬぎ垂れつゝ、藤山吹などいろ〳〵にこのもしく、あまた小半蔀の御簾より押し出でたるほど、晝御座のかたに御膳まゐる。足音高し。けはひなど、をし〳〵といふ聲聞

數多ある中に—大和に幾多の市ある中に特に

誰に云々—な入りそ、即ち入る勿れの語より思ひつきたる洒落

藏人云々—六位藏人は陛下御衣の御おろしなる青色の袍を著す

辰の市。椿市は、大和に數多ある中に、長谷寺にまうづる人の、かならずそこにとゞまりければ、觀音の御縁あるにやと、心ことなるなり。おふさの市。餝摩の市。飛鳥の市。

淵は

かしこ淵、いかなる底の心を見えて、さる名をつけけんと、いとをかし。ないりその淵、誰にいかなる人の教へしならん。青色の淵こそまたをかしけれ、藏人などの身にしつべくて。いな淵。かくれの淵。のぞきの淵。玉淵。

海は

水うみ。與謝の海。かはぐちの海。伊勢の海。

わたりは

しかすがの渡。みつはしの渡。こりずまの渡。

山陵は

うぐひすの陵。柏原の陵。あめの陵。

所おきける―遠慮したる、片去りより思ひつきたる洒落

わが名云々―古今集、天智天皇、犬上のとこの山なる名取川いさと答へてわが名もらすな

よそに云々―古今六帖、昔見し人をぞ我はよそにせし朝倉山の雲井遙に

こそ、誰に所おきけるにかと、をかしけれ。五幡山。後瀬山。笠取山。ひらの山。鳥籠の山は、わが名もらすなと、みかどのよませ給ひけん、いとをかし。伊吹山。朝倉山よそに見るらんいとをかしき。岩田山。大比禮山もをかし、臨時の祭の使などおもひ出でらるべし。手向山。三輪の山、いとをかし。音羽山。待兼山。玉坂山。耳無山。末の松山。葛城山。美濃の御山。柞山。位山。吉備の中山。嵐山。更級山。姨捨山。小鹽山。淺間山。かたゝめ山。かへる山。妹背山。

峯は

ゆづるはの峯。阿彌陀の峯。彌高の峯。

原は

竹原。甕の原。朝の原。その原。萩原。粟津原。奈志原。うなゐごが原。安倍の原。篠原。

市は

こちたくそぼち――ひどく濡れて

たてるを――立てるよ、下なるさわぐよと竝立の格

枝扇――僧侶用の扇なり

定證僧都の身長高きに思ひよせたる洒落

雨少し降りて、菊の露もこちたくそぼち、おほひたる綿などもいたくぬれ、うつしの香ももてはやされたる　つとめては止みにたれど、なほ曇りて、やゝもすれば、降り落ちぬべく見えたるもをかし。

よろこび奏するこそをかしけれ。後をまかせて、笏とりて、御前の方に向ひてたてるを、拜し舞踏しさわぐよ。

今内裏の東をば、北の陣とぞいふ。楢の木の遙にたかきが立てるを、常に見て、「幾尋かあらん」などいふに、權中將の「もとより打ちきりて、定證僧都の枝扇にせさせばや」とのたまひしを、山階寺の別當になりて、よろこび申すの日、近衞府にて、この君の出で給へるに、高き屐子をさへはきたれば、ゆゝしく高し。出でぬる後こそ、「などその枝扇はもたせ給はぬ」といへば、「ものわすれせず」と笑ひ給ふ。

山は

小倉山。三笠山。このくれ山。わすれ山。いりたち山。鹿背山。ひはの山。かたさり山

涙を流すからはこれ正しく
うへ—一條院
物調ぜさせばや—何か食事をせさせたし
畏勘事—勅勘をいふ

翁丸」といふに、ひれ伏していみじくなく。御前にもうち笑はせ給ふ。人々まゐり集りて、右近内侍召して、かくなゝど仰せらるれば、笑ひのゝしるを、うへにも聞し召して、渡らせおはしまして、「あさましう犬などもかゝる心あるものなりけり」と笑はせ給ふ。うへの女房たちなども來りまゐり集りて呼ぶにも、今ぞ立ちうごく。なほ顔など腫れたゝめり。「物調ぜさせばや」といへば、「終にいひあらはしつる」など笑はせ給ふに、忠隆聞きて、臺盤所のかたより、「まことにや侍らん、かれ見侍らん」といひたれば、「あなゆゝし、さる者なし」といはすれば、「さりとも終に見つくる折もはべらん、さのみもえかくさせ給はじ」といふなり。さて後畏勘事許されて、もとのやうになりにき。猶あはれがられて、ふるひなき出でたりし程こそ、世に知らずをかしくあはれなりしか。人々にもいはれて泣きなどす。

正月一日、三月三日は、いとうらゝかなる。五月五日は曇りくらしたる。七月七日は曇り、夕がたは晴れたる空に月いとあかく、星のすがた見えたる。九月九日は、曉がたより

丸—翁丸の略稱

ゆゝしげに—不氣味に

あらぬものに云々—翁丸ならずときめてしまへり

侍ふに—淸少納言が也

さはこれ—かくわが言に感激して

れ丸か、かゝる犬やはこのごろは見ゆる」などいふに、翁丸と呼べど耳にも聞き入れず。それぞといひ、あらずといひ、口々申せば、「右近ぞ見知りたる、呼べ」とて、下なるを「まづとみのこと」とて召せば參りたり。「これは翁丸か」と見せ給ふに、「似て侍れども、これはゆゝしげにこそ侍るめれ。また翁丸と呼べば、悦びてまうで來るものを、呼べど寄りこず、あらぬなゝめり。それは打ち殺して、棄て侍りぬとこそ申しつれ。さるものどもの二人して打たんには、生きなんや」と申せば、心うがらせ給ふ。暗うなりて、物くはせたれど食はねば、あらぬものにいひなして止みぬる。つとめて、御梳櫛にまゐり、御手水まゐりて、御鏡もたせて御覽ずれば、侍ふに、犬の柱のもとについ居たるを、「あはれ昨日、翁丸をいみじう打ちしかな。死にけんこそ悲しけれ。何の身にかこのたびはなりぬらん。いかにわびしき心地しけん」とうちいふほどに、この寢たる犬ふるひわなゝきて、涙をたゞ落しにおとす。いとあさまし。さはこれ翁丸にこそありけれ。よべは隱れ忍びてあるなりけりと、あはれにて、をかしきことかぎりなし。御鏡をもうちおきて、「さは

―打ち懲して
さいなみて―譴責して
さう〴〵し―寂しく
なにぞ―何ぞ、いかなる
翁丸なり―一本翁なり、心うの事云々は清少の心中、次の詞は御厠人の重ねていふ也

つかはせ。只今」と仰せらるれば、集りて狩りさわぐ。馬の命婦もさいなみて、「乳母かへてん、いとうしろめたし」と仰せらるれば、かしこまりて、御前にも出でず。犬は狩り出でて、瀧口などして追ひつかはしつ。「あはれ、いみじくゆるぎ歩きつるものを。三月三日に、頭の辨柳のかづらをせさせ、桃の花かざしにさゝせ、櫻腰にさゝせなどして、ありかせ給ひしをり、かゝる目見んとは思ひかけけんや」とあはれがる。「御膳のをりは、必むかひさぶらふに、さう〴〵しくこそあれ」などいひて、三四日になりぬ。ひるつかた、犬のいみじく泣く聲のすれば、なにぞの犬の、かく久しくなくにかあらんと聞くに、よろづの犬ども走り騷ぎとぶらひに行く。御厠人なるもの走り來て、「あないみじ、犬を藏人二人して打ちたまひ、死ぬべし。流させ給ひけるが歸りまゐりたるとて、調じ給ふ」といふ。心うのことや。翁丸なり。「忠隆實房なん打つ」といへば、制しに遣るほどに、辛うじてなき止みぬ。「死にければ門の外にひき棄てつ」といへば、あはれがりなどする夕つかた、いみじげに腫れ、あさましげなる犬のわびしげなるが、わなゝきありけば、「あは

またこともなし―他に別段の用事もなし
めでたし――原本をかしに作る
かうぶり給はりて―敍爵して
しれもの―翁丸（犬の名）をいふ
打ち調じて

からんをりに對面して、申しうけたまはらんとなん申されつる」とて、またこともなし。一夜のことやいはんと、心ときめきしつれど、「今しづかに御局にさぶらはん」と辭していぬれば、歸り參りたるに、「さて何事ぞ」とのたまはすれば、申しつる事を、さなんとまねび啓して、「わざと消息し、呼び出づべきことにもあらぬを、おのづからしづかに局などにあらんにもいへかし」とて笑へば、「おのが心地に賢しとおもふ人の譽めたるを、嬉しとや思ふとて、告げ知らするならん」とのたまはする御氣色もいとめでたし。

うへに侍ふ御猫は、かうぶり給はりて、命婦のおもととて、いとをかしければ、寵かせ給ふが、端に出でたるを、乳母の馬の命婦、「あなまさなや、入り給へ」とよぶに、聞かで、日のさしあたりたるにうち眠りてゐたるを、おどすとて、「翁丸いづら、命婦のおもと食へ」といふに、まことかとて、しれもの走りかゝりたれば、おびえ惑ひて、御簾の内に入りぬ。朝餉の間にうへはおはします。御覽じて、いみじう驚かせ給ふ。猫は御懷に入れさせ給ひて、男ども召せば、藏人忠隆まゐりたるに、「この翁丸打ち調じて、犬島に

つとめて―その翌朝

ちうせい―小さい、生昌の方言口調をそのまま寫せる也

折敷―片木板（ヘギイタ）を折りまげて作れる盆

まゐりよからめ―食べよからん

きすく―氣直、正直一遍

笑ふことといみじ。あけぬとならば、唯まづ入りねかし。消息をするに、よかゝなりとは誰かはいはんと、げにをかしきに、つとめて、御前に參りて啓すれば、「さる事も聞えざりつるを、昨夜のことに愛でて、入りにたりけるなゝめり。あはれ彼をはしたなく言ひけんこそ、いとほしけれ」と笑はせ給ふ。

姫宮の御かたの童女に、裝束せさすべきよし仰せらるゝに、「わらはの袙の上襲は何色に仕う奉るべき」と申すを、又笑ふもことわりなり。「姫宮の御前のものは、例のやうにては惡氣に候はん。ちうせい折敷、ちうせい高杯にてこそよく候はめ」と申すを、「さてこそは、上襲著たる童女もまゐりよからめ」といふを、「猶例の人のやうに、かくないひ笑ひそ、いときすくなるものを、いとほしげに」と制したまふもをかし。中間なるをりに、「大進ものきこえんとあり」と、人の告ぐるを聞し召して、「又なでふことといひて笑はれんとならん」と仰せらるゝもいとをかし。「行きて聞け」とのたまはすれば、わざと出でたれば、「一夜の門のことを中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて、いかでさるべ

それも尋ねず—この語の下に、ねぶたければそのまゝ寐たりと補ひ見るべし
ゆめに—決して
見えぬもの—不思議なるもの、妙なもの

と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつることいひ侍る」と申しておりぬ。同じ局に住む若き人々などして、萬の事も知らず、ねぶたければ皆寢ぬ。東の對の西の廂かけてある北の障子には、鏁もなかりけるを、それも尋ねず。家主なれば、案内をよく知りてあけてけり。あやしう涸ればみたるものの聲にて、「侍はんにはいかゞ」と數多たびいふ聲に、驚きて見れば、几帳の後に立てたる燈臺の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけていふなりけり。いみじうをかし。更にかやうのすきずきしきわざ、ゆめにせぬものの、家におはしましたりとて、無下に心にまかするなンめりと思ふもいとをかし。わが傍なる人を起して、「かれ見給へ、かゝる見えぬもののあンめるを」といへば、頭をもたげて見やりて、いみじう笑ふ。「あれは誰ぞ、顯證に」といへば、「あらず、家主人、局主人と定め申すべき事の侍るなり」といへば、「門の事をこそ申しつれ、障子開け給へとやはいふ」「なほその事申し侍らん、そこに侍はんはいかにいかに」といへば、「いと見苦しきこと、更にえおはせじ」とて笑ふめれば、「若き人々おはしけり」とて、ひきたてていぬる、後に

へ造れる門
陣屋の云々ー宮中の如く左右衞門の陣所の宿直人も居るにあらねば只乘車のまま入るべき事と思ひて

于定國ー前漢書に出づ

進士ー式部省の官吏登庸試驗に應ぜしむべく國々より選出せる人材

けれど、いかゞはせん。殿上人、地下なるも、陣に立ちそひ見るもねたし。御前に參りて、ありつるやう啓すれば、「こゝにも人は見るまじくやは。などかはさしもうち解けつる」と笑はせ給ふ。「されど、それは皆めなれて侍れば、よくしたてて侍らんにしこそ驚く人も侍らめ。さてもかばかりなる家に、車入らぬ門やはあらん。見えば笑はん」などいふ程にしも、「これまゐらせん」とて、御硯などさしいる。「いで、いとわろくこそおはしけれ。などてかその門狹く造りて、住み給ひけるぞ」といへば、笑ひて、「家のほど身のほどに合せて侍るなり」と答ふ。「されど門の限を、高く造りける人も聞ゆるは」といへば「あなおそろし」と驚きて、「それは于定國がことにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば、承り知るべくも侍らざりけり。たま〳〵この道にまかり入りにければ、かうだに辨へられ侍る」といふ。「その御道もかしこからざめり。筵道敷きたれば、皆おち入りて騷ぎつるは」といへば、「雨の降り侍れば、實にさも侍らん。よし〳〵、また仰せかくべき事もぞ侍る、罷り立ち侍らん」とていぬ。「何事ぞ、生昌がいみじうおぢつるは」

おもはん子を法師になしたらんこそは、いと心苦しけれ。さるは、いとたのもしきわざを、唯木のはしなどのやうに思ひたらんこそ、いといとほしけれ。精進物のあしきを食ひ、寐ぬるをも、若きは物もゆかしからん。女などのある所をも、などか忌みたるやうに、さしのぞかずもあらん。それをも安からずいふ。まして驗者などのかたは、いと苦しげなり。御嶽、熊野、かゝらぬ山なく歩くほどに、恐しき目も見、驗あるきこえ出できぬれば、こゝかしこによばれ、時めくにつけて安げもなし。いたく煩ふ人にかゝりて、物怪てうずるも、いと苦しければ、困じてうち眠れば、「ねぶりなどのみして」と咎むるも、いと所狹く、いかに思はんと。これは昔のことなり。今樣はやすげなり。

大進生昌が家に、宮の出でさせ給ふに、東の門は四足になして、それより御輿は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども、陣屋の居ねば入りなんやと思ひて、髮つきわろき人も、いたくもつくろはず、寄せて下るべきものと思ひあなづりたるに、檳榔毛の車などは、門ちひさければ、さはりてえ入らねば、例の筵道しきておるゝに、いとにくく腹だたし

なりたる物

驗者―修驗者、加持祈禱者

てうずる―調伏する

所狹く云々―窮屈にて心中いかに苦しからんと氣の毒也

四足―四足門、四本柱を四方に添

祭、四月、中の酉の日に行はる

たど〳〵しき—はつきりとせぬ聲を

屐子—クツツケノアシダ(和名抄)

ちやうざ—長者、東寺の住持なり

こと〴〵—異事、特にきはだち異

霞も霧もへだてぬ空の景色の、何となくそゞろにをかしきに、少し曇りたる夕つかた、夜など、忍びたる杜鵑の、遠うそら耳かと覺ゆるまで、たど〳〵しきを聞きつけたらん、何ごこちかはせん。祭近くなりて、青朽葉、二藍などのものどもおしまきつゝ、細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて、行きちがひもて歩くこそをかしけれ。末濃、村濃、巻染など、常よりもをかしう見ゆ。童女の頭ばかり洗ひつくろひて、形は皆痿えほころび、打ち亂れかゝりたるもあるが、屐子、沓などの緒すげさせ、裏をさせなどもて騒ぎ、いつしかその日にならんと、急ぎ走り歩くもをかし。怪しう踊りて歩く者どもの、さうぞきたてつれば、いみじく、ちやうざといふ法師などのやうに、ねりさまよふこそをかしけれ。ほど〳〵につけて、親をばの女、姉などの供して、つくろひ歩くもをかし。

こと〴〵なるもの

法師の詞。男女の詞。下司の詞にはかならず文字あまりしたり。

除目—春行はるゝは縣召（アガタメシ）の除目とて地方官任免の式

申文—任官志願書

啓し給へ—皇后へ申すを啓といふ

まゆにこもりたる—柳の僅に芽ぐみたるを蠶の繭に譬へいふ

祭—賀茂の

除目のほどなど、内裏わたりはいとをかし。雪降りこほりなどしたるに、申文もてありく。四位五位、わかやかに心地よげなるは、いとたのもしげなり。老いて頭白きなどが、人にとかく案内いひ、女房の局によりて、おのが身のかしこきよしなど、心をやりて說き聞するを、若き人々は眞似をし笑へど、いかでか知らん。「よきに奏し給へ、啓し給へ」などいひても、得たるはよし、得ずなりぬるこそ、いとあはれなれ。

三月三日、うら〳〵とのどかに照りたる。桃の花の今咲きはじむる。柳など、いとをかしきこそ更なれ。それもまだ、まゆにこもりたるこそをかしけれ。廣ごりたるはにくし。花も散りたる後はうたてぞ見ゆる。おもしろく咲きたる櫻を長く折りて、大なる花瓶にさしたるこそをかしけれ。櫻の直衣に、出袿して、客人にもあれ、御兄の公達にもあれ、そこ近くゐて物などうちいひたる、いとをかし。そのわたりに、鳥蟲のひたひつきいと美しうて飛びありく、いとをかし。

祭のころはいみじうをかし。木々のこの葉、まだ繁うはなうて、わかやかに青みたるに、

八日、人々よろこびして走りさわぎ、車の音も、つねよりはことに聞えてをかし。

十五日は、もちかゆの節供まゐる。かゆの木ひき隱して、家の御達、女房などのうかゞふを、うたれじと用意して、常に後を心づかひしたる景色もをかしきに、いかにしてけるにかあらん、打ちあてたるは、いみじう興ありとうち笑ひたるも、いと榮々し。ねたしと思ひたる、ことわりなり。去年より新しう通ふ壻の君などの、内裏へ參るほどを、心もとなく、所につけて我はと思ひたる女房ののぞき、奧のかたにたゞずまふを、前にゐたる人は心得て笑ふを、「あなかま〳〵」と招きかくれど、君見知らず顔にて、おほどかにて居給へり。「こゝなる物とり侍らん」などいひ寄り、はしりうちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず愛敬づきて笑みたる、ことに驚かず、顔少し赤みてゐたるもをかし。また互に打ちて、男などをさへぞうつめる。いかなる心にかあらん、泣きはらだち、打ちつる人を呪ひ、まが〳〵しくいふもをかし。内裏わたりなど、やんごとなきも、今日はみな亂れて、かしこまりなし。

もちかゆ―望粥、小豆粥なり

心もとなく―待遠しく

あなかま―あゝ喧し

おほどかにて―鷹揚にして

まが〳〵しく―忌々しげに

白馬—正月七日、左右馬寮より二十一匹の白馬を宮庭に引き出し、天皇の御覽に供へ、又庶民にも示す

顔のきぬ—顔の地膚

一年ながらをかし。

正月一日は、まいて空の景色うら〳〵と珍しく、かすみこめたるに、世にありとある人は、姿容心ことにつくろひ、君をもわが身をも祝ひなンどしたるさま、殊にをかし。

七日は、雪間の青菜青やかに摘み出でつゝ、例はさしもさる物目近からぬ所に、もてさわぎ、白馬見んとて、里人は車きよげにしたてて見にゆく。中の御門の閾ひき入るゝほど、頭ども一處にまろびあひて、指櫛も落ち、用意せねば折れなンどして、笑ふもまたをかし。左衛門の陣などに、殿上人あまた立ちなンどして、舎人の弓ども取りて、馬ども驚かして笑ふを、僅に見入れたれば、立蔀などの見ゆるに、主殿司、女官などの、行きちがひたるこそをかしけれ。いかばかりなる人、九重をかく立ち馴すらんなど思ひやらるゝ中にも、見るはいと狭きほどにて、舎人が顔のきぬもあらはれ、白きもののゆきつかぬ所は、誠に黒き庭に雪のむら消えたる心地して、いと見ぐるし。馬のあがり騒ぎたるも恐しく覺ゆれば、引き入られてよくも見やられず。

をかし―趣あり

あはれなり―情趣深し

炭もて云々―炭を持ち歩くなども季節がら似合はしき趣あり

枕草紙

春は曙、やう／＼白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜、月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる、雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山の端いと近くなりたるに、烏のねどころへ行くとて、三つ四つ二つなンど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなンど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるは、いふべきにもあらず。霜ンなどのいと白く、またさらでもいと寒き、火なンど急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつき／＼し。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

ころは、正月、三月、四五月、七月、八九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ、

目録

にしがたき所ありて、一々之に引用符を施すは不穩當の嫌ひあるも、もと解釋上の困難は多く玆に起因するが故に、假に對話其他に之を施して閱讀通解の便を圖りたる也。

本書の索引は、三種ともに、思想、語句、逸話、故實、故事、其他の各方面に亘りて最も詳細精密ならん事を期せり。　これ我が古典中の三大隨筆は、其研究引用の範圍極めて廣く、一讀の後尙ほ反覆參考の要あるべきを信じたればば也。

明治四十四年十一月

校訂者　塚　本　哲　三

徒然草は、南北戰亂の時に當り、洛西雙ヶ岡に世を背きたる吉田兼好が、事に觸れ折に臨みて其抱懷を漏らしたる書也。釋典を經とし、老莊を緯としたる出世間的の思想に充つるも、亦世に容れられざるの不平は往々にして筆端に露はれ、却つて言ひ難き興趣を添へたり。
以上三書の校訂に關しては、枕草紙は春曙抄原本に基き、傍註、抄、其他數種の異本を參照し、方丈記は、流水抄及び諺解の原本に據り、徒然草は文段抄を底本に用ひ、諸抄大成の類を參考し、異本に於て差異の甚しきものは、何れも頭註に標記し置けり。枕草紙、徒然草中の對話の全部、及び引用句の類にして本文と紛らはしきものには、一々引用符を附せり。元來我邦の文章にては、語法の性質上、其對話に於て、直接法と間接法との區別を明確

緒言

本書に收めたる枕草紙は、一條帝の后定子に奉仕したる淸少納言の著にして、觀察の奇警、行文の簡勁を以て稱せらる。あらゆる事物事件に對して、犀利なる批判と自由なる感想とを縱横に披瀝したるものにして、一隻眼を具へたる女性の隨感錄たると同時に、又平安時代の一種の側面觀史とも見るべし。

方丈記は、建曆の頃、日野山奥に閑居したる鴨長明の著はせる所也。此書、量多からずと雖も、好く佛敎思想の眞諦を捉へ、世相人事の轉變を達觀し、首尾を通じて淸高の氣に充ち、筆路淡々として無限の幽情を寓せり。

爐邊に携へ行き、軽く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

枕艸紙 全

方丈記 全

徒然草 全

